西暦２０２１年前に転生したんだから科学者として頑張るしかないでしょ！！

namaZ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２００４年に転生した科学者に憧れる少年は『木原』として生まれた。

やったー『とある』だー！え、学園都市じゃない？此処何処の世界だよ（汗）ブラックブレットじゃないすかー神様。

『木原』としての技能フル稼働して人類救いますか。

※矛盾点、独自解釈、多々あり（それしかない）。作者の滅茶苦茶な解説には目をつぶって下さい。作者なりに原作と矛盾しないよう頑張ったんです!!（遠い目

目次

第一次観測 1
第二次観測 8
第三次観測 14
第四次観測 20
第五次観測 25
第六次観察 32
第七次観測 38
第八次観測 46
第九次観測 51
第十次観測 59
第十一次観測 66
第十二次観測 76
第十三次観測 82
第十四次観測 92
第十五次観測 97
第十六次観測 105
第十七次観測 120
第十八次観測 128
第十九次観測 136
第二十次観測 144
原作開始
第二十一次観測 152
第二十二次観測 167

第二十三次観測 176
第二十四次観測 184
第二十五次観測 193
第二十六次観測 205
第二十七次観測 222
第二十八次観測 229
第二十九次観測 236
第三十次観測 246
第三十一次観測 261
第三十二次観測 271
第三十三次観測 280
第三十四次観測 298
第三十五次観測 312
第三十六次観測 322
第三十七次観測 338

第一次観測

生まれ変わるならどんな自分になりたい？

輪廻転生。

死んであの世に還った霊魂（魂）が、この世に何度も生まれ変わってくることを言う。

ヒンドゥー教や仏教などインド哲学・東洋思想において顕著だが、古代のエジプトやギリシャ（オルペウス教、ピタゴラス教団、プラトン）など世界の各地に見られる。輪廻転生観が存在しないイスラム教においても、アラウィー派やドゥルーズ派等は輪廻転生の考え方を持つ。

非科学的な概念。

以外にもその考えを信じる人が多い摩訶不思議な教えだ。

魂・精神・肉体。

まず注意したいのは、魂と精神はよく混同されがちだが、別の状態だということを理解してほしい。

どれも大切なものにはかわりないが、存在の大きさというかエネルギーの可能性の大きさから言うと魂〉精神〉肉体となる。

この世界で言うなら、魂は「無意識」、精神が「意識」、肉体はそのまま「肉体」。

「肉体」はまだ理解できる。

細かい部位や名称を省いて分かりやすく言えば、肉と骨と皮で構成されている。

「意識」は一般に、「起きている状態にあること（覚醒）」または「自分の今ある状態や、周囲の状況などを正確に認識できている状態のこと」を指す。

肉体と違い、その在り方は多種多様。

人が何かを成すには「意識」は欠かせない。

人の信念、意志をひっくるめて「意識」なのだ。

「魂」は曖昧で形のないエネルギー。

これは意識にも言える事だが、生きものの体の中に宿り、心の働き

をつかさどると考えられるコレは、魂が在るから「意識」は人に力を与えてくれる。
それじゃあ「心」はってなっていくと更にごちゃ混ぜでよく分からない方向に行くのでパス。
そもそも心の拠り所、その在り方は、一人の人間では語る事は出来ない。

生命は有限であり終りがある。
魂は無限であり終りがない。
人間の肉体は有限であり終りがある。
人間の肉体に宿った魂は無限であり終りがない。
死ねば、魂は肉体より離れて霊界で生き続ける。

それでは自我を構成している「記憶」とは？
記憶は魂・精神・肉体のいずれとも深く係わっている。
記憶は肉体――――この場合は脳に保存されている。
脳は主記憶装置（メインメモリー）で生きた証を書き込んでいる。電源（死）を落（ね）とすば失われてしまう。
魂と精神は補助記憶装置だ。
文章や写真や映像を保存している肉体は、電源（死）を落（ね）とすば失われてしまうが、大量のデータを保持できる補助記憶装置は電源を落としても失わない。
主記憶装置（肉体）で書き込まれた情報は、補助記憶装置（魂・精神）に――――想いとしてしっかりと残されている。

持論はこの位で冒頭に戻るが、生まれ変わるならどんな自分になりたい？
何でもいいんだ。
理想な『ヒーロー』とか？
カッコいいよな。困った人を、涙を流す女、子供を颯爽と助けてくれる。

別に無敵な『ヒーロー』じゃなくてもいい。
好きな子の為に精一杯努力し命を懸ける。唯一人の為の『ヒーロー』でもいい。
民衆から喝采と拍手を盛大にもらえる正義の『ヒーロー』。
好きな人に感謝される孤高の正義の『ヒーロー』。
どんな自分になりたい？
態々自分を犠牲にする『ヒーロー』になる必要もない。
無利益で人助けをする『ヒーロー』になる必要もない。
ひ弱で病弱だった者が、スポーツ選手や軍になりたいと思う者も居るだろう。
案外がさつな人ほど、パティシエや繊細な職人に憧れる者なのかもしれない。
人殺しに手を染めていた人が、逆に人を助けたいと思いレスキュー隊員や医者になりたい人も居るだろう。
だけど、人々が求める誠実な人間や、希望を与えてくれる『ヒーロー』になる必要はない。
こう言えば安っぽく聞こえるが、光は闇を求め、闇は光を求めている。
まことの光しか求めぬ正義の『ヒーロー』。
まことの闇しか求めぬ悪役の『外道』。
これは稀。希少種。絶滅危惧種。
光しかない人間は居ないし、闇しかない人間も居ない。

それを踏まえて、生まれ変わるならどんな自分になりたい？

■■■■には、憧れる理想像がある。

そうそれは、

――――――科学者だ!!

悪の組織の科学者は非人道的な外道。
犯罪のための様々な兵器や装置、道具の開発。
欲求を満たすため一途に子供の様に頑張る姿。
正義の組織の科学者は人道的で人を愛している。
人々を想い、主にサポートに徹する。
けど、一発逆転の奥の手を何かしら開発している。
ありとあらゆるＳＦ・アクション映画、漫画、アニメで科学者は例外なく重要なファクターだ。
科学者がラスボスだったりする。
俺はその在り方、何者にも縛られない知的欲求の精神に敬意を払う。

だけどよ神様。これはないだろ？
何だよこの仕打ち。貴方様は気分やなのはしってはいるが、これはない！

「ざけんなよおおおおおおおおおおおおおおお!!」
「ドクターうるさいですよ～」
「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!文句があるなら責任者呼んで来い!!」
「その責任者はあんたでしょ～」

二度目の人生はなに不自由のない生活をしている。
科学者として専用の研究施設。人員に投資して下さる資産家と国家。
後ろ盾とパイプは有り余っている。
この世界が前世で暮らしていた普通な世界ならどれだけよかったか。

「ドクタ～こちらにサインお願いします」
「はいはい」

これは俺の戦いだ。
起こりうる戦争を回避――――――――は無理でも想定より犠牲を減らせる。

「横流し、兵器の売買、権力者への弱味……汚い事に手を染めてるなー」
「全部ドクターが率先してやりましたからね」
「そうだっけ?あんまし覚えてないな表向きはお前が主任研究員なんだし」
「そう、それですよドクター!そのせいで私見覚えのない人に恨み辛み持たれてるんですからね!」
「俺まだ子供だよ?交渉の際、まず舐められて話もスル―される。その点お前は実績があるしそれなりの繋がりもあったし丁度よかったんだよ」

俺の仕事場は日の光を浴びる事のない地下施設。
どこぞのアンブレラみたいな馬鹿でかい秘密基地だ。
俺の一族の遺産がこの施設に詰まっている。

「こんな可愛くもない子供初めてです。ドクターのお父さんには昔よくお世話になりましたな~」
「そういやー親父って何処にいんの?」
「マジに聞いてます?実験の事故でお亡くなりになったじゃないですか~しかも目の前で」
「物覚えする前に死んだか?」
「一年前でしょ!」

此奴は親父の元助手件俺の助手の……なんだっけ?

「神無城沙希(かんなぎさき)ですよ~いい加減覚えて下さいドクタ~」

「サイコメトリーで思考でも読んだの？人の思考を勝手に突っ込むな」
「何年付き合ってると思ってるんですか～ドクター。顔に書いてあるんですよ」
「え、マジで、本当に？うっそだ～」
「ほっっっっっとに可愛げがないですね！」

これは神様の悪戯なら――――夢ならどれだけよかったか。
この世界は終わる。
最初っから詰んでいる。

「……なんでこんな世界に生まれちまったのかね」
「何か言いましたかドクタ～？」
「なーんも」

この世界の行く末は――――来るべき悲劇は俺だけが知っている。
癪だが、何もしなければ死ぬだけだ。
決められた未来を、少しでも希望のある未来に。
まずこの世界には不可思議な事がある。
原作を読まなくても分かる場違いな存在。
ノック音と共に白衣を纏った科学者が書類の束を片手に入室する。

「『木原』ドクター此方にもサインをお願いします」

子供でありながら大規模の研究施設と数多な研究所を任されているのは俺が木原だから。
木原は木原と言うだけで天才。
木原は科学者の中で異質だ。
でも、だからこそ、子供である俺がデカい顔できるんだ。

「あー、はいはい書きますよ書けばいいんでしょ。置いといて」
「了解です」

西暦２０２１年に人類は窮地に立つ。
人類史上最悪な時代が到来する。

「やれることをやるまでだな」

今年は西暦２０１１年。
十年しか時間は残されていない。

第二次観測

俺がこの世界で木原として生まれた瞬間、当然何が何だかわからなかった。

前世の俺が如何死んだか知りもしないが、これぱかりは神様のみぞ知る。

記憶は途切れ途切れの断片的にしか思い出せない。

そのおかげか前世は前世、この世界の俺の感性――――――木原的思考にはあんまし影響されなかった。

あくまで、あんましだからね。

学園都市に生まれ、暗部で暗躍生活するのか～っと未来に希望が見えずにいた。

だけどそこは無駄にポジティブに、憧れの科学者に成れてラッキー俺様万歳で乗り切った。

英才教育――――――殆ど木原の御蔭でそこらの大学教授より物知りで頭もいい。悲しい事に『木原』じゃ自慢できないけど。

引きこもりすぎて外の空気が恋しくなった頃、この世界に生を受け五年。今まで外にすら出てない俺に転機が訪れた。

親父の研究実験の見学として外に出て分かった。

住んでる国が日本ですらなかった。

学園都市どこだよ!?え?木原って『とある』の登場人物だよね?より詳しく言うなら木原一族だよね?これはもしかして学園都市がまだ無い?

アレイスターさん何やってんすか。正直楽しみにしてたのに、超能力とか魔術とか心惹かれる実験に。

『とある』は月日の表示はされているが、アレが西暦何年くらいなのか検討もつかない。

『とある』の学園都市外の科学力を推察するにそう遠くないうちに日本に建設されるだろうと安易な考えに至ったのはこの際仕方ない。

俺も六歳になり、親父の研究のサポートをしていたある日の事。木原を憎む、科学者(バカ)の自爆工作で呆気なく親父が死んだ。

奇跡的に助かった俺は、このままではまた命を狙われてしまう。
そこで、顔を隠し、個人情報を名前だけ残した俺は、自衛の為今まで疎かにしていた研究、実験以外の情勢を片っ端から調べつくした。
早くそうしなかった俺を憎むぜ。
まずは前世との違いを探した。
間違い探しだ。この手の作業は肉体が子供のせいか何だか楽しい。
『精神は肉体に引っ張られる』と言う言葉があり、俺の精神はいまだ、少年といっても違いないものだ。
其処で一番目を引いたのが、『天童』。
ん？天童？珍しい苗字だが『とある』なら有り得ーるで納得したかった。
親父の自室に厳重にロックされている金庫を発見。この時点で命に係わる三つの罠を解除している。実家に何仕掛けてんだよ親父。
金庫のセキュリティも指紋、網膜、音質、三十二桁のパスワードも難無く突破。
金庫を開けると更に金庫と遊び心満載のマトリョーシカ。
開けば開くほどめんどくさく複雑になっていくセキュリティ。
五枚目の扉をクリアし、やっと目的の物を手に入れた。
そこで見てしまった。見つけてしまった。
親父の研究資料――――――――此処には親父独自の研究資料（独占データ）が出るわ出るわ。
そこで目を引く一文。
『謎の黒い金属を発掘。調査した処、通常の金属では有り得ない――――――（以下略）』
研究資料にバラニウムについての経緯が記されていた。
流石に察しがつきました。
証拠がこんなに有るともう否定できない。
「ブラック・ブレットの世界じゃねーか?!流石は俺の親父！木原としていち早くバラニウムに注目してやがったか！室戸董（むろとすみれ）より先に視つけてくれちゃってこんちきしょー！」

独占だ独占～♪
こんな平和な世の中じゃ此奴の価値はまだ理解されない。
好きなだけ独占だ！
てか、俺が頑張らないと未来が灰色だ。
あ、ガストレアウィルスが無いと作るにしても憶測になってしまう。
ソレに近いモノを研究し創りだせれば、対ガストレア抗生物質を創りだせるかもしれない。
バラニウムの研究と一緒にウィルスの研究も同時進行しよう。
科学者としてテンション上がってきたぁぁあああああ!!!
狂喜のマッドサイエンティストに俺はなる（キリッ

とか考えている時期が俺にもありました、はい。
子供ながら『木原』というだけで誘拐、暗殺の毎日。
年齢に似合わず大人顔負けの指示をする俺に納得がいかない多数の人達。九割方こっち派だから困るわー。
研究しようにも出来ないのが現状です。
そんな時、親父に助手居たなとふと、思い出した俺はそいつを身代わりにする事にした。勿論勝手に。
ちゃっちゃと片付けたいから死んだことにした。一割以下の俺を支持してくれる者共のごく一部にだけ、俺の存命を教え、手足として扱き使っている。
俺の御蔭で沙希ちゃん大成功！やったね！
閑和休題。
あれから一年。七歳になりそれなりに研究も進んでいる。
十年は永いようで短い。
この糞みてーな地下でひたすら実験するしかねー。
区画ごとに実験は振り分けられている。
その中のお気に入りの一つ。

『ウイルス製造工場』。
文字通り、ガストレアウィルスを創るぞー工場。
ウィルス、細菌、病原菌、ありとあらゆる世界中の生物に何かしら作用するその全てが集められている。
生物だからね、人間以外に作用する全てが詰まっている。最近は植物にも作用するのも集めている。
ウィルスじゃないのも混ざってるって？世の中総じてそんなもんだ。
他の研究員には、純粋な観察と、環境や他生物にどれだけ影響を与え、変化するのか。後、混ぜてみたり、それその『モノ』の根幹部分を弄り、どう変異するのかを計測しデータを取り出している。
その結果、ガストレアウィルスが生まれれば簡単に正反対のものが生み出せる。
要はデータさえ揃えばこっちのモノ。
工学機器が自動的に不眠不休で頑張ってくれてるが、実験工程を消化するには時間がかかる。
そして、木原らしい区画。俺のお気に入りの一つ。
『最終実験施設』。
最終――――人体実験場だ。
ガストレアウィルスか如何か確認する場合、これほど手っ取り早い方法はないね。
マウスや、犬、猿なんかで試すなんてナンセンスだ。
この区画には俺が認めた狂人（変態）しかいない危険地帯だ。
最低でもガストレアウィルスに関しては、三年実験しないとデータが不足している。
三年後の工程が楽しみだ。

三年が経ちました。
外の世界に永らくお会いしておりません。
今年で十歳になりました。終末まで七年。

現存するウィルス類や菌類の計測は大体終わったが、此れと言って劇的な変異はなかった。
学園都市があれば、ガストレアウィルスなんて怖くも何ともないのに。樹形図の設計者があればどんだけ便利か！三年も掛かんねーよ！数分で済んじまうぞ！　てか、対処法わかんじゃね？
人体実験には死刑囚や戸籍のない可哀想な人たちに絞って選抜してきた。
ガタガタ文句を言うバカも居たが、黙らせといた。
あぁー進展しないな。何でも揃ってはいるが、人員に時間にお金が足りなーい！
沙希ちゃんを売れば儲かるかな？

「何馬鹿な事考えているんですかドクタ～？ちゃ～んとお遊び（お仕事）に熱を入れて下さいね？」
「分かってるよビッチちゃん」
「誰がビッチですか！もうー！ドクターの研究でノーベル賞物が多すぎてあっちこちに駆り出される私の身になって下さいよ～。その御蔭で資金ががっぽがっぽ懐と研究費に入っているのにドクターの研究はお金を何だと思ってるんですか？ドブに捨ててます！アレどう見たって生物兵器を作ってるとしかみえませんよ！」
「生物兵器か……似たようなもんだな。結婚するなら早めがイイらしいぞ。何故かって？ふっ……野暮ってもんだろ？なぁ！」
「なんの話ですか!?そもそも私そんな年じゃありませんよ！ピッチピッチの十八歳ですよ！」
「え？お前十八なの？……え？」
「え？じゃないですよ！なにが『え？』ですか！……本当に知らなかったんですか？」
「……」
「……」

おかしいな、冷房設備は完璧だ。どちらかといえば寒い部屋に流れ

るこの熱（プレッシャー）風はなんだ？

「時間もない事ですしもういいです。誰かさんが癌の治療法とか難病の治療法次々に発表するせいで、なれないスピーチで忙しいですし」
「それがそうでもない、真の難病には俺も手を焼いている」
「真の難病？」
「仮病、君が代病、中二病、ロリコン、ショタコン、釘宮病と世には科学ではどうしようもない病が溢れている。ニンフルエンザはもう手遅れだ……」
「よく分からないけどそんなにヤバい病なの？」
「ああ……時間はいいのか？飛行機に遅れるぞ」
「やっばいやばい！それではドクター。一週間ほど空けますので」
「いってら」

俺も大概だが、十代で主任研究員でお偉いさんの機嫌取り。
頭が上がりませんわ。
さて、今日も人類繁栄の為に一肌脱ぎますか。
ルンルン気分で『ウイルス製造工場』までスキップする。
その後姿を見つめる影に最後まで気付かずに。

第三次観測

綺麗に効率よく建設された研究施設。
特に区画ごとにそれぞれの分野に最適化された建築工事がされている。
事故防止に他区画に被害が及ばないようそれぞれの区画はそれ自体が強固な要塞とかしている。
ミサイルの直撃に耐える防火シャッター。もしもの事態に閉じ込められた際のカプセル型ポット。スプリンクラーは勿論の事、空調設備は木原自ら設計した。
一つの区画の不具合が全体に影響されればそれだけ人類の未来が損なわれる。
全区画は独立的に作られている。
つまりだ。
籠城なんてされた日にはそれはそれは困っちゃうことになっちゃうわけで……。

「……ざけんなよ三下がァ。俺の管理する俺の庭の俺の未来のパンドラに何しちゃってくれてんの？」

『中央管理総合区画』
ここから全ての区画をモニタリングしている。配給されているＩＤレベルで閲覧可能な区画も制限されているが。

「何の真似だ？血の繋がりは無いとはいえ、同じ屋根の下で釜の飯を食べ、同じ目的を掲げた同志じゃないか。まだ手遅れじゃない、大人しく出てくるなら罪を不問にする」

強制手段もあるが、機材壊れるからやりたくねーんだよな。交渉で片付いてくれるなら有りがたいんだが。
第一俺何か恨み言買ってたっけ？ぜーんぶ沙希に押し付けてきた

からな。

『……知らないだろうな。貴方は何も知らない』

「はへ？」

何言ってんのコイツ？変な声出ちまったぞ。俺が知らない？

ばっかじゃないの？

『――――――とか考えてるだろ？君は分かりやすい』

ナニコイツ……ムカついた！

被害なんて関係ネー！頭蓋骨をとろとろのチーズにしてやんぜ!!

『言い忘れていたが、私の鼓動が停止する。または、一定以上の痛覚の刺激で爆弾が起動する。此処に保管、保存された世界中の菌、ウィルス、病気の原因、人間には全く影響のない動物や植物に作用するもの、三年掛けて弄り、改造したものまで……全部だ』

「……この大馬鹿クソムシがァ!!そのデータがどれだけ貴重か理解してないわけないよな？俺の半身でもあるソレを破壊する？おいおいままごと遊びには付き合いきれねーんだよ。だいたいテメーに何の利益がある？ソコを破壊するのは人類に不利益しか齎さないぞ」

災厄は俺しか知らないにしても、科学者からしたらこの場所は宝の宝庫だ。

ソレをみすみす壊す？破壊する？爆破するだと？

ガストレアが表舞台に登場するなら『木原』を好き勝手にする。

まだ我慢。学園都市のように『木原』が好き勝手するにはこの世界はまだ優しすぎる。

『私は言った……貴方は何も知らない。知ろうともしない……愚かだ』

愚かなのはテメーの方だ。頭を掻き毟り感情を抑える。

「あ～も～俺ほど知ろうとする人間はそういないと思うけどな～……その場しのぎなら殺すよ？あ、殺せないんだったな～クソムシがァ!!」

『……これは君だけじゃなく君の一族に言える事だ。君のお父さんは優秀な科学者だ。君はその血を受け継いでいるが、経験が足りないね。君のお父さんなら私の思考と行動を予測し手を打ってる筈だ。だけどね、やっぱり君は知らない。第二次世界大戦以降『木原』は比較的に大人しくなった。君のお父さんがいい例だ。『木原』として未熟と言えなくもないが、彼は心理学を極めた人物だ。仲間には優しい人だったが裏切り者には容赦はしない『木原』らしい一面も持ってたよ』

「で？なんの関係があるの死んだ親父と」

『……君はお父さんを尊敬しているかい？』

「尊敬ねぇ……科学者としては認めているよ」

『家族として……育ての親として感謝し、愛していたかい？』

心底どうでも良さそうに肺に溜まった鬱憤ごと息を零す。

「感謝？愛していたか？なにそれ、それで科学が発展するの？俺は忙しいんだよ。でも確かに感謝はしているよ、こんな立派な研究施設を残してくれたんだし。愛しているよ、心の底からね」

『『木原』は大人しくなった。平和な時代に狂喜のマッドサイエンティストは必要ない。時代が安定した今、急激な発展は必要とされなくなった。悲しい事だが、科学の発展に戦争は欠かせない。時代は君の様な『木原』を必要としていないのだ。何より非人道的すぎる。死刑囚の横流し、人身売買、貧しい地方で家族を養うために実験体の誓約書にサインをする人々……知らないとは……無知とは悲劇だ。知らないという事はそれだけ好き勝手出来る。傲慢だ。君は天才ではあ

るがあまりにも無知だ』
「……俺が無知だと？」
『君は人間社会では……人格的に好まれない性格だ。大人より大人らしい生意気な子供だ。『木原』であってもその歳で熟成された子供は異質だよ。正直不気味だよ、この歳で恐怖を実感できた。目を見て、言葉を交わし、共に研究者として働けば嫌でも感じてしまう。日に日に私の恐怖は増幅していく。……なにを焦っている？君の人生は始まったばかりだ。時間は有限だがたっぷりと猶予がある。夢や希望に憧れを懐く世界の闇を知らない無知の世代。それが普通の子供だよ』
「その理屈だと俺が無知ってのは可笑しくないか？まぁ確かに七歳児が大人顔負けの論文発表すれば不気味で恐怖を抱くのも頷ける。けどそれとこれとじゃ話は別だ。俺が無知のと如何つながる？」

数秒の沈黙。その目を止めろ。
俺を可哀想に見るんじゃない。
俺の何を理解している！

『君は……君という存在は……いや、これは侮辱だ。言っていけない、一人の人間として、大人として『木原』である君に同情など鬱陶しく邪魔でしかないだろう。それでも、大人として私はやらねばならない。何も知らない無知な子供を叱らなければならない。それが、私のやれる唯一の義務だ』
「そんな義務ドブにして棄てちまえ!!イライラすんだよぉ!!一人で勝手に自己完結してぺちゃくちゃぺちゃくちゃうるせークソババアァァァ!!そんなに死にたきゃ望み通りご希望を叶えてやるよ老い耄れがァ!!」

もう無理、限界だね。
空調システムはオレが握っている。
まずは眠らせてどぎつい実験体送りにしてやんよ！

『私を無力化するには君がやれるのは空調を操作するぐらいなのは分かっている。防護服は完備している』

コイツ!!?

『ウイルス製造工場は君にとって肉親や同僚より優先して護る大切な場所……子宮と同じだよベイビー。どんなに恐喝しようが君は実行できない。君に此処は破壊できないよ』

クソ!!こんな形で裏切り者が……バラニウムやガストレアウィルスの研究しかしていない今の俺は攻撃的手段が無い。こんな事なら他の分野にも手を付けるべきだった。

『君は自分が処分した者を覚えているか?実験体にした者は?』

「はぁ~?覚えてるわけねーだろカス。生ごみを覚える時間があるなら壁の傷を数えた方がマシだ」

『そうか……そうなのだな……もう駄目なのだな』

「何を言ってるんだ?」

『人の心を忘れた無知な子供よ。これは私なりの我儘で勝手な復讐だ。傲慢でいつも勝ち誇っている君の顔を歪められたと誇るべきかな』

俺の気を知らないでコイツは!!

『人の心を忘れた無垢な子供』だと?人の心を忘れてないからこそどんな犠牲を出そうが地獄を回避しようと足掻いてんだろうがァ!!少数の犠牲で未来の人々が助かるなら安いもんだろ!?

『最後にコレを見せておきたい』

「あぁぁ!?……なんだそれ?ウィルスか?」

『そうだ。このフラスコには私が創った新種のウィルスが入ってい

る。これも経験の差だな。まだ私の方が頭がいい。此奴の効果は至極簡単、ウィルス類や菌に取り付き増殖するタイプだ。観測類の装置は破壊させてもらった。データは取らせない。この空間そのものが、巨大なフラスコとかす。全てが入り混じったこの空間でどんな反応が起こるかは不明だ。後始末は……君に任せる』

「おいおいおいおいおいおいおいおい!!全部話す!俺の目的も、今までの行いの理由も全部説明する!だから――」

『さらばだ』

フラスコがワラレ、全てが爆発する。

そこで――映像が途切れた。

第四次観測

何だこの感じ……胸に、ポッカリと穴が空いたみたいだ。
これが喪失感か。
これが、涙か。
今日まで涙など流したこともない俺が泣くだと？
これが……涙か。

「……映像を復旧させろ。大至急だ」
「り、了解しました！」

周りの局員が騒がしい。復旧と他区画の影響を調べている。
怖がっているのか？俺は今無力だ。親に買って貰った玩具を他人に踏み砕かれたのと一緒だ。
悲しくて哀しくて悔しくて涙が止まらない。
なのに――――――

「……ふふふ」

涙とは裏腹に三日月の立派なほど耳元まで歪む。
これは怖がられても仕方ないかな。
俺の意思に反し、『木原』が破壊を喜んでいる。
落ち着け……気を静めろ。俺の指示が無くとも、防御服に身を包んだ局員が侵入しようと抉じ開けている。映像ももう暫らくで治まりそうだ。

「研究員には何も問題ないと伝えろ。これ以上の無駄な時間はこりごりだ」

良い人だったよ貴方は、自分の正義を信じ俺に人の心を芽生えさせようと……この大馬鹿が。

此処で働く者には『大馬鹿』に共感を抱く奴が多くいるかもな。俺は悪で自分の行いは正義。

俺からしたらお前等が『悪』だ。

原作知識は断片的でうろ覚え、むしろ『とある』の方が覚えてるくらいだ。

……絶対来る世界間違えただろ神様。

「俺無宗教なんだけど……ないわー。神様が俺に与えた試練ってやつ？わろえない」

ウイルス製造工場は下手に障れない。

あの区画は正しくフラスコだ。どうなるか予測できない。観測機器壊しちゃってくれちゃってーも～。

「下手に触らない様にって伝えといて、密封しろ。何も漏らすな。防火シャッターを解除次第最後の防壁も解除し絶対に開けるな。まずは映像で確認する。状況が解り次第観測、計測器でデータ収集しつつ消火活動に移れ」

そろそろかな、さっすが沙希ちゃんの人選。超優秀です。

「映像回復します」

「中央のモニターに映せ、此処に居る皆で観賞しようじゃないか」

映し出されたモニターに誰もが釘付けになる。

異様、異常、奇妙。一言で表すなら……そう、『地獄』。

「なんだアレは？」

「人……なのか？」

「有り得ない……法則を無視している」

「現存するウィルスではまず無理だ」

驚愕する者。恐怖を抱く者。知識で理性を保とうとする者。冷静に考察する者。

俺も――――興奮が治まらない。少し濡れたね。

「落ち着けテメーらァ!!空調システムで区画の空気を入れ替える。現状の『ウイルス製造工場』は未知数だ。空調システムであの場の空気を別の区画のビーカーに保存する。終了次第『アレ』の回収に行け」

こ・い・つ・らァ!!

「さっさと動け!!移し替えたらビーカーの中身を調べるぞ!『アレ』に変化が無いか監視しつつ連絡を取り合え、以上!」

慌てた様に作業に取り掛かる研究員。

たく時間は有限だってのにクソがァ!

「回収班に『最終実験施設』に『アレ』を運ぶように指示しろ。迅速にな」

「了解ですドクター」

「……いつまでも『アレ』では駄目だな、『アレ』を『アルディ』と名称する」

「了解。回収対象をコードネーム『アルディ』と名称。ドクター、何故アルディと?」

「アルディピクス・ラミダス……人類の最初の祖先。人類最初の女性だよ。ババアでも女性だからね。ユーモアがあっていいだろ?それに……これは始まりだ」

「始まり……ですか?」

「お前はあの現象を見た事があるか?」

「それは……ありません」

「そうだ、俺もない。此処で生まれたんだ。現在の科学じゃ解明でき

ない世界初の理を捻じ曲げる未知のウィルスが」
「何故ウィルスと分かるのですか？」
「『木原』が作った空調設備だぞ？その中を流れる空気を瞬時に解析するシステムがあって当然だろ。現存するガス、ウイルス、菌、化学兵器を瞬時に見分ける。誰かが作った程度の新しいガス程度なら数秒で解析する。そのシステムで解析不能と表示された。そのデータを読んだが、配列からウィルスとだけ分かった。文字通り、未知のウィルスだ」
「未知の……ウィルス……ゴクッ」

　無いつばを飲み込む。未知に対する恐怖と、科学者としての好奇心が彼をかつてないほど高揚させる。

「研究員を先の『アルディ』と未知のウィルスの研究に回せ、情報管理を徹底させろ。『ウイルス製造工場』も隅々まで調査しろ、何らかのヒントがあるかもな。五つ区画を潰し、変わりにウィルスの研究に回す。全てに置いて優先させろ」
「よ、よろしいのですか？五つも区画をウィルスを調査する為だけに改造するのですか？」
「構わない！ただ調査の為に五つも区画を使うと思ってんのか？あのウィルスを、人を異形の生物に変えてしまうウィルスを調査だけに終わらせるとほんとに思ってんのか？色々試すしかねーだろーがァ!!お前もそうだろアドリアン！」
「なるほど……すいません。驚く事が多すぎてそこまで頭が回りませんでした。ドクターは冷静ですね」
「ふッ……まあな。俺は『アルディ』に専念する。そっちは任せた」
「了解ですドクター」

　お前にとって己が正義で俺が悪である。俺にとっては正義でありお前は悪だったが……お前は俺の希望だったよクソババア。
　沙希ちゃんには……帰って来てからでいいか。

「いっちょ頑張りますか！」

見た目通りの年頃の笑みを見せて……歪んだ。

数日後。当然、沙希ちゃんに怒られました。てへ☆

第五次観測

二年後。

十二歳になりました。西暦２０１６年って俺が生きていた前世を超えちゃったよ。西暦２０２１年までもう残り五年しかない。

日本の長野県の北部に居ます。原作知識はこれっぽちも覚えてないけど、『七星村』って単語は記憶に残っており二年前からこの地で活動している。

てか、原作知識が『バラニウム』、『ガストレアウィルス』、『四賢人』、『天童』、『七星村』、『国際イニシエーター監督機構』、『西暦２０２１年になると人類やべー』って断片的過ぎて悲しくなってくる。『とある』は詳細に覚えているのに……転生する世界を間違えたと心底思うぜ神様。

たしか……確かではないけどおそらくこの『七星村』はガストレアウィルスもとい『悪魔のウィルス』と何らかの繋がりがある。御蔭で研究が大分進んでいる。

大分って言っても活用方法だけ進行して肝心の死滅させる方法はてんで駄目だ。

「日本のお偉いさんは買収済み。俺特製の病原菌を蔓延させ治療と新しい病原菌の治す研究で幾人かの村人を此処に建てた研究所で隔離し、優しく年寄り方に貢献し村人の信頼を勝ち取っている」

「その裏で、隔離した子供に悪魔のウィルスを使った様々な実験薬を子供に投与。毎日のように体にメスを入れている自称人類の救世主ドクター」

「自称じゃない。救うんだよアドリアン君」

「へいへいその様で。所でどうやって調べたんです？こんな極東のド田舎に悪魔のウィルスの耐性が高くて化け物化しにくいって。最初は意味不明でしたよ。研究ならイギリスのラボ（ホーム）で好きなだけ出来るのに何で態々機材やめんどくさい地盤固め件手回しをしてまで此処に拘るのかがさっぱりでした」

「来てよかっただろ？」
「そうですね……留守番している沙希さんには悪いですが、一気に研究は進みましたし万事オーケーですね。それにしてもどうしてここの村人だけ、他の人と違い耐え得るのでしょうか？」
「仮説は数多有るが有力なのはこの村が閉鎖的な村だからだ。人間は時代と共に劣化していく。本能を忘れ、便利な物に頼り切り、肉体は弱っていく一方だ。それを開発している科学者が言えた台詞じゃないけどな。世界には他にも閉鎖的な村は有るが何故か、この村だけが悪魔のウィルスに対する免疫……他の人間より耐性があった。これは奇跡だよ奇跡。そこである仮説が生まれるわけだ。二年前突如生まれた未知のウィルスに何故免疫があるのか」
「過去にも……このウィルスは存在していた？」
「そうだ！憶説しかないが、遠い遥か昔にこのウィルスは世界に確かに存在していたのだ。もしかしたら恐竜は『悪魔のウィルス』で生まれた王者なのかもな。そうすれば説明がつくんだ。空気感染はしないと実験で得ているが、毒素は蓄積されていく。母から子へな。恐竜が滅び大地が灰に染まった時、『悪魔のウィルス』も滅んだか身を潜めたんだろう。だが、何億年も世界に漂ったウィルスは小動物にも何かしら働きかけた。進化し、再び地上に生物が繁栄したが、血は薄れていく。そして現在、最早失われた遺伝子はこの村で、『七星村』で生きている。奇跡だよ。科学者がこんな台詞使いたくないがな」
「そう言えば沙希さんから連絡が来てますよ。何でも例のプランの子が五歳児になったとか」
「あぁー『木原』が先祖代々関係のあるあの家系の息子がもう四歳児かー。俺の計算……６００年前の『木原』の計算では今代のその息子が人類の可能性だったか……」

まったく、６００年前からこんな計画を持ち掛けたあの一族もそうだが、それを長い目で計算し弄り実行した『木原』も異常だな。まあ弄ったのが最初だけで、後はアドバイザーとして勝手にやってくれたんだけどね。

「今度の……週末に会いに行くと連絡しといて」

今後の戦いに必要不可欠だからな。ず～と良好な関係でいたいしね。

二年前の事件以降、他の者に任せていた様々な分野に手を付けた。頭のいいガキのままじゃ生き残れない。

この世界の科学力は『とある』より低い。何処を見ても普通普通ふつ～なもんしかない。駆動鎧（パワードスーツ）も満足に作れないとかアホか。西暦２０２１年に人類は滅びかけるが、西暦２０３１年まで確実に生き残るんだ。それまでに追い付くしかない。確実に量産できるまで。

「さてと、今日も頑張っていこー！」

人間の姿のまま生物の能力を発揮出来る実験をね。

世界中の卵子を採取、保管されているこの部屋は、あらゆる遺伝子が保管されている。

今日もこの村の男性の精子と女性の卵子を受精させ、長時間かけ悪魔のウィルスを注入し、人を超えた生物を生み出す。

一年と半年前から行われている実験だ。

その内容は、人の姿のまま悪魔のウィルスに馴染み超越した能力を持つ子供を生み出すのは勿論。生まれる過程で、どの程度の悪魔のウィルスを取り込めば、安定して生まれるのかの実験が行われていた。

それぞれのビーカーで育つ子供たちは、今のところ二千体。最初の半年はその倍以上を悪魔に変えた。

表向きは病院をやっているこの研究施設は当然妊婦の面倒を見る。

色々理由をつけ酸素マスク（悪魔のウィルス）を吸わせ、生まれるまで調査、観察し続

けた。
そうして生まれた赤ん坊は至って正常。この結論から、定期的に吸わせるだけでは毒素は溜まりにくいと判断した。
第一怪悪魔のウィルス実験では、千体の試験管ベビーの内十一体が正常に成長。その他は別の実験に使用されている。
最初に生き残った十一体には遺伝子の組み換えを常時行っている。
人は人。動物は動物。植物は植物。
人が安定して一種の生物の能力を行使すれば、七、八歳でスパイダーマンに成れる計算だ。人を超えた人外が世を闊歩しガストレアを無双する。だがそれには限界がある。無双で来ても殲滅は難しい。
そこで、『行ける所まで行っちゃうか』精神でガストレア化前提でバンバンこの十一体を改造中～。
第二怪悪魔のウィルス実験では二千体以上の一種類だけを安定して量産型を生み出す実験を行いつつ、第一怪を反省しつつ数種を混合させた忌み子を生み出す。
第三怪悪魔のウィルス実験はそれが成功ラインに達すれば『木原』の技術力た～ぷり取り入れた武装強化の実験に移行する。
第三怪悪魔のウィルス実験は西暦２０２１年過ぎに移行すると予想。
如何でもいいけど、第○怪の『怪』は『回』か『次』が正しいのは分かっている。他研究員にも言われて誤字に非ずと説明。『怪』には、不思議な。あやしいなどの意味がある。俺等が作ってんのは人知を超えた人外だと実験名で分かりやすく説明しているのだ。判りやすいだろ？
この世の中はまだ優しすぎる。人権問題だのめんどくさいにも程がある。
世間にばれない様にどれだけ手を回し、貸しを作り、賄賂を贈った事か。試験管ベビーまでもってくのにどれ程対価を払ったか。
正直俺の立場は危うい。悪魔のウィルスの存在は研究員を除けばごく一部の人間しか知らない。
医学的価値を説明し完成した際の利益の無限の可能性を首脳と一

部必要不可欠なお偉いさんに粘々ねちっこく説得し許可を頂いた。反対した奴は居たかって?·そりゃいる。自分の利益より知らない他人に奉仕し「俺は偉い。人間として何て正しいんだ」と正直共感しにくい思想の輩は居た。一昔前は無理だが平和な世はそんな輩を金の力で引きずりおろし都合の好い輩を席に置ける。

俺自身も、人類（知らない他人）と自分と仲間の為に今日も奮闘している。

世界は今日もグルグル回っている。

憎たらしくいつも通り弧を描いて。

「不自然な情報や動きをした者はこの研究所に今日も居なかったかいアドリアン君?·」

「まだいませんね。人の心は変わりやすいですし、この好きなだけ実験できる環境に満足したら”人として間違いではないのか?·”と考える輩を警戒するのは至極当然。外にも監視網を敷いては?イギリス(ホーム)に監視役いるとしても、日本の天童も警戒した方が……」

「してるよ、けど下手に触れない方が長生きするよ。単身で挑みたくない人間だから」

「ドクターに其処まで言わせるとは……けど人間なんですね。そこは化け物とかじゃないんですか?·」

「アレを見てまだそんな事が言えるのかい?·アドリアン君は凄いなー。彼らは所詮人間の中で上位な存在……ただそれだけだよ。天童同士の試合見た事ある?·」

「……ないです」

「それは勿体無い。圧巻の一言だよ。武術を極めるとはこの事か!·って痛感したよ」

「それ程ですか……あ、『ルーシー―２０４７―』がレベルⅢに変異。このままいくと想定の基準値で最大のレベルⅣまで到達できます」

「個体ごとのレベルの変異が激しいからね『ルーシー』は。共食いとはいえ、それぞれレベルⅣまでどの位掛かるか記録しないとね」

「……前々から疑問だったのですが」

「なんだいアドリアン君？」
「これ生物兵器ですよね？」
「ハハハ！違うよ、人類を救う名誉な研究だよ。全員にはその辺詳しく説明してあるじゃないか！」
「医学的価値って奴ですか？それと人間の可能性とかうんたらと記載している胡散臭い資料なら筋は通ってるし納得はできるんですが……」
「何か気になる点でも？」
「大変失礼かもしれないんですが……」
「いいよいいよ。気にせず言っちゃって」
「……ドクターがそんな綺麗な理由でやりますかね？自分にはドクターが、先を見越して戦の準備に勤しむ国家元首にみえちゃんですよ。未来の脅威に備えてるって言った方がしっくりしますね」
「……ぷッ……くはははははははははは!!ひっひっひっひ、ごふがふ！がはッ！」
「じ、自分でも馬鹿な事訊いてるなって自覚在りますけど笑う事ないじゃないですか！」

凄い！凄いよアドリアン君!!優秀だと分かってはいたが、観察力はぴか一だね！
いやー君を選んでよかった!!

「……君は私を笑い殺すきかい？だが正直に答えちゃう！正解だよアドリアン君!!いやー嬉しいね！僕を理解してくれる人が居るのがこんなにも嬉しいんだなんて！俺は今日という日を忘れない!!」
「えーと、まず色々訊きたい事ありますが、一人称しっかり固定しましょ」

信じる信じないどっちでもいい！正気を疑われよと元々疑われている身だ。知ってること話しちゃうぞ～。
ふふふ、まず何から話そうか？西暦２０２１年以降の世界に決まっ

てんじゃん!!
どんな反応するのかな?
この話を聞いてアドリアン君がどう考察し考えるかが楽しみだ。
あ、だけど西暦２０２１年てのは黙ってよ。五年後僕の言った通りになって驚くんだろうな～。

この後、滅茶苦茶説明した。

第六次観察

誰が予想出来たであろうか。
最初の十一体の子供たちが局員の裏切りで『木原』から逃げる為に世界中に散らばるなんて。
誰が予想出来たであろうか。
人権団体か知らないけど、精神的な安定の為子供たちと遊ぶ仕事の研究員が裏切るなんて。
誰が予想出来たであろうか。
裏切った首謀者がアドリアン君だなんて。
誰が予想出来たであろうか。
僕の行いを世間に公表するとアドリアン君に言われるだなんて。
誰が予想出来たであろうか。
その為だけに、至高の十一体を誘拐するだなんて。
誰が予想出来たであろうか。
裏切って世界中に散らばった日が西暦２０２１年の１月１日だなんて。
誰が予想出来たであろうか。

僕が全ての元凶だなんて。

「決められた運命は……確定した運命は覆らないとでも言いたいのか神様……。今日という日を覚悟していた。大勢死ぬのも分かってた。分かってるつもりだった!!……全ての罪を背負えと言うのですか神様?僕には……重い」

『木原』としてただ生まれればどれだけ幸せか。前世の想いが俺を苦しめる。
人間性が魂を通じ『木原』を侵食する。この重圧に押しつぶされそ

うだ。心臓が張り裂ける。
おちつけ……おちつけ、おちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけ。
心を落ち着かせろ。鼓動がうるさい、通常の心拍数に戻せ。
問題ない、何も問題ない。
こうなるって分かってただろ?落ち着けよ俺!!
なーに、原作より元凶がはっきりして清々するじゃないか。
自然発生より人為的の方が説得力があるじゃないか。
結果はもともと確定していた。過程がちょっと俺のせいになっただけだ。そう、僕のせい。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!ネガティブだァ!!思考が暗過ぎるよーやばいよーヤバいくらい『木原』らしくないよ俺様!!『木原』はもっとこー……どんな状況にも不動に堂々とデータ収集を何より優先する科学者魂だ!!よしよしよしよしよし『木原』が勝ってきた……罪悪感も薄れてきた……脳も妙にクリアだ。『木原』に感謝だな。『木原』の技量と頭脳を持った唯の科学者じゃ俺の心が持たかったぞ。初めて神様に感謝だな。もうないと思うけど」

お、イギリス(ホーム)に帰ってきたか。専用機とはいえ座ったままなのは腰が痛くなる。
アドリアン君も馬鹿だねー。何の為に一人一人に玩具渡したと思ってんの?何万何億の生物の遺伝子をぶち込んだ至高の十一体は人の似姿で国を亡ぼせる。それがガストレア化したらレベルⅣなんて甘っちょろいもんじゃない。正真正銘の世界を亡ぼせる怪物の誕生だ。そうなったらレベルⅤかな?
『とある』みたいだなレベルの格付けとか。
その場合どっちのレベル5が強いんだろうな……規模と破壊力とインパクトはガストレアだけど、生物じゃあり得ない能力を扱う超能力者もまた化け物。
ん~~……相性かな。考えても仕方ないな。

時間的にそろそろかな。玩具を失った子供たちはその身を暴走させる。父に対する裏切り防止がこんな形で裏目に出るとは、世の中ままならない。一人一人にあげた玩具はその子供の精神的安定と欲求を満たす役割をしていた。玩具を失ったあの子たちは、一気に自分が保てなくなり、玩具で無意識のうちに抑え込んでいた人以外の遺伝子が暴走する。そうならないよう、玩具にはマーカーがあり、無くしてもすぐ探し出せる管理体制になってたんだが。

俺から逃げる為マーカーの付いた玩具を施設に置いてきたなアイツ。

精神安定の部分は説明したと思うが、暴走ってのは言ってなかったな。

「ほんと、世の中ままならないな」

「お帰りなさいドクタ～。何かおっしゃりました？」

「なーんも。ところで沙希ちゃん、腰痛くてね。揉んでくれない？」

「私は運転するんで我慢してください。軍は予定通り軍事演習を行うようです。一応二時間後に開始されますが……」

「あぁ～問題ない。三十分で至高の十一体、『ゾディアック』が悪魔のウィルスを撒き散らしながら世界同時に出現しちゃうし。時間稼ぎには十分かな」

「はぁ～」

「そんなため息ついてどうしたの沙希ちゃん？」

「いえ……ドクターの説明通りになら、この世界大ピンチですね～。渡された資料通りならその十一体は時間さえあれば世界亡ぼせますよ」

「アドリアン君がこんな行動に出るとは思わなくてね。対抗手段のバラニウムはだけど二週間後に発見したってことにして」

「怪しまれない為なら一週間でもいいんじゃないですか？大抵『木原』で解決しますよ？」

「それもそうだな。その辺任せるよ」

今日はもう寝よう。ベットに入ってぐっすりして、頭をリセットだ。

精神の疲労も厄介だな。アイディアが何も浮かんでこない。

そんな日は寝るに限る。

「ドクタ～」

「なに？俺眠いんだけど」

「悪魔のウィルスはドクタ～が発明……じゃなくて、発見したじゃなあいですか」

「……にっくきクソババアが作っちまったな」

「それを踏まえても、第一人者じゃないですか」

「そうだな。……なに言いたいの？」

「これから忙しくなりますし、何時までも悪魔のウィルスではまんまじゃないですか。私なりに考えてみたんですよ」

「ほうほう気になるね。君のネーミングセンスが試されるね。優秀な沙希ちゃんの命名だ。そりゃー心弾ませる凄いモノなのだろうね。ね、沙希ちゃん？」

「ねーねーうるさいですよ。それとなくハードル上げないで下さい。自分でも自信ないんですから……言って後悔してきました」

「余計気になるな。……そこ右に曲がって、マック食べたい」

「緊張感無いですね～。これから大変なのに」

「だからマック食べるんだよ。当分食べれそうにないからね。それに一応祖国には警告してあるよ。上の方も黙認するしかないよ、自国で秘密裏に開発されていた生物兵器が世界の人口を十分の一にするなんて公表も情報も残しちゃ置けない。俺だけに罪を擦り付けるにはもう遅いんだ。俺を社会的に生かし、活用するしかない。最初の三年くらいは情報混乱や重要施設の破壊で情報操作は容易。未来の利益を考えるなら逆に俺が更に偉くなる」

「結構政情に詳しんですね。実験馬鹿だと思ってました」

「馬鹿は酷いだろ馬鹿は。馬鹿と天才は紙一重だよ」

全種類単品で頼んじまった。食い切れるかな……お腹減ってるし大丈夫か。ちッ……あの店員シェイク入れ忘れたな?ストローもねーし最悪。けど態々シェイクの為に戻るのもな……安いしいっか。

「……んく、もぐもぐ……ごくん。あぁぁ……沁みるぜ……目尻から涙が……」

「なに変なところで感動してるんですかドクタ~」

「感動ついでにさっきのネーミング教えてもらおうか」

「……言わなきゃだめですか?」

「気になってウィルス対策に集中できないわ」

「い、言いますよ!絶対に笑わないで下さいよ!?」

「笑わないよ」

「うわ~信頼できない」

沙希ちゃん完璧超人なのにたまに変なの口走って墓穴掘るんだよな。

天然可愛い。

「悪魔のウィルスは感染者が悪魔みたいに化け物になるから悪魔のウィルスって言われてるじゃないですか。それだとイメージが悪いじゃないですか。医療方面やこれから生まれる感染した子供たちにも悪いイメージが付くのはかわいそうですし、悪魔ってだけでそこだけを見る人がやっぱりいるんですよ。少しでもそんな名前で傷つく人や誤解を招く人を減らすためにそうゆうのに関係ない名前を思いついたんですよ」

瞳の奥は輝き、自分が正しいと一遍も疑わない正義の精神。

化け物を生み出す悪魔のウィルスを人類の未来を必ず幸せにすると信じている。

そしてまずは名前を変更。

名前の変更は否定しないが、沙希ちゃんの思想は『木原』並みにヤ

バいモノを感じる。

「ドクタ～の名前から取ってもじったんですよ」

「俺の……名前から？」

俺の名前からか、もじったんなら俺って分からないかな？

そもそもそのまま採用するなんてきまってないけどな。

「ストレンファーナ＝木原＝ヴァンスガズをもじって……」

「『ガストレア』ってのはどうですか？」

第七次観測

西暦２０２１年。世界はガストレアの恐怖に包まれた。
海は魔物、地は怪物、あらゆる生命体に人類は絶滅したかに見えた。
しかし人類は死滅していなかった！
ガストレアとの戦争により荒廃した世界で、人々は一部の無頼と化した暴力に脅えながら暮らしていた。その世界にのちの世に伝説の科学者『木原』と謳われた世界最高の頭脳を持つ天才が現れた。
『木原』によってガストレアをなぎ倒し、再び人々に希望を芽生えさせた。

閑和休題。

世界に突如現れた巨大生物は脅威の再生力と人類に対する殺戮能力により昨日までの平和な世は終わった。
そこに未知のウィルスも合わさり、人類は魑魅魍魎の化け物と戦う事となる。
巨大になろうが生物は生物。近代兵器の前には大きくなった的でしかなかった。
その考えはたった一日で覆された。
恐ろしく死ににくいのだ。鳥は羽を捥げば地に落ちるしかなく、地上生物も足を吹き飛ばせば身動きが取れず斃すのは容易と考えられた。
世界に出現したガストレアはあらゆる所で暴れた。警察や軍隊がカバーしきれない範囲に展開したガストレアはその巨体と再生力、生物特有の能力を駆使し防衛には国全てを護るのは無理だと判断された。
護るべきエリアを決め、人々は一致団結する。口には出さないが、皆気付いている。このままじゃ勝てないと。

一週間で人類は絶望した。この世界に希望なんてない。進行を遅らせようと戦うが奴らは何処からでも湧いてくる。対策を練らねば、絶望しかないこの世界に人類は希望を求めている。怪物と戦う決定的な対抗手段が。

近代兵器の効果が芳しくない情勢に『木原』は革命を興した。闇と同化する漆黒の鉱物。あの怪物に対抗する為の金属。この発表の際の神無城沙希博士は「この金属が黒いのは、人類が懐くあの怪物たちに対する憎悪だ」と、生き残った人類はその言葉に深く共感した。

バラニウムの兵器を、怪物のより詳しいデータを。

一つの国に五人の天才が集結する。のちにその五人は『五賢人』と呼ばれる。

各国はまず壁を作った。巨大な壁を。怪物の侵入を防ぐ強力な壁を。

エリアを等間隔で囲う巨大なバラニウムの石板の建設は全てに置いて優先された。人権なんて最早ない。生きる意志を、どんな犠牲を払っても生き残る信念の強さを、人類は試されている。

日本には現在、四人の天才がこの危機を乗り越える為の兵器を考察していた。より効率よくぶっ殺すための術を、四人は互いの技術を密かに盗み、高めていった。

西暦２０２１年1月1日から5か月。

様々な名称変更で『悪魔のウィルス』、『怪物のウィルス』と忙しなく色々な言い方が沢山あったが、ここ最近『ガストレアウィルス』で定着した。名称など如何でもいいが、研究の際名前がハッキリとしているのは良いことだ。

『機械化兵士計画』が立案され、四人はそれぞれの技術を導入し人間兵器完成させるべく不眠不休で研究に没頭していた。そんな中、五人目の最後の一人がやっと此処に来るそうだ。

彼女――――――室戸菫は心底どうでも良さそうにその報告を聞いていた。いや、実際に如何でもいいのだろう。自分が唯一無二の天才と信じている四人は同等の頭脳を所持する互いを牽制し、技術を高める為のよりよい好敵手（ライバル）でもあった。

そんな時期に、しかも遅れてやってきた最後の一人に『負け』の二文字は存在しない。同等の四人の天才が共に学ぶのと、同等の天才が一人で学ぶにはこの五か月の差は決定的。五か月前の自分と同じ位かもしれないが、来るならくるで邪魔をしないで欲しいのが本音だ。

私は自覚できるほど狂気に染まっている。この憎悪と殺意と絶望は私から大切な人を奪った怪物……ガストレアが此の世からいなくなくなるその日まで、私の魂は報われないだろう。

「……ころす、殺しつくす……一匹でも多く……」

未練など無い。無くなってしまった。此処に居る室戸菫は唯ガストレアを殺す壊れた科学者だ。死ぬまで私は救われない。救われる気もない。ガストレアを殺せればそれでいいのだから。

トントンとノック音。普段は研究に集中し気付かず無視するが今は舌打ちをしてしまう。相手も私が気付いてないと決めつけているので、私の許可を執らず形だけの返事をし入室する。

「室戸様。最後の一人がご到着になりましたので至急執務室までとのことです」

やはりそれか。メリットが無い。時間の無駄。移動するのがめんどくさい。

「行く必要が無い。君はそんな事に私の時間を奪うのかね？移動時間。顔合わせの時間。自己紹介の時間。帰る移動時間でロストする時間にどれだけ出来ると思う？君が本を一冊読んでいる間私は図書館を読み終わるよ」

睨み付けるが、何時もの事なので相手は怯む様子もない。

「グリューネワルト翁の命令です」

「そうか……」

アルブレヒト・グリューネワルトは私が唯一尊敬する人物。我々四人を統括する立場でもある。そんな彼の願いだ。無下にできない。

「……ならさっさと行くとしよう」

五人目は神無城沙希だったな。いち早くバラニウムを発見した歴史に名を残す偉人確定の人物。その前は数々の難病の治療法を発表している。その時点で歴史に残るノーベル賞受賞者として名誉を得ていた。

そう考えると彼女と話し合う事で新しい閃きがあるかもしれない。

執務室に入ると私が最後のようだ。三人の視線が突き刺さる。それぞれ好き勝手に寛いでいる。

「おはようございます?ところで今何時だ?」

「室戸菫。時間位常に把握して然るべきものだ。お前には時間という概念が無いのかね?我々科学者は時間とは切っても剥がれない関係なのだよ。時刻は午前8：00だ」

「感謝するよエイン。お前の堅物ぶりが滲み出る時刻報告だ」

「ふん……時間厳守は当たり前だ。三十分前とはお前には言わないが珍しく時間丁度に来た事は褒めてやろう。問題は神無城沙希だ。完璧に遅刻だ」

「遅刻か……時間の無駄だな、帰る」

「まあまあ待ちたまえ。これから協力する同志ではないか。それに割く時間は無駄ではない……そうだろ?」

「グリューネワルト翁のおっしゃる通りだ。少しは我慢したらどうだ

？」
「……アーサー。貧乏揺すりは説得力に欠けるぞ？」
「……これは癖だ」
「グリューネワルト翁を見習ったらどうだ？とても余裕に満ちている。なぁエイン」
「なぜ私に振るのだ室戸菫？私は常に余裕に日々を過ごしている」
「その日その日のスケジュールを手帳びっしりと書いている君に〝余裕〟の二文字が出るとはな」

皮肉をぶつけり合ういつもの光景。五分遅れて目的の人物が慌てて駆け込んでくる。

「お、遅れて申し訳ありません!!部屋を間違えまして……」

私も人の事を言えないがこれは残念美人という奴か？年齢より見た目が若い。寝癖はそのままで天然臭漂う天然記念物の予感がする。

「構わないとも。我々は此処で戦う同志ではないかね？」
「そんな同志だなんて……私は唯の付添人ですから。ドクタ～この部屋ですよ！」

四人同時に〝ん？〟っと首を傾げる。付添人とは如何いう事だ？
遅れて部屋に入ってきた人物は青年。誰だ？神無城沙希がドクターと呼ぶ謎の人物。実は五人ではなく六人居ましたと言うオチか？

「これはこれはグリューネワルト翁御久しぶりです。初めての出会いは僕の父親が生きていた随分と前ですが覚えていますか？」

青年を観察し、グリューネワルト翁とエインが分かりやすい動揺をする。この二人がここまで露骨な反応をするこの青年は何者だ。

「生きておったのか……」
「ええ、生きてますよ。怪我一つない健康体です。元気が有り余って大変なほどです」
「如何やらその様だ。死んだと聞いた時、貴様がそう簡単にくたばると考えてもなかったわ」
「……なるほど、彼女は隠れ蓑か。君が生きて裏で糸を引いていたのなら納得だ」
「お二人は誰か分かってる様子ですが、そろそろ紹介してもらっても宜しいですか?室戸も困惑の様だ」

この青年は一体何者なのだろうか?興味がわいてきた。

「では改めまして自己紹介を。そうですね～……『木原』と、お呼び下さい。フルネームは教える気はないのでその辺よろしくね。あ、グリューネワルト翁とエイン殿は知ってそうなので誰にも教えないでください。記録上は『木原』とだけ登録してあるので調べるだけ無駄だと思いますけどね」
「『木原』……だと?!」

私にとって名前などソレを特定するだけの記号だ。フルネームなど興味ない。そんな事よりあの青年は『木原』と名乗った。

「科学業界の都市伝説的ノリかと思ったよ。常に科学の発展の最先端に居ると言われている一族。新しい発明には『木原』の影があると噂……伝承のレベルで根付いている。噂には噂される根本が必ず存在する。その元凶が君のわけだな『木原』君」
「へーそんな噂流れてんのか。照れちゃうな～お姉さんは室戸董でおk?」
「おーけーだよ『木原』君。噂話の真意は如何なのだい?」
「大体合ってんじゃないんですかね。だってほら……『木原』ですし。

沙希ちゃんの発表したバラニウムは元々『木原』が見つけた物ですし。そうそう皆さんは『生命を尊重する』と約束を交わしたそうじゃないですか？」

「当然だ。我々は科学者である前に医者でもある。どんな状況でも生命を尊重するのは人として、人間として至極当たり前だ。それ以前に医者が命を粗末にしては我々の存在意義が問われる」

「お堅いねグリューネワルト翁。その信条が何時まで持つか楽しみだよ、この地獄と化した世界でね」

「そうか……肝に銘じておこう。では君の信条は何かね？」

「オブラートに包んで言えば……科学の進歩に不必要なものはモラル……は、嘘ではないですが貴方方には敬意を払い『木原』ではない僕の本音で話しましょう」

「その心は？」

「どんな犠牲を払おうが人類を新たなステージへと導くのが僕の信念だ」

開いた口が塞がらないとはこの事か。この青年は超人的な攻撃力や防御力を持つ兵士を造り出す極秘計画を知っているのか？

「機械化兵士計画のことかね？」

これはグリューネワルト翁らしくない。自分から極秘計画を喋るのは愚か者のする事だ。だが、グリューネワルト翁からは隠し事は無用と切り出した。何よりこの程度の事『木原』ならもう知られている前提で話している。

「貴方方が新人類創造計画と呼んでいる計画かい？アレは発想は良いけどコストがかかりすぎると思うけどね。あ、別に否定はしてないよ。それも科学の発展だ。けど僕は、ガストレアウィルスに人類の可能性を見出すけどね」

「お前はあのおぞましいウィルスを可能性と呼ぶか!!」

「落ち着いて下さいアーサーさん。そうですね……もう耳に挟んでいると思いますがガストレアと同じ赤い瞳の赤ん坊が生まれていますよね。丁度ガストレアが出現してから」
「それは聞き及んでいるが……唯の子供だぞ？」
「ハハハハハハハッ!!唯の”子供ですか!!僕は確信してるんですよ、あの子たちは人類の進化の形の一つだと、ガストレアに対する切り札になるとね!!」

高らかに笑う『木原』は咳き込むまで笑った。

「ゴホゴホゴホッ!!あ～、んん!!沙希ちゃんありがとね、背中摩ってくれて。……え～僕は貴女方四人を高く評価しています。この世界最高の頭脳を持つ『木原』と同等の天才である貴方方を。今の研究に息詰まりましたら私の所まで来てください。最高の待遇でおもてなしをすることを約束します。それでは」

最後に神無城沙希が連絡先の名刺を私たちに手渡しその場を立ち去った。

医師として、あの青年には同意しかねる。私の本能が、魂が警告する。奴の根本は人を使い捨てる外道だと。

私の人生においてあれ程のクズの外道に合う事はないだろう。

自分は絶対に生命を尊重し、外道には落ちないと誓う。

第八次観測

西暦２０２５年。世界は変わった。

日本が五つのエリアに分かれた様に、故郷でもあるイギリスでも変化は起きている。

ヨーロッパの国々はガストレアの脅威に一国としての機能を保つのは困難を極めた。

そもそもヨーロッパとは、イギリスを含め、ヨーロッパは江戸時代の日本と同じく『地方領主の領地＝都市国家』と言う感じだこの例えはアジアでも通用する。だが、今更一つの国として一致団結し頑張りましょうは通用しない。それぞれが独自の国家だった時代が長いので無理やり一つの国としてやっていくよりもＥＵと同じく『複数の国の連合体』としてやっていきたいと言う願望が各国にはある。そこで、

アイスランド、アイルランド、イギリス、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、エストニア、ラトビア、トアニア、ポーランド、デンマーク、ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランス、スペイン、ポルトガル、スイス、オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー、スロベニア、イタリア、ルーマニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ユーゴスラビア、ブルガリア、マケドニア、アルバニア、ギリシャ、リヒテンシュタイン、アンドラ、サンマリノ。計３６各国は連合体として一つになった。その中で消えた国もあったが、ヨーロッパは連合国としてＥＵ改め『ローマ連邦』として誕生した。

何故ローマ連邦なのかは知らんが、国のお偉いさんが頑張って決めたらしい。如何でもいいが。

「さー……諸君。お披露目と行こうじゃないか。ガストレアウイルス抑制因子を持った現代のスーパーマン。機械化せずとも人類はガストレアと戦えると証明するお披露目会。呪われた子供たちの優位性を人類に広めるのだァ!!この日をどれだけ心待ちに過ごしてきたか

分かるか野郎ども!!」

そうここはエリア外。モノリスに引き籠った腑抜け共と違い勇気溢れる勇者しかおらぬ！

「はいはいそうですねドクタ～。あ、そこの機材こっちだよ～、コードは踏んでほしくないよそこの人達。そこ！ガストレアが来る前に終わらせる気あるの!!あ、続きをどうぞドクタ～」

「……なんでもないっす」

くそ！僕を居ない者みたいに、邪魔者みたいに扱いやがって沙希ちゅうあん。そこに痺れるぜ……。

くぅー……嬉しさのあまり肌がゾクゾクするし涙も出てくるし、僕はなんて幸せなんだ。誤解なきよう言っとくが今日のデータ収集と披露宴で歓喜してんだからね！

「ならドクタ～も手伝ってくださいよ」

「何故僕が？力仕事は柄じゃない。今も片手間だけど仕事はしてるよ」

手のひらサイズの液晶パネルをぱっぱと操作。そこには一人の膨大な量の体調データ現在形で配信されている。この中に、足裏から頭の天辺までの肉体の隅々のデータが確認できる。まさに、君の知らない所まで僕は知り尽くしている……だ！

「今回の主役ですよねそれ？過保護ですね～ドクタ～。態々お手製の『檻』に容れて運んで来たんですか？逆にストレス溜まっちゃいますよ？」

「『檻』とは物騒だな沙希ちゃん。『愛の棺桶』ってちゃんと命名してあるでしょ？脳波も検知してるから喜怒哀楽は簡単に把握できる。今はリラックスし過ぎて眠ってるよ。栄養の管理も直ぐに本気で戦え

るよう肉体のポテンシャルは常に絶好調。怪我の治療も病気の治療も何でもござれ、手足吹っ飛ぼうが生やせる便利な『愛の棺桶』。その気になれば寿命まで入れる愛の結晶だ。生命維持装置って言えば簡単か？それだと普通過ぎて詰まんないな」

「完璧に『檻』じゃないですか。入れてしまえばスーパーマン（呪われた子供たち）も脱出不可能な生かされる檻じゃないですか～ドクタ～」

「態々そんな事に使う予定はないよ。彼女は……そお……大事に育てた娘かな」

「ドクタ～が父親なら私はお母さんですか？」

「アラサーには興味ないな」

「誰がアラサーか?!まだ青春真っ最中の二十代です」

「青春とか草生えるわ」

　沙希ちゃんは相変わらず面白いなー。研究肌過ぎて貰い手が居ないのが難点だけど。あれ？僕今年で二十歳じゃね？前世より長生きしたな。

「随分と楽しそうじゃないですかドクター。痴話喧嘩ですか？」

「おお～ジョセフ君じゃないですか。相も変わらず元気そうでなによりです。今年で何歳でしたっけ？」

「御久しぶりですドクター。自分は今年で十三歳ですよ。頭のよさなら二人には勝てませんが青春なら二人に圧勝です」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!現役には勝てないさ。そんなに固くならなくていいんだよ？」

「いえ、上からもドクターには礼儀を尽くせと」

「どうせあの非情なおじいちゃんでしょ？許す！僕が許可しちゃう！素のままの君でいてほしい」

「身内以外でジジイにそんな口訊けるのドクターくらいですよ。それじゃ遠慮なく、ドクターサインください！」

「いいよ」

「えええ！いいんですか?!てか、サイン書けたんですか?!しかも色紙

に！……なんで色紙持ってきてるのジョセフ君？」
「おれドクターの大ファンなんですよ！いやー会えてうれしいです！家で関係持ってても個人的な繋がりも会ったことも見た事もないですからね。ほら、子供の時ですし。おれ達がここまで上に来れたのも『木原』の御蔭ですよ」
「そこまで言ってくれると嬉しいな。ソレを今でも忠実に行っている君たちは僕たちの誇りだよ」

この子はもっと化ける。十三歳にして空手、柔道、拳法、ボクシング、サバット、総合格闘技に至るまで十年以上修行したその道の達人と勝負し、勝利を勝ち取る強さがある。今は剣術、棒術、槍術、銃剣格闘などにも挑戦してるらしい。

「そうだ！オススメの武術があるんだけど『天童式武術』っての知ってる？」
「天童？ふむ……ジジイの付添で何度か。身内以外には教えてくれないし映像も撮らないから習いたいにも習えないのが現状ですかね」
「そんな君にジャーン！盗撮映像～ぱっぱかぱ～。ほいあげる」
「……ほんとに貰っていいの？貰っちゃうよ？イヤホー!!建築の勉強しながら今の実力で如何対策すれば勝てるか考察するよ!!」

さすがニュートン。人間の身体は全員が上を目指し進化しているのではなく、様々な個性、弱点、偶然の変化がありながら大体で生きていけるラインで落ち着いているだけである。それを意図的に、『全ての個性を兼ね備え』『向上させている』のがジョセフの一族。
設定からカッケーなぁおい。一言で済ますなら人間のやれることは全て出来るっだ。頭脳も人間の中じゃ天才だけど専門的な学者や、科学者には勝てないかな。『木原』も人間として努力して『科学者とはこう在らねばならない』って感じに頑張って『木原』になったならカッコいいけど、『木原』は最初っから『木原』だからな。……あれ？『木原』が概念っぽく聞こえるぞ？

「どうかしましたドクタ～？」
「いやーね……『木原』って何だろって考えてた」
「そんなの簡単ですよドクタ～」
「え、マジで？」
「『木原』は『木原』じゃないですか。『ニュートン』が人間の身体としての到達点なら、『木原』は人間の科学者としての到達点ですよ～」
「……そんなもん？」
「そんなもんです」

パネル画面を切り替え偵察衛星の映像を確認する。ガストレアの一団が視界で確認できるまで一時間を切ってる。最終チェックで無人偵察機による確認作業と機材のチェックにそろそろ彼女を外に出して馴らしておこう。

「ジョセフ君。拠点で紹介したい子がいるから一緒に来てくれ」
「いいですよ。女の子ですか？なら失礼の無いよう急いだ方がいい」

フッフッフ……二人には『国際イニシエーター監督機構』を設立する土台に……伝説になって貰いましょう。二人の様に人間と呪われた子供たちのペアによる警察でも軍人でもない民間人でも気軽に憎悪のまま戦えるシステムに……その場合、褒美があった方がいいのか？それなら序列付けにしそれに応じ何かしらの特権を与えるのもありか。原作知識が『国際イニシエーター監督機構』の名前だけで内容が分かんねーし。その辺おいおい根回しすればいいか。人類が呪われた子供たちの重要性に気付く切っ掛けの戦いでもあるのだから。

第九次観測

『サラブレッド』

１８世紀初頭にイギリスでアラブ馬等を競走用に品種改良された軽種馬がある。現在も、競馬で勝つことのみを目的とし日々交配と淘汰とが繰り返されており、人が創り出した最高の芸術品とも呼ばれている。血統のよい馬や優秀な成績を残した馬を交配させ淘汰を繰り返す。より　完璧な、徹底的な、血統背景だけではなく、育つ環境も含めて完璧であることを指す。

『人間』が『人間』になるために、『人間』がより『人間』らしさを、『純血』を絶やさない為に。

一流の職人が手掛けた芸術品は観る者を魅了する。あらゆる状況で美しさが変わる芸術品は、無機質でありながら人間の心を放さない。馬が芸術品と称賛されるなら芸術品と称えられる『人間』とはなにか？

世界一可愛い美少女を決めるコンテストで優勝した少女？世界三大美女のクレオパトラ7世、楊貴妃、小野小町？容姿による外殻的芸術は時間と共に失われて行く。英雄やスポーツ選手などは？容姿がさほど良くなくとも成し遂げた功績でその人物が他者と違って見える。概念芸術は時間と共に伝説になる。

それじゃあおれ達は？

政財界では有名な方だが、おれ達は公式の試合にはでない。経歴が異様なだけの金持のボンボンと誤解する輩もいるかもな。日本の天童みたいに政治にそこまでの影響力は無い……のかな？政治や権力におれはまったく興味はない。おれの代から目立ってこうと未来設計図を立てる前にガストレア戦争だ。有名になってモテたいと思うのは男として当然だろ？話は戻るが、おれ達の芸術感性はあまりいいモノとは言えない。見た目より機能で服を選ぶし、見た目より頑丈な携帯にする。おれはカッコイイにこしたことはないけど。

芸術の感性は人それぞれというが、おれ達の感性は癖が強い。ナルシストと勘違いされる台詞だが、おれ達が芸術だ。おれ達にとって

『サラブレッド』は至高の芸術品だ。

『サラブレッド』を『サラブレッド』にする年月と繊細さと――――

――芸術性がおれ達にはあった。『人間』はもじき『人間』に成る。”

神に最も近い生物”が完成する。

おれ達の誰かが言った。

「進化こそ――――芸術」

……と。

科学者は嬉しそうに計測器を準備するに対し、武装した警備部隊はピリピリ殺気立って近づく生物が居ないか警戒していた。ここはエリア外。モノリスの外に人類の安息地は存在しない。なのにここに居る人たちの温度差は北極と南国。誰が好き好んでモノリスの外に出たがる?ガストレア出現から五年経ったが愛着など沸くはずもない。不安と恐怖が精神をすり減らしている。逆に科学者は元気いっぱいだ。何がそんなに楽しいのか、鼻歌交じりで作業に没頭している。

両者の違いは価値観。価値観が根本から異なるからここまでの温度差が出てしまうのだ。唯のガストレアなら両者の温度差は出なかった。ここに向かっているガストレアが特別であり、人類にとって天敵であり、全ての元凶でもある生物。

世界に突如出現した十一体のガストレア。『ゾディアック』。

兎に角謎が多い。ガストレアとは何か?そのウィルスは?そもそも何故対を成すように都合よくバラニウムがある?災害には理由がある。人類はその『理由』を調査し、確信を得なければならない。

だが、問題は今の状況。ローマ連邦に接近しつつある一体のガストレア――――否、『群れ』。

黄道十二星座の名を冠すゾディアックの一体、無敵のガストレア『金牛宮(タウルス)』が接近してくる。

癖の激しいガストレアを統括し集団を率いて行動する金牛宮（タウルス）。都市部等の人口集中地区に何かしらの目的――――――かは判明してないが、意図的にガストレアを率いて都市を破壊し人間を蹂躙しているのは事実。千を超えるガストレアを率いる人類の敵、無敵のガストレア。コイツが来たら終わりのレベル。軍事国家が匙を投げ完全敗北したゾディアック。

此処に来てるのは、死ぬのが分かって来ている馬鹿野郎しかいない。軍隊が負けた相手におれ達は立ち向かうしかないのだ。たった二百人……二百人〝も〟来てくれたんだ。今頃市民や一部の関係者はローマ連邦本拠地イギリスに逃げていることだろう。

危機にある時、人間には逃げ出す者と、逃がされる者の二種類が出てくる。おれは前者を軽蔑しない。しかる後に、後者には敬意を払ってしかるべきだと学んで欲しい。それが……後に生きる者の義務だ。

「まあ……死ぬ気はないけどね」

この先に『木原』がいる。この二百人のリーダーはあの『木原』だ。人としての人格は壊滅的だが、この時代においてこれほど優れた科学者は居ないとジジイが言ってたな。

遠目で確認できた。まずは『ニュートン』として振る舞う。『木原』がどうやって金牛宮（タウルス）を追っ払うか知らなければならない。何が、行ってからのお楽しみだジジイ。年考えろって。けど、会うの楽しみだ。彼の論文に目を通したことがあるがとても興味深かった。『木原』の一つの完成された存在に敬意を払うの当然。『木原』は頭脳の進化の高みにいる。あれこそ思考する芸術だ。手形は無理でもサインはしっかり貰わないとね。

「随分と楽しそうじゃないですかドクター。痴話喧嘩ですか？」

そこから他愛もない会話をしサインを貰った。紹介した子とはジジイに行けば分かるに関係ある子かな？

『木原』専用軍用テントは直径五メートル以上はある。デカい、目立つ、警備は……無人機かあれ？テントを囲むように一定の間隔で配置されている。

「こっちこっち、ジョセフ君に是非見て貰いたくて」
「女の子なんでしょ？なら断る理由は皆無。男は女性の期待に応えるのが仕事だ……所でどんな女性です？」
「そだね……君がどれだけ『人間』として最強でも敵わない相手かな」
「……その子本当に『人間』ですか？」
「『人間』も混じってるとだけ言っておこう。さて……この中だ」

正方形の巨大なキューブ？縦横四メートルの真っ白の箱はさながら神秘的でもある。

「性別は女性だけど虎やパンダとか言いませんよね？」
「僕もそんなに意地悪じゃないよ……君も愛の棺桶を『檻』だと思ったの？」
「えええ?!違うんですか！てっきり隔離用の檻とばかり……」
「マジか……『檻』は比喩でもなく本当にそう見えるのかよ」

何かマズッたか？ドクターが端末を操作するとキューブが半分に割れ液体が流れ出る。

「紹介しよう彼女は今年八歳になる僕の娘で、君のパートナーでありガストレアに対する最強の生物になる……人類の希望だ」

キューブが解き放たれる。ジョセフでは理解できない性能を誇るこのキューブはとても静かだ。液体が排出される滴る音しか響かない。

少女はゆっくりとキューブから足を降ろす。適温の液体の中にいたせいか僅かに赤みを帯びる四肢。腰のラインまである銀髪が肌に

張り付き妖艶さを引き立たせる。顎から滴る水滴が身体に流れ、寂しい胸囲を難無く通過しへその穴に吸い込まれる。

そう……彼女は全裸だ。

「～～～ッ!?!!すんませんしたーーー!!」

慌て過ぎて舌が回らなかった。頭を下げ、見ないようする。綺麗に九十度。この姿勢って謝ると同時に目を背ける効果がるんだなと、如何でもいいことを考えてしまった。

「……?ナゼ、謝罪をするのですか?」

可愛らしく小さな顔を傾ける彼女は、素直に疑問を尋ねる。

「紳士たる者淑女の許可なく裸を見るなど言語道断。ましてや、男が気軽く見ていい物じゃない。完璧に此方の落ち度だ。改めて謝罪させてほしい……すみませんでした!!」

「……?余計に分からない。ナゼ、謝るのですか?私はドクターより作られた実験体です。『人間』ではない私にその理屈は通じないのでは?」

「君は」

「はいはいそこまで!まず自己紹介しましょうよ、ね。それと沙希ちゃん、ふくのはいいけど用意した服をさっさと着せてくれない?」

「ドクタ～お肌もちもちですよ!かあいいな～かあいいな～お持ち帰りしたいな～……だめですか?」

「駄目です。着せろ」

「むぅ～～……はい」

服の擦れる音がする。聞き耳を立てるのもよろしくないが……聞こえるものは仕方ない。このくらい許してほしい。

「ばんざ～いして～」
「拒絶します。ナゼ、先生が服を着せるのですか？一人で着れます」
「聞く耳持ちませ～ん！ほら、時間の無駄ですよ？ここは従った方が得策ですよ～」
「ム……卑怯です」

そのままされるがままに着せ替えられた少女は不満そうに頭を撫でられている。
一目で唯の衣服ではないと分かる異様な服。首から下をすっぽりと隠す黒の全身タイツ……はダサいので何かメカメカしい黒のスーツを基準に見た事もない最先端技術を装着している。銀色のプロテクターがジャパンアニメーションのどこぞの従来の兵器のそれを遥かに凌駕する（笑）空飛ぶパワードスーツ並みに「それ防御力あんの？」の格好をしていたのだ！

「えっと……お似合いですよ？」
「ナゼ、疑問形なのか問い詰めたい所ですが、この装備の性能は」
「はいはいそこまで！二度目だけどさっさと自己紹介しろやこら」

彼女を不機嫌にさせてしまったか？ミスったな。一時期ジャパンアニメーションに無駄に嵌まった時期があったからな……つい反応してしまった。そう云えばドクターの『木原』は元々ジャパンで生まれなんだよな。ドクターもアニメとか観た事あるのか？

「んん！失礼お嬢ちゃん。自分はニュートン……ジョセフ＝G＝ニュートン。ミスの名を伺っても？」

姓を名乗ってから姓名名乗り直す。キザっぽいが年頃のお嬢ちゃんには効果覿面かな？

「……ジョセフ＝G＝ニュートン。記憶しました。私には様々なネー

ムがありますが……生みの親であるドクターから頂いた名を名乗らせてもらいます。私は『レルネ』……レルネ＝C＝K＝ヴァンスガズといいます」

「お返しされちゃったかな。子供っぽい所もあるんだね」

「ム……私の何処が子供っぽいのですか？子供の様に我儘の駄々も捏ねません。自分の世界しか知らない子供と違い世間をよく理解しています。子供の様に好き嫌いなども私にはありません。そもそも子供の様に私は騒いだり暴れたりしません。更に」

「そこが子供っぽいんだってお嬢ちゃん」

「……頭を撫でる必要性があるのですか？」

「おっとこれは失礼マドモアゼル」

ん？俯いちゃったよ、からかい過ぎたかな？

頭部に触れている指が熱の上昇を感知。これは……ひょっとして照れてるのか？言われ慣れてない無いのかこの子は、可愛いぞこの生き物。やっべ、ニヤニヤしちまう。

「ふ……ふざけないで真面目にお願いします。わ、わたしはガストレアです。貴方の様な『人間』とは違うのです」

「違わない。レルネは『人間』だ」

彼女、レルネはまだ時代に認められていない進化した人間だ。レルネの赤い瞳は呪われた子供たちの証。だがレレルネの身体的特徴から推察するに八歳児だ。ガストレアウィルスが出現して五年。ジジイとドクターは大事な事を隠している。それが何なのかまでは推測の域を出ないがレルネちゃんはその中心にいる。まだ小さな少女なのに……この子には年相応の自由が無い。自分が人間じゃないって、子供が言う世界は終わりだ。女、子供が戦場に行く国は敗戦する。子供は、周りに気を遣わずに甘える生き物だ。だが、これは言ってはいけない。言えば彼女を侮辱してしまう。会ったばかりのおれが指摘していい所じゃない。

けど現状からレルネちゃんは金牛宮（タウルス）を撃退する重要なキーポイント。ドクターは『ガストレアに対する最強の生物になる……人類の希望だ』と断言した。この話が本当ならこの子は戦場に赴くのだ。義務教育を受ける年頃である彼女が武器をその小さな手に握り戦うのだ。そして『君のパートナー』。ドクターの考えは不明だがレルネとおれは共に戦うパートナーになるらしい。

……レルネはおれより本当に強いのか？

「ドクター」

「どうしたんだい？」

「レルネちゃんと組手をしたいです。ああ理解してますよ、レルネちゃんがすごく強いって。だけど、本当におれより強いかは戦ってみないと分からない。男としてここはプライドで挑みます」

「……いいけどジョセフ君。全力で、本気で戦ってくれよ？そうしないと君でも勝負にならない。彼女はそれほど特別なんだ」

「わかりました。おれとどう違うのかこの一戦で見極めます」

「レルネはどうだい？」

「……私も彼に……興味が出ました。彼なら本番前の肩慣らしにちょうどいいと思われますドクター」

「興味が出たね。お父さん悲しいねー、もう親離れだよ」

「……気色悪い事言わないでくださいドクター」

「グサッ!!刺さっちゃったよ言葉の暴力!!……さて外に出ようか、ここじゃ危ないし。時間が限られてるからルールを付けるけどこの組手に制限時間を設ける。時間は五分。以上」

「五分もくれるんですか？一分あれば十分ですよ」

「初手で終わりますので五分は永すぎかと」

だからそこが子供っぽいんだってレルネちゃん。

第十次観測

手合せは互角。

ジョセフは技術で対抗し、レルネは足りない経験を性能で押し切る。

かれこれ二分この状況が続いているが、ジョセフのプライドはズタボロだった。

『男としてここはプライドで挑みます』って啖呵切っといてこれはダサい。本気も本気、ちょー本気で戦ってるのに身体能力だけで防がれいなされる。自信無くすなー……こんなに差が出るのか。十分に理解できた。ちょっと前に神無城沙希がある論文を発表した。今にして考えるとあの論文はドクターが書いたものだと分かる。論文の内容は希望的に見えるが世論が到底納得しない無茶苦茶なもの。

要約するとこう。

『呪われた子供たちは人類の進化の一つの形です。その能力は人間を超えガストレアをパンチやキックで殺せるスーパーマン。性別は女性しか確認できてないからスーパーウーマンの方が正しいですな。アメコミのスパイダーマンの様に彼女たちはガストレア因子の恩恵をその身に宿している。説明が面倒だからはぶくが一人一人がスパイダーマンだと理解してくれればいい。それを踏まえ、私は我慢の限界だ。ガストレアショック?赤い目にトラウマだぁ~?自分の赤ん坊を殺すってことは所詮その程度の愛情ってことだろ?ガストレア大戦以降、赤ちゃんを預ける施設を私は設置しました。預ける人もたくさんいましたが殺す人も後を絶たない。彼女たちは人類の希望なのです!殺すのは辞め、大事に育てましょう!以上!』

当然、黙ってはい、そうですって頷く輩より反発する輩の方が大勢いた。施設内部の局員が犯行を行うのもちらほら。今日は呪われた子供たちに対する考えに改革を齎す希望の灯火。

レルネは呪われた子供たち全ての代表ともいえる。彼女が、これか

らの呪われた子供たちの運命を決めるのだ。その重責はおれの想像が及ばない領域。呪われた子供たちの利用価値を人類に示す役目がある。それでも、これは、予想外！

「……中々に体が温まりました。感謝します。そして理解したでしょう……私が人ではないと」

「全然理解してないのはどっちかな？君は間違いなく人間だよ。俺が保証する」

「まだ言いますか。……準備運動は終わりです。肩慣らしの一撃でそろそろ止めときましょう」

「全力で打ち込んでよ。肩慣らしなんだし」

「……死にますよ」

「それで死ぬならそれまでのちっちぇ奴ってことだ。それに、女の子が一人悲しんでいるのに涙も拭えないんじゃ男として失格だ。それに、君もドクターから聞いてると思うけどおれをパートナーとして認めてもらおうかな」

レルネちゃんが視線をドクターに向ける。

ドクターは満面の笑顔で親指を立てる。

あれ、いいってことだよね？

「……分かりました。死んでも知りませんよ」

「おっ！耐えきったらパートナー認めてくれるってことでいいよね？」

「死なないしてもこの後の戦闘に問題なく出撃できたら認めましょう。……本来は私一人で十分です。ドクターにも考えがあって私と貴方を組ませようと考えている様ですが必要性を感じませんね」

「レルネちゃんには笑顔が似合うと思うんだよ」

「……いきなりなんですか？」

「いや、ね。困ってる女の子の涙を拭うのもそうだけど、女の子には笑顔でいてほしいかな。まだ会って間もないけどおれ、レルネちゃんの

笑顔がど~しても見たくなったんだ」

ありゃ?滑ったかな。真剣黙り込むんだらどうかえしていいやら……ここは流れで押し切るしかない。

「そんな君とパートナーになって、いつか微笑んでくれたら……天使の微笑みを独り占めだ」

よし、手応えありだ。反応はいかに。

「……ば、馬鹿じゃないんですか!?そ、そそそんなこと言われて女性が喜ぶとでも!?やっぱり馬鹿です!大馬鹿です!さっさと死んでください!」

「ははは、何時でもどうぞ。おれは死にませんから」

もうすぐ約束した五分になる。レルネちゃんにはおれのカッコイイとこ見せないとね。

「……では、参ります」

腰を低く構え衝撃を受け流す体勢をとる。準備万端だ。まだ『人間』の性能を万全に発揮するには十三歳の年齢は若い。成長期のこの時期にどこまでやれるかが胆だ。

レルネちゃんのベースはなんだ?唯のパンチや蹴りじゃどれだけ身体の性能に差が生じようが完璧に防御できる。問題は攻撃までの過程でいかに仕掛けてくるか。人間に無い生物特有の能力を侮ってはいけない。

レルネちゃんは深呼吸をし大きく息を吐く。足が動いた、来る!

にしても、レルネちゃんは健康的な身体を持っている。子供ながら綺麗な足腰だ。黒のスーツ(全身タイツ)が未成熟ながら女性の部分を強調する。顔も整っており、将来有望で間違いなく美人になる。髪

もサラサラで銀色の絹が光を反射する。おれはそっちのけは無かったつもりだったんだが……可愛いと思う。彼女の存在全てがおれを魅了する。目が離せない。小ぶりの可愛らしい唇、風に流れる髪の一本一本まで目が離せない。生まれて初めて感じるこの感情を、イギリス人らしく簡潔に脳裏を支配した。これが、これこそが……恋！心拍数が制御できない。彼女がおれに近づけば近づくほど胸が高鳴る。人生でこれほど一人の女性を集中して観察したことがあったであろうか。おそらく彼女は走っている。極限まで高められた集中力が脳を加速させ外の時間を遅くさせる。あぁぁ……もう目の前だ。その体に触れ……ていいのか紳士として？けど、向こうから触って来るんだから仕方ない。彼女の振り被った足の甲が眼前に……

レルネの本気の助走の本気の踏み込みの本気の蹴りが、顔面に突き刺さる。森林を薙ぎ倒し二十メートル吹き飛ばされる。

無防備に、力む暇さえなく蹴り飛ばされた。岩を砕き、車をスクラップにする蹴りを人がくらう。しかし、泥と木に埋もれながら確かに生きていた。

一瞬意識が飛んだが、全身に奔る激痛に目を覚ます。痛みで力が入らない。

ありゃりゃこりゃ参った。ありゃーフェロモンか？レルネちゃんの吐く息に妙に鼻が反応したんだよな。違和感を無視するもんじゃないな。

ある研究で『人間の顔は殴られた時のダメージを最小限にすべく進化してきた』ことが明らかになった。助かった理由はほんのごく少数その進化の御蔭だ。しかし、リラックスしていたのがよかった。力まず全身を脱力することにより衝撃を分散させたのだ。反射で後ろに飛んだのも大きい。勿論無傷なんかじゃない。頭を護るために衝撃を下に逃がした分、体はズタボロだ。筋肉は筋肉痛の万倍やばいし骨はヒビが入るは折れるは粉々にならなかったのが不思議なくらいだ。中身の機能もいくつか損傷しているが停止するほどじゃ

ない。顔も完全には無傷ではない。鼻は潰れ骨も砕けた。脳に刺さらなくて本当によかった。拳法の発勁習っといてよかった～応用するもんだ。

さて、男としてここは『プライド』の見せ所。ダッセェーとこ見せらんねーからな!!

死に体にカツを入れる。伝えなくてはいけない。彼女に、人じゃないとほざく彼女に知らせなくてはいけない。フェロモンのせいとはいえ一度は本気で心を奪われたお嬢ちゃんだ。初恋の相手を不幸のままに出来るかって!

右腕がちょっと動いた。脳の神経を右腕にフル活用し無理矢理動かす。上がった腕で拳を作り小指を下に向けけ、グッっと親指を立てる。

視えてっかなー……やべぇー……いしき……が……

薄れて消えていく意識の狭間に、確かに小さな手を感じた。

泥が掃われ、体に圧を感じる。……ちょー痛い。

「……ばかです」

え、ちょ……霞んでよく視えないけど泣いてる?慰めで抱きしめたいけど両腕上がらんとは、とほほ。

「……ほ、ら、……いきて、る」

ニュートンの遺伝子よ!今こそ進化を見せる時ィ!!舌と咽喉と肺が機能すれば問題ない。おれは、この子を泣かせたくない。

「……ぜいじゃく、な、人も……ころせない、レルネは……人間、だ」

言えた!言い切った!咽喉が焼けるほど痛いけど言い切ったぞ!

自分をガストレアと、怪物だというレルネにしっかりと伝えた。こ

れで、考えを改めてくれたらいいけど……。

「……ありがとう」

これは……成功かな。あ、これ以上力込められるとアバラ折れちゃうけどしばらくこれでいっか。

「にやにやにやり、てことでパートナーってことでいいよねお二人さん？」

「フッ！」

「アブゥ!?」

突き飛ばされ、た。身体が悲鳴を上げるがレルネちゃんの無意識の手加減に優しさを感じる。

「……この後の戦闘に問題なく出撃できたら認めましょうと約束しました。ジョセフには無理です」

その約束生きていたらにしとけばよかった。そんことより今、ジョセフって呼んだよね。彼からジョセフにランクアップ。

「その辺問題ないよ。ジョセフ君を棺桶に容れるから」

「アレは私以外には使用できないのでは？」

「レルネとジョセフはパートナーなんだからジョセフの生体データはインプット済みだ。アレは二人専用だよ」

「……完治には三時間かかるので無理では？」

「完治には三時間かかるけど、手足を重点的に治療するから使えるよ。痛みはあるけどそこは我慢だね。じゃ、いこっか」

まんま関係が父親と娘だな。なんだよ、ちゃんと人間の家族してじゃないか。

その後、男として誠遺憾ながらレルネちゃんに背負われ棺桶、檻の間違いだろのキューブに放り込まれた。

第十一次観測

今日も私は水の中を漂う。

呼吸用のチューブ以外何も身に着けづ波紋もない水中をぷかぷか遊ぶ。ここは私の部屋。実験や訓練以外はここにいる。生まれも育ちも試験管ベビーのせいかこの場所が落ち着く。母親のお腹の仲もこのようなものだろうか。ナゼ、かは分からないけど、密閉空間は不思議と心が和らぐ。ここは何もない。誰からの目もないし人もいない。私にとってここは――――別世界だ。

外の世界はキライです。科学者は実験体として接し、他の人は怪物を視る眼つきになる。事情を知る人からすれば私は呪われた子供たちよりたちが悪い。私は初期に創られたモデルの中で唯一人の形を保った生き残り。最初の十一体はドクターから聞き及んでいる。その次に創られた私は七星村の男女から生まれたらしい。受精卵の時点で遺伝子操作にガストレア因子の投与、過剰な身体実験の繰り返しに私の髪は日本人に似つかわしくない銀色になり、眼の色も日本人に似つかしくない濃褐色（ブラウン）から赤色に仮定された。私は世間的に云う第一世代と違い、ガストレアウイルス抑制因子でランダムでベースが一種類決定する子供たちを羨ましいと思う。だって、私は人工的に複数のベースを組み込まれた真の『第一世代』なのだから。

ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ――――アラーム音が水に反響する。

いつの間にか寝てしまったようだ。時間を知らせるタイマーが作戦実行一時間前を知らせてくれた。ちょうど外でドクターがハッチの開閉装置を起動させたのか水が排出されていく。

『起きてる～？あ、もしかして起こしちゃった～？それならごめんね～』

……先生は頭はいいし私に勉強を教えてくれましたがどうも精神的に幼いのが否めない。「問題ありません」といつも通り返答すると「ふふぅ～ん♪これがよその家に娘をやるお母さんの心情ですかね～」……訳が分からない。

ハッチが開き外気で肺を満たす。無菌室、俗にいう病院の匂いだ。そこに嗅ぎ慣れない男性が一人。

ドクターはパートナーを今日紹介するとおっしゃっていましたが彼が？これは想定外。

私のパートナーには私と同じか四年前から生まれた同種がなるとばかり考えていた。ドクターは何を考えている？

地に足を降ろすと見慣れた二人に少し年上の少年が――――――高速で頭を下げた。

「～～～ッ!?!!すんませんしたーーー!!」

なんなのでしょうこの人間は？

私は実験体として男女問わず科学者に身体を弄り触られました。最初は羞恥心もありましたが、私は人間ではありません。私の裸を見て興奮する男性はいませんし、そもそも女性としてではなく『ガスト実験体レア』として見られる傾向が強い日々しか過ごしたことがありません。それを踏まえ、この男性は何に対し謝罪をしているのか至極当然な疑問を懐きました。

「紳士たる者淑女の許可なく裸を見るなど言語道断。ましてや、男が気軽く見ていい物じゃない。完璧に此方の落ち度だ。改めて謝罪させてほしい……すみませんでした!!」

余計に訳が分からない。ナゼ、裸を見たくらいでここまで動揺するのです？私たちには人権は無く、生みの親であるドクターに尽くすのみ。同性だろうと男性だろうと裸など恥ずかしくもない。なのにナゼ、そんな顔をするのですか？

先生はよく私の身体を接触してくる。普通の子供に接するように揉みくちゃにされ不愉快ですが、そこまでキライではありません。そして、先生は私をつくづく子ども扱いする。ナゼ、服を着せたがるのでしょうか?黙って従った方が時間短縮できるのは果たして正しいのでしょうか?……キライではありませんが。

戦闘用木原スーツを着用すると件の男性が微妙な褒め言葉を零す。私を含め私の周りはファッションセンスが壊滅的です。全員白衣か完全武装しか見た事が無い私は見た目より性能を重視する傾向があります。どうやら、一から説明する必要があるようですね。

「はいはいそこまで!二度目だけどさっさと自己紹介しろやこら」

……ドクターに怒られてしまいました。私はドクターの期待に応えなければいけないのに。ム……この男性、あのジョセフ＝G＝ニュートンなのですか。ナゼ、姓を名乗ってから姓名名乗り直すのでしょうか?不覚にもときめいてしまったのが悔しい。先生に無理矢理読ませられた恋愛小説（読まないとしつこい）に似た様なシチュエーションに女として想像を膨らませましたが、まさか本当にこんなキザっぽい自己紹介をする人間が居るとは……負けてはおれません。

「……ジョセフ＝G＝ニュートン。記憶しました。私には様々なネームがありますが……生みの親であるドクターから頂いた名を名乗らせてもらいます。私は『レルネ』……レルネ＝C＝K＝ヴァンスガズといいます」

さあどうですこの完璧な返しは。

「お返しされちゃったかな。子供っぽい所もあるんだね」

ム……果たして私の何処が子供っぽいのでしょうか。問いただす必要があります。そもそも子供とは何かを説明すると頭を撫でられ

ました。……初めて異性に優しく撫でられました。科学者など私の都合を一切考慮せず思うがままにべたべた触って来るというのにこの人間はナゼ、普通に私に接する?……ナゼ、……ナゼ、でしょう。顔の温度が上昇します。これは、噂に聞く風邪……ではないにしても……心臓発作でしょうか?体調管理は盤石なはず……ますますこの人間が分からない。私はガストレアだ。私がじゃれれば壊れてしまう人間とは違う。

「違わない。レルネは『人間』だ」

ナゼ、こんなにも真剣に断言できるのでしょうか。彼は信じて疑わない。こんな私を一人の人間として接してくれる。ナゼ、だろうか……どう接しればいいのか分からない。私の知っている世界は小さい。私の居場所は実験台とこの鳥かごにしか存在しない。今日成果を出せなければ更なる痛みと実験の日々が私に待っている。それが”日常”なのになんの疑問も懐かない。反論など時間の無駄……私は人類の敵であるガストレアを滅ぼす兵器としてドクターの期待に応える”モノ”でしかないのだから。それなのに、ナゼ、この人間は普通に……真剣に私の身の上を悩んでくれるの?

思考の泥沼に沈んでいると彼はドクターに私との組手を所望していた。そう言えば、彼は私のパートナーになるのでしたね。

「レルネはどうだい?」

答えは……決まっている。今まで感じた事のないこの感覚を確かめたい。この不思議な感覚の原因が彼ならば……。

「興味が出たね。お父さん悲しいねー、もう親離れだよ」

なにが親離れですかドクター。そんなこと絶対ありもしないと理

解しているでしょうに。
　組手のルールは制限時間五分、それだけ。私のやりたいようにやれですねドクター。

「五分もくれるんですか？一分あれば十分ですよ」

　ム……口先では敗北ですが古典的な組手で私の敗北はありえません。身体慣らしで一撃で気絶しないようにしますが、ここはハッキリ言ってやる必要があるようですね。……ナゼ、優しく頭を撫でるのでしょうか。

　彼は人間……手加減しているとはいえここまで持った人間は彼が初めてです。彼は人間の中でも相当上位の実力者なのは身を持って実感しました。けど、その程度。人間はガストレアに敵わない。それを彼は理解したでしょう。

「全然理解してないのはどっちかな？君は間違いなく人間だよ。俺が保証する」

　この人間は分からず屋だ。自分の信じる信条を絶対に曲げない。なら、その間違った考えを改めさせる。身を持って実感すれば彼も理解し恐怖する。それが正しい人間の反応であり人間の本性だ。それを知らずか、「全力で打ち込んでよ。肩慣らしなんだし」などと……。

「それで死ぬならそれまでのちっちぇ奴ってことだ。それに、女の子が一人悲しんでいるのに涙も拭えないんじゃ男として失格だ。それに、君もドクターから聞いてると思うけどおれをパートナーとして認めてもらおうかな」

　パートナーですか……私が本気でヤれば彼は死ぬ。ドクターもそ

れは望まない筈……なんて楽しそうな顔なのでしょうか。それ程彼に自信があるのですか。私が本気でじゃれついても問題ない……と。

パートナーにする条件は死なないしてもこの後の戦闘に問題なく出撃できたら認めることにしましょう。それが彼の為だ。

「レルネちゃんには笑顔が似合うと思うんだよ」

……毎度毎度なんなのでしょう。彼の人間性が理解できない。私の周りにいなかったタイプ。

「いや、ね。困ってる女の子の涙を拭うのもそうだけど、女の子には笑顔でいてほしいかな。まだ会って間もないけどおれ、レルネちゃんの笑顔がど～しても見たくなったんだ」

彼は、ナゼ、優しく語りかけてくるの？私の笑顔が見たい、そんな安っぽい台詞に、ナゼ、こんなにも思考が乱れるのだろうか。

そんな私に追い打ちを掛けるように。

「そんな君とパートナーになって、いつか微笑んでくれたら……天使の微笑みを独り占めだ」

テ、てて天使!?こ、ここよ人は一体何を!?今分かりました、この人は馬鹿なんです。大馬鹿だからあんな非常識な事が平然と言えるのです！なにが「おれは死にません」ですか！遺伝子レベルで生物の違いを思い知らせてやります。

衝撃に備えた体勢で此方を見据える彼に、不思議と彼ならもしかしたら……と幻想を懐く。それはありえない、全力で蹴るだけでも危ないのに能力を使用すれば確実に死亡する。それなのに……彼ならもしかしたらと……。ベースの能力を使用する。

〝息を吐く〟、ただそれだけで彼は私の思惑に嵌まった。

『性フェロモン』読んで字の如く、効果は――――――想像にお任せ

する。
私は彼を殺す気で攻撃する。唯の人間である彼が死亡、再起不能になる確率はとてつもなく高い。それでも私は確かめなければならない、妙にざわつくこの胸を。
レルネの本気の助走の本気の踏み込みの本気の蹴りが、顔面に突き刺さる。森林を薙ぎ倒し二十メートル吹き飛ばされる。
無防備に、力む暇さえなく蹴り飛ばされた。岩を砕き、車をスクラップにする蹴りを人がくらう。予想するまでもなく濃密な死の結果がそこにはあった。

「……接触と同時に飛びましたか。侮れない反射神経です。飛び散ることなくくっ付いたままですか……人間にしては頑丈ですが死にましたね」

泥と木に埋もれ姿の確認は出来ないが、死は決定だ。
やっぱり彼も『人間』だった。そんな人間を一撃で殺せる私は……怪物だ。

「……ドクター、金牛宮（タウルス）を迎撃する装備の調整をお願いします」
「ふふふふふふふふふふふふ」
「……ドクター？」
「レルネ……君は人間を舐めきってる。甘すぎて甘すぎてペロペロ溶けるまで舐めきってる！いいかい、私は彼が、ジョセフ君しかレルネのパートナーになれない！勤まらない！その考えは今も変わらない。レルネよ……人間相手に能力を使いたがらない君が何故あそこまで使用した？」
「……そ、それは」
「別に怒ってるわけじゃないんだ。予想してあげようか？君はジョセフ君に期待してしまったんだ。〟彼なら、もしかしたら〟っと、それ自体は間違いじゃない。けどね、レルネをそう思わせる何かが彼にはあったのは確かだろ？君にとっても初めてのはずだ……『唯の人間が

私の本気の一撃を防ぐかもしれない』と期待したのは」

そうだ、私は一時の〝ゆらぎ〟で能力まで使用し『人間』一人を殺したんだ。わたしが、私が……彼に期待しなければ……ッ！

「そんな落ち込んでいるレルネに凄く言いたいことがある」

「……なんなのですか」

「生みの親として、一人の人間として、これは胸に刻め――――人間はそんなに弱くないってね」

ドクターが彼の埋もれた一角を指さす。けどそれはありえない、人間が私の一撃を耐えるなんて……。

胸が〝ゆらぐ〟、ゆっくりとドクターが指し示す方向に視線を向ける。

「……そんな……ありえない」

ジョセフの痛々しい右腕がグッと突き出している。ジョセフの性格を表すようにふざけたサインまでだして。

私は無意識に、けど一生懸命に彼の手を掴み掘り起こす。

大きな胸板、上半身に抱き着き身体を支える。ほんの少し力がこもる。

「……ばかです」

この男はどれほど愚かで馬鹿なのでしょう。ばかです。おおばかです。ちょうおおばかです。ばかすぎてわたしにうつっちゃいました。……わたしもばかです。

「……ほ、ら、……いきて、る」

この男はどこまで私の予想を裏切ってくれるのでしょう。予想を超え、私の世界に亀裂を入れる。

「……ぜいじゃく、な、人も……ころせない、レルネは……人間、だ」

……ッ!!世界が砕ける。

あぁ……、私は認めて欲しかったんだ。実験体でも怪物でも無い、『人間』だと認めて欲しかったんだ。

もう我慢しなくてもいいのだろうか?

人間として、人間の子供みたいに過ごしていいのだろうか?

けど……私はドクターの所有物だ。

生みの親であり、お父様でもあるドクターを裏切ることはできない。

それでも、

それでも……ジョセフの前では『人間』とし生きてもいいですか?

「……ありがとう」

これ以上泣いちゃいけない。私は泣いてはいけない。実験が日常となり涙を流さなくなったのは何時からだろう?私は姉妹たちの存在を背負っている。人間を辞め、怪物として進んできた。

けど、今だけは、――――泣いてもいいよね?

「にやにやにやり、てことでパートナーってことでいいよねお二人さん?」

台無しだと思いませんか?

第十二次観測

『無敵のガストレア金牛宮（タウルス）撃破!!（謎の少女が斃した!!?）』真実はいかに――――ッ!!

この報道が世界中に発信されたのはゾディアックが斃された一時間後の出来事だ。

大量のガストレアの死体と――――金牛宮（タウルス）の巨体が横たわる画像も一緒に各国に送信された。各国の情報機関はこの画像の信憑性を最優先に確認した。金牛宮（タウルス）がローマ連邦に接近し接触する情報は当然知れ渡っている。ゾディアックがモノリスの壁を超えれば蹂躙と虐殺しかない。そのゾディアック中最強――――無敵と謳われる怪物がローマ連邦に接触する。誰しもが同じことを考えた「また国が一つ無くなる」と。

そこに欺瞞情報か?と、疑うのも無理もない知らせと画像が世界中にばら撒かれたのだ。確認作業に血眼に勤しむのも仕方ない。そこにまた一通のCメールが送信される。そこには座標と金牛宮（タウルス）が弾け飛ぶまでの解りやすく編集された動画が添付されていた。そして、ファックスで送られてきた「この情報拡散よろしく」の文章に首脳は頭を抱えるしかなかった。

当然メディアにもこの情報は行き届いている訳で――――興奮した記者が大々的に公表した。

人類はガストレア大戦のさなか、怖れ、畏れ、恐れ、憎しみ、憎悪し、復讐を決意する。人類が負け続け夢も希望も失われたこの時代についに――――対に勝利が訪れた。

人類を追い詰め住む場所を、愛する者や家族を奪われた者たちはその報道に肩を振るわせ歓喜した。いや、人類すべてが咆哮をあげた。

根拠はない。胸の内に溜め込んだ黒い感情が雄たけびを挙げ放出される。「勝てる!!」「勝利を!!」「奴らを根絶やしにせよ!!」と。

残念ながら動画には戦う者の姿は映し出されていなかった。しかし、行為でそうしたかは定かではないが一フレームにだけぼやけた後姿が映っていた。確証はないが体格から子供、動画の名前が『少女』と

なっていることから少女とだけ分かった。興奮した報道陣からすればこれだけで記事に出来る。金牛宮（タウルス）の画像を大々的にドーン！と一面トップにしテロップは『無敵のガストレア金牛宮（タウルス）　撃破!!（謎の少女が斃した!!?）』　真実はいかに――――――ッ!!と、ドクターの思惑通りに順調にことは進んでいた。

そして、二年後――――――神無城沙希（ドクター）を頂点に『国際イニシエーター監督機構』は設立された。

これは一つの通過点。西暦２０２１年に起きた醜い人間の物語。

バラニウム産出国世界一位の日本の弱味を握り、友好的な関係を築く今回のイベントはドクターにとって渡りに船だった。

『天童家の内輪もめ』

家の問題は他所でやれが当たり前だが、東京エリアで『天童』の影響は計り知れない。ドクターこと『木原』は天童和光（かずみつ）と接触しその内輪もめに加担した。表向きは沙希ちゃんが接触し裏から指示する『木原』は天童和光を通じ『天童』の闇に触れ計画に加担。

天童菊之丞（きくのじょう）他、天童和光、天童日向（ひゅうが）、天童玄琢（げんたく）、天童てるとしも馬鹿ではない。身内の闇は身内で済ませたいのが本音。態々部外者に協力してもらう必要性も教える必要もない。『天童』の五人が内々にこの秘密を胸に秘めておけばいい。だがそこで考察する。五賢人の一人と強いパイプを持てないかと。

ドクターにしても『天童』と個人的なパイプが持てるのは嬉しい。バラニウム横流しに東京エリアにおける『ローマ連邦（木原）』の闇の証拠隠滅。やり過ぎればヤバいが、ある程度見逃し影を揉み消してくれる条約を『天童』と『神無城沙希（木原）』は結んだ。

神無城沙希にとってこの仕事は正義の行いだ。

何を如何正義とするかは人それぞれだが沙希にとってコレは正義の行いだ。

彼女にとっての正義は貧しい人にお金や食料を分け与える事や被災地や戦地の募金活動やボランティアする事でも無い。虐められっこが虐めっこに精神的に虐められようが自殺に追い込まれようが沙希に関係ない。力を持たない女、子供が無残に殺され陵辱されようが心を痛めない。「可哀想だな～」と言ってキャンディーを舐めて終わり、他の人も大体こんな感じでしょ。ニュースや新聞やインターネットで調べても「へ～そうなんだ～可哀想だね～」とか言って話のタネに加えて他の作業に熱中する。見知らぬ他人が理不尽な暴力で恐喝されようが素知らぬ顔で通り過ぎる。

神無城沙希の正義の心はドクター曰く、「『木原』並みにヤバいモノ」。

人により正義の定義は異なる。しかし、人として犯してはならないモラルはある。神無城沙希は素知らぬ顔で怯える子供を麻酔無しで解体できる。じっくりじわじわと。

では、神無城沙希の正義とは何か？彼女の思想は今も昔も変わらず一つ、それ即ち『人類未来の平和』。

個人の幸福より人類の平和こそ正義と考える彼女はまさに『木原』に至る素質と理念を兼ね備えている。そんな彼女にとってこの願いを叶えてくれる存在は等しく正義。『木原』に仕え、ドクターのいう事を従順にこなす彼女もまた、狂気のマッドサイエンティストなのだが……本人にその自覚は無い。ドクターより人道的だと言い張るが、基準にする人物を間違っている。

さて、そんな彼女は東京エリアで『天童』と密会していた。

「どうも～おはようございます菊之丞さん。本日はお日柄もよく最高の密会日和ですね～」

「おはようございます神無城博士、今日はただのお茶の誘いです。密会などと」

「私にしても『天童』と関係が持てるのは心強い限りです。このお茶おいしいですね～茶葉は何処のを？」

「これは私的な趣味で栽培した茶葉ですので生産元は『天童』となるの

ですかな」
「ご自分で栽培を?菊之丞さんにそんな趣味があるとは驚きです～」
「よく言われます。……お茶で咽喉も潤ったところで『和菓子』などはいかがですかな?」
「本当ですか～!いつもいつもすみません～。お返しに『お土産』あるんですけどいかがです」
「態々すみませんな。『お土産』はありがたく頂戴します」
「えええ～今後ともよろしくお願いいたします。もう午前十一時のチャーター便で帰りますので～」
「車は此方で用意致します」
「そうですか～ありがとうございます～」
「ところで神無城博士。ドクターにもよろしくとお伝え下さい」
「……誰のことでしょうか?」
「いえ、単なる独り言です。余りお気になさらず」
「……そうですか、もしも……もしもですよ?もしもドクターなる人物が居るとしましょう。……他言無用でお願いします」
「……元よりそのつもりです」

彼女も『木原』も天童菊之丞を見くびっていた。
ドクターにとって生死がばれようがばれまいがどっちでもいいが、『木原』まで辿り着いた情報網と収集力は侮れない。沙希はドクターにいいお土産話が出来たと、空港に向かう。
天童菊之丞は神無城沙希の『お土産』を懐に隠し素知らぬ顔で『天童』家に帰宅する。
廊下で偶然通り掛かった和光に菊之丞は告げる。――――「実行する」と。
和光の口角は人知れず歪んだ。

天童菊之丞、天童和光、天童日向、天童玄琢、天童てるとしは五人で密会する。

この五人はこの時間帯はそれぞれ別の場所にいる事になっている。
この事件は野良ガストレア襲撃事件で片が付く。

「……エサの準備はどうなっておる」
「此方に」

咽喉と足の腱を破壊された十匹のネズミ。
それに菊之丞は神無城博士の『お土産』を装着させる。それはネズミ用に改良された首輪型注射器。

「タイマーは１２０分で設定してある。……へまをするでないぞ」

警告する。此処までやってドジする愚か者はこの場にはいないが。
五人は何も無かったかのようにそれぞれの場所に戻った。
この事件はそもそも『天童』の闇を告発しようとした愚かな男から始まった。
『天童』の闇は深い。『天童』は政財界に多数の重鎮を輩出している名家だ。当然のし上がる過程で汚いことの一つや二つはしている。だが彼は、その闇を告発すると天童菊之丞他、四名の目の前で誓ったのだ。自分も同じく汚れきっているのにその闇を告発する。五人からすれば突然わけのわからん正義に目覚めた裏切り者だ。このままでは『天童』は終わりだ。殺してでも死んでもらうしかなかった。当初よりガストレアで殺す計画だったが、彼も『天童』の免許皆伝者。妻と娘を護るため隙が生じるだろうが唯のレベルⅠガストレアでは不安が残る。そこで神無城博士の『お土産』が役に立つ。注射器の中身はガストレアウイルス、首輪のタイマーが零を刻むとネズミを強制的にガストレアにする。十匹の内九匹はレベルⅠのガストレアになり、残りの一匹は特殊改良された高濃度ガストレアウィルスで一気にレベルⅢに昇格させる。免許皆伝者でも容易に勝てる相手ではない。妻と娘を護るためならその身を犠牲にするだろう。
そして二時間後、ガストレア襲撃事件として幼い二人の子供だけが

生き残った。その後の調べで、十体のガストレアを一人で討ち取り、レベルⅢと相討ちになったと判明したという。

ローマ連邦『木原』研究施設。

「ドクタ～何故あんな回りくどいやり方をしたのですか～？他人に任せずご自分でやった方が手間も無くていいですよね」
「それだとそっこー片付いてつまんないだろ？『天童』ともちゃーんとした関係持ちたかったし」
「彼は罪悪感から過去の自分が許せなかったのでしょうか？」
「お！良い勘してるよ沙希ちゃん。そうだねー……七星村の活動を承認してもらう際、賄賂渡して全部懐に入れた彼もこの事態の原因といえば原因の一つだ。彼も馬鹿じゃない、西暦２０２１年１月１日に発生したガストレアと七星村の関係性を僕が証拠を抹消仕切る前に調べちゃったんだよね。１００パー正義ってか罪悪感で自分と『天童』の闇を告発し、自分の胸の内を軽くするためだけに全ての原因である僕の情報を流そうとした。ローマ連邦もソレやられると困るからね、東京エリアの警察より先に証拠品抹消しにいったわけ。菊之丞の影響は向こうのエリアじゃデカいからね」
「なるほど～いろいろ考えてるんですねドクタ～」
「沙希ちゃんは実験の観察眼を世間にも向けた方がイイよ」
「善処します～」
「やれやれこれだから」

ドクターはマグカップに注がれたココアを堪能すると去年まで同僚だった愚か者を薄ら思い出す。

「そう言えば、七星村の研究員に里見って日本人いたな」

第十三次観測

西暦２０２７年に設立された『国際イニシエーター監督機構』は世界各国に設立され、呪われた子供たちに対する殺傷事件、呪われた子供たちによる殺害窃盗事件は激減した。『国際イニシエーター監督機構』は呪われた子供たちにとって、養護施設、訓練施設、強制収容所、管理施設だ。『国際イニシエーター監督機構』は武器商人と皮肉な相性で呼ばれている。

土台作りに二年掛けただけあってそのシステムとルールは各国は無視できない――――――ガストレアと戦うため無くてはならない存在になりその立場は揺るぎないものになった。その際、政治には干渉できない等の条約を決め呪われた子供たち専門の組織になる。

そして生まれたのが、イニシエーター・プロモーターシステム。イニシエーターは呪われた子供たち、プロモーターはイニシエーターとペアを組んで戦う民警社員（人間）。ツーマンセルを組み戦うこのシステムは誰でもなれるが座学と実技の試験を受け民警許可証（ライセンス）を取得することで就くことができる。

民警社員はその努力次第で特権が付く。それがイニシエーター・プロモーター序列、略してＩＰ序列は全世界のイニシエーターとプロモーターのペアを、戦力と戦果で序列付けしたもので序列が上がるごとに『擬似階級の向上』や『機密情報へのアクセス権』などの特権が与えられる。あくまで〝ペア〟での順位であるため、どちらか一方が死亡するなどした場合順位はリセットされる。１００位以内のイニシエーターには二つ名が付き、その戦力は文字通り次元が違う怪物に与えられる。

人間は弱い、呪われた子供たちが素直に従わせるための首輪を当然用意した。それが伝家の宝刀『浸食抑制剤』。ガストレアウィルスの体内浸食を抑制する大事なお薬。呪われた子供たちにとって欠かせない命に係わる秘薬。なにより、『奪われた世代』と『呪われた子供たち』にとってこの制度と序列を生きる糧にして欲しい願いもある。とくにドクターが力を入れたのが『機密情報へのアクセス権』。開示す

る情報を全てドクターが決め、最高機密アクセスキー・レベル一～十二に定め序列ごとに与えるシステム。これはドクターなりの遊び心。世界の秘密を暴きガストレアの真実を知り得るシステム。その情報を知りどうするかは当人の自由、『木原』を殺したければ暗殺なり何でもすればいい。『木原』は全力で返り討ちにする。『機密情報へのアクセス権』はドクターなりの飴でご褒美、世界のごく少数しか知り得ない情報を序列で開示するこのシステムは民警社員の意欲を刺激し闘争心を駆り立てる。更に『擬似階級の向上』の御蔭であらゆる面で顔が効く。

　この盤石なシステムの下、民警はガストレアをぶっ殺す。

けど、六歳は若い。戦闘できるギリギリラインだがその問題はペア同士で解決してくれ。

　一年後、アルブレヒト・グリューネワルトがドイツのイニシエーター『雷神』が処女宮（ヴァルゴ）を撃退した。

　この世界に生を受け最初に感じたのは母の温もりでもない、ただただ冷たい無機質な痛み。

　いたい――

なぜ？

どうして？

いたいよ。

やめてよ。

いいこにするから。

だから。

いたくしないで。

わたしのため？
こまってるひとをたすけるため？
でもいいたいよ。
おりこうさんはがまんするの？
ぱぱのためいなるの？
ぱぱをたすけることになるの？
わたしががまんするとぱぱはうれしいの？
なら。
がまんする。
なきむしじゃない。
もう。
なかない。
いたいっていわない。
さけばないし。
あばれない。
しゅうしゃも。
にがいおくすりも。
ぱぱのためならがまんする。
ぜんぶぱぱにまかせる。
ぱぱのいうことなんだってきく。
だからぱぱ。
ひとつだけ。
ひとつだけでいいの。
わたしが。
ぱぱや。
みんなにほめられるすごいことしたら。
ひとことだけちょうだい。
ひとことだけ――――――

頬に触れる気配を察知し、寝ていた私はその手の引き押し倒しうつ

伏せに拘束する。
片腕を背中で捻り痛いのか苦痛の声を上げる。
抜け出そうにも完全に極まってるからもう片方でタップするその姿から、寝惚けていた私は急いで拘束を解く。

「いたたぁ……脱臼を覚悟したよ。いつのも君らしくない、魘されていたようだけど大丈夫？」
「う、魘されてなんかないわよ！え、ちょ、なんで寝室にいるの!?」
「……本当にいつもの君らしくない。ＳＦ映画を一緒に観てたらうとうとして寝ちゃったのはエヴァの方だろ？」

よくよく思い出してみたら、訓練もない休日は暇で娯楽を知らない私は彼のオススメのＳＦ映画を一緒のソファーで並んで観賞してたらいつの間にか寝ちゃってたんだ。
てことは、彼に寄りかかり無防備な姿をまじまじと観られ挙句の果て上着を毛布代わりに掛けられちゃったのわたし！

「訓練時でもないのに顔が赤いぞ？体調不良はないにしても念のため教授に相談するか？」

こ・い・つ・は!!

「うっさい！しね！部屋で寝るからまた明日！」

にこにこ手を振って「おやすみ」と別れの挨拶。大体いつもこんな感じのせいか私の罵声にはノーダメでなんかムカつく。

「あんたは私の世話役なんだからしっかり起こしなさいよね！」

返事を聞かず自室に直行。ムカつく、ムカつく、自分がムカつく。
人の好意に素直に「ありがとう」といえない私がちょームカつく。

「……なんで性格こんなに歪んちゃったんだろ」

こうなった原因は思い当たる……わたしは、怖いんだ。

優しくされるのがこわいんだ。

「……わたし、みんなにほめられるすごいことしたよ？がまんするから、だから、だから、……ぱぱ」

枕に顔をうずめ、重くなった瞼を閉じてゆっくり、ゆっくりと夢の中に入っていった。

無垢な子供が虐げられ自分の殻に閉じこもって大人たちに繋がれた人生を約束された日々。

それを強要する人間と少しは変えようと努力をする人間。

この二人はどちらに属すのか、はたまた別の何かか……

核シェルター並みに頑丈に作られた応接室に二人の人物が対峙していた。

互いに護衛を付けず一対一で話し合うなど本来有り得ない二人。

それを可能とするのは互いの関係性がなせる裏技の類い。両者向かい合って鎮座してるが予想通り先に沈黙を破ったのはドクターだ。

「来るなら来ると連絡してくださいよグリューネワルト翁。これでも多忙の身、電話一本さえしてくれれば予定を潰さずにすんだのに」

「すまないことをした。だがどうしても君の口から直接訊きたいことがあっての」

「訊きたいこと？」

白々しい。グリューネワルトの訊きたいことなどお見通しだろうに。

「君の二人目の娘、エヴァ＝Ｔ＝Ｋ＝ヴァンスガズのことだ。……年端もいかぬ幼子を戦場へ追いやる私は地獄へ堕ちるだろう。だからこそ前線で戦うあの子のために君に会って欲しい」

『エヴァ』がグリューネワルト翁に引き取られるまでどんな生活をおくっていたか経緯は不明だが、彼女の身体を調べたらその生活は実験動物と同じ扱いを受けていたとしか思えない仕打ちを受けていたと容易に想像できる傷が刻まれていた。

『エヴァ』を引き取る際、「コレはプレゼント、僕なりの友好の印です。あ、失敗作じゃないですよ。僕の秘蔵っ子の次くらい遺伝子は優秀ですから。身体に組み込まれた電子機器は外さないのをオススメします」

グリューネワルト翁は訝しんだ。自分にここまでする理由が見当も付かないからだ。『木原』は「この子は戦力になる。ベースは戦闘向きで他の赤めじゃまず勝てないでしょ。理由ですか？僕は貴方を気に入っている。一方的だけど友人として接している。この子は僕なりのお近づきの印ですよ」ハハハハと大きく口を開いて笑う。

意外な暴露でグリューネワルト翁は『木原』と話し込んでしまったが、最後に「この子は僕から離れた方が強くなる」と言い残しその日はお開きとなった。

「先程もおっしゃいましたが多忙の「そんな上っ面で納得するとでも？」……今年で西暦２０２８年……ガストレアが出現して７年目でアイツも７歳。７年でどれだけ世界は変わったと思います？グリューネワルト翁には説明不要ですが世界の在り方はガストレアのせいで人の命はとても軽いものになりました。医者であるグリューネワルト翁にはお辛いかと……でも、だからこそ、今はまだかまってやる余裕も猶予もない。むしろ真っ先に地獄に堕ちるのは僕の方ですね」

「……『木原』らしくないの。それともそれが本当の『君』なのかい？」

「ハハハハ！さーどうでしょうね、人の在り方も存外変わりやすい」

「ふふふ、君の言う通りだの。私もいつか医者の道を外れ悪鬼の道に堕ちる日が来るかもしれんの」
「そうしないと無理だとちょこっとでも悩んだら……この番号に掛けて下さい。それでは」

席を立ちそのまま退出するドクターにグリューネワルト翁は待ったをかける。

「まだちゃんとした返事を訊いておらんが？」

ドアノブに手を掛けたドクターが止まる。数秒だけ考える仕草をするとニッコリと悪巧みを考えた子供の顔で振り返る。

「エヴァには彼氏を紹介する時に会うと伝えといてください。人間不信のアイツがそんな超高難易度絶対無理だと思うけど、その時に約束を果たすと。でも世話役男性なんでしたっけ、確か名前は……巳継悠河（みつぎゆうが）」

もう立ち留まる事なくその場を立ち去るドクターにグリューネワルト翁はソファーにもたれかかり頭に手を当てため息をつく。この条件はあの子には厳し過ぎると。

ぱぱがよろこんでくれる。
こいつをたおしたらぱぱがよろこんでくれる。
たおす。
たおす。
たおす。
たおす。
ころさなきゃかてない。
からだがいたい。

ころすんだ。
からだがいたい。
ころすしかない。
からだがいたい。
こえろ。
こえろ。
こえろ。
わたしをこえろ。

空気を読まない天候は漆黒の雲で雷鳴と雨を降らす。
泥と血で汚れた身体が清められる。
唇にこびりついた土の味がする。
視界が霞、疲労で手足がボロ雑巾で動かない。
水が浸み込んだ土が熱を持った傷口をひんやりして気持ちいい。
大地が震動する。
傷を修復しまた動き出したんだ。
まだ完全に治り切ってはいないが私が回復する前に仕留めるつもりだ。
パイルバンカー雷電針のカートリッジは残り一発。
私と共に戦った人たちはみんなやられた。
ガストレア化した人たちと戦うみんな。
それを焼き払う私。
みんなのサポートでここまで頑張れた。
処女宮（ヴァルゴ）の装甲を削り、雷電針で内部を隅々まで破壊する。
ここまで。
ここまできたのに……！
雷が雲と雲との間を駆け巡り雹を降らせる。
雨と雹が入り混じりガストレアと人の死体を冷却保存する。
電池切れの身体を起動させる燃料は無い。
もう、うつては……

――――稲妻が大地に向かって走った。
人が雷に撃たれる確率は１０００万分の１の確率。
これは『偶然』なのか『奇跡』なのか。
空だった燃料がフルチャージされ全身に埋め込まれた安全装置が吹き飛んだ。
いくら常人より傷の治りが早いからといって安全装置なくしては感電の致命傷は避けられない。
しかし、この『奇跡』はみんなの力。
みんなの報いを受けさせないと気がすまない。
こいつをころす。
ころす。
ころす。
ころす。

「人間はな……弱いんだよ」

だからわたしがまもる。
ひとりになりたくないから。
ひとりぼっちはいやだから。
みんなをくるしめる人類の敵をぜったいころすから。

「わたしに……力を貸して！」

全身に電流が奔る。細胞が焼かれ再生を繰り返す。治癒力が間に合わない感電は傷を深く抉る。
細胞が、遺伝子が、因子がぐつぐつと煮えたぎる。
電流が神経を、筋肉を刺激し活性化させる。
身体が軽い。
いたみはない。
うねる手腕を回避、その上を駆け接近する。
感覚がおかしい。

こんな感覚初めてだ。
成長している。
技術が、特性（能力）が因子が限界まで成長しているのが分かる。
これが『ゾーン』。
お姉ちゃんの領域。

「……ほめてくれるかな」

みんなを死なせたわたしにはその資格はないのかもしれない。
だけど。
だけど……！

「みんなの敵（おまえ）は……しねーーーーーー!!」

完全に修復しきれていない内部に侵入しパイルバンカーを叩き込む。
心臓に到達した雷電針が処女宮（ヴァルゴ）の核を熱傷し焼き払う。
頭部や全身に打ち込まれた雷電針に稲妻が落ちる。
神の怒りとでもゆうのか、雷鳴は止まない。
肉の焼けた臭いが充満する。
処女宮（ヴァルゴ）は、生命機能が完全停止しもう動く事はない。
身体の一部が炭化し、仰向けに倒れる。
糸が切れたのか、疲労が一気に襲い掛かる。
この感覚に任せ、エヴァは眠りについた。

この瞬間――――――『雷神』は誕生した。

第十四次観測

『木原』といっても専門分野全般に精通しているわけではない。

『とある』を思い出してくれれば分かると思うが、一人として同じ分野の『木原』は存在しない。

『とある』の『木原』は独自の価値観と思想的考えを持ち、科学を発展させていく。万能型『木原』も最終手段は自分が最も知り尽くしている分野で挑んでくる。

僕の場合は生物学を専門に幅広く展開している。この場合僕の武器は娘たちになる。第一世代唯一の複数のベースを身に宿し人の器のままでいられた『奇跡』の子。あらゆる環境で無敵の強さを発揮する進化した人類。この子は人類の可能性だ。後々ジョセフ君と結婚し子を宿し、その赤子がどう進化を導くか観察するつもりだ。思いの外人間観察は面白い。あの二人を見ていると前世で置いてきた青春時代を思い出す。二人の関係に手出しも口も出さない、ほのぼの見守るのも新しい楽しみの一つだ。レルネは気難しい性格だけどそのうちジョセフ君からプロポーズしてくれるでしょ。あの子が「承諾」するのにどれだけ時間がかかるか。レルネが二十歳になる前に子供が欲しいですね、最終的に命令すればあの子も潔くジョセフ君に身体を許してくれるでしょう。

ローマ連邦のエリアには二つの強力な一族がいる。

一つは『木原』。科学の異端児。

一つは『ニュートン』。人間の進化の探究者。

ドクターと『ニュートン』の分野は概ね一緒だ。同じ分野だから問題が発生する。

『とある』と違い偏りが激しいんだ。学園都市はあらゆる分野のスペシャリストがそれぞれ専門な実験を毎日行っている。これにより一つの分野だけが専攻して発展する事はまずない。

室戸　菫、アーサー・ザナック、エイン・ランド、アルブレヒト・グリューネワルトの四人もそれぞれ偏りがあって得手不得手があるが、これまた似た様な方向で科学の発展が尖ってしまう。

ま、要するにだ。
変な生物創ったり、医療機器作ったり、生物兵器つくったりするのは大得意な『木原』さんでもその道の変人には勝てないわけで――――

「僕を呼んだってことは試作品完成したんだよね？」
「もちの論ですドクタ～」
「この前みたいに上半身だけ一回転とか、全関節が逆方向に曲がったりとか勘弁だぞ」
「そんなミスしませんよ～」
「今年で何年か知ってるか？西暦２０２８年だよ？西暦２０１６年から１２年も経ってるんだよ？今だにドラム缶とか勘弁してくれよ」
「ドクタ～が女の子にべたべたしてる間遊んでいたわけじゃないんですからね～」
「ほんと頼むよ沙希ちゃん。駆動鎧（パワードスーツ）の基礎図面渡してから一歩も進歩してないはほんっっっっっっと勘弁だからね！」
「１２年もあればドクタ～のコンセプトに近づけますって～。色々創っちゃいましたけど性能重視で中身が潰れちゃう事もないですよ～はい～」
「……うわーしんぱいだねー」

五賢人の僕を除いた四人は機械化兵士とか燃費の掛かる無駄なものに力を注いでいる。四人と違って個人に強力な力をあげて金と燃費のかかる一人無双には限界がくると考えている。『新人類創造計画』とか『新世界創造計画』とか、機械化して新人類とか舐めてんの？僕に喧嘩売ってるよねこれ？機械化してもそれは新人類でも進歩でも成長でも進化でも無い。そこを分かって欲しいな。
そもそも万人が扱える兵器じゃないと意味ないだろ。
誤解されがちだが、僕はこの世界を救いたいんだ。そのために頑張って頑張って頑張って……空回りし過ぎて全部僕のせいになっちゃったけどその贖罪に人生を捧げるつもりだ。これは『木原』とし

て誓うんじゃない、『僕』として心に誓うんだ。

「もう！意地悪ですよドクタ～」

厳重そうな開閉ハッチにこれまた面倒な手続きで沙希ちゃんは『開』のスイッチを押す。

世間では外骨格（エクサスケルトン）なる使用者の身体能力を強化されるパワードスーツが販売されている。まだ改良の余地がある装備だが、これも本人の技量に大きく左右される。そもそもこの世界の住人は人間として有り得ない身体能力を有している。何で刀の一振りで１０メートル以上の巨体とか真っ二つに出来るの？そっちがそのきならこっちもトンデモ科学で対抗するしかないじゃない！

開閉ハッチが開くとライトに照らされた数多の影。

「……素晴らしい。はなまるだよ沙希ちゃん」

「えへへへ～ちょーかんばりましたよ～」

沙希ちゃんは『木原』や他の五賢人に劣っているがそれだけなんだ。まだ僕たちの領域に追い付いていないだけなんだ。むしろ他の四人より『木原』になる才能を秘めている。

今回の一件で再度確信した。駆動鎧（パワードスーツ）に関しては僕以上だ!!

反則かもしれんが、演算補助と思考パターンに親父を利用させてもらった。沙希ちゃんの頭の中には沙希ちゃんの考えと親父の考えがミックスしてる。これこそが、足りないなら他から補えばいい『木原』の発明！そのおかげかまさかの方向に専門的になって嬉しい限りだ。

散々機能面やら金銭面やら燃費面やら言ってはいるが最終的に「科学者のロマン」で創っちゃったてへを否定できない自分がいた。

「二人の散歩より大切な人と歩くだけでいつもの道が違って見えるだろレルネ」

「そうですね」
「あんな栄養ばかりの液状物より断然おいしいだろレルネ」
「……そうですね（もぐもふ）」
「ゲームもやってみるとおもしろいだろレルネ」
「……そうですね（目が離せない）」
「そういえばレルネ……」

ナゼ、私がジョセフと共にローマ連邦の練り歩いているか、それは、金牛宮（タウルス）を撃退したあの日が大きく係わる。

先の戦果のご褒美か、自由時間が増え外出許可も与えられた。年相応に好きに外で遊んで来いと報告のお達しに。

とはいえ、一般的な娯楽を知らない私はどう過ごせばよいのか見当もつかず、日課の鳥かご（愛の棺桶）に戻ろうとするところをジョセフに捕まった。

「……ナゼ、ココにいるのですか？関係者以外立ち入り禁止ですよ？」
「今日からこの研究所勤務になります。よろしくね」
「はぁ……よろしくお願いします」

ついつい握手で応じるレルネ。ハッと手を振り払いジト目で疑問をぶつける。

「……ナゼ、局員に？ローマ連邦の正規軍に所属していましたよね？」
「それこそ愚問だよ。生涯のパートナーと同じ組織に所属するのがそんなに疑問かい？」
「よ、よくそんな恥ずかしい台詞を躊躇なく言えますね」

ジョセフはレルネの周囲に居なかったタイプの人間だ。どう対処すればよいのか分からずいつも軽くあしらわれる。レルネは羞恥心を堪え、一生の不覚と自身を蔑みながら一世一代の「お願い」をジョセフにいう。

「……そ・・・・・・その、きゅ、休日などの……自由時間は、『人間』はどのように過ごすのですか？……えっと、その、は、初めてなもので……教えていただけますか？」

前に組んだ指先をもじもじしながら上目づかいで懇願する姿にジョセフは、不覚にも心打たれた。

レルネの生物本能が本人の意思とは関係なく微量の性フェロモンを分泌してジョセフをかどわかしたのは否定できないが――――――むしろ喜んでレルネの手を握り休日の過ごし方をジェスチャーした。

それからというものレルネの自由時間はいつもジョセフの隣にいた。

散歩をして。

味のする形ある食事をして。

遊んで。

レルネの知らない事は何でもジョセフが知っている。レルネが「アレはナニ？」と質問すると丁寧に答えてくれる。

（怪物の私が、彼の前だけ『人間』だと想える）

隣でへらへら笑うこのムカつく大馬鹿には絶対教えませんけどね。

第十五次観測

「ご紹介？何を何処に紹介するの沙希ちゃん」
「ご紹介じゃなありません！五翔会です～！」
「あー……あぁ～あの五翔会ね！この前ギブ＆テイクの関係で話が付いたでしょ？」
「それが、ど～してもお会いしたいときかなくて～」
「誰？話の内容は？」
「日本エリアの偉い人五人とバラニウムにかんすることです」
「よし行くぞ」
「変わり身の速さは天下一品ですねドクタ～」
「ローマ連邦じゃーまともに手に入らないからだよ！バラニウム関係は全部僕に回せ、そこだけは僕がやる」
「他の仕事もやってほしいなー……なんて」
「その辺は信頼してるよ沙希ちゃん」

話し合い（後ろめたい話）は三時間で終了。ドクターはなんとか自分の納得できる条件でバラニウムの取引に成功し満足していた。正式なメンバーに加わらないか勧誘されたが断っといた。正式なメンバーになるきはない。にしても変な質問するな、「ガストレアを制御する術はありますか？」と来たもんだ。

あるにはあるが、切り札は簡単に見せちゃいけないもんよ。「薬を用いてはどうですか？」と提案し、催眠状態を誘発する薬をいくつか進めて今日は解散になった。

教えただけで結構割引してくれたなあの人たち。ガストレア薬漬けにしてどうするつもりだ？関係ないけどね。

帰りにコンビニにより焼きそばパンとコロッケパンを購入。久しぶりに食いたくなるよなこれ……牛乳うめー。

ゆっくりし過ぎたのか夕日が沈んでいる。

あーやばいな。あ、運転手。

「ダァーーーーーー!!探しましたよドクターあああああ!!コンビニ寄るのに警備撒かないで下さいよマジでェ!!てか飛び降りないで下さいよォ!!防弾ガラスかち割ってアイキャンフラーイって何ですか!?馬鹿ですか!?皆暫らく思考停止しましたよマジでェ!!」
「コンビニのゴミ箱って外にあるタイプと店内にあるタイプあるじゃん?買って外で食ったら捨てるさい戻って捨てるはめになるんだよ?ゴミもって店内入るの最初地味に勇気いると思わない?あ、これ捨てといてね。店内にゴミ箱あるから」
「怒りを通り越して殺意をいだきそうですよマジでェ!!車内で待ってくださいよ!!お前等今度こそ逃がすなよ!!」
「よろ~」

四人の子供が防弾車にドクターを案内する。この四人はドクターが創った移動時の護衛隊だ。
先程の『運転手』が親代わりに育てている。
私を見失うくらいだ。『運転手』の抜けた性格がうつったかな。その分信頼関係は厚そうだけど。
ドクターを後部座席の真ん中に座らせ、左右の窓際に一人ずつ座り正面に一人。助手席に一人と四人は決められた席へ座る。
この状況でガラスを割って脱出するのは至難の業。出来てしまったのだから『運転手』と四人は思考停止したのだ。

「ヴァンティアン。じゃがりこたべりゅうううううううううう?」
「お心遣い感謝いたします。ですが勤務中ですのでまたの機会に」
「あそ、じゃがりこってやっぱサラダ味だよね。ね!ヴァンドゥ」
「自分はチーズ味派ですので」
「あー派閥で別れちゃったよ。ヴァンヌフはサラダ派?チーズ派?」
「抹茶クリーム味ですどくたー」
「変化球かよ!微妙過ぎるは!トラント~君の姉たちが創造主いじめるよ~」

「えっと……私たちのお父さんは『運転手』さんですから」

ふっ……敵しかいねーよ。サラダ以外認めない、これ、絶対。

「くぅ～～～～～!!おとうさん感動だ!!この歳で娘が四人持てるとは夢みたいですわ!!」

「よかったね『運転手』くｎ」

何の前触れもなく車が爆発した。

威力を物語る小さなきのこ雲に周囲の一般人は悲鳴を上げる。

炎に照らされる六つの影。

「ぬおおおおおおおお死んだ!!死に掛けたよおおおおおおおおお!!」

「お父さん舌噛むよ」

「ドクターは!?ま・・・・・・・まさか!?」

『運転手』の隣に四人は着地する。

「緊急の為強行手段を実行しました。怪我は御座いませんかドクター?」

「助かったよヴァンティアン。ヴァンドゥ、ヴァンヌフ警戒怠るなよ。近くにいる」

『運転手』の趣味で車を魔改造できなかったのが痛手か。

ロケットの類じゃない。音のデカい兵器をこの四人が聞き逃すのはまずない。

「マンホールの裏に爆薬仕掛けやがったな、コンクリートが捲れてるよ」

「もしかしなくても命狙われてます?ドクターが」

「恥ずかしながら恨みを買い過ぎて逆に目星がつかないんですよね」
「……きます。数は8、４ペアの民警と判断します」
「あー……囲まれてるね。『運転手』さん、帰宅までよろしくお願いしますよ」
「任せておけって!!ヴァンティアン、ヴァンドゥ、ヴァンヌフ、トラント、捕虜はいらん殲滅だ」
「「「はいお父さん」」」

逃がさないよう包囲してる。ここまでやったら逃げも隠れもせず堂々と正面から迅速に抹殺しに来たか。

「え、イニシエーター全員ミニガン二丁装備って頭おかしいんじゃないの!?」

包囲された五ヶ所から計８丁のミニガンの集中砲火。
硝煙とコンクリートの粉末が標的を覆い隠すまで撃ち続けた。
イニシエーターだろうが人の姿を保てない暴力の化身。
敵のイニシエーターは弾切れのミニガンを放棄しプロモーターの指示を待つ。
４人のプロモーターにとってこれは復讐だ。
ＩＰ序列１０位のリーダーは念には念を入れよとパンツァーファウスト3、１１０ｍｍ個人携帯対戦車弾をぶっ放した。
それを、ヴァンティアンは正面から受け上に軌道をずらした。
敵イニシエーターの一人がヴァンティアンを観察しモデルを予想する。

『皮膚が硬化されてる?赤と白の斑模様……モデル：クラブのイニシエーターだな。凄まじい硬度だぞ、明らかに『ゾーン』の領域に到達している』

ヴァンティアンの背後の煙が風に吹かれ晴れる。それは黒の繭。

ひびで割れの割れ目から五人が頭を上げる。

〈……『木原』の護衛者は只者ではないと覚悟していたが、全員無傷とはな。不意打ちに失敗、ここからは実力の勝負だ。どうやらその繭、硫化鉄だな？臭くてたまらん。モデル：スケーリーフットだな。……成程、『ゾーン』到達者は二人だけか〉

科学者の僕には理解できないんだけど、相手を見ただけで「こいつは強い」って断言する奴って何を基準に評価してるんだろ？雰囲気とかオーラとか言い出しそうで怖い。

リーダー格っぽい男の予想はど真ん中の正解だ。敵さんは何人が『ゾーン』到達者かな？

〈ＩＰ序列１０位マイクだ。コイツはシャリー、モデル・ウルフフィッシュのイニシエーターだ。相性ばっちりだなカニ。ついでに教えるが舐めてかからない方がいい、四人全員が『ゾーン』に到達している〉

（応援呼んだけど間に合うかな？）

「ドクターとお父さんは私が創った鎧を纏ってて、臭いは気にしないでよ！」

「今更気にしねーよトラント!!ドクター!!なんかこー、一発逆転の兵器とかないんですかい!!?」

「そんな都合の好い兵器があるか！僕は創る専門だけど『ゾーン』相手だと厳しい次元超えてんの！トラントは防御型だから実質ヴァンティアンだけの戦闘になる。ヴァンドゥ、ヴァンヌフは……死ぬぞ」

『国際イニシエーター監督機構』トップの地位は伊達ではない。ＩＰ序列１０位と聞いて今しがた思い出したが、後の三人はＩＰ序列１１位『集団自殺（ジェノサイド）』、ＩＰ序列３１位『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』、ＩＰ序列９０位『空腹（エンプティネス）』の１００位以内の上位ランカー。

『とある』の『木原』みたいな人外戦闘は僕には無理。『木原数多』は一方通行を創った張本人だからまだ『木原神拳』は理解できる。けど

思い返してほしい、『木原』は科学者の癖に運動神経が抜群なんだ。『木原円周』ちゃん然り、『木原加群』然り、『木原病理』……人外代表だったな。兎にも角にも、『とある』の『木原』みたいな戦闘は無理。

僕は創る側であり戦う側ではない。

それを踏まえ。

「僕に何か用？訊きたいことがあれば答えるけど？」

時間稼ぎが成功すれば最終防衛がやってくる。

〈……これ程の大罪を犯して何故のうのうと生きている？五賢人の力か？『木原』の権威か？取引でもしたか？なんにせよ……屑の心情を知りたい。どう感じた？〉

時間稼ぎ成功（ニヤリ）

「言い訳にしか聞こえないが……残りの人生全てを捧げるつもりだ。僕ほどガストレアウィルスに詳しい人間もいないしね。時間は掛かるけどこの世界からガストレアウィルスを消してみせるよ。納得した？」

〈納得できるか!!未来の為？人の為？なら……なら、この恨みはどうなる!?俺個人の願いはどうなる!?殺したくて殺したくて殺したくてたまらない!!未来を考えろ？大勢を助けろ？平和な未来の為死んだ人はどうなる？大勢を助ける為見殺しにされた無勢はどうなる？この恨みはどうなる？自己満足？大いに結構。自己中？大いに結構!!人は弱い……俺もガストレアとの戦いでいずれ命を落とす。憎しみを懐いたまま、この世界に怨念を撒き散らして死ねと!?原因を、全ての元凶を……知っているのに指を銜えて黙ってろってか!!あああぁああ!!?〉

「……羨ましいほど人らしいよ君。君は間違いなく人だ。人らしくて誇らしい。けど、人は弱くない。強いよ……人は、強い。人は努力と

進化でなんにでもなれる。君たちの場合それが『復讐者』だった……それだけの違いだよ」

〈お前は何を成す？〉

「人の進化」

〈俺たちの願いは？〉

「人の在り方」

〈……〉

「最後に訊くけど……この世界の真実を知った君たちはどうしたい？」

そんなもの決まってるとばかりに鼻で笑う。

もうどうしようもないのだ。

真実を知って、自分の願いと人類の悲願どちらが重いか考えた。

それを、本人の口から「人の在り方の一つ」と断言された。

ならもう――――――

〈ぶっ殺す!!〉

最初っから殺す気で来ていれば可能性が在ったかも知れない。

『願い』は叶ったかもしれない。

『木原』は断言する。

『人間』は強いと。

なら、成長途中の幼虫より成虫が強いのが通り。

「『人間』の到達点とイニシエーターの可能性が来るぞ」

両者の間に人二人分入るミサイルが着弾する。

「僕を殺したいなら好きなだけ殺しに来るといい。君たちは本気で殺しに来るし僕も本気で抵抗する。……殺れるもんなら殺ってみろ、モンキー（劣化）が『人間（進化）』に勝てると思うなよ？」

その存在は人類に勝利をもたらし、人々の期待を一身に背負う存在。
彼らにとってもその存在は光でもある。

〈そっち側なのか……貴方方はそっち側なのか!?〉

ＩＰ序列１位『希望（エルピス）』モデル：不明

「星を届けに来ました。希望の星姫を」
「……惜しみもなく臭い台詞をよく言えますね」

第十六次観測

８人は呑まれた。

一目で理解した――――――見なくてもわかる。

例え見なくとも警戒領域に侵入した瞬間、ＩＰ序列１０位マイクがプライドを捨てて逃げ出すヤバさ（レベル）。

どう攻めればいい？

技術？

工夫？

手数？

速度？

力？

……何だ？どうすりゃ倒せんだコイツ？

『木原』を殺せれば犠牲を厭わない我々だが、この二人を倒さぬ限りちょっとした余所見が死に直結する。

１０位と１１位のペアは、他の７人を犠牲にどうすれば『木原』の命を散らせるか頭を働かせていた。

この二人が次に注意を向けたのは他の３ペア。３１位はプロモーターが危険度を察知したがイニシエーターはダメだ。９０位はプロモーターはダメだかイニシエーターが危険度を察知している。

危険度の察知の有無で３１位、９０位は１０位と１１位に劣るが無能ではない。

１位は『希望』ではあるが、『希望』の所以が規格外だ。

『無敵のガストレア金牛宮（タウルス）の撃破』、軍隊でも敵わない怪物を斃した化け物。

１位を目の前に力量が解らないのは致命傷ではない。そもそも規格外すぎて力量など関係ない。

８人の警戒は細胞レベルで一組に注がれている。

「指令は暗殺者の排除、条件はベースの制限、使用していいのは接近戦用のベースのみ。全員『ゾーン』ですか……瞬殺は不可能ですが秒殺

は可能そうですね」
「まずはドクターの安全が最優先だ。道を開くけど誰がいい？」
「一番弱い奴がいいかと」

ヴァンティアンはその意味を理解し妹達はドクターと『運転手』を担いだ。
その一言に一番反応したのは、９０位『空腹（エンプティネス）』プロモーター芳香だ。

『え、ちょッ!?やば!!』

１位に睨まれたら死んだも同然。
９０位のペアは１位に気を取られた刹那、９０位イニシエーター夢華（モンファ）はヴァンティアンにみぞうちを貫かれた。プロモーターはイニシエーターの襟を掴み腹にめり込んだヴァンティアンの右腕を蹴りっ飛ばし後退する。
ドクターたちは包囲網の穴を抜け全速力で逃げ出す。

『あー……ナッシングだよ。みんなごめんね』
〈単純な戦闘なら『空腹（エンプティネス）』よりカニ娘の方が強い。問題は１ペアに『木原』を追わせ３ペアがコイツを押さえなければならないことだ。使い物になるのか？〉
『ホッチキスで傷口治療したから大丈夫。内臓ぐちゃぐちゃだけど問題ナッシング』
『死語だぞそれ』
『問題ナッシングが死語だなんて私は認めない。せっかく生まれた言葉の息吹を簡単に闇に葬り去っていいのだろうか？いいはずがない！言葉は意図が相手に伝われば問題ナッシングなはずだ。私は生きた化石なんかじゃない!!』
『十分化石だ、何歳だと思ってんだ？いつまでも若かった頃に縋り付いてんじゃねーよ』

『あぁぁあ!?』
〈静かにしろ、俺に殺されたいか?〉
『……チッ』
『……ふん』

1位のプロモーターの偉丈夫は大剣が武器。イニシエーターは特殊な戦闘服だけで武器はなし。そもそも規格外に武器はいらないか。

〈……『集団自殺(ジェノサイド)』が追え、残りで……〉
『『『絶対いや』』』
〈殺すぞ!?〉
『むっこさんの『ゾーン』に対抗するには『大食い(インフィニティーガウジ)』が適している。一番可能性がある。4ペアいればなんとかなるだろ。『木原』を殺すのに十分だ』

俺のシャリーは固い装甲を砕ける。クラブとスケーリーフットの装甲を難無く破壊し肉を抉れる。
相性で考えるなら一番可能性のあるのは俺だ。
……腹を括るしかない。

〈待たせたか?〉
「空気を読んでただけだ。敵だろうが、最後の別れはさせる。少しでも悔いが無いようにな」
〈なら『木原』を殺させろ〉
「それは勘弁。レルネのお義父さんを死なすわけにはいかん」
「……サラッと聞き逃がせない単語が耳に入りましたよ」

1位のプロモーターどっかで……『ニュートン』のジョセフじゃねーか。
おいおいマジかよ、ヤバい噂しか聞かねーぞ。レルネだったか、ジョセフを狙えば護るため隙ができる。

それしかない。
インカムで暗号化された通信に指示を送る。
度肝を抜いてやる。

〈レミ、『木原』の居場所分かるな？〉
『大丈夫です。『私』が一人追跡しています』
〈行幸だ〉

俺が『木原』に辿り着けば目的は成就される。
ＩＰ序列１１位『集団自殺（ジェノサイド）』プロモーターサイが俺の代わりに『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』と『空腹（エンプティネス）』を纏めてくれる。

〈任せたぞサイ〉
『さっさと行け』

引き寄せを任せ、俺は真っ直ぐ『木原』を追った。

？

？

？

？

？

『問題ナッシング！先手もらっちゃうよ～』

芳香が水平２連銃を発砲、当然躱される。
１位はそのまま『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』のペアに斬りかかるが、『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』のプロモータースカイが即効性の麻痺毒を塗り込んだまきびしを牽制にばら撒く。

「ん……毒が塗ってあります」
「了解！」

スピードを緩めず大剣を真下に突き刺し、大剣の柄を蹴りまきびしを飛び越え『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』に迫る。勿論レルネの手を握って。

『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』のイニシエーターイブはアーマーリング状の刃を両手の指に付け空中戦に持ち込んだ。

ジョセフに『ドリル突き』を放つ。手首の関節を外し回転数が倍増した１０本の刃は容易に肉を削るが、人間の反応速度を超えた突きを空中で１回転し手首を蹴り飛ばすことで回避。

スカイはすかさずＰ９０をレルネに撃ち込むが全てプロテクターに弾かれる。

『ギャハハハハ、見たか?弾全部弾いたぞ!空中でしていい動きじゃねぇ!』

『も、問題ナッシング!』

『ナッシングだ化石!』

サイはナイフ戦に持ち込むが、ジョセフの方が上手だった。ナイフを捌きつつサブミッションを仕掛けてきやがった。

手首を持たれ時計回りに捻り関節を極めに来た!

合わせるように身体ごと回転し蹴りを顔面にくらわせる。

力が緩み手首を解放させる。

空いた手で閃光弾を投擲、炸裂と同時にダガーナイフを８本を急所に投擲するがジョセフは上半身だけをずらし回避。

サングラスを掛けている自分と違い目を瞑ったジョセフの完璧な回避に度肝を抜かれる。

ククリナイフを２本握りしめ斬りかかろうと一歩踏み出した時、先程投げたダガーの１本にジョセフが指を掛け１回転させ眉間に投擲してきた。

（反射!?間に合うか!!）

バク転でダガーを躱し距離をとる。

『……チッ掠ったか』

サングラスは真っ二つになり地面に滑り落ちる。眉間も切れたのか血が流れる。

『ほんとに同じ『人間』か?『人間』超えてんよお前』

「此処まで強い奴は久しぶりだ。嬉しいよ、レルネもそうだろ?」

「ナイフ使い……切れたら痛そうです」

「そろそろ全力でやんないとね。『大食い(インフィニティーガウジ)』だっけ?」

「そうですね。指示通りかあのペアだけ行かせましたがドクターはヴァンティアンを鍛えるつもりでしょうか?」

わざと先に行かせた?舐め腐ってやがる。

「ドクターも人が悪いです。『ゾーン』が5人もいると前情報で知らされましたがデマですね」

『デマだと?』

「私は手合せをし判断しましたが、ドクターは一目で『ゾーン』か否かを見極めることが出来ます。ドクターから全員『ゾーン』と聞き休日潰して来たというのに……始めっから実戦経験に持って来いだろの魂胆でしたか」

『我々全員『ゾーン』だ。一回の手合せで……』

「分かるはずがないと?確かに『集団自殺(ジェノサイド)』は『ゾーン』でしたよ。その他は違いましたが、チームに2人も『ゾーン』到達者がいるのが驚きです」

合ってる。

怖いねーこの子。洞察力と勘が鋭い。

今の話しが本当なら……

『『木原』は襲撃を事前に察知していた？知った上で放置して自前の駒の訓練に利用したと……』

ははは、なんだそれ……フザケンナヨ!!

突如地揺れでジョセフとレルネの足元だけ陥没する。

飛び引いたら高層ビルが偶然にも二人の所に傾き倒れる。

「あいつ……なにかしたな、本番だレルネ」

「はい」

レルネは常時赤目だ。操作が下手糞で黒目に戻せないわけでも、能力を解放しているわけでもない。

過剰な遺伝子組み換えと肉体改造に、生まれながら髪の色は銀色、瞳の色は赤に固定された。

父母日本人の遺伝子から生まれれば黒髪、濃褐色になるはずが（日本人だけど金髪とかブルーとか赤毛とかホワイトあるけど気にすんな）、日本離れした容姿になってしまった。

レルネが能力を使用したら見分ける統べは無い。

赤目のままだから使うまでわからない。

能力を使わずジョセフと白兵戦で戦えるのだからその肉体の改造っぷりがうかがえる。最近は負け越しているそうだが。

『木原』が認めるその完成度は規格外。

無敵のガストレア『金牛宮（タウルス）』を撃破したその実力は――――

ドパァンッ！

空気が破裂した。レルネから衝撃波のようなものが発生し、一蹴りで一万トンの高層ビルが砕け散った。

「今の蹴り……ゾディアック並みの耐久性が必要ですよ？」

（どっちが怪物だァ!!？呪われた子供たちとか『ゾーン』ってレベルの話じゃねーよ!!）

「さて、フリーとパラポネラの力を解放したレルネに敵うかな？」

「フリーは兎も角よくパラポネラがわかりましたね」
「一目でわかるよ」
「ん……そうですか」

全部『大食い（インフィニティーガウジ）』に託した。
恐怖など無い。ただ……ただ……

『すまねーレミ、こんな負け戦につき合わせちまって』
『今更ですよ、サイさん。わたしは……最後まで付き合うって決めたんですから』
『……ありがとよ。お前等の命を俺に預けてくれ、『子』を全て投入しろ』

奴らの肝を冷やしてやろう。
地中、ビルに潜んでいたレミの『子』が姿を現す。
レミに似ているが二歳年下の女の子たち。
全てレミの『子』だ。

「……凄い数だね。まだまだいそうだ」
『千の『子』を投入した。いくら個としてのパワーが規格外でも軍に勝てると思うなよ』
「そのガストレアの軍隊を撃破したおれ等にゆうか。特攻、銃撃、接近なんでもいい、『1位』の意味を教えてやる」

カッコいいな、惚れる。
俺が女なら抱かれてもいいイイ男だ。
俺も、男を見せたくなるだろ!!

『IP序列11位『集団自殺（ジェノサイド）』サイ！コイツはモデル・マウス、ステップレミングのイニシエーターレミ！』

空気読めよ?と殺意の眼光で睨む。

『ＩＰ序列３１位『赤い弾丸(ウィンドケイブ)』スカイ。ペアはモデル・ピシダエ、イブ』
『ＩＰ序列９０位『空腹(エンプティネス)』芳香!パートナーはモデル・シーキューカンバー夢華(モンファ)!!』
『『死にさらせぇ!!』』

長柄武器、短柄武器、銃器、火器、暗器、皆一つとして同じ武器が無い千の『子』がなだれ込む。
矛、戈、戟、薙刀、薙鎌、槍、鍬、竹槍、長巻が突っ込んでくる。
ジョセフは戟の突きを逸らし発勁を顔面に叩き込み潰し、ついでに戟を拝借する。

「これ方天画戟じゃん。敵とはいえ五歳児を手に掛けるのは心苦しいな、しかもこんなに!!」

薙ぎ払いで十人の首を刎ねる。
網や接近武器が波となり襲い掛かる。互いを傷つけるなどお構いなしに暴力を振るう。
完全な乱戦は味方ごと切り裂き視界外から攻撃する!

「レルネ!後方ごそごそ何かしてると思ったら火砲支援の下準備してる!」
「私が行きます!」

レルネが二人が乗っていた移動用ミサイルに手を突っ込む。
身体の機器にチューブが接続され肩と腕を覆う巨大な腕が装備される。
身長１４０ｃｍのレルネが全長２００ｃｍの無骨な剛腕のパワードスーツを着る。
肘のソードも腕と同じ長さがある駆動鎧(パワードスーツ)。

目を凝らすと肩の部分に開発名『ハードスーツ』と刻まれている。
フリーの能力で強化された足は衝撃波を生み出し百人を吹き飛ばし、一瞬で迫撃砲に到着する。
パラポネラの能力と駆動鎧（パワードスーツ）が合わさり、拳で弾け飛ぶ。
迫撃砲を奪い、片手で振り回す。
別の迫撃砲の部隊が急いでレルネに照準を合わせるが、迫撃砲をぶん投げ誘爆させる。

『二門しかない迫撃砲を……数の意味がない……レミ、最終手段だ』
『……はい』

パンツァーファウスト3などのロケットランチャーを装備した部隊がお構いなしに味方ごと炎に包み込む。
『子』を使い潰すこの戦法は好かんが、1位を殺す確実の手段。
撒き込まれたレミの『子』たちが肉片になる。

（ほんとに人間かアイツ！『子』の壁を五歳児とはいえガストレア因子の子供を物ともせず全部躱せるか普通!?）

しかも、編成を組んでいる『子』に意図的に突っ込み此方の被害を拡大させている。
機関銃や重火器装備の『子』を落ちていた『子』の盾でガードしている。

（イニシエーターが規格外ならプロモーターは人外だな。撃って躱すなら零距離で当ててやる）

防具を着込んだ部隊がジョセフと接触。
方天画戟で防具の隙間を切り裂かれ、踏み台にして進もうとしたとき――――防具がずれ、防具の内側にＣ４が。

（神風は躱しようがねーだろ！）

防具を着ている『子』みんな自爆要員。

『人間』のジョセフは重火器は兎も角、爆薬などの広範囲に破壊を及ぼす兵器が大の苦手だ。だって手足普通に飛ぶから。

自爆攻撃の爆風に逆らわず、同じ速度で後退し熱と破片を盾で防いだ。

（なんじゃそりゃ!?）

サイの知らぬことだが視力２０・０がなければとっくにジョセフは死んでいた。

『やっと追い付きましたよ～この野郎!!足速いんですよ!?』

「『空腹（エンプティネス）』か！お前等のせいで街が滅茶苦茶だよ！」

『あたい等に関係ないね、死ね!!』

「散弾なんか命中しないよ」

「盾で防いだな！」

盾ごしに発勁、腕が痺れジョセフの足が一瞬止まった。

夢華がジョセフの背中に張り付き首に腕を回し締め付ける。

首の骨を圧し折る気だ。

ジョセフはパニックにならず冷静に重心を落し一歩踏み出す。

両足が陥没し背中の気を解放し八極拳を叩き込む。

腹部に命中し中身の内臓を破壊した。

力を緩めない夢華にジョセフは焦りを見せる。

その隙に芳香はジョセフの足にしがみつき動きを封じた。

『拳法家として正々堂々戦いたいけど、こっちとら形振り構ってられないのよ。知ってる?ナマコって内臓再生するのよ』

夢華は首を切断するつもりで首を絞め、足でジョセフの腕を固定する。
もう二秒で首の耐久性は限界を超え破壊出来る。
もしもの時は私たち後と爆撃しろと命令請けている。
死ね！
グルンッ！
首が１８０度回転し夢華の首を噛み切る。
動物の骨を噛み砕くジョセフの顎は夢華の首の半分を捕食し、骨を砕いた。
ビクンビクンと痙攣すると失禁し絶命する。

『う、うそ……』
「現実だ」

足を極めていた芳香は、成す総べなく顔を掴む手で首の骨を折られた。

『イニシエーターを殺したぞ……人間じゃねー』

サイは部隊に指示を出しながら一部始終を見ていた。
芳香、夢華、お前等の死は無駄にしない。
足を極められていたせいか動きが鈍くなったジョセフに自爆部隊が二十名しがみ付いた。

『ジエンド』

爆発の瀬戸際――――――

「ジョセフ！」
（『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』と『子』だけじゃ足止めにもならないか。火砲支援もほぼ壊滅、プロモーターを貰わないと割に合わない）

1位も人間、間に合わない。
だが、レルネが拳を振り上げるとジョセフに向けクリーンヒットさせた。

『ははぁぁぁあ!!?』

レルネの拳は徹甲弾を防ぐボディーアーマーを破壊する。
人間より頑丈なレミの『子』を紙屑にする。
フリー――――――ノミと弾丸蟻とパワードスーツが生み出すパワーはレベルⅣを一撃で死滅させる。
それをペアに容赦なく叩き込むレルネの行動に信じられないと口を塞ぐのを忘れた。
自爆部隊はジョセフから振り落とされ爆死した。
三十メートル吹き飛ばされた人間が生きてると思わない。
生きて……ピンピンしてたらガストレアだ。

「いたた……助かったよ」
「ギリギリでした。その、怪我はありませんか?」
「ハハハ、無事だよ。凄いねこのプロテクター、演算型(カリキュレイト)・衝撃拡散性複合素材(フォートレス)(仮)だっけ?これがなかったら殺されてたよ」
(どんな服だよ!?欲しいなおい!)
「もう一発いきましょうか?」
「勘弁してください!今ので壊れちゃったから!」

人間じゃねー!人型ガストレアか何かか『ニュートン』は?

『おい、生きてんなら報告しろ『赤い弾丸(ウィンドケイブ)』。インカムが壊れただけか?』
『……何とか生きてる……手加減された』

『結構余裕だな、『子』はもう八十人足らずか。大分あの子に殺されちまった……辛いかレミ？』

『……何時もの事です。わたしも『子』も、あなたの復讐の道具。役に立てば本望……役に立ちましたか？』

『文句なしだ。誰にも文句は言わせねー、『大食い（インフィニティーガウジ）』が後はやってくれる』

もう退けないのだ。

弱点を突いて突いてプロモーターだけは殺す。

『プロモーターを狙え、イニシエーターは守りに入る。徹底しろ』

『子』は接近武器しか生き残りは居ないか。

2ペアでどこまで行けるか勝負か。

『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』は戦術を変え、長距離狙撃に移行。

スカイは何処に隠し持っていたのか狙撃銃ＭＳＧ９０で狙い撃つ。

イブは狙撃の際の護衛の役目か。

……躱せるもんじゃないんだが。

「狙撃がウザいな、アレやってよ」

「アレですか？アレを使用しますと『ハードスーツ』のエネルギーが空っぽになります」

「実戦のデータ取るなら最適だろ？」

「……それもそうですね」

掌をスカイとイブに向ける。

「滅しなさい」

掌の円が光り輝き――――星が流れた。

『光学兵器!?おい、スカイ!イブ!……クソ!!』

あっさりと死んだ。
ＩＰ序列３１位『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』は光の流星に胸を貫かれて死亡した。
唯の拘束具となった『ハードスーツ』をパージ。
息を吐き手を肩に置き軽く回す。

「お休み……データは十分かな。残りの八十人はおれに任せてそっちのペア任せるよ」
「ん……さっさと終わらせて帰りますよ」
（こりゃ死んだな）

高層ビルを破壊した蹴りをくらわせれば誰であろうと一撃だ。
データ収取に徹していたレルネは『ハードスーツ』の試験運用を任せられていた。
それが終われば枷は何もない。
レルネの震脚が地を裂き『集団自殺（ジェノサイド）』は足場を失う。

「ジョセフから習った必殺技です。震脚の衝撃波で相手の足元を崩し宙に浮かせます。そして……」

身のこなしが極限まで洗練され、音まで置き去りにする。

「蹴りを叩き込む……拳法には程遠い力技です」

サイとレミがハジける。
衝撃に肉体が耐え切れず花火とかす。
『集団自殺（ジェノサイド）』、『赤い弾丸（ウィンドケイブ）』、『空腹（エンプティネス）』は、『大食い（インフィニティーガウジ）』に思いを託し、この世を後にした。

第十七次観測

レミの『子』の指示に従い市街地を抜け闇を駆ける。
1位が追跡してこないことからあいつ等の足止めは成功したようだ。
俺の役目は一刻も早く『木原』に追い付き殺す。
これは逆恨みだ。
『木原』は『アルフレッド・ノーベル』に似ている。
『木原』は平和主義者――――なのかもしれない。
非人道的で外道だが、人々を救おうとその頭脳を活用している。
遠い未来を見通し人類を想うなら『木原』は必要な人物だ。
人類に必要。
その為なら人を殺してもいいと？
無勢を犠牲に多勢を助けると？
ＩＰ序列１０位の権威でこの世界の真実を知ったマイクは、怒りで怒鳴り散らしたり、恨み呪詛を懐いたわけでもなかった。ただ――――泣いた。
大の大人が、七年前に忘却した涙を崩壊させ無様にイニシエーターの腕に抱かれ泣いたのだ。
最高機密アクセスキー・レベル十二は『木原』が開示した情報を全て閲覧できる。そこには淡々と経緯が書かれた世界の真実。
こうゆう実験をした。
被験者が死んだ。
事件があった。
トラブルがあった。
自爆し新種のウィルスが生まれた。
創った。
仮説、予想をまとめてみた。
人間に投与した。
実験は成功した。
やらかした。

真実を知ったらなんと馬鹿らしい。

一部の科学者が暴走し、偶然生まれたウィルスを調べるも「兎に角凄い」としか分からず、そんな危険物を何の躊躇もなく人間に投与し実験を繰り返し、外道の行いに耐え切れなかった一部の研究員が子供たちを逃がしたら暴走しゾディアックが誕生した。

なんと馬鹿馬鹿しいんだ！

これ程の災厄が人の手でなされ、それが悉くトラブルと善意でなされている。

これは泣くしかない。

こんなアホらしい理由で知人や家族は死んだのだ。

この情報は「こんなことが起きて、こんな結末を迎えた」と解りやすく表示してあるが、どうして『木原』はガストレアが出現する前から対ガストレアを想定して実験を行っていたのか――――――――それが一つも書かれていない。

トラブルや事件が発生すれば、どうしてそうなったか相手の心情も詳しく掲載されているのに対し『木原』の思惑と思想がまったく書かれていない。

『木原』は実験をやった。（実験や行った非道の数々。実行した理由は不明）

邪魔をする研究員が現れた。（多分こんな理由で妨害した、裏切った）

『木原』は事件の中心にいる。

『木原』を裏切った研究員や科学者の殆どが、『木原』を止めようとしていた。理由は様々だが止めようとしていたのは事実。

俺は覚った。コイツは止めないとイケない奴だ。

誰かがスイッチを切るまで稼働する殺戮機械（キリリングマシーン）。

事故だ偶然と書かれているが、『木原』は最初っからそうなるよう誘導し、あたかも自分は悪くないと印象操作しているのでは？

真実は誰にもわからない。

『木原』しか知らない。

そんな俺でも分かるのはコイツはゲス野郎だ。

人の命が軽くなったガストレア大戦移行はコイツは優秀だ。
人々を救う可能性を秘めている。
それでも、ガストレア大戦前の犠牲者はどうなる？
ガストレアが出現する前の犠牲者をどう説明する。
俺にはコイツがこの状況を意図してつくりだしたとしか考えられない。
――――――俺は唯恨みの捌け口が欲しいだけなのかもしれない。
それでも、それを踏まえても、コイツを止めない限り犠牲者が納得しない。
ガストレア大戦の最前線で知り合った俺の仲間。
俺に賛同してくれる復讐者を三人集めた。
俺が知る限りの百番台の民警。
百番台が四人――――――――――それ以外の民警の知り合いはいたが、『木原』には力不足だ。命を散らす必要はない。

『１００メートルを右折した路地に『木原』がいます。待ち伏せの可能性が……』
〈問題ない〉

１位がいない居ないなら俺に勝てる奴はいない。
十番台――――――俺達に勝てるのは九人しかいない。
１位は足止めされ、八人に減ったわけだ。
待ち伏せされ罠だろうが俺達は噛み砕く。
以外にも狭い路地にはトラップの類はなく、標的に追い付いた。

〈……三人？護衛の三人はどうした？〉
「邪魔にならないよう下がらしてある。思う存分ヴァンティアンと戦いたまえ、『運転手』のペアに勝てたら僕を思う存分八つ裂きにして構わない。やる気が出るだろ？」
〈……乗ってやる。どのみちカニ娘は食い散らす予定だ。カニはうまいからな〉

「うちの娘に向かって食い散らすたぁいい度胸だ。時と場合によっては勘違い間違いなしのマジ切れ切腹者だ。ぶち殺すぞ小僧おおおおおおおお!!」
「めっさ勘違いしてるよ!?」

空気読んでんのか?こっちは真剣に殺しに来てんだ。

〈……俺の標的は『木原』だけだ。無駄な殺生は避けたい、『木原』を置いて消えな〉
「お生憎様仕事なもんでね。このご時世食べごろの娘四人も養うには持って来いの役職だ。ま、運がなかったと諦めてくれ」

命を懸けてまで『娘』を想う心は評価できる。
仕事を投げ出さないプライドも好感が持てる。
なら余計に、

〈娘を失う羽目になるぞ?10位を舐めるな。『大食い(インフィニティーガウジ)』の二つ名は飾りじゃない〉
「がはははははははは!!」

ウケる要素があったか?

「なにキョトンとしてんだよあんちゃん!!殺す気でこい!!運転ばっかで運動不足なんだぁ!!それともその程度なのか、その程度なのかあああああああああああ!!?」
〈死にたいなら殺してやる!〉

十番台に挑む時点で浅はかだ。
レベルが違う。
経験も、実績も、相性も、全部上回っている。
モデル・ウルフフィッシュの特徴(能力)は強靭な咢(アギト)だけじゃない。

能力の真髄は挟む事にある。顎は挟むもの、挟む行為に意味がある。
自然界で貝類をかみ砕いたり、甲殻類をかみ切って食べる喬を握力でも発揮する。
それがシャリーの特性。
掌を重ね地面と水平に構える。
掌底を重ねたまま指を尖らせ喬を催す。
立派な喬だ。
口より巨大な喬は急所を丸ごと捕食する。
シャリーはカニ娘を、俺はおっさんを一撃で殺す。
痛みのない刹那で殺す――――――慈悲だ。
俺は我流の格闘だが、確かな実戦で身に着けた経験が技の領域まで昇格してくれた。
豪気な蹴りで首を刈り取る。
唯のおっさんが俺の蹴りを捌けるとも思えない。
シャリーの防御不可の喬は防ぎようがない。

（始末したらそのまま第二撃を『木原』にくらわせ終わらせる。それで完結）

首を狙った蹴りは――――――受け止められた。

〈ッ!!〉
「おっさん舐めんなよ小僧。ジョセフに拳法教えたの誰だと思ってやがる」

洗練された滑らかな水の流れは、殺人を一つの舞にする。
足を圧し折り、首の脊髄の一つを外した。

「イニシエーターのお嬢ちゃんも連れてってやるから安心しろ。肺を片方潰れたしそう永くないだろ」
〈ガハッ……な、なにもの……だ?〉

「唯のおっさん……で納得しねーわな。劉明武（リュウ ミンウ）、ＩＰ序列９位『旅人の運転手（カブリース）』。ベース：タスマニアン・キング・クラブ、ヴァンティアンとペアを組んでいる」

――――――９位。

百番台からは序列一つで実力に差が出る。

十番台は激戦区だ。

魔境の領域。

怪物。

「強いよあんちゃん。今まで戦ってきた誰より……ジョセフの次くらい強い。ま、相手が悪かったと諦めてくれ。シャリーちゃんも『大食い（インフィニティーガウジ）』の二つ名に相応しい強さだ。ヴァンティアンの両腕掩がれたの初めてだ。ま、おれ等の方が強かっただけだ」

力ある者が生き残り、何をしても許される時代。

俺はそれが許せなかった。

力があれば弱者を蹂躙していいのか？

力持たぬ弱者は強者の家畜でしかないのか？

違うだろ。

違うだろ!!

みんながみんな強いわけじゃないんだ。

”人間は弱いんだよ”

俺もお前も『木原』も呪われた子供たちも――――――弱いんだ。

（人は強いと言ったな……違うな、人は弱いから強いんだ）

初めから強い人間なんていないんだから。

「……死んだか」

煙草を一本銜えオイルライターで着火。ニコチンを肺で満たし息をつく。

「お父さん、煙草の煙は主流煙より副流煙の方が有害物質が多く含まれています。発癌性の高いジメチルニトロサミンは主流煙が５・３から４３ナノグラムであるのに対して副流煙では６８０から８２３ナノグラム。キノリンの副流煙にいたっては主流煙の１１倍、およそ１万８千ナノグラム含まれている。つまり、実際は吸う人間よりも周りの人間の方が害は大きいのです。その点私はガストレア因子の恩恵で心筋梗塞や狭心症、脳卒中や喘息の心配はありません。ですが、臭くてたまりません。臭いを落としてから帰宅してください」

「以後気を付けます、ほんとに、はい」

辞める気は当分なさそうです。

「キシリトールとリセッシュ配給するから匂い消してから報告書提出してね、うちの研究所煙草禁煙だから。……分かっていたとはいえ事後処理めんどくせー！回収班急がせろ！レミの『子』は生きて回収しろ！マスコミの対応は事前通りに！はぁ疲れた。娘たちよ、さっさと帰るよ」

「了解ですドクター。ですが訂正が一つ」

「訂正？」

「お父さんは『運転手』です」

「そう思うならせめて名前で呼んでやりなよ」

生みの親とはいえ娘たちが何を考えているのか分からない時がある。

呪われた子供たちは人間の進化だ。

環境か、時代がそうさせるのか、呪われた子供たちは精神的に成熟している。
普通の人間の子供が死ぬ気で勉強して戦闘訓練を学んでも大人のプロには敵わない。
進化した『人間』の子供は学習能力と成熟した精神は逸脱している。
親に甘える年頃の子供がプロ顔負けの技術と知識を身に着ける。
その努力は想像を絶する。
頑張ったね。
よくやった。
そんな安っぽい言葉じゃ表現できない生き地獄。
身に着けた能力は人間を凌駕し、新たな『人間』にランクアップさせる。
呪われた子供たちは先導者だ。
もっと専門的な知識を学ばせれば科学者として偉大な存在になる。
でも人間の子供と同じで『人間』の子供たちにも得手不得手がある。
更に呪われた子供たちも人間と同じで精神が不安定だ。
まあそれが『人』間らしさだよね。

「僕の娘たちは優秀で助かるよ」
「世辞ですか？」
「本音だ」

でも、ガストレア因子の子供は女性しか生まれない。
男性もつくれないかなぁ～。
ガストレアウィルスが存在する限り例えガストレアが消えても遠い未来人類滅ぶぞ。

第十八次観測

前回の戦闘で得られたものは多い。
ジョセフとレルネは人間との実戦経験で殺しを経験した。
普通もっとあーだこーだ人殺したらうだうだするもんだけど二人はこれが初体験ってわけじゃないしその辺安心。
クズ、ゴミ、能無し、馬鹿、「慣れ」とほざく奴は好かん。
『理由』や『意思』がない殺人はダメだ。
命令でも何でもそこには『意思』と『覚悟』が必要だ。
僕には『覚悟』がある。芯の通った揺るぎない『決意』がある。
その点今回の相手は戦士に相応しい心を秘めていた。ジョセフもレルネも『運転手』もヴァンティアンも自分の役割をきっちり理解し、本気で役に立ってくれた。
試作品『ハードスーツ』の戦闘データも取れたし緊急移動用ミサイルも問題ナッシング！口調うつっちゃった。
目的の為に人を躊躇なく冷静に無力化できる1位に勝てるものはゾディアックを除いて存在しなくなった。
ガストレアは殺せても人間を殺せない腑抜けではこの先やっていけない。
ガストレアより人間の方が恐ろしい。ゾディアックは殲滅確定だが、人間を殲滅したら目も当てられない。
人間は味方なのか敵なのか？
思想、環境、組織、同じ人間でもバラバラだ。
ガストレアは敵。
人間は味方も居て敵も居る。
そこがガストレアとの違いだ。
でもそこが『人間』の持ち味の一つでもある。
七年前ガストレアウィルスで世紀末を迎え、平和な時代が終了した。失われた秩序を取り戻した近代、偽りの平和も三年後また動く。
西暦２０３１年――――――――原作開始の日本を中心に世界は動き始める。

『木原』にとって原作通りは「邪魔」でしかない。
『木原』と同じ境遇の転生者がもしもこの世界にいるのなら、原作知識を駆使し上手い立ち回りをするかもしれない。原作を崩さずに。
原作通りに進みたい奴は未来を知っている自分に酔ってんの？それとも、原作通りの方が関わる際便利だから？転生者関係なしに世界の修正力とか厨二チックな言い訳はうんざりです。
『運命』は信じないけど『奇跡』を信じ願うのは科学者らしくない。けど、神様がいるんなら『奇跡』はあると信じている。
だから神様。

「僕がガストレアウィルス消す方法見つけるまで大人しくしてくれないかな……日本」

ローマ連邦でバラニウムは一つもとれない。
日本のバラニウム生産率は五エリア合わせると５０％以上と――――何で日本こんなにバラニウムとれるん？っと、日本を中心に設定した原作設定に文句を唱えたい。
『木原』さんがどれだけ頑張ってもバラニウムは日本から輸入するしかない。バラニウムがないとローマ連邦終わる（笑）
エリア崩壊とかそんな非常事態が無い限り僕自ら赴く事は多分ないでしょ、たぶん。
日本の五エリアの監視を増やす必要があるな。
グリューネワルト翁もドイツを離れ、日本に滞在中。何処に住んでいるのやら。

「ドクタ～レミちゃんの解析終わっちゃいました～」
「お、どだった？」
「どうやらレミちゃん他の子と違って成長速度がめっさ早いですね～。レミの『子』と名称されている理由もレミ（オリジナル）の『子』だからです。ＤＮＡも満場一致で僅かばかりプロモーターのも混ざってますね～」
「七歳前に初潮迎えて子作りしちゃったの？しかも千単位の赤ん坊生

みのにどんだけかかるか」
「レミングは野生の状態では、春から秋にかけて3回繁殖しますが、条件さえ良ければ、冬期にもう1回繁殖するみたいですね～。一方、飼育下であれば、年中無休で際限なく繁殖を続けますから……たとえば、あるペアは167日間で8回、繁殖したそうです。ちなみに、妊娠期間は16日間～23日間で、1回の出産では、1匹～13匹の子が生まれます。一部の♀は、生まれてからわずか14日で、繁殖可能になるそうです。もしかしたらあのプロモーター『子』とも子作りワッショイしちゃったんじゃないですか～？」
「……寒気が、ガストレア大戦前と比べてペドフィリア絶対増えたよ、十三歳以下に手を出すとは……せめて結婚可能年齢の十六歳までまてよ。そう考えるとジョセフ君もペドなのかな？」
「ジョ～君はペドというより強い女の子に魅かれるたちですから、年齢はあまり関係ないかも。本能で嫁にする『ニュートン』にロリやら熟女の一般的括りは意味ないですね～」
「そうか、安心した。僕はロリコンを否定するつもりはないけど『木原』的にはジョセフ君とレルネにはさっさ子供作って欲しいんだ。いつからジョーと呼ぶようになってのかな沙希ちゃん？」
「本人から気軽にジョーとお呼び下さいって言われたんです～」
「彼女性の手回し迅速だな。でも沙希ちゃん僕一筋だもんね」
「はい～ドクタ～大好きです！」
「……ん、ま、わかってたよ。解析が終わったんなら次は解剖だね。世界初の呪われた子供たちと人の間に生まれた『人間』だ。アァ……もう駄目だ、心が躍る!?」
「テンションアゲアゲですねドクタ～、準備も整って万全です。あ、コレ忘れてました～」
「相も変わらず抜けてるね沙希ちゃん。それど……れ……」

狙ってやってんのかな沙希ちゃん。最初に見せる重要な情報じゃん。

「つまりあれか？レミはたくさん産むが成長速度は他の呪われた子供たちと一緒だと。初潮だけはクソ早いみたいだが……急激に成長させた……この数値は人の手が……五賢人の誰かが背後にいるな」

どいつか知らないが見所あるな。発想は僕好みの外道のクソ野郎だ。

面白そうだし放置しよ。

「グリューネワルト翁に恩を買う方法を思いついた」

「恩を売るの間違いでは～？」

「ふふふ、見解の相違だよ沙希ちゃん。グリューネワルト翁から僕に恩を売るなんて滅多にないのだよ！エヴァみたいに露骨に恩を売ったら嫌われちゃうだろ？なら、此方から〝お願い〟すればいいんだ。意味？意味だって？意味なら有る！科学者として創ったものは最後まで面倒を見る。レルネは完成している。数多の犠牲の上に調和された新人類だ。エヴァも超越する存在だが……強さとは人それぞれだ。レルネの強さの根源が『人間』としていられる相手の隣なら、エヴァは逆だ。隣に居るのが当たり前になるとあの子は甘えて弱くなる。〝孤独〟があの子を強くする。心を許す者が必ずしも傍にいるとは限らないんだ。理由は何だっていい、エヴァは頑張り屋さんだから努力する。停滞は許されないんだよ」

「それがどうグリューネワルト翁に恩を買う事に繋がるんですか～」

「世話役の子を借りる。恩を買い、エヴァを孤独にして一石二鳥じゃん」

「考え妄想するだけならマシですけど、ドクタ～は実行して成功しちゃう馬鹿野郎ですね～」

「有難う最高の褒め言葉だ」

民警にした方がいろいろ良さそうだ。

今は肉体と技術に集中させて二年後に民警にして東京エリアで活動。よさげだな。

見えない目をグリューネワルト翁に治してもらい忠誠を誓ったらしいな。グリューネワルト翁の命令なら僕の指示に従ってくれるでしょ。

「エヴァが懐いてる彼だから意味があるんだ」

巳継悠河はグリューネワルト教授に返しても返しきれない恩義がある。

母体が妊娠時にかかった病気のせいで、生まれたときから両目とも見えなかった。

別に物心ついたときから見えないのが普通だったから特別自分の境遇を哀れんだことはなかった。子供は残酷だ。普通の小学校でさえ弱者をつくり虐められる。目が見えないなら尚更だ。目が見えないのをいいことに散々馬鹿にされた。

悔しい思いをたくさんした。

見返してやりたいと思った。

目が見えないのは紛れもない事実。

僕は何も言い返せず日々に希望など無く生きていた。

そんな折、彼の元に神様が舞い降りた。

生来盲目だった彼を救ってくれたのが、グリューネワルト教授その人だ。密かに開発が始まっていた第二世代型機械化兵士計画――――――『新世界創造計画』に参加したことで機械の目を獲得した彼の世界は逆転した。

その目を通して『光』と『世界の美しさ』に――――――泣いた。

春の美しさに泣いた。

夏の目に射る太陽に泣いた。

秋の美しさに泣いた。

冬の白さに泣いた。
もう、何もいらない。
『世界の素晴らしさ』を与えてくれたグリューネワルト教授へすべてを捧げようと思った。
恩義から強さを求めた。無我夢中に強くなった。
『五翔会』に加わり、四枚羽の地位に着いた。グリューネワルト教授に奉公することが自分の存在意義であると豪語する。
初任務は世話役。
教授と同じ五賢人の一人から渡された一人の少女の身の回りの世話だった。
何故子供の世話なんかする必要がある。
強さが発揮されない苛立ちもあった。
時が経ち、如何すれば教授の役に立てるか考えていると、今まで一言も喋らなかった少女が話し掛けてきた。

「……めん」

”麺”なんで麺？ふざけてるのか。
少女の言葉は其処で終わりではなかった。

「……ごめん、なさい」

少女が何故謝るのか理由は分からない。
そう言えば少女を一度も見てなかった。
教授の事で頭がいっぱいで少女をしっかりと見てなかった。
見ていない、見えていない。
無力に外敵の的になり、自分が悪くないのに謝る。
昔の僕と一緒じゃないか。
少女をしっかりと見る。
与えられた目で一遍も逃さないの誓った。
それからは結構有意義な日々。

今まで気付かなかったが世話役の僕を差し置いて少女は不慣れながら掃除洗濯を……ばれてないつもりなのか、とてもたどたどしい。
身に着けた家政婦スキルで陰ながらフォローする。
少女は昔の僕だ。
周りに迷惑を掛けないよう怯えているか弱い少女だ。
呪われた子供たちは化け物と教わった僕は、変な先入観があったのは認める。
目が見えなかった頃の僕は、耳に入ってくる情報がすべてだ。
目の前の少女は化け物か？
ガストレアと一緒か？
否、少女は僕と一緒だ。
世界に希望が持てなかったあの頃の僕だ。
この子を救えないなら、僕はあいつ等と一緒だ。
弱者を貶めて優越感に浸る愚図と一緒だ。
少しづつでいい。
少女の心の支えになればいい。
こんな世界にも『光』はあるんだと。

どのくらい月日が経っただろう。
打ち解けた……と思っていいんだろうか。
最初のころと比べるとフランクで感情豊かになった。
僕としては嬉しい。
『光』を少しづつ手に入れている証拠だからだ。
話や資料でしか知らないが、妹がいたならこんな感じなのかな。
教授への忠誠心は揺るぎない。
けど、教授から命令されない限り少女を見捨てる気はない。
教授に奉公し、少女に『光』を。

教授の命令で東京エリアに行くことになった。
暫らく会えなくなるが、メールや電話で何時でも意思疎通は出来る。

うるさい、構うなと言うが、ああ見えて結構寂しがりやだからこまめに連絡しないと拗ねる。
呪われた子供たちはエヴァ以外ちゃんと接したことないけど大丈夫かな。
『五翔会』に属する僕が民警になるなんて考えもしなかったけどいい経験になる。
教授のお気に入りとして任務を確実に成し遂げて見せる。
民警として実力で序列を勝ち取れとのお達しだ。
千番台からスタートだけどガストレアを殺せば序列は上がるのか？
”民警として東京エリアを監視しつつペアで序列を上げろ”個人で交流し人脈づくりしろ”
東京エリアでの上司だから命令を聞けと教授に言われたが、変な命令をするもんだ。
電話越しで名前しか知らないが、命令なら実行する。
「『木原』か……」
顔もわからない相手だが、さして気にするまでもない。
顔の見えない付き合いなど慣れている。

第十九次観測

薄らかび臭い湿気の充満したボロ部屋が鼻孔を刺激する。
冷房設備の故障か、夏特有の熱気と湿度が部屋の住人を苦しめる。
全開の窓から風が入ってくるが、生暖かいせいか意味をなさない。
頬に汗が伝う。腕を枕に眠るには不適切な環境。
僕の頭上で壁に寄りかかりながら力なく胸元を仰ぐ弱り切った姿から想像できないが、彼女は僕のイニシエーターだ。
民警になって半年以上たったが、序列がどれだけ高くても暇な時は暇なのだと分かった。
千倍台から一向に上がらないＩＰ序列は悩みのタネだが、季節が夏になるとこの環境を用意した上司が悩みのタネとなった。
金も困らない程度貯金してあるし、任務中であるので毎月給料は支払われる。
高級住まいに引っ越すのになんら問題はない。むしろ今すぐ引っ越したい。
上司に引っ越しの有無を申請した所、何とも分かりやすく二文字でファックスで送られてきた。
――――却下。
叩き壊さなかった僕を褒めて欲しいですね。
引っ越しが無理ならそれ相応の理由があるはず、秘匿回線で尋ねたはいいが……

《何不自由ない生活してきただろ。あんな防音性抜群の空調設備が整えられた所より、一般市民の貧乏人の生活の方が色々情報が入る。別に嫌がらせや面白いと思ってそんな貧相な場所に住まわせてる訳じゃないからね。これも、任務をより完璧に実行し完遂する僕の好意だと思ってくれたまえ》

僕の個人情報を知らない筈がないのにこの皮肉、一言二言余計だけどこの様な環境だから入ってくる情報もある。これ以上何を言って

も正論で返されそうなので素直に納得し回線を切る。舌打ちは忘れないが。

そんなこんなで、四枚羽の自分がこんな腐った部屋で暮らしている。

生暖かい風が身体を撫で回すが、３９．５度の気温から発生する風はサウナと何ら変わりない。

これなら、空調の利いた快適な空間に移動する方が有意義だ。

雲一つない快晴な大空が悠河の精神を削る。

冷房は修理どころか、最新の新品に変える予定だが、運がない事に僕と同じ考えの輩が同時刻にいたのか、予約待ちで一週間待たなければならない。

〝ぐぅ～〟……もう昼時、調理するには時間がかかり遅くなってしまう。手抜きはしたくない。

「昼食にしますか、出かけるからさっさとしたくしろ」

壁に寄りかかっていた少女は目だけ僕に合わせるとやる気のない返事でだらだら立ち上がる。蹴り倒すぞ。

「汗拭け、着替えろ。汗浸み込んで下着見えてるよ」

大きめのバスタオルを投げ渡す。

頭から被り視界が悪くなったせいか、バランスを崩し壁に後部をぶつけうずくまる。

コイツ置いてっていいか？いいよな、その方がいい。

彼女の容姿は少し変わっている。

黒髪が目元まで伸び切ったストレートはくせ毛でちょくちょく髪が刎ね、どんより濁った瞳は光さえ反射せず闇に飲み込む。

地味に気に入っているのか夏はワンピースを好んで着ている。顔に似合わず白しか着ない。

「……九十九番目は落ちこぼれ、ふひひ、駄目な子」

一人で勝手に落ち込むのが悪い癖だ。こればかり如何にかならないかな。

「ももか、一分だけ待ちます。それ以上は置いてく」

神無城沙希博士が育てたと聞かされている〝九十九ももか〟のプロフィールは詳しく知らされていない。

ももかの口癖は『九十九番目は落ちこぼれ』、この事から彼女はローマ連邦で九十九番目に育成された呪われた子供たちなのか、格付けで付けられた数字なのか、候補はいくつかあるが、この様子から後者の予感がする。

「……お腹が、このままでいいよね」

「着替えろ」

エヴァとは真逆な性格でそりが合わない事が多々あるが、任務はそつなくこなすのでペアとしては問題はない。私生活にも任務中の俊敏性が備わって欲しいが。

教授の元では考えられないが、友好的な交流関係を維持している。民警として、ＩＰ序列を上げる為人間関係は欠かせない。

上司の命令がなければ今すぐ民警辞めてやる。

『五翔会』の情報網があれば民警に属する必要がないんだけど。

外食をすまし、図書館で暇つぶしをしていると携帯がバイブレーション機能を作動する。

メールを受信したようだ。内容を確認すると仕事だ。

「仕事ですか、行くとしましょう……何をやっている？」

「干からびたカエルの物まね」

人目を気にせず蹴り飛ばした僕は悪くない。
仕事と言っても野良ガストレア討伐の簡単なお仕事。正直ＩＰ序列が上がりそうな仕事以外ボイコットしたいんだが――――――『木原』!!教授直々の指名の上司の命令じゃなきゃ猛抗議してる。
移動手段として購入したＶ―ＭＡＸに跨り、ももかにヘルメットを被せ後ろに座らせる。

「レベルⅡが侵入したようです。僕が斃すから手出し無用で」
「やりぃ♪」

エンジンを噴かせ零から百にメーターが振り切る。風を置き去りにする錯覚を覚えるが、切り替わる景色が好きな悠河は好んでバイクを使う。
目的地は外周区。人類のエリアでありながら忘れられた土地。
住宅地に侵入する前に気付けたのは、巡回していた外周区の警備が目撃したからだ。
一帯の民警に同時刻配信メールで依頼された討伐。足を運んだのに先を越されたは無駄骨である。
外周区の整備のされていない道路は反動で身体が浮かび上がる。
もう間もなく目的地だが――――――銃声が響いた。

「遅かったか……漁夫の利を狙うとしますか」

間に合わない方が確立として高そうだけど行くだけ行ってみるか、此処まで来て何もしないのは癪だ。
銃声の鳴り響いた方角に舵を取ると、運がいい事に激しい破壊音から此方に近づいてくる。

「このまま突っ込む、ハンドルは任せた」

ももかは悠河の前に乗り出す。

プロモーターはライセンス獲得時に戦車と戦闘機以外なんでも運転できる技能が最低条件で必要だ。一般的なイニシエーターは侵食抑制剤が配給されるメリットしかないが、ももかは唯のイニシエーターではない。ローマ連邦で身に着けた技能で戦闘機以外は乗りこなせるももかは二輪車の運転など片手間に出来てしまう。

悠河の装備はシューズの靴底に仕込まれたバラニウムと超バラニウムで編み込まれたグローブ。飛び道具にはＡＭＰテクニカル・サービス社製、ＤＡＲ、Ｎｏ．１スナイパーライフルがあるが今回使用する予定はない。

ガストレアを視認。巨大なヒグマと昆虫特有の触角が生えた何とも例えがたい立派なレベルⅡが涎を垂らしながら突進してくる。

「心臓を一撃で破壊する。口に飛び込むのは無しだ。タイミングを合わせろ」

速度メーターは右端をカンストしエンジンが悲鳴を上げる。

酸素を肺に満たし、二酸化炭素を吐き出すと――――義眼の力を解放させた。

悠河の両目に幾何学的な模様が現れ、黒目内部に仕込まれたＣＰＵが起動し、黒目内部が回転。

「義眼サポート」

「ふひひ、不要」

「よし」

ガストレアレベルⅡの噛み付きを見事なバイク捌きで躱し、ももかはハンドルを身体全体で捻り、急カーブと急ブレーキを同時に行い、心臓部を一瞬通過する。

――――それで十分。

掌打は正確に心臓部に命中し破壊する。

ガストレアはそのまま瓦礫に衝突し停止。

役目を終えた両目は正常な状態に戻す。
後は、報告し報酬を貰うだけのはずが……少しめんどくさい事に。

「童の獲物が!?横取りされてしまったぞ連太郎ッ」
「しくった、木更さんに何て報告すれば……て、悠河じゃねーか」

よりにもよってこのペアに鉢合わすとは、東京エリアのボロ臭いアパートを拠点に生活している僕の隣の部屋の住人。

「里見くん、奇遇ですね。ガストレアが手傷を負っていて助かりました。難無く倒せましたよ」
「仕留め切れなかった俺に対する皮肉かこの野郎、千番台様と一緒にすんな」
「天童式戦闘術免許皆伝があるじゃないですか、イニシエーターもレベルⅡ程度簡単に倒せる実力ですよ。ねぇ藍原さん」
「まったくだぞ」
「初段なしょ・だ・ん!そんな大層な肩書取った覚えないぞ」
「すみません先輩」
「よしてくれ、民警歴あんま変わんないだろ」

先輩ですよ。機械化兵士一世代の次に生み出されたのが二世代型の僕たちなんですから。
スペックは僕が勝っているが、貫通力は一世代型の里見連太郎に劣る。
何故機械化兵士の力を使わない?
ゾディアックを除くレベルⅣまでなら屠れる攻撃力を有しているのに。

「同い年ですもんね。……六時、早いですが夕食にしません?材料買い込んでしまったんで賞味期限がヤバいモノがいくつかありまして、勿論天童さんもご一緒に」

「まじか、よし、木更さんも機嫌を直してくれるぜ。手ぶらで帰ったら……裏山に無残に打ち捨てられるとこまで想像した」
「上下関係がとても分かりやすいね」
「連太郎は童と木更の尻に敷かれているからな！」
「……勘弁してくれ」
「ははは、それじゃ先に帰って準備してるよ。七時半に来てくれればいいよ」
「悪いな。一度事務所に戻ってからそっち向かうわ」
「それでは」
「またな悠河！ももか！」
「えーちゃんも元気で、所詮わたしはえーちゃんと違って落ちこぼれ、駄目な子」
「そ、そんなことはないのだぞももか。ももかは凄い子だ！」
「ほんとに？」
「ああ！ももかは童の知らないことは何でも知っている。博士みたいだ」
「ふひひ、博士だって」
「はいはいそうだねよかったね」

適当に返事をすると、アクセルを回し発進させる。
帰ったら味付けを仕込まないと。
戦闘には関係ない無駄に洗練された無駄のない無駄な動き家政婦スキルは、ボロアパートのペア暮らしに不本意ながら役立っていた。

はふはふ
ズズっ
はむ
ふー……

悠河の調理スキルはお店レベル、胃袋を完璧に持ってかれた。
美味いのはいいんだ。
ただ飯に文句は言えんし有り難い。
しかし、しかしだ。

「この肉団子絶品、鍋ってこんなにも美味しくなるのね」
「ただ具材を鍋にいれれば美味しくなるわけじゃないんです。シンプルであればあるほど作り手の技量が試されるんです。決め手はこの出汁、コクがあってスープみたいに飲める」
「ん、こくこく……ほんと出汁が違うわ。……この敗北感はなにかしら」
「肉だけじゃなく野菜も食べないと大きくなれないのだぞももか」
「にく、びみ」
「それは童の狙っていた肉団子!?」
「ふひひ、この世は弱肉強食」
「童が丹精込めて育てた団子を……許さんぞぉ！」
「隙あり」
「あー！全部持ってかれたぞ！一口も食べてないのに」
「うまうま」
「むむむぅ～ッ連太郎ぉ」
「俺の分けてやるから大人しく食え」

この蒸し暑い真夏に鍋ってどうよ？
美味いけど。

第二十次観測

西暦２０３１年。
『木原』として人類がガストレアに敗北して十年。
記念すべき原作開始の火蓋が切って落とされた。
此処から始まる。
ガストレアウィルスの開発から呪われた子供たちを生み出したのは物語の『序章』に過ぎない。
『本論』は此処から始まる。
何時終わりが来るのか分からない『終章』に向かって原作が動き出す。

「戦力と根回しは粗方終わった。不測の事態は避けられないが……負けは許されない」

金牛宮（タウルス）――――――――素体（もと）となった子は寂しがり屋で臆病な性格だった。自分の意見を言わず流れに任して皆の輪に加わり安心感を覚える子。
一人じゃ何もできない十一体の子供たちの中で落ちこぼれだった彼女がゾディアック最強とは……
ゾディアックには個性がある。
素体（もと）となった少女の根源を欲求として行動している。
食事も睡眠も種の存続も必要としないゾディアックはただ『人間』だった頃の少女の想いと渇望に突き動かされている。
人類の敵として生まれてしまった化け物は目的もなく、ガストレアウィルスを撒き散らしながらこの世に誕生した。
要らないだけで食事も睡眠もできる。滅ぼさない限り死ぬことがないから種の存続の本能がない。
これといって何もやることがないのだ。
この世界に敵などいないのだから。
だが彼女たちは気付いていない。

もう二体斃され、人類は化け物を殺す刃を研いでいることに。

「レルネは人類の希望（エルピス）だが、在り方は災厄の壺（パンドラの箱）なんだ。ゾディアックを撲滅する可能性を秘めながら人類を滅ぼす可能性を秘めている。希望と災厄をその小さな肉体に宿してるんだ。他の子と違いレルネのフルネームには深い訳がある。レルネ＝C＝K＝ヴァンスガズの名の『木原（K）』と『ヴァンズ』は僕の姓だって簡単にわかるでしょ？なら『レルネ』と『C』は捻ってるのかって言われるとそうでもない。レルネ……この場合『レルネ―』か、ギリシャ神話に登場する怪物で巨体に9つ頭を持つヒュドラって怪物がいるだろ……結構関係あるからちゃんとききんしゃい。ヒュドラは『レルネー』の沼地に生息している。その沼にはもう一匹住みついている怪物がいたんだ、それが巨大蟹（カルキノス）。

黄道十二星座最後の欠番『巨大蟹（キャンサー）』……『キャンサー（C）』は我ながら単純だと思ったんだが、あの子はゾディアックを屠る強さを兼ね備えた勇者だが同時に最後のゾディアックに成れる『人間』なんだ。人類を滅ぼす最強災厄の魔王の資格を生まれながら獲得してるんだ。『人間』をジョセフ君や身内でしか知らないレルネが、人類の敵になる時はジョセフ君と僕が何らかの手段で『人間』に殺害されたときだけだろうね。そうなる可能性は零に近いけどそうなったらレルネはその身を災厄に任せ存分に死をばら撒くだろうね」

あの子は僕の『愛の棺桶』でレルネ専用の侵食抑制剤を一時間接種しないと『人間』として生きられない身体だ。そこだけが不憫かな。

『愛の棺桶』は生産と維持費に莫大な予算が必要であり、量産不可能なワンオフ機となっている。

そのせいで下手にローマ連邦を出れないんだ。

飛行機の移動中壊れたり、海外で破損したら目も当てられない。

レルネが他の地でゾディアックを退治しにいかないのはこれが理由である。

色々試行錯誤して開発はしてるんだが……これがまた難しい。

「レルネの由来はもうちょい語りたいけど、次はエヴァにしよう。レルネは特別だから僕直々に名前を与えたけどエヴァは沙希ちゃんが命名した。名前の意味は特になく、「かわいいから」だそうだ。いい加減だなぁおい。

僕は娘たちを二つに分けている。『お気に入り』か『ただの娘』かの二通りだ。勿論一番はレルネで確定だが、二番はエヴァだ。態々手回ししてまで甲斐甲斐しく過保護に面倒を見ているのはこの二人だけだしね。レルネと違ってエヴァのベースは一つだ。だから敬意を払う。レルネの様な存在が天然で生まれない限り、一つのベース……天然のモデルに敵は無い。だから僕は空席となった金牛宮（タウルス）の『タウルス（T）』をエヴァに授けた。僕なりの愛情表現さ」

語りかけている相手は声には出さないが笑っている。

喜んでくれて何よりだ。

「一人で抱えるには重いからね……こんな話が出来るのは君くらいだ。沙希ちゃんには失望されたくないし」

こんな娘自慢（？）『木原』らしくないからね。

他の人には聞かせられない。

「僕の実験でまた沢山死ぬんだろうなぁ」

気が滅入っちゃう。

あれ、励ましてくれるの？癒やされるわー心がシェアされるぜ！

「仕事の時間か……また来るよ、それじゃ」

スイッチを押し、それ以上負担にならないよう眠らせる。

床下に収納されるのを見届けるとその場を立ち去る。

相手が生命維持装置のビーカー内でしか生きられない脳と脊髄だけの存在でも、彼にとってありのままの自分を曝け出す唯一の相手。

「元気でね……ママ」

電源を切らない限り死ぬことがない環境を強要させていることに彼は気付かない。

『木原』同様『彼』自身も狂っていることに。

東京エリアに滞在し一年。

慣れない環境のせいか、時間の流れが遅く長い一年となった。

任務とはいえ、この生活を結構気に入っている自分がいる。

何だかんだ、ももかとは問題なく一つ屋根の下で一年暮らした。

ももかはよく藍原延珠と遊びに行く時、「えーちゃんと遊ぶね……一緒に来る？ロリコｎ」頭を蹴飛ばし何度窓から突き落としたか。

天童木更には料理を何度もレクチャーして教えたこともある。最初は酷かった、まさか卵焼きを天井に叩きつける場面をリアルに見られるとは。

普段は、ガストレア退治と自主トレと情報収集を日課に一日を平凡に任務に没頭している。

一月一日はガストレアの侵入も目撃情報もなく、今年の年明けは平和な始まりを迎えた。

「ごめんねぇ巳継ちゃん。ウチが手料理食べたいって我儘言うたばっかりに」

「料理するの好きだし鬱憤なんてないよ。日頃の自主トレと同じでやって当然の部類だし寧ろ節約に料理を覚えるのは有効なんです。

ね、連太郎くん」

去年の十月半ばに里見くんの呼び名を連太郎に変えて欲しいとお願いされてしまったのだ。僕は基本人を『くん』か『さん』付けで呼ぶようにしている。（ただしももか、テメーは駄目だ）半年以上交流して同じ時期に民警になり同い年の男子。周りが女子だけで、同期の女子に『里見くん』と呼ばれる。薄々察していたけど、タメで下の名前を呼んでほしかったんだ。『くん』付けは辞めないけどね。

「……善処する」

「その台詞何度目だろ？」

「ああ悪かったな！料理入門者レベルで悪かったな！上位所か神クラスのお前には一生かけても敵わねーよ」

「それどころか料理なんかした事ない初心者レベルの腕前だもんね？」

「悪かった木更さん」

「連太郎の作るモヤシ料理は絶品だ。童が保証する！」

「アレを料理と言い切る延珠ちゃん偉いわ、どこかのお馬鹿とちがって」

「調理スキルを求めんな」

「何か手伝うことはないのか？」

藍原さんが顔をのぞかせ自己主張してくるが、もうあと五分ほどで完成する。

「もう五分でそっちに持っていくからその時手伝ってもらえる？」

「任せろ！」

全てお手製の手打ちの年越しそばを六人分作るのは結構大変だ。大分待たせてしまった。

人数分の器に均等に仕分けする。

「よし……それじゃ藍原さんこの二つを彼女たちにお願いします」
「うむ、任された」
「ももかはこれね」
「えーやるなんて一言も言ってないよ」
「ヤレ」
「この態度の違いだよ」

文句を垂れつつ蕎麦を運ぶももか。
僕も残りの二つを持ち食卓に並べる。

「さ、温かいうちにどうぞ」
「「「「いただきます」」」」

待ってましたとばかりに蕎麦に喰らいつく一同。
汁を吸い、麺をすすった。

「う、うまい!?何だコレ……まるで麺が生きてるみたいだ」
「こんなに美味しい蕎麦が此の世に合るとわ！」
「家で食べた蕎麦に匹敵する……出汁が違うわ！天童の蕎麦は代々受け継がれた伝統の味。これには〝和〟と〝洋〟を感じる！」
「こりゃビックリやわぁ。ウチの板前と互角……〝洋〟を取り入れたアイデアから今までと違う味わいを引き出しとる」
「いつも通りだね」
「……いつも食してるから舌が肥えたか」

一同絶賛の仲、ももかだけ通常運搬。

「巳継ちゃん司馬家の板前に鞍替えせえへん？勿論ももかちゃんと二人でや」
「民警なんか辞めて一人で転職したいけど遠慮しとくよ」

「なんや残念やわ。天下の八百台様が板前件護衛をしてくれればどんだけ心強いかぁ」
「弾薬類の無料提供感謝してる。それはそれ、これはこれだ。このぼろアパートで民警として生活してくよ……不本意だけど」
最後は誰にも聞き取れない音量で口の中で反響した。
「あーん、ふられてもうた乙女心癒してぇなぁ里見ちゃん」
「なにどさくさに紛れて里見くんに抱き着こうとしてるのよ！嫌がってるでしょ離れなさい！」
「え～ウチとしては嫌がる里見ちゃんに無理強いしたくないけど、こんな美少女に迫られて困る男性はいいひんと思うよ」
「さ、里見くんは私のなの！社長の手足なのよ。他の女になびくなんてありえないんだから！……このお馬鹿、少しは抵抗しなさい！」
「……勘弁してくれ」
同情します。いえ、マジで。
何事もなかった。スルースキルを発揮する。これも組織で生きる上で欠かせないスキルだ。
僕とももかは無言で蕎麦を啜り同時に食べ終わり食器を片付ける。
避難するんだ。
今にも殺し合いを始めそうな二人に藍原さんと連太郎くんがテーブルの端を掴み戦闘に巻き込まれないよう端に避難する。
僕たちも慣れたもんさ。
先輩に無言で頭を軽く下げ帰りの意を告げる。
連太郎くんも慣れたもんで、諦めの表情で”助けてくれ”と目で訴えかける。
僕はとてもいい笑顔で自室に避難した。
これまでの経緯で、二人は壁までは破壊しないと分かっているからだ。

同時刻に一人の少女と一人の幼子が東京エリアの空港に降り立った。

飛行機の座席から眺める東京エリアは闇に包まれた結晶。

どの都市にも言える事だが、かつての世界を知る者として世界（エリア）は儚い崩れゆく幻想郷にみえる。

いつか風に吹かれ消えゆく風前の灯火。

ガストレアに人類は負けるんだ。

地球の支配者が『人間』からガストレアに移り変わるだけ。

自然の理は『人間』の努力など踏み滲む。

何より彼女に希望など無い。

ガストレアに恨みなど無い。

ガストレアに捕食された両親は不思議と悲しくなかった。

彼女には希望の星がいたのだ。

それももう過去の御話。

『光』を失った世界は、生きるには暗過ぎる。

他人に憎まれようが悪意の泥沼に沈もうが、この『闇』をぶつけなきゃ我慢ならない。

ワタシは――――――『鬼』。

「三年……三年もかかった。――――――を殺す」

東京エリアの都市部に歩みを向ける。

ライトの光に照らされた『鬼』は、場違いに闇に溶けていた。

原作開始

第二十一次観測

地獄の使者が徘徊する世界に安寧はない。
仮初めの平和も長くは続かない。
壁を建てても何の解決にもならない。
この時代に大切なのは、どんな犠牲を払っても人を救う統治者と頭脳と武力を持つ者。
僕は五翔会が――――――教授こそが人類を先導する選ばれた人間だと確信している。
教授の命令は何をおいても正当化される。
教授の命令を厳守する。
たとえムカつく上司の下で働く事になってもそれが教授の命令なら粉骨砕身で勤しむ。
一年前に連絡して以降、定時報告の書類上でしか会話をしていない僕は緊急の連絡を専用回線で報告していた。

《……遺産が盗られただと》
「はい。より詳しい情報を随時更新し収集してますが、東京エリアの上層部は相当慌てているようです。秘密裏に動いていた遺産を輸送する部隊がガストレアに襲われ、奪われた遺産の行方を捜索してるようです。そろそろ依頼として政府直々に防衛省に招集が掛かるはずです。会社に属してないフリーですけど八百番台なんで」
《それで済むならいいけど……不安要素があればすぐにでも連絡してくれ》
「『木原』さんは遺産が何を指しているのか察しているようですが、それが分かれば調査の方もより進行します。開示していただければ……」
《なに、唯の玩具だよ》
「玩具ですか？」

なにかの隠語?少なくとも教える気はないようだ。
複数機常備してある携帯のうち一つが震える。
アレは民警ように用意した携帯だ。

「すみません。どうやら民警としての僕に依頼が来たようです」
《早いな、聖天子……菊之丞が動いたか。今回の仕事は直々にあいつ等が依頼するぞ》
「自らですか?」

東京エリアのトップが直々に民警に依頼など前代未聞だ。仲介人を挟んでたまに――――するか?そんな記憶は一つも無かった。
そんな前代未聞なエリア統治者が直接依頼を申し出る未来を上司は予見している。
遺産はそれほどのモノなのだ。
事前に教えてくれれば仕事が楽になるんだけどなぁ。
この上司は部下に楽をさせる気がさらさらない。

《僕が直接出向く必要性が浮上するかもだから荷物をまとめとくよ。些細な危険も異常も見逃さないようにね》
「異常だらけですよ、この世界は」
《中々旨い事言うね君。それじゃ、民警として頑張ってね。利用できるものは何でも利用して東京エリアの壊滅だけは防いでね》
「え、ちょ、如何ゆう意味」

通話はそこで途切れた。
『木原』が切ったのだ。
最後の命令はなんだ?
とても聞き捨てならないフレーズが鼓膜を通じて聞こえた。

「……やればいいんでしょやれば。ももか、G装備からH装備に変更」

色々諦めた声音でももかに命令を下す。今回は本気だ。

「いいの？見られちゃうよ？」

「今回は緊急だ。対人装備（H）は……極力人目の無い所で使え。使用する際も相手を確実に殺せ」

「りょーかいだよん」

ヤな予感がする。

この呼び出しで、確実に事態が動く。

V—MAXに跨り、ももかは振り落とされないよう僕の腰に抱き着く。

渋滞が無い分、残り数十分で防衛省に到着予定だ。

集合時間の三十分前に到着、順当だな。

なんの障害もなく目的地に到着するとフロントに足を向ける。

「すみません。よろしいでしょうか」

「はい、ご用件はなんでしょうか？」

素早く説明する為民警許可証を見せる。

向こうの呼び出しだ。これだけで察しはつくだろう。

民警許可書が解らない人に説明するなら警察手帳の様な役割と理解すればいい。

少々お待ちくださいと一分ほど待たされた後、案内役の職員に誘導される。

東京エリアで数少ない三桁だけあって、案内役の人の緊張が伝わっ

てくる。
一般人にとっても千番台以下の民警は化け物扱いだ。
取って食うわけでもないのにそこまで怯えなくてもねぇ。

「此方になりますので、私はこれで」

丁寧に頭を下げ立ち去る職員。
扉ぐらい開けてけよ。
ネクタイを整えスーツの皺を伸ばす。
服装で舐められたら終わりだ。五翔会で発注した戦闘用のスーツは防弾繊維で編まれている。こんなすごいモノを開発するなんて教授はなんて素晴らしいんだ。（『木原』が暇つぶしに用意してくれました）
第一会議室と書かれた部屋を開けると、思わず声を上げてしまった。
そうか……こいつもいるのか。

「あぁ？……テメェ、やっときやがったか悠河ぁ!!俺様が呼ばれた時点でおめぇーも緊急招集されねぇはずないもんな。この依頼は横取り阻止だ。今度こそテメェに勝つ」
「毎度毎度その喧嘩腰どうにかなりません？付き合ってるこっちの身になってくれよ」

何処のギャングだよと問いたくなる筋肉マッチョが喧嘩を仕掛けてきた。
こう見えてＩＰ序列１２６４位の実力者。
千番台伊熊将監（いくましょうげん）は何故か僕を敵視する。
イニシエーターは千寿夏世（せんじゅかよ）。第一世代のモデル：ドルフィン
「こんの野郎、この場で死にたいらしいなガキ」
「ガキに負ける貴方はなんです？洟垂れ小僧とか？」
「死刑確定だ!!」

「将監さんダメです、抑えて下さい！ここでの争いごとは我々に不利益です」
「イニシエーターに子守をさせるとか、どっちがプロモーターかわかったもんじゃないね」
「……怒りってもんは一周すると冷静になるって本当なんだな。死にさらせぇ!!」
「全然冷静の〝れ〟の字も感じられませんよ!?一旦落ち着いて下さい。今回の依頼で目に物見せてあげましょ？」
「……チッ命拾いしたな。夏世（かよ）に感謝しな」

〝どっちが保護者か分かったもんじゃないな〟って言えばお互い無傷じゃすまなそうだ。
平和に事が済むのはいいことだ。
自ら引き金を引く必要はない。

「お、先に来てたか。よ、悠河」

連太郎くん、君の運の悪さには称賛を送るよ。

「君はつくづくタイミングが災厄だね」
「どういうことだ？」

将監さんが連太郎くんにダッシュ頭突きをお見舞いした。
同い年で無名の連太郎くんに憂さ晴らしに行ったか。
扉を突き破り向こうの廊下まで飛ばされた連太郎くんは僕の視界から消え去る。
ご愁傷様。そこまで面倒は見きれないから頑張ってね。
指定席に座ると将監さんの雇用主、三ヶ嶋ローヤルガーダー代表取締役三ヶ島影似（かげもち）が落ち着いたのを見計らって話し掛けてきた。

「うちの将監がいつもすまない。馬鹿は馬鹿でもそこまで馬鹿じゃな

いんだ。許してくれ」
「いつものことですから構いませんよ。それより……流血沙汰は三ヶ嶋さんも困るんじゃないんですか」
「あの馬鹿、すまないが失礼させてもらうよ」

これで連太郎くんの命の心配はないな。
将監さんは馬鹿だけど目上の人間には敬意を払う要領を弁えた馬鹿だ。
そろそろ指定の時間だ。
制服を着た幕僚クラスの自衛官が部屋に入ってきた。
僕を含む社長クラスが一斉に立ち上がりかけたところで、手を振って着席を促す。
クライアントには従うものさ。

「空席一か……本日集まってもらったのは他でもない、諸君ら民警に依頼がある。依頼は政府のものと思ってくれて構わない。本件の依頼内容を説明する前に、依頼を辞退する者はすみやかに席を立ち退席してもらいたい。依頼を聞いた場合、もう断れない事と先に言っておく。……よろしい、では退席はなしでよろしいか？」

そんな幼稚な脅し文句で今更ビビる神経はこの場にいない。
特大パネルの並べられた席の空席は一つ。
さて、今回の依頼は一悶着ありそうだ。

「説明はこの方に行ってもらう」

突如特大パネルに映し出された一人の少女に、僕を含めた社長クラスが勢いよく立ち上がった。
雪を被ったような純白な服装と銀髪――――――聖天子。

《ごきげんよう、みなさん。楽にして構いません。私から説明します》

この少女こそ敗戦後の日本、東京エリアの統治者。
当然ながら誰一人着席する者はいない。
座ったら将監さん以上の空気と世間体が読めない馬鹿だ。
おっと、大馬鹿から殺気が。

「といっても、依頼自体はとてもシンプルです。民警のみなさんに依頼するのは、昨日東京エリアに侵入して感染者を一人出した感染源ガストレアの排除です。もう一つはこのガストレアに取り込まれたと思われるケースを無傷で回収してください」

ケースの説明はない。
予想通りとはいえ、今回の報酬に対しガストレア一匹は高すぎる。
本命はケース。知られたくはない、知る必要もない。
軍人、自衛隊、民警にも当てはまる事だが、永く生き残るすべの一つに「何も喋るな、詮索するな」の暗黙の了解がある。
命令に対し疑問を懐くな、命令通り実行しろ。
命令を胸に止め、そこで見たものは詮索も喋ってはならない。
民警は軍人と違い自由奔放で、気分やでそこまで縛りは無い。
だが、東京エリアの民警なら統治者である聖天子の命令は絶対だ。
拒否権も拒否する気もない。
誰も自分から立場を危うくする愚か者はいない。
本音では、ケースの中身が気になるのは人のサガだ。
三ヶ嶋さんがすっと手を挙げる。

「質問よろしいでしょか。ケースはガストレアが飲み込んでいる、もしくは巻き込まれていると見ていいわけですか?」
《その通りです》

あの将監さんを首輪に繋ぐだけはある。
飲み込んだ、巻き込まれたではケースの場所が大きく異なる。

巻き込まれるとは、被害者がガストレア化した際、破れた衣装や表皮、身に着けている装飾品が変化したガストレアの皮膚部に癒着してしまう現象の事だ。こうなるとガストレアを倒してから取り出すより他なくなる。

「感染源ガストレアの形状と種類、今どこに潜伏しているのかについて、政府は何か情報を掴んでいるのでしょうか？」

《残念ながらそれについては不明です》

今度は木更さんが挙手する。

もうこれといった聞きたいことは無いはずだが何を聞くんだ。

「回収するケースの中には何が入っているのか聞いてもよろしいですか？」

あぁ聞いちゃうんだ。

ざわりと周囲の社長が色めき立つのがわかった。

知りたいけど、マジで聞いちゃう？絶対教えてくれないよ、とこの場の社長は考えているが――――――教えてくれる可能性も無きにしも非ず。

はからずも木更さんが全員の意見を代弁した形になったらしい。

《あなたは？》

「天童木更と申します」

聖天子は少し驚いた表情をした。

《……お噂は聞いております。それにしても、妙な質問をなさいますね天童社長。それは依頼人のプライバシーに当たるので当然お答えできません》

周囲の社長が「ですよね～」と、表情には出さないが肩を落とす。
想定した流れ通りなので、落胆は誰一人いないが。

「納得できません。感染源ガストレアが感染者と同じ遺伝子を持っているという常識に照らすなら感染源ガストレアもモデル：スパイダーでしょう。その程度の敵ならウチのプロモーター一人で倒せます」

……えっと、それ訊いちゃうの？
ここにいる全員それに気づいてるし、触れないし、訊かないスタイル通してるんだけど……。

「問題はなぜそんな簡単な依頼を破格な依頼料で……しかも民警のトップクラスに依頼するのか腑に落ちません。ならば値段に見合った危険がケースの中にあると邪推してしまうのは当然ではないでしょうか？」
《それは知る必要がないことでは？》
「そうかもしれません。しかし、あくまでそちらが手札を伏せたままならば、ウチはこの件から手を引かせていただきます」
《……ここで席を立つとペナルティがありますよ》
「覚悟の上です。そんな不確かな説明でウチの社員を危険にさらすわけにはまいりませんので」

この場の社長、五翔会でも滅多に居ないタイプの人間だ。
自分の出世より部下の命を重んじるタイプ。
社員に好かれるが、自分の立場を危うくし自滅して、出世できない。
社長も社員もそんなのだから貧乏から抜け出せないのか。
『天童』にしては、世渡り下手糞だね。

「ハハハハハハハハハハハ!!」

突如、部屋中に響き渡るほどのけたたましい笑い声が響き渡った。

《誰です》
「私だ」
お前だっ……上司に毒されてる。
先程まで空席だった――――――一々名前覚えていない社長の席に仮面、シルクハット、燕尾服の怪人が、卓に両足を投げ出して座っていた。
ソードテールの光学迷彩――――――最近資料で見た事あるな。
プロモーター蛭子影胤（ひるこかげたね）、イニシエーター蛭子小比奈（ひるここひな）、大量殺人を繰り返し再三の犯罪により、民警ライセンス停止・序列凍結中の元プロモーターであり、ライセンス停止前のＩＰ序列は１３４位。
僕と同じで教授との取引で機械化兵士になれたのにその在り方は僕と真逆。
僕は世界平和を。
影胤は混乱を。
両隣に座っていた社長は忽然と現れた影胤の存在に驚き席から悲鳴を上げ転げ落ちる。
「いよっと」と掛け声をあげて影胤は体を反らせて起き上がると、卓の上に土足で踏み上がる。そのまま卓の中央に来ると立ち止まり、聖天使に相対する。
《……名乗りなさい》
「これは失礼」
影胤はシルクハットを取って体を二つに折り畳んで礼をする。
「私は、蛭子影胤。お初にお目にかかるね、無能な国家元首殿。端的に言うと私は君たちの敵だ」
背筋に走る悪寒が、僕にＰ８拳銃を抜かせる――――――前に、将

監さんが斬りかかった。

「ごちゃごちゃごちゃうっせぇんだよ!!こっちとりゃ我慢して我慢して我慢してんのに余計な話をたらたらたらたら邪魔くせぇ!!敵!?敵なら俺のストレス解消惨殺マシーンとして機能しやがれ!!」

そんなに怒ってたか、影胤の登場に溜まりに溜まった堪忍袋の緒が切れちゃったか。

その点感謝。馬鹿相手に無駄な体力を消費せずにすんだようだ。

瞬時に懐に潜り込んで速度を維持したまま逆巻く突風をまとって巨剣が竜巻の如く振り回される。

角度、タイミング共に逃れられない必殺の間合い。

だが”バシィッ”という雷鳴音が弾け、次の瞬間将監の剣があさっての方向に弾け飛んだ。

「なに!?」

「マシーンはマシーンでも私はキリリングマシーンの方かな」

「下がれ将監!!」

三ヶ嶋の一喝を瞬時に意図を汲んだ将監は舌打ちと共に後退する。

集まっていたすべての社長、プロモーターの一斉発砲。

弾倉から弾が無くなるまで引き金を引きまくる。

３６０度あらゆる方向からの銃撃は、再び雷鳴と共に今度はよりハッキリと青白い燐光が見える。

ドーム状のバリア。

弾丸は全てあさっての方向にに弾かれ意味をなさない。

「斥力フィールドだ。私は『イマジナリー・ギミック』とよんでいる」

今の僕に、このフィールドを貫通するだけの火力が無い。

第一世代に後れを取るなんて！

「すごーい機械化兵士だぁ！」

空気読め大馬鹿！

「ほお、知ってるのかい？流石は高位民警だ。知らない人の為に説明するが、私はコレを発生させるために内臓の殆どを摘出してバラニウムの機械に詰め替えている」

「機械だと？」

「名乗ろう里見くん、そこの少年、私は元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊『新人類創造計画』蛭子影胤だ」

「……ガストレア戦争が生んだ対ガストレア用特殊部隊？実在するわけ……」

「信じる信じないも君も勝手だよ。まあなにかね里見くん？つまりあの時私はまったく本気じゃなかったんだよ。悪いね」

接触してたのか、その情報話してほしかったよ。あと連太郎くん、嘘はいけないな。

《……なにようですか？》

「おっと、これはご無礼を、今日は挨拶だよ。私もこのレースの賞品いただこうと思ってね」

《報酬に関して……》

「あぁ勘違いしないでくれ、私がいただくのは『七星の遺産』の方だ」

《ッ!!》

「『七星の遺産』？なんだよ、それ」

「おやおや、君たちは本当に何も知らずに依頼を受けさせられようとしていたんだね、可哀想に。君らが言うジェラルミンケースの中身だよ。そこでだ諸君ッ、ルールの確認をしようじゃないか！私と君達、どちらが先に感染源ガストレアを見つけて『七星の遺産』を手に入れられるかの勝負といこうか。『七星の遺産』はガストレアの体内に巻き込まれているだろうから、手に入れるには感染源ガストレアを殺せ

ばいい。掛け金は君たちの命でいかがかな？」

その発言に誰も何も言はない、言えない。

影胤は連太郎くんに赤いリボンがあしらわれた箱を渡すと僕に向かい。

「なぜだろうね、里見くん同様君に興味が湧いてきたよ。名前を聞いても？」

「……巳継悠河」

「そんな警戒しなくても殺しはしないよ。またね、巳継くん」

連太郎くんが力を発揮しないと今は勝てないからね。

さっさと帰って欲しい。

二人は悠然と窓を割り、ごくごく自然な動作で飛び降りた。

「ももかにしては空気を読んだ。よく襲わなかった」

「私基本ニートだからないない」

「なにしでかすか解らないんだよ」

連太郎くんは木更さんに問い詰められている。

あんな危険人物と接触したのに、過保護の社長に相談なくて拗ねてるね。

連太郎くんが言い淀んでいると、三ヶ嶋さんが怒りに任せ卓に拳を叩きつける。

この依頼の危険度を理解したらしい。

「天童閣下ッ！新人類創造計画はッ……あの男が言っていたことは本当なのですか？」

《答える必要はない》

菊之丞はこゆるぎもせず即答する。

重たい沈黙が下りかけたその時、半狂乱の男が会議室に飛び込んできた。

「大変だ！しゃ、しゃちょうがあああああああああ!!?自宅で殺されて、し、死体の首がどこにもない」

全員の視線が連太郎くんの手前に置かれた箱に向けられる。

箱の底から赤いシミが滲み出る。

中身を確認するまでもない、趣味にしては悪趣味だ。

連太郎くんが怒りに任せ叫んだ。

憎しみを感じる悲痛な叫びだ。

《静粛に！》

聖天子の澄んだ声に一同顔を上げ注目する。

《事態は尋常ならざる方向に向かっています。みなさん、私から新たにこの依頼の達成条件を付け加えさせていただきます。ケース奪取を企むあの男より先に、ケースを回収してください。でなければ大変な事が起こります》

木更さんが聖天子を睨み上げた。

「中に入っているものがどういうものなのか、説明していただけますね？」

聖天使は目をつぶり唇を小さく噛んだ。

《いいでしょう、ケースの中に入っているのは『七星の遺産』。邪悪な人間が悪用すればモノリスの結界を破壊し東京エリアに大絶滅を引き起こす封印指定物です》

知ってて言わなかったな『木原』さん。

命令である以上、僕は大絶滅を何としても阻止しなければならない。

次、会った時は機能を停止させる。

第二十二次観測

防衛省襲撃から二日、住まいのアパートに戻らず情報収集と上司の報告に勤しんでいた僕に一通の電話がかかる。五翔会の情報課からの連絡だった。

僕が一番聞きたかった言葉、「感染源ガストレアを発見した」がスピーカを透して僕に伝えられた。

五翔会の情報網で誰よりも早く感染源ガストレアを見つけた僕は上司に報告した。

感染源ガストレアを殲滅しケースを回収すれば今回の依頼と厄介ごとは解決する。

それが――――――

「追跡するなとはどういう事ですか!?大壊滅よぉ！アナタは”利用できるものは何でも利用して東京エリアの壊滅だけは防いでね”と僕に命令しました。言っていることが逆ですよ」

《……勝てんの?》

「勝てます」

《へーそーならやって貰おうかな?僕ちゃんが到着するまでの時間稼ぎとでも考えてたけど勝てるならそれに越したことはない。それと防衛省での報告書読んだけど、ももかは影胤を視えてるよ》

「僕の目でも一度姿を認識しないと無理な事をももかは最初っから視えていたと」

《イエス。ももかのベース忘れたの?ももかの目の前ならステルスは無意味だよ》

「……後で問い詰めるとしますが、ケース回収の命令に変更はないと?」

《何が何でも東京エリアを護れ、四羽の羽ばたきを思い知らせてやれ》

「御任せ下さい」

さてと。

「今の聞いてたよねももか？説明してもらおうかな」
「ビーダッシュッ!!」
「逃がすかッ」

逃げ出すももかの足を四の時固めで捕らえる。手加減はしない。

「いたたたたったたたたぁぁあああああああいい！折れる！折れるから！」
「安心しろ、一瞬ですむ」
「すまない！すまないから！すいません！謝りますから！正直に話すからといてぇ!?」

観念したももかの足を解放する。
足を抱え痛みからか涙を浮かべている。

「演技はいいから話せ」
「演技じゃないよぉ……視えてた」
「なんで教えなかったんだい？」
「勝てないから」
「……それを決めるのは」
「お前じゃない？実際勝てねーなってブルっちゃったでしょ？ぬぐッ!?……無言肘打ちは勘弁して、マジで痛い。私も公衆の面前で使いたくなかったもん。悠河もバリア破れないのに切り札使いたくないでしょ？」
「……義眼も、ももかの本気も人目に晒したくない。まだだめだ……が、今日は誰の目にも、目撃者も存在しない」
「見られたら殺しちゃえばいいわけだしね♪モノリスの外は危険がいっぱいだ」

目的地である外周区、三十二区を上空で視界に捉えたももかはここぞとばかりに悠河に毒を吐く。

「ねえねえ、ねえねえ！聞こえてる!!」

「聞こえてるよ!!」

「五翔会の情報網も大した事ないね♪」

コレは言い返せない。

まさか、民間の情報を受信して「見つけました」と報告してくるなんて。

「どんな組織も一人の人間を視つけるとなると原始的な方法しかない。東京エリアの聖天使と天童に存在を隠すとなるとより気配を消し隠密行動するしかない。今回は仕方がないと言えば仕方がないんだ」

「言い訳乙」

蹴り落としてやろうかコイツ。

僕たちは自衛隊の伝手でＣＨ―４７航空機で移動中、つくりにつくった借りの一つを返して貰った。

そして、もうすぐ到達する戦闘区域で僕より先に影胤と対峙する一人の少年。

「文句は後で好きなだけ垂れ流せ、蓮太郎くんを助ける」

「助けるねぇ……落ちこぼれの私には重い言葉だ。一番槍は……悠河のわけないよね～」

「当たり前、僕は君と違って柔いんだから丁重に扱うべき。さ、飛び降りようか」

「その理屈おかしい！飛び降りる必要がな――――」

下をのぞき込んで突き出した尻を靴底で押してあげた。

もう一年の付き合いである。どう扱えばいいのか熟知している。

「ロープ借りますね」

自分は安全にロープで降下していく姿に自衛隊パイロットは戦慄を覚えた。

少し離れた安全圏から降下する悠河を蚊帳の外に、ももかは変体仮面の頭上に文字通り落下していた。

「ぎゃあ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟しゃらくせぇえええええ!!なるようになれやコラあああああああああ!!自由落下怖いよぉぉぉぉぉぉぉぉぉマジむりむりむりむりむり内臓浮くううううううう!!」

空を飛ぶ羽も足場も持ち合わせていないももかは、自然の摂理に従い変態仮面の頭上に落ちるしかない。

落下地点の変態仮面は銃口を蓮太郎氏に向けている。もしかしなくて結構ギリギリ？

私に気付いてるけど無視してるねぇやだやだ。

バリヤ、ばりあー……バリヤでいいや、バリヤによほど自信があるんだねー落ちこぼれな私と違って人生を強者として過ごして来たんだろうなー……辛い。

そんな落ちこぼれな私でも鳩が豆鉄砲を食ったよう顔に出来れば上的でしょ！

「悠河のシャイセ!!」

ももかは、黒目の状態で能力を行使した。

重力落下のパワーを我武者羅に拳を突き出して全体重を乗せる。

握り拳の右手を不可視の壁に叩きつけた。

「マキシマムペインッ！共々潰れろ」

蒼白いフィールドが扇状に膨張し、恐ろしい勢いでももかと蓮太郎に殺到する。

ももかと蓮太郎を圧殺する凶器の壁がももかと接触した。

「なァッ」

脆弱な足場は衝撃を吸収しきれずクレータを生み出す。

ももかが生み出した破壊の波は、影胤を地中深くまで埋めるが、斥力フィールドは破壊されず服に泥汚れ一つつかない。真上からは綺麗な円状にクレータが出来上がった。

蓮太郎は衝撃の波に抗う術はなく、ゴミクズの様に転がる。

轟音で引き返してきた延珠が蓮太郎を抱きかかえ心配そうに此方を見つめる。

「蓮太郎連れて逃げて」

「で、でも……」

「蓮太郎が死んでもいいの!?……私は大丈夫、八百番だよ？」

「くッ、すまんッ」

九十九番目は落ちこぼれ、自分の事で精一杯で他人の心配なんてできない。

強いね、延珠は――――もう諦めたけどね。

急いでよ悠河、逃げたくて逃げたくて仕方ないんだから。

「ヒヒッなんて威力だ。圧殺どころか『マキシマム・ペイン』を凌駕するとは、『イマジナリー・ギミック』では危うくダメージを負っていたよ。『マキシマム・ペイン』で攻撃に転じたおかげで破壊されても衝撃を殺しきったか、危ない危ない。攻撃は最大の防御を無自覚に体現し

てしまったよ」
「パパ、こいつ弱そう。延珠追いかけていい？」
「コラコラ愚かな娘よ、殺気だけで人を判断してはいけない……君の場合狩人に追い詰められた野兎の気配がする。私のフィールドを正面から破壊する力の持ち主とは思えないな。能ある鷹は爪を隠すとかかね」
「あー……もー……なんでもいいです」
「バラニウム製グローブ、この前はそんな装備していなかった。それが本当の武器か。鉄球グローブとはパンチ力に自信があるモデルなのかな？」

そりゃばれるか、もう素直に殴られてくれないだろうなぁ解りやすいし。
二人ともなんか使い手っぽいしやだなぁ。

「斬っていい？斬っていい？こいつ邪魔した。変わりに斬っていい？」
「好きなだけ斬りなさい」
「うん！」

状況が状況なら可愛らしい返事だなおい！狂気しか感じないよ。
小比奈のモデルはマンティス、接近戦最強とのたまっているが武器を握った時点で本人の技量に左右される。
蟷螂が接近戦に適しているのは認めるが、＝（イコール）強さとは限らない。
尤も、経験豊富な上位民警には当てはまらないことは多い。
トチ狂ったこいつも百番台は飾りじゃない。
一、二分もったら御の字です。
やばいよーはやくたすけにきてよバディ。

「よければナメプして見逃してください！」
「斬られたら考えてあげる」

「ソレ意味ないヨッ!?」

落ちこぼれの逃げ思考が功を奏した。

ももかの戦闘スタイルは最初に先手を取るでも、受け止めるでも、受け流すでもなく、まず距離を取って逃げる。

初めて戦う相手には逃げに徹する。何が得意でどんな戦闘スタイルなのか初見では外見でしか分からないからまず距離を取る。そのスタイルで小比奈の初撃を回避することに成功した。

問題は次の二撃目。

二刀流は右手を躱されても左手がある。機動力と速度は蟷螂が上、何とも分かりやすく首を両断しに来るがボクシングのファイティングがまたもや功を奏した。

胴と首を護るこのポーズは鉄球グローブが顎と首を護っている。

金属音と火花が飛び散る。無事に二撃目を防いだんだ。

問題は此処から、縦横無尽に刃物を使いこなし命を刈り取る微笑みの死神は狂気に隠れた冷静さで斬りかかってくる。単調な攻撃はもう期待できない。

コイツメンドくせぇー何やってんの悠河は!サポートしてくん無いとお肌傷ついちゃう。痛いのやだし。

えーい乙女の肌を何だと思ってんだ。

「痛いの我慢!」

「ふひひッ」

致命傷は避ける。掠り傷は勝手に治る。

牽制でジャブを放て、時間さえ稼げば悠河がくる。

落ちこぼれの大得意な”逃げ”に徹すれば対処できる。

影胤も加わったらちょいピンチだけども。

「ほう……小比奈の太刀筋を眼で追って躱すか。優れた目を保有している。赤目にならないのはあの子のモデルにでも秘密があるのかな巳継悠河くん……？」
「気付いてましたか」
「私が加勢しようとすればその隙に襲い掛かっていただろ？怖い怖い。このまま一対一で殺り合うのかな」
「冗談がきつい、僕の今の兵装で貴方を殺しきる術はない」
「……では何をしに？死にに来たのなら喜んで手をかすよ」

鼻で笑い此方を静かな眼で見つめる。
その目は死にに来た人間の目ではない。
これは――――――

「十年前の兵器が今の僕にどの程度通用するのか……手解きをお願いします――――”先輩”」

人の目では無い、機械の眼（まなこ）が私を貫く。
見違えるものか、二つの義眼は紛れもなくバラニウム製。

「フフフ、フハハハハハハハハハハハッ同類だったのか！先輩……なんともいいがたい響き、いいよ大歓迎だ。共に人間を辞めた者どうし殺し合（遊び）おうじゃないか」
「使い方を間違った時点で僕との在り方は別物となった。この世界に貴方の様な組織に属さない危険分子は必要ない。世界平和の礎となれ」
「世界平和か……それは困る!!」

『人間』としての進化を微塵も考えず諦め、『機械』の進歩に身を染めた二つの『兵器』が、人間を超えた兵士として激突した。

第二十三次観測

巳継悠河の双眸に幾何学的な模様が現れ、黒目内部が回転する。
悠河のコレは『二一式改』。
もととなった『二一式黒膂石義眼』を踏襲し、改良を加えた二世代型。
演算装置による思考の加速――――それが義眼。
身体の重心、傾き、構え、指先から眼の動き、呼吸に至るまで計算し、未来予知に迫る精度で相手の次の、また次の、また次の次の行動を演算、予測する。
それだけでも厄介だが、真骨頂は別にある。
脳は処理能力が最速にまで達するとかなり加速可能になる。義眼の演算加速が常識では有り得ない体感を可能にする。
昔からスポーツや極限状態において、脳内にアドレナリンが分泌される事で興奮状態となり、処理能力が加速し心拍数が上昇、体感時間が延びる報告は数多くある。野球のバッターは、ボールがスローや、止まって見え、縫い目が数えられたというのは有名な話。
しかし、それも刹那な瞬き。
あらゆる状況下でも加速するのは不可能。
それを可能にするのが『二一式改』なのだ。
だが――――千日手とは実際に体験しないと厄介さが分からないものだ。

「このままだと朝日を拝むことになりそうだ」
「今まで気にもしなかったが相性の善し悪しを思い知ったよ。互いにこうも攻撃が当たらないのは……厭きてくる。その義眼は脅威だ。思考を読まれているようだ。もし、もしもフィールドを破壊出来る手段、君のパートナーでもいいが、ピースが揃っていたら敗北していたよ。小比奈も私と同じで攻めあぐねているし時間切れかな」
「本気で逃げに徹したももかを倒すことはできない」
「変わった信頼だ。おっと、もう無理か。撤退させてもらうよ。彼ら

がやってきた。遊びは終わり、戯れはまた今度だ」

小比奈が悔しそうにももかを睨みながら影胤の側に着地する。

「いや～死ぬね。もう無理、やだ、めんどくさい。帰って寝たい」

「アイツムカつく、弱いくせに斬られてくれない」

「撤退だももか。彼らの標的は蛭子親子、巻き添えは御免こうむりたい」

月明かりの暗闇に光が光速で通り過ぎる。

彼等が到着したのだ。

今の光は彼らを運ぶ輸送機、東京エリアを守護する新設部隊。

「陸上自衛隊特殊兵科所属駆動鎧戦術部隊……ローマ連邦から輸入した新兵器を真っ先に取り入れた部隊。かの五賢人の一人である神無城沙希が開発した駆動鎧をバラニウム産出国である東京エリアに売り込むとは聞いてはいたが、こんなにも早く導入するとは」

全力で後退する。

ここにくる兵器は一人の人間を殺すには殺傷力があまりにも高すぎる。

そう――――『人間』なら。

「彼と僕との戦力差は大方分析完了。あとは兵装だけ……」

最後に視線だけを後方に向けると蛭子親子は屈強の駆動鎧に囲まれていた。

全長は2．5メートルほどの大きさで、青と灰色の特殊な迷彩を施されて、頭に当たる部分が巨大で、胸部が膨らんでいるため、ドラム缶を被っているように見える駆動鎧。

『ＨｓＰＳ―１５』が、アタッシュケースを回収する任務を邪魔する

蛭子親子に、巨大な銃口を向けた。
勝敗は判らないが、あの二人は逃げ延びる。
お互い痛み分けか、駆動鎧戦術部隊の壊滅か、結果は予想よりも早く知ることになる。

東京エリアで一際厳重に護られた建物。
重鎮が住まうある一室で聖天使は菊ノ丞の報告に耳を傾けていた。
駆動鎧戦術部隊のＧＰＳマーカー消失。
Powered Exoskeleton tactics unit
この報告を受けて聖天子は静かに瞳を閉じ、唇を震わせる。
報告は其処で終わらない、菊ノ丞は感情を覚られず淡々と報告書を読み上げる。
降下予測ポイントで駆動鎧の残骸を回収中とのこと。
犠牲となった人達に祈りをささげ、最後まで菊ノ丞の言葉に耳を傾ける。
現状、駆動鎧戦術部隊は壊滅した見方が濃厚。
十体の『ＨｓＰＳ―１５』壊滅は少なからず二人の間に動揺を生んだ。
陸上自衛隊の主戦力として期待していた分、その反動も大きい。
私たちの予想以上に元百番台機械化兵士は強敵。

「次こそ……いえ、次が最後の総力戦。民警の皆さんに託すしかありません」

最悪のパターンも想定して事に当たる必要がある。
ゾディアックは人類の天敵なのだから。

「……それともう一つお伝えすることがあります」
「それは？」

「明日、『木原』が入国いたします」
「『木原』ですか……五賢人神無城博士の助手でしたか？」
「その認識で相違ありません。どこから知り得たのかは定かではありませんが、今回の出来事が原因でいらっしゃるようです」
「そうですか、何やら裏を禁じえません」
「入国を禁じますか？」

『木原』に関する資料を流し読みし。

「……許可します」
「わかりました」

菊ノ丞は報告を終えると腰を曲げ一礼し退出する。
これは一種の賭けだ。
このタイミングで五賢人の助手が東京エリアに来日する。
怪しい、タイミングが良すぎる、裏がある。
それらを一蹴しこの状況を切り抜ける可能性に賭けた。
情報をどこで仕入れたかは知り得ないが、ゾディアックが接近中であることを承知の上で来ている可能性が高い。
――――保険。
最悪の事態を想定し保険を掛ける。
東京エリアの３代目統治者として何としても住民を護らなければならない。

ももかの人生は逃げの人生だ。
目を背け（逃げて）、耳を塞ぎ（逃げて）、何も言わない（逃げて）――――
助けを求める手を振り払い逃げて。

中途半端に死からも逃げて。
生きたいから逃げて。
辛いのもいやだ。
苦しいのもいやだ。
面倒もいやだ。
熱く頑張るのもらしくない。
『木原』からも、家族からも逃げて。
逃げても根本的解決にはならないと分かっていても。
立ち向かうのもいやだから。
才能もない。
才気もない。
努力をすれば――――なんて気概もない。
逃げて、逃げて、逃げて――――
（目を背け／耳を塞ぎ／何も言わない）
全てが終わり、なお取り返しがつかなくなっても逃げて――――
――後悔。
どうしようもないのは分かっている。
私は無力なただな子供。
巳継悠河との生活は楽しかった。
乱暴で口も悪くて性格も最悪。
そんな人間最底辺な彼だけど、実験体としてではなく一人の存在として扱ってくれた。
途方もなく嬉しかった。
任務でも仕事でもいい、今まで誰も引っ張ってくれなかった手綱を巳継悠河は掴んでくれた。
現実逃避なのは理解している。
けど、一年前までの全てを忘れてこれからも悠河と暮らせれば――
――――
マイホームに帰還し切り傷に包帯を巻いてる間、悠河は急ぎ連絡していた。

上司……とだけ知ってはいるが、どの組織と連絡しているかは知らないももか。
蓮太郎や延珠が無事か気になるがもう動きたくない。
ぐっすり眠れそうだ。
いつもは聞き流す悠河の電話の内容の一部分が強烈に脳を揺さぶった。
”『木原』さんが明日東京エリアに到着する。”
その連絡に――――ももかは震えていた。

「かはッッッツ、おえぇぇぇぇぇぇ」

一年前なら耐えれた記憶が、逃げの先で手に入れた幸福が邪魔をし、彼女を追い詰める。
『木原』が東京エリアに来る。
それだけで胃が締め付けられ、胃液までも絞り出す。
逃げて、にげて、ニゲテ――――
見捨てた今までの全てが重くのしかかる。
震えが止まらない。
胃には何もないのに吐き気が治まらない。
悲しい、瞼が重たい、彼女自身の防波堤が一時的な逃げに奔った。
このまま眠れば少しは楽になる。
いつものように心の奥に逃げ込み――――

「ももかッ」

あの悠河が心配そうな目で私を見ている。
倒れた私を抱きしめてくれている。
もうそれだけで、幸せで、幸せで、幸せで――――
今まで避けてきた人の温もりが――――温かくて。
こんな身体でも温もりを感じるのが嬉しくて。
嘘でもいい、勘違いでもいい、この鼓動を私は生涯忘れない。

彼女は確信していた。
『光』を奪った悪魔は此処に来ると。
理屈？ないよ、あるわけないじゃん。
理屈なんて一つも無い、此処に来るのは絶対なんだ。
絶対来る。
理由もないしなんの根拠もない。
やつは東京エリアに固執している。
ワタシそれを利用する。
ワタシに悪魔を殺せる力はない。
悪魔を困らせて困らせて困らせて――――――――いつかの刹那を待つ。
ただそれだけに生きる。
ワタシは『鬼』。
他人など省みない。
ワタシは『鬼』だから。
何でもワタシの為に利用する。
『闇』をも照らす月をただただ見つめていると、携帯が震える。
もうこの携帯の連絡先には誰も通じない。
なら誰からか？
『同士』からだ。
東京エリアに着いたはいいが、ワタシに工作の類の心得は無い。
そんなある日、〝君と私は何処となく似ている……良い目だ。狂った『闇』の綺麗な瞳だよ〟
口説き文句にしては殴られても文句が言えない台詞。
そいつはシルクハットを深くかぶり派手な燕尾服に白い仮面で素顔を隠した――――――そう、変態仮面と呼ばれてもこれまた文句が

言えない恰好なのだが、妙にしっくりくる……似合っているとさえ言える。

『狂人』がワタシの瞳から判断したように。

『鬼』も仮面の奥から僅かに覗き見る双眸から理解した。

――――――嗚呼なんだ……同じか。

『狂人』は高らかに笑った。

”同じ、それなら納得。こんなにも笑ったのは久しぶりだ。どうだろうか我が『同志』よ、共に混乱をツクラナイカ?”

それが『狂人』との出会い。

通話ボタンを押すと狂った『狂人』がいつも以上にテンション高く今日の出来事を語りかる。

ただただうるさいそれを聞き終える。

「その無駄に高いテンションどうにかならないの?道草食ってないで早く合流してよね――――――影胤」

第二十四次観測

『木原』は胸を大きく広げ大空をみやげながら鼻から深呼吸して肺を空気で満たし――――ゆっくりはいた。

「日本の空気は美味い……これが故郷の味ってやつ？僕は帰ってきた!!」

「ローマ連邦出立から七十六時間二十三分二十秒経過し東京エリアに到着致しました。只今の時刻は午前十時七分五十秒です。故郷の定義は人それぞれ異なりますが、ドクターにとって故郷とは日本なのですか？」

「んなわけねぇえええだろおおおおおお!!がはははははは!!ドクターのギャグを一々真剣に返答してたらきりねえぞォ。そんな事よりヴァンドゥとヴァンヌフが留守番ってどうしてですか!?」

「おうふ、何度説明すれば納得するんだ『運転手』君？あの二人には沙希ちゃんの護衛を頼んだでしょ？分かる？分かってくれよ？てか分かれ？なぁ？」

「ドクターが俺達親子の仲を引き裂こうとしてるよ!!ヴァンティアンもトラントも寂しいよなァ!?」

「えっと……ちょっこと寂しいけどお姉ちゃんもお仕事がんばってるしわたしもお姉ちゃんに負けないくらい頑張るから平気だよぉ？」

「同意。留守番中の妹にお土産を買ってくるようにせがまれたので帰りに購入しても？」

「仕事してくれるんなら文句ない。ほら僕非力だし」

「非力の定義にもよりますが、ドクターの護身用アイテム……護身兵器を含めないのなら非力、ではないです」

「誰かこの子に相手のノリに合わせる会話術教えてやんなよ。正直者過ぎて将来苦労するぞ」

いやー楽しいなー、『木原』では有り得ないこんな馬鹿な会話が自分の癒しだ。

死の無い『普通の生活』を望む僕にはこの世界は重すぎる。
原作が始まった。
それだけで、憂鬱だ。
西暦２０３１年日本のエリアで大規模な出来事、事件は常に監視していた。
そして今回の蛭子親子が呼び覚ました七星の遺産。
これ程の事件は無い。
元日本の首都東京エリアこそが原作の舞台。
主人公はまだ分からないが、平凡な少年なのだろう。
少し我が強くて、周りに引っ張られ厄介ごとに巻き込まれ、面倒な女がいつも一緒で、いつも周りを疎ましく思い、失いたくないと願う。
そんな少年だ。
年齢は高校生の可能性が一番高い。
だってラノベ系主人公って大体が高校生くらいの年齢だろ。後、女難の相。
巳継悠河は主人公のライバルポジか、敵対組織の一刺客ポジが似合う。
予想外な事態を招く主人公を殺すのも提案の一つだが、それは愚行だ。
『自分の人生の中では誰もが皆主人公』なんて理屈は求めていない。
僕が求めるのはどんな戦力比、絶望な状況でも必ず希望の『光』を引き寄せる――――民衆（正義）の味方。
それは僕には無い性質。
今回の事件を解決する――――奇跡の様な手腕、出来事で解決へと導く者こそ主人公（もう一人の救世主）。
僕は『人間』の可能性を知っている。
世界を救う『希望』（一位）と『民衆の味方する救世主』（人公）。
故に、鬼畜外道な『木原』を裁けるのは合理的に世界を救う『希望』等ではなく、世界よりも仲間を、視界に入る誰かの願いを聞き届ける民衆の味方こそが『木原』の宿敵。
”全てが終わった先で『木原』（僕）を裁けるのはヒーローだけ”

「一位はその他色々政治の都合やら組織の都合だかよーわかんねぇがあんな戦力国外に出したくないのは分かる!!が!!ヴァンドゥとヴァンヌフをォ!!」
「まだ引っ張るよこのおっさん」

「――――――♪」

ふふふ、ふふ――――――ふ、ん……。

鼻歌。
一定のリズムを繰り返し繰り返し繰り返し――――――
飽きることなくこの歌に喉を震わす。
この歌に思入れがあるのか、『鬼』の顔は消え、瞼を閉じ、木に寄りかかりながら静かに、『光』がまだ彼女の中にあった頃を思い出させてくれる。
この歌を歌って瞼を閉じると『光』が見える。
ワタシを照らす暖かな『光(過去)』が見える。
耳からの雑音など聞こえない。
聞こえるのは『光』が会ったあの頃の総て。
こんな日常がいつまでも続けば――――――
嗚呼、でもワタシは知っている。
コレは幻で、コレは幻聴だと。
それでも、この時だけが『光』を失った『鬼』を忘れることが出来る。
現実を拒絶できる。
嗚呼分かっている。

幻想はいつまでも続かない――――――

「ふふふ、ふふ――――――ふ、ん……フフフフ」
「おや？君が笑うところなど初めて見るよ。なにか、そう、私の様に玩具でも見つけたのかな？」
「そう？そうなのよね……笑ってるのね、ワタシハ」
「私は君に協力し、君は私に協力する。そう約束したあの日から私達は同士だ。似た者同士である私の勘だが、私のそれは好敵手であるが、君のそれは片思いの恋い焦がれた待ち人に出会える……そんな瞳だ。嗚呼勘違いしないでほしい。恋する瞳とか愛を秘めた美しい瞳とかそんな『光』ある瞳ではない。濁りに濁った狂喜の瞳だ。世界を呪う狂った『闇』の綺麗な瞳だ。そんな瞳に一途に見詰められるどこかの誰かさんがとてもとても羨ましい」
「やっぱ変態さんね。そこだけがワタシとアナタノ違い。ワタシは今も『光』を求めているもの。『闇』を払い、在った筈の幸福を胸に抱きながらひっそりと生きていたいの」
「居ない者を常に想い生きていく、やはり狂ってるよ。度し難いほどに」

クククと、笑いながら娘を抱き眠りにつく。
見張りは交代制で最初はワタシだ。
警戒は怠らないが、いつもと違い気分が高揚しなんだか人とお話をしたくなる。
『鬼』となったワタシにいつまでも付き従う幼子。
今年で九歳となるワタシの『光』の唯一の現世の繋がり。

「明日、どんな形であれ決着がつく。ワタシは殺すわ、どんな障害が立ちはだかろうと絶対に殺すわ、四肢捥がれ、この双眸が潰されようが、心臓が鼓動する限りワタシは喉元に噛み付く。……たとえ一死報えず心臓が止まりアイツの足元でのたれ死んでも、ミリーが居る。死ねばもう触れ合えず話す事も出来ず未知を共有できなくなる。でもね、

ワタシがそうであるように、ワタシの中に確かに生きているの。生きているのよ。アナタは如何ミリー?アイツに『光』を奪われた人たちは大勢いる。『鬼』は無数にいる。ミリーは如何なの?」

この子は無口で内気だ。
ワタシと同じで全てを失い依存していた『光』を失い人形と化した。
何も成そうとしない幼子の手を取りここまで巻き込んだ。
でも、それでも、ワタシ死ねばこの子が殺し、この子が死ねばまた誰かが殺しに逝ってくれる。
『人間』の肉体は滅びようが意志は誰かに受け継がれる。
『闇』は『人間』にこびりつく本質。
ゆえに、『鬼』は目に視えぬ本質。
最終確認。
この子が何も答えず人形に成り切るなら、置いて行く。
ワタシが死んだとき、この子は気付くのだ。
人形と化した己の中に眠る本質を。

「……ぁ」
「ん?」
「……しあわせだった……のかなぁ」
「……」
「……最後まで……一緒で、しあわせだった、かなぁ」
「……」

ワタシには答えられない。

「……たたかう」
「……え?」
「……いっちゃうんでしょ?……おねがい、おいていかないで」

ワタシはこの子を利用するのだと再度自覚させる。

事実、唯の人である自分と呪われた子供たちのくくりで物事を合理的に考えるならこの子は必要だ。

〝この子の心を殺したのはアイツでも、肉体を殺すのはワタシの意志〟

『鬼』であるワタシには答えられない。
付いてくるならそうすればいい。
ワタシはこの子の頭を撫でる事しかできない。
明日、総てがわかる。

「……しにたい」

目覚めたももかはまず自己嫌悪で死にたくなった。
死にたくなっても――――死にたくない。
所詮口先だけの女だ。
ゆえに。

「……きえたい」

総て関係ない遠い何処かにきえたい。
きえさって人生をリセットしたい。
それでも私は逃げきれない。
逃げることが出来ない。

「お、目覚めた」
「う……ゆうがぁ？」

乱暴で口も悪くて性格も最悪、そんな人間最底辺な彼が扉を開け私が寝ている布団の近くに腰を下ろす。

「えっと……なんじ？」

「丸一日寝てたよ。それにしても結構重いね」

「乙女に体重訊く？やっぱ人間最底辺だね。常識がないよ常識が、これだから脳筋は」

「そうかそうかそんな態度をとるのか、お腹を空かした頃合いだと御粥でも作ってきたのに」

「オウゴットファーザー血の盟約を契ったファミリーを見捨てるのですか？」

「誰がゴットファーザーだ根暗。僕が食べるよ」

「おにぃきちくぅあくまぁげすぅげどうぅはげおたんこなすうんこいろのかみのけぇエ!?」

「殴った」

「うぅ～」

泣いちまうぞ、このやろう。

悠河は御粥を一口食べると残りを頭脇に置いた。

「まだやることがある。忙しいんだよ。それ食ったらもう寝て明日に備えろ。置いてくぞ」

「あーんしてよ」

「口移ししてほしいか？」

「……」

「……」

「……いい、けど？」

「一著前に女の顔で男を誘うな馬鹿」

〝パチン〟。凸ピンされた。イタイ。

結構マジなのに。

「お休み」

「……お休みなさい」

そして悠河は出ていく。

こんな忙しい時期に私の分の仕事まで頑張ってくれてるんだからツンデレだよ。

なにより、私と『木原』を合わせないよう配慮してくれた。

ダメなのは解っている。

私は悠河に依存している。

悠河に逃げ道を作っている。

でも、それが私だから。

少し冷めた御粥をスプーンで掬い一口食べる。

「……あたたかいなぁ」

ありふれた御粥が、何故か胸にしみた。

明日は何時もみたいにからかってやる。

まずはスプーンでの間接キスからからかってやろう。

唇を指でなぞる。

いつもより気分がイイ。

明日はいつも以上に頑張れそうだ。

某病院の病院の一室で、蓮太郎は星を眺めていた。

木更さんと延珠には心配をかけてしまった。

俺が目覚めたのを確認すると、二人して散々人の事を馬鹿にして

……謝るしかなかった。
もう無茶はしないと出来うる限り約束して、木更さんは延珠を引っ張って帰って行った。
俺は星を眺め、黄道十二星座を探していた。
ゾディアックの危機、蛭子影胤の脅威、在るか分からない未来を想いながら、それ以外の更なる胸騒ぎが蓮太郎を支配していた。
蓮太郎はごく普通の平凡な少年だ。
それでも、死線を幾度なく経験し生き延びてきた彼の勘が確信をもって語りかけてくる。

”決戦は――――明日だと”

第二十五次観測

東京エリアの崩壊――――――――大絶滅。

蛭子影胤は持ち去ったケースの中身は、ガストレアのステージⅤを呼び出すことができる何らかの触媒であることが聖天使が開示した情報により判明した。

ガストレアのレベルⅤを人為的に呼び出す。

東京エリアのお偉いさんが隠し続けてきた〝汚点〟。

今日明日と訪れるか分からないゾディアック、こんな事態が発生しなければ隠し通したかった情報。

最早隠すことはないとプロモーター蛭子影谷、イニシエーター蛭子小比奈の全情報開示。

『未踏査領域』に逃げ込みステージⅤを呼び寄せるための準備に入った影胤に――――――――政府主導の大規模な作戦が実行された。

聖天使の要請でモノリス外に潜む蛭子親子の情報が、依頼を受けた全民警に一斉送信された。

蛭子影胤追撃作戦、多数の民警が参加する史上最大の作戦。

時間帯は日が沈み闇が支配する空間、赤い光が蠢く魔の森を民警が駆け抜ける。

影胤に辿り着く前にガストレアで大多数の民警が削れると予想される。

例え影胤に辿り着いても、機械で『人間』をやめた人間兵器と唯の人間では勝てる可能性は――――――――

「まぁ零ではないわな。武器、武術、何でもいい。外道、非道、プライドや人の感情を感かしないならそれこそ何でもありだ。時間制限も無ければなを可。有るなら……まぁ悠長に選べる立場じゃないな」

伊熊将監は悪魔のささやきを断れなかった。

自分の非力さ、無力さに、何もできない自分に絶望する。

内臓とか物理的ものじゃなくて、皮膚の中身が腕から流れ出て――
――空っぽになってしまう。
虚無感。
失ってはじめて彼女の大切さに気付いた。
医学知識がない俺でも分かる。
民警なら常識レベルで、経験で身につけた知識が、〝嗚呼もう助からないんだな〟と、どこか遠い頭の隅で現実を受け止めていた。
体内侵食率が５０％を超えている。
左腕と右足は無くなり、白かったワンピースは血で汚れ、あちこち切り傷と歯形が残っている。
〝グジュグジュ〟とありえないほど早く傷が再生していた。
それどころか、千切れとんだ手足まで再生しつつある。
『国際イニシエーター監督機構』に登録された『呪われた子供たち』には浸食抑制剤が配布される。
絶えず侵食抑制剤を投して体内のガストレアウィルスを押さえ付けてるが、あくまで『抑制』であって『抑止』する効果がない。
『呪われた子供たち』は抑制因子を宿しているため一般人の様に一瞬でガストレア化することさえないが、力を急激に解放したり、ガストレアに体液を送り込まれたりすると、微々たる速度で体内浸食率が上昇する。
そして、一般人と同じように、体内浸食率が５０％を境に、一気に浸食が始まり人の姿に留めていられなくなる。
その臨界点は、現代医療技術では引き延ばす事も、押しとどめる事も出来ない。
こんなことになってしまった原因は俺だ。
蛭子影胤追撃作戦は『未踏査領域』で実行された。
『未踏査領域』は人間の領域の外、勝手気ままに横断は許されない独自なルールがある。
その一つが夜間大きな音を立てる爆薬物とうの火薬類の使用禁止。
ガストレアも朝に起きて夜眠る奴もいれば、夜行性のガストレアだって存在する。

大きな音は眠ったガストレアも呼び寄せる。
なのにだ。
馬鹿が爆発物を使ってへまこきやがった。
ターゲットの影胤は目の鼻の先、このまま戦えばガストレアと挟み撃ち。
俺は夏世に命令した。
”あのムカつく仮面野郎をぶっ殺す間頼めるか?”
今思うとなんていい顔で承諾しやがる。
そんなにも俺を信頼してたのか。
俺が負けるはずがないと、さっさと仮面野郎をぶった切って戻ってきてくれると――――此奴は俺を信じてくれたんだな。
なのに俺は……無様に負けて皮一枚で死に掛けた瞬間に、仮面野郎の攻撃を悠河が防ぎやがった。
武器もない体の芯まで痛めつけられた俺は遠ざかっていく悠河の背中を見送る事しか出来なかった。
俺は悠河を追うのではなく、反対方向に向かった。
夏世は俺の帰りをガストレアの大群と戦いながら待っている。
俺と夏世が揃えば敵なんてない。
俺が前衛で夏世が後衛、仮面野郎だって倒せる。
俺はそう信じて此奴の元に辿り着いた。
その結果が――――

「お前にとっての千寿夏世はなんだ?ただの便利な道具か?変えの利く『呪われた子供たち』の一人か?そうじゃねーだろ。ペア、相棒、戦友、何でもいい。これだけは答えろ」

力なく俺の腕の中で化け物になっていく。
俺には何もできない、何も。

「伊熊将監……将監にとって千寿夏世は『人間』か?」

『人間』かだと?.此奴馬鹿か?.んなもんきまってんだろッ!

「『人間』だッ!」

頭はわりぃし素行も最悪で口も汚い。
それでも、なくてはならねー人情は宿っている。
此奴は俺の……俺のォ!!

「……し、しょうげん……さん……?」
「……ッ!!」
「……わたしのことは、もお……いいんです」
「いいわけあるかこの馬鹿がッ」
「ばかはしょうげんさんです。いつも……つっぱしって、でも……それが……かっこいい」
「いくらでも迷惑かけてやる、サポートしてくれ……だからッ!?」
「……もうむりです……もう、むり……」
「夏世ッ」

こんなにも悔しいのか、何もできない、それがこんなにも悔しいのかよ。

「彼女は助からない。それどころかガストレアとなり自分を殺しにやってくる。なら自分の手で『人間』のまま終わらせるべきか。それは正しい。正道だ。王道だ。ハッ、飽き飽きする。先が知れた展開程詰まらんものはない。この十年間君と同じ展開で泣き、喚き、懺悔し、後悔する人類は数億に上る。数億回も、しかも強制的に同じ展開を見せられる読者の気持ちが解るかい?.僕は今それと同じ気持ちだ。クソくらえだ。なら自分でどうにかするしかないだろ。次の展開が見たいなら自分でつくるしかないだろ。僕は『人間』の〝意志〟の強さに敬意を払う。科学者として非科学的だが、『人間』の〝意志〟には解明されない力がある。だから、此処重要な瞬間は相手に選ばせる。脅

し、無理矢理やらせるのは駄目なんだと理解した。故に、強制はしない。選べ。提供してやる。この十年当たり前になったその王道を叩き割るもう一つの可能性を示してやる。もう前の彼女じゃなくなる。それでも生きていて欲しいなら選べ」

〝『人間』の進化とは異なる別のプロダクション〟

俺の選択は――――

将監を殺すタイミングで影胤に攻撃したが失敗。
変わりに助ける形になってしまった。
けど、

「蓮太郎くんが追い付くまでには終わらせる。もう貴方は僕には勝てない」
「ほほう、それは楽しみだ。如何も君は眼のことはばれたくないらしい。偵察機は言わずもがな。だが……そう、今回は別の様だ」
「僕としては秘密にしたいんだけど、上がうるさくて。幕も近い、さっさと始めよう」
「決着をつけよう、巳継くん」

『イマジナリー・ギミック』を展開した影胤は此方を見つめ無言で語り掛ける。
〝さあどうする？先日のやり取りを繰り返すのか〟
僕はそれに――――ため息が零れた。
呆れたと表せばいいか、弱者と戦い過ぎて牙が錆びれたか……慢心が滲み出ている。

先日引き分けた相手が、何も対策もせずに同じ愚行を侵すと思ってるのだろうか？
嗚呼解るよ、圧倒的武力と実力が合わさらば見下したくもなる。
僕も同じ状況なら慢心するだろう。
けど、自ら相手に初撃を譲るのは慢心などではなく唯の馬鹿。
慢心はいけない感情ではない。
ほんの少しの慢心は視野を広くし、冷静に思考できる。
慢心も上手く使えば戦術になる。
それを理解していない馬鹿は――――

「一撃で……殺す」

悠河が打ち出すのは掌底。
絶対的信頼を寄せている一撃。

「所詮口だけ、君を殺し里見くんと――――ッ!?」

掌底を放つ右手とは逆に左手が斥力フィールドに触れると――――
――砕け散った。
そうなると分かっていた悠河の次の一撃は速かった。
影胤の心臓に暗殺者（ダークストーカー）の必殺が命中した。
身体が勝手に反応する。
影胤は無意識に致命傷を避ける為衝撃を殺し後方に飛んだ。
着地すると影胤は――――痛みに胸を押さえ膝を着いた。

「……クク、ハハハ、フハハハハハッ！痛いイタイゾォッ、私は痛いッ、私は生きているッ。素晴らしきかな人生!!ハレルヤ!!何だね今のは？右手は振動の類かい？その左手に秘密があるのかい？フィールドに触れた瞬間とても気持ち悪かった。砕かれた、壊されたとは違う……消失したんだ。どうだろうか？案外的を得ていると思うのだが」
「一撃でそこまでつかめるなんて心底人間離れしてるよ。ご明察、右

手は細胞の結合を破壊するほどの振動波を発生させる専用兵装。左手は上司が用意、調整してくれた君だけを殺す兵装だ」

五翔会構成員コードネーム『ダークストーカー』の近接戦闘用の兵装として打撃技のダメージを増幅する『超振動デバイス（ヴァイロ・オーケストレーション）』。

そして――――――

「これも振動波の一種だけど人体を効率よく破壊する『超振動デバイス（ヴァイロ・オーケストレーション）』とは別物です。先日フィールドをあらゆる角度で威力調整をしながら攻めました。その時すでにこの結果は決定されていたんです。ダイヤモンドは確かに固い、固さだけなら目を見張るものがある。だけど固いだけのダイヤモンドは……脆い。貴方のフィールドも同じ、フィールドでは逃がし切れない衝撃波のパターンを演算。後はそのパターン通りの攻撃を加えれば、理論上壊せないものはない」

という事はだ。

「このグローブは連打と振動を同時に行い、展開したフィールドを不安定にさせ同調させて消失させる。中和させてるんですよ。低度の誤差も勝手に修正してくれるから便利なものです」

「最高だよ、巳継くんッ」

影胤は自ら彼の射程圏内に飛び込んだ。

悠河の義眼の演算を用いれば最強の接近戦は結果として打撃の攻防とかしている。

単純に悠河より影胤が強いんだ。

思考を加速させスローモーションにしようが、演算で未来を予測しようが、経験と技量で負けている。

けれども、今の悠河が負ける理由にはならない。

「兵器人間になってどれだけ強敵と戦ってきた?全部その力でねじ伏せてきたか?楽勝だったかい?酔いしれただろうね。次は回し蹴り、あ、残り二十三手で心臓を破壊出来る」
「凄いッ、楽しいよッ、私は幸せだッ!!コレはどうするッ!?」

腕を上げ、指先を悠河に向ける――――――『マキシマムペイン』。
指先から蒼白いフィールド発生し扇状に膨張し、圧殺する勢いで殺到する。
悠河はその壁を、当然の様に左手で防いだ。

「この技は君に使っていない。どうやって……嗚呼君のイニシエーターか」
「ももかが一発で破壊してくれたおかげって、僕みたいにまどろっこしい事をせずにすんだよ。まあこれで君お得意な手品は封じた」
「素晴らしい武器だ。名はあるのかい?この二挺は『スパンキング・ソドミー』、『サイケデリック・ゴスペル』と言うんだが、巳継くんの左手(それ)に名はあるのかい?」
「一応あるけどネーミングセンスは僕じゃなくて上司だからね」
「それで構わないよ」
「『幻想殺し(イマジンブレイカー)』」
「……」
「……」
「……ぷっ」
「笑うなももか」
「だって幻想殺しだよ?幻想要素一つも無いのに幻想って……ぷぷっ」
「頼むから黙っててくれ」

自覚しているからももかに何も言い返せない。

「私は好きだ。良いネーミングセンスだ。そんなものを一科学者が創

れると思わない。かの五賢人かな？」
「その辺は僕にも分かりませんよ。ただ、認めたくありませんが、コレを作ったのは紛れもない天才で、五賢人に匹敵する頭脳の持ち主だ」
「その科学者の名は？」
「『木原』」

その瞬間、狂気の仮面は高らかに笑った。
ステージで道化を演じるピエロの様に、運命に身を震わせた。

「フヒヒ、アヒヒヒヒヒヒヒッ、彼女にはケースのお守りをお願いしたんだが、この様子では選手交代かな」
「なにを……」

腹部の予期せぬ衝撃が体感のバランスを崩し、たたらを踏むが、転けずその場に踏みとどまった。
ももかが押したんだ。
そして理解する。
耳に掠った火傷の意味を。

「撃たれたのか!?」
「照準器が見えなきゃ終わってたよ！」

教会の扉が開放され、氷の笑みを張り付けた女性が悠河を見据える。
その瞳はどこまでも淀んで、濁って、真っ黒な瞳。

「聞き間違いじゃないよね？確かにアイツの名前を呟いたよね？ねぇそうでしょ？……『木原』って……」
「――――――ッ！」

影胤と違った狂気、影胤のは闘争を求める人類への混沌。

彼女のそれは、どこまでも冷え切ったたった一人に向ける氷の刃。
その刃を流れ弾の要領で悠河に突き付けられている。
純粋の憎悪を初めて一身へ浴びた悠河の胃が締め付けられる。

「センサーに反応があったからそろそろアナタノお気に入り君、此処に来るわよ。だから……来なくても一緒だけど、コイツモラウネ」
「怖い怖い、巻き込まれて噛み付かれたんじゃ堪ったもんじゃない。惜しいけど譲るよ、そういう約束だ。小比奈もよく我慢できたね、えらいえらい」
「こいつらパパ虐めた、いじめた」
「本当によく我慢したね」
「ミリーがお利口さんの方が喜んでくれるっていったもん」
「ほうほう、他者の助言を素直に従うとは成長したものだ」

影胤は娘の頭を撫でると『鬼』に道を譲った。

「さぁて、キミハ『木原』の何なのかしら?」

照準器が搭載された二挺拳銃を携えた『鬼』が狂気する。

「ももか、ここからはペア戦だ。彼女は影胤より弱い、弱いが強い」
「分かってる……今日まで訊かないでいてくれた私の秘密を全部見せるレベルで頑張る」
「何時言ってくれるか楽しみに待ってたんだが、まさか一年も待たされるとはね」

今回の悠河の兵装は対影胤用――――敗れる理由にならず。

「貴女が人の中でもそこそこ強いのは何となくわかります。……それだけで人間を超越した我々(機械化兵士)に勝とうだなんて、驕りだ」

影胤戦に余計なトラブルが発生させないために、『鬼』を優先的に排除する。

廃墟の街で引き裂かれた死体が散乱していた。
そのごみ溜めを歩む蓮太郎と延珠は完璧に出遅れていた。
戦況は？
戦力は？
影胤を倒したのか？
生き残りは？
情報が不足している。
恐怖で身が竦む。
そんなおり、

「これは……こっちだ！」
「どっちだ!?」
「あっちだ。うるさい音がする」

能力を解放して強化された耳が、蓮太郎では聞こえない戦闘の余波を拾った。
蓮太郎は延珠を背中から振り落とされないようしがみ付いた。
特急延珠号は最速で最終決戦の舞台に向かった。
蓮太郎は分かっている。
アイツを倒せるのは同族だけだと――――

「よお……団体さんの後で悪いが、俺の相手も頼むぜ」
「待ってたよ、里見くん」
「えんじゅだ～」

「行くぞ蓮太郎！」

蓮太郎は迷わず、右腕と右足――――左眼を解き放った。
バラニウムの義肢、義眼、その黒い輝きは紛れもないバラニウム製。
蓮太郎の眼が幾何学的な模様が現れ、黒目内部に仕込まれたＣＰＵが起動し、黒目内部が回転。
二人は知らないが蛭子影胤は知っている。
その眼の厄介さを身を持って実感している。
だからこそ、震える。

「……里見くん、まさか君……嗚呼そうだ……こうでなくてはッ、人生でこんなにも幸福な一日はあっただろうか？欲しかった玩具を一遍に貰った子供のようだッ!!」

蓮太郎はゆっくりと顔を上げた。

「俺も名乗るぞ影胤。元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊『新人類創造計画』里見蓮太郎」

静かに構えた。天童式戦闘術『百載無窮の構え』天地を永久無限の存在であることを意味する攻防一体の型。
延珠は出撃前に聞いた――――ソレを使うと。
蓮太郎は決意した――――自分に向き合うと。
小比奈は発狂した――――我慢の限界だと。
影胤は感動した――――お預けの後のメインディッシュは最高だと。

「二度目の敗北、味方は全滅、援護は来ない……嗚呼願ってもない状況だクソ野郎!!戦闘開始ッ、これより貴様を排除するッ!!」

それが――――開戦の合図だった。

第二十六次観測

演算しろ予測しろ、一発でも命中すれば『人間』の機動力は極端に低下する。

「サポートは必要？」

「ちょーほしい。いくら私の眼がイイからってそれ＝躱（イコール）せるわけじゃない。どれだけ眼がよくても避け続ける思考力も集中力もない」

「……接続した。離れすぎるなよ」

「ふふふ、ピッタリ張り付けばいいんだね」

「はぁ～、もうそれでいい」

こうゆう手合いは小細工せず、面倒になる前に斃す。

「『鬼』は奪う者、奪わせてよ」

『鬼』は両手に握った照準器付きハンドガンを前方に乱射する。

僕たちは回避行動もせずに突っ込んだ。

ももかを盾に、全弾弾いて魅せた。

指で引金を連続して引くより、自動拳銃でフルオートの方が連射性は高い。

所詮人が知覚できるレベルでの連射は『呪われた子供たち』には遅く見える。

何より眼がイイももかは、照準器のレーザーサイトがハッキリと視えており、引くタイミングさえ判れば防げない攻撃ではない。

それでも、〝眼がイイからってそれ＝躱（イコール）せるわけじゃない。どれだけ眼がよくても避け続ける思考力も集中力もない〟のがももか。

なら、全弾ももかの手が届く範囲で弾けるタイミングとパターンを事前に知らせてやればいい。

「同調は問題ないみたいだ。貴女は自分の事を『鬼』と言いましたね。

銃弾を防がれたくらいで動揺するなよ」
「クソガキがッ」
装填には数秒がかかる。
それさえあれば、射程距離内だ。
「ミリー！」
「……モデル：ベア、み、ミリー」
『鬼』のイニシエーターは、内気そうな見た目の割にモデルに似合った熊を連想させる右フックをももかにぶちかます。
嗚呼――――こいつ等駄目だ。
影胤の化け物染みた実力も状況判断もない。
何か特殊な兵装があるのかと警戒すれば、戦い方は素人丸出し。
僕と影胤の戦いを観戦して、アイツのバトンタッチしてこの体たらく。
「カウンター」
「へぶッ!?」
「ミリー！」
「至近距離で眼を放すなよ。はい王手」
心臓破壊『超振動（ヴァイロ・オーケストレーション）デバイス』。
無防備に掌底を胸にうけ、体重の軽い彼女はその場に踏みとどまれず吹き飛ばされた。
「感触が違う。胸当て？なんだ、ちゃんと僕の技に対策してきたのか。その膨らみ、胸ではなく胸を脅威から守るクッション材でも詰まってるの？胸がないってレベルではなく絶壁だ。計算したらＡＡＡカップとか、何歳だよ自称『鬼』さん」
「こ……のクソガッ」

「『鬼』が性別を馬鹿にされただけでキレんなよ」

狂気は影胤と同等、実力は素人に銃の使い方を訓練させた程度。
イニシエーターも自身のモデルに振り回されている。
僕の勘違いだったか。

「弁えろ、貴女如きが戦うレベルは等に超えている。実力もないくせに首を突っ込むな」
「アナタニ、何が分かるってのよ!!」
「弱者は淘汰される。それだけだ」

まずは邪魔な腕から圧し折る。
次は機動力の足を奪う。
最後に首を破壊する。
それで終わり。
おしまい。
僕を引き剥がそうとグリップで殴り掛かって来るが、そんなもの予想通り、まずは右腕を圧し折った。

「〜〜〜ッ!!??」
「へぇ、叫ばないか。ならもう一本」

彼女は僕を睨み付けると――――確かに歪に笑った。
次の瞬間、僕は『鬼』の狂気を見誤った。
”カチ”奥歯から鳴る機関音。
眼の前で、腕が炸裂した。

「――――ッ!!ば、正気か!?」

狂気は影胤と同等、頭の可笑しさはこの女が数段上だ。
この女は自分が弱いことを承知している。

『鬼』と名のった彼女ははじめっから、”腕が折られたら爆発しよう”と決めていた。
そうでなくては判断が速すぎる。
至近距離の爆発は鼓膜と視界を狂わせ、思考を鈍らせる。
折るため抱え込んだのが仇となった。
肘から上を犠牲にした自爆は、どれだけ思考を加速しようが認識できぬ攻撃には対処できない。
衝撃はアバラを圧し折り、内臓にダメージが広がっている。
右腕の骨に何を仕込んだのか、金属の破片に体を刻まれた。
装填が間に合っていた左のハンドガンの銃口が――――――――光った。
弾丸が見える。
一発、二発、三発――――――六発。
その内二発が腹部に命中する。
精度など無い無茶苦茶な連射。
麻酔も無しに生身の腕を吹き飛ばしたんだ、分かっていたとは言え、撃てる精神がどうかしている。

「悠河!!」
「キャハハハハハッハハハッハハ!!ミリーソイツマカセタ。弱者?強者?嗚呼あれでしょ?小細工に引っ掛かるおバカさんでしょ?」
「……腕丸ごとの手榴弾。普通じゃない」
「普通じゃない?普通でいられるはずないじゃん。単身で国家を相手にするんだよ?尖兵の人間兵器に一矢報いるのに腕一本って、むしろお釣りが出るわ」

腕と胴体は破片で切り刻まれ、アバラは折れ、衝撃と弾丸で内臓のダメージは甚大。
こんなに傷つくのは初めてだ。
彼女も初めてだ。
腕を吹っ飛ばす経験などある方がおかしい。

そんな彼女が、戦えて――――僕が戦えない道理はない。

「なめんな……後悔させる」
「後悔などとうにしてるわよ」
「ももか、タイミング合わせろ!!」

真に警戒すべきは左手の銃。
片手リロードはお手のものと。
僕は、何の迷いもなくＰ８拳銃を抜いた。
僕の撃つ弾は演算された軌道上に撃つ百発百中の精度。
相手が次に何をするのかが分かってしまう。
装弾数１５＋１発。
頭に二発、胴体に三発、のち二発は頭を庇った左手に命中すると予測。
発砲。

「イ、たい!!」
「防弾繊維かな、貫通しないなんて良い服だ。けど痛いモノは痛い」

痛みに僅かに怯んだ『鬼』の右腕の肘を『超振動デバイス（ヴァイロ・オーケストレーション）』を発動しながら掴んだ。
この手合いは何をするか分からない。
なら、痛みで何も出来なくすればいい。
ただでさえぐちゃぐちゃの右腕の肘部分をぐつぐつにし――――
――一本背負い。
痛みに声にならない喉を潰した悲鳴が聞こえるが、このまま地面に叩きつけるのではなく、投げ飛ばす。

「諸共飛ばせ……軽くなって一石二鳥だ」
「りょーかいっと！」

今のももかは僕と同調している。
『鬼』とミリー、互いが衝突するタイミングで殴り飛ばす。

「きゃッ」
「ぐッ」

その二人に――――――ももかの鉄球グローブが火を噴いた。
二つの鉄球グローブが火を噴出して砲弾の如し飛来する。
ももかの兵装鉄球グローブは上司が作り命名した。
通称『ロケット砲弾鉄球』――――――名づけセンスは皆無だ。

「貴方たちにピッタリな爆弾です。弾け飛んでください」

『ロケット砲弾鉄球』が着弾――――――弾けた。
爆風の煙が揺らめき、こっちに突っ込んできた。

「二つとも抱え込んで身を挺してワタシヲ守ったつもり？いい迷惑なのよ!!」

演算予測を超える自己犠牲。
それを瞬時に受け入れ攻撃に転じるプロモーター。
失った右肘を僕に向ける。五メートルもない。
接近格闘で無力化すべきか？
銃で牽制？
この時点で、やることが決まっている『鬼』の行動は速かった。
肘に仕掛けられた『バラニウム散弾』が暴発。
この距離では悠河は避けることなく蜂の巣。
それを護ったのは、イニシエーターとしてプロモーターの盾となり飛びかかったももかに全弾命中する。

「キャハハハハッハハハッハハッ!!貫通力のない散弾で助かったわ

ね!!散弾が脅威を発揮する〝面〟になる前に全弾体で受け止めるなんてミリーみたいね!!」

「こ、の!?」

ほぼ零距離で受け止めた筈のももかが、パンチで『鬼』の脇腹を貫通させていた。

「な……で……」

「威力高すぎて貫通しちゃった」

「……もう一本腕はあるんだよォォォォォォ!!」

左腕から矢じりが飛び出し、ももかの右腕を固定する。

「弾けろ」

「え? やだよ」

パネルのピースのようにももかは右腕を肩から外した。

起動した爆弾は止められない。

自爆。

「~~~~~~!!!???ぐぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎやああああああああああ!!!!????」

両腕を失いながら双眸から殺意はきえない。

「しねぇえ!!」

口の中から銃口が除く、ここまでして武器を体に仕込む『鬼』の執念。

凄い人だ。

その意思の力だけは尊重しよぅ。

「超振動デバイスッ!!」（ヴァイロ・オーケストレーション）

心臓を完璧に破壊。

終わりだ。

「カハ……ごめんね、マイクおにい、ちゃん……」

悠河は敵が死のうが何も感じない。

敵の死を悼むよりももかの状態が気になった。

「なんだその体は？」

「ん～いいよ、説明してあげる」

もう使い物にならない腕を回収してももかは自分の身体を解説する。

「義体、サイボーグ技術だよ。脳などの重要器官……八割以上サイボーグの元『人間』、らしいよ」

「らしい？」

サイボーグでさえ驚きなのにらしいとは？

「そもそもモデルとベースの違いが何なのか分かる？」

「考えた事もなかったな、言い方の違いだとばかり思ってたし。……モデルは『呪われた子供たち』の生まれた時から宿している……天然……いや、だけど……ベースはそうなるよう調節して生まれたのか？」

確信はない、けどこれが本当なら――――。

「そうだよ。モデルはそうなった。ベースはそうなるよう作られたんだ。ある一人の科学者によって」
「ま、まて、それが本当なら……」
「一旦落ち着いて、この体についての説明でしょ?私はね、『呪われた子供たち』になる一歩手前になるよう調整されて生まれたんだ。それで如何したと思う?私のベース・蝦蛄、モンハナシャコは、私がその能力を引き出してるんじゃなくて、サイボーグの人工筋肉のあれやこれ等が拒絶反応なく扱っているんだよ」

「天童式戦闘術一の型三番ッ」

蓮太郎の椀部・疑似尺骨神経に沿うようにエキストラクターが黄金色の空薬莢を掴みだし、回転しながら蹴りだされる。

「轆轤鹿伏鬼!!」

カートリッジ推進力により加速された蓮太郎の爆速の右拳が、影胤のフィールドを貫通。
確かな手応えに影胤は成す総べもなく吹き飛ばされた。
靴底を削りながら、倒れることなく踏みとどまった。
追撃をかます延珠に小比奈が邪魔に入った。

「エンジュエンジュエンジュえんじゅうううう!!」
「邪魔だッ!!」

神速の斬撃と神速の蹴りが鍔迫り合い、刹那の拮抗に拳を叩き込んだ。

その刹那の更に刹那に小比奈は小太刀を引き拮抗状態を解き、一回転。
斬撃のコマは必勝を持って俺に切り刻まれる。
延珠が居なければ。

「邪魔だと、言っているッ!!」
「くッ」

両刀を靴底で弾きかれ、たまらず後退する小比奈に延珠は更に蹴りを放とうとするが、俺は延珠に腕をつかみ下がらせる。
延珠のいた場所が爆発のような土煙が立ち上がる。
影胤のベレッタ拳銃の援護射撃である。
危機を察した延珠は俺を抱えジャンプし飛び跳ねていく。
それを猛追する銃弾は、延珠が飛び移った直後の足場を一瞬に弾痕だらけにして破壊する。
延珠は大きく飛んで、廃墟の倉庫街を見定め、俺の肩を二回叩く。
放すぞ、その合図。
コンテナの影を利用し死角に移動、司令塔であるプロモーターを叩くのがタッグ戦での定石である。
見失っている今がチャンス、コンテナの影から飛び出しざま生身の影胤にＤＸで応射。
確実に命中する銃弾は、小太刀で斬り払われた。
足が震える。
冗談じゃない。
恐怖を晴らすため撃ちまくる。
それを嘲笑うかのように快音とともに片っ端から弾丸が撃墜される。

「そんな、馬鹿な」

延珠も顔を青ざめながら蓮太郎に寄り添う。

不安にさせてどうする。

「……延珠、一対一で影胤を倒すのに……いや、俺がやる。同郷として決着をつけなきゃいけないんだ」

「嗚呼戦いたい、血肉を削る闘争に没頭したい。だが、だがだがだがァッ、今こそ尋ねたい。なぜじゃまをする。私と君は同郷だ、同族だ、同じ存在だ。存在理由は只々ガストレアを殺す兵器、それだけなんだ」

「……どういうことだ」

「分からんかね?我々新人類創造計画は殺すために作られた。モノリスが崩壊し、ガストレア戦争が再開すれば、我々はその存在意義が証明される。憎しみは消えない。戦争は終わらない。私達は必要とされているッ!!分からないかい里見くん?ガストレア戦争が継続している世界こそ我々新人類創造計画の兵士としての勝利なのだよ」

蓮太郎はハンマーで殴られたような衝撃を受けた。

それまでに此奴は狂っている。

「まさか貴様ッ!……そのためだけに……?」

「だとしたらなんだというのだ?人類が絶滅するなど些細な問題にすぎない。我々は戦っていなければ誰も必要としてくれない。さあ戦争!!もっと闘争を!!これは私の私による私のための戦争だ。誰にも邪魔はさせない」

「夥しい量の血を啜っておいて、まだ殺戮を求めんのか?」

「これは壮大な実験なのだよ!!私に易々と殺されるような人間はどのみち私の理想郷の中で生き残れなどしない。君のイニシエーターが『呪われた子供たち』だと露見した時の周りの反応はどうだった?祝福されたか?鳴りやまぬ歓声に心洗われたか?歓喜のうちに胸に抱き留められたか?そんなことあり得ない。私は選ばれた。小比奈も選ばれた。君たちも選ばれた。さあ里見蓮太郎、君の欲するすべてを与えてやる。私と共にくるのだ」

「ザケンじゃねぇよクソ野郎!!貴様の語る未来ッ、断じて許容できねぇッ!!」
「ならば死ね」

影胤が銃口をこっちに向けるのを見て、延珠が突っ込んだ。
銃口に気がいっていた延珠は小比奈の横やりに崩され、足を掴まれ俺めがけて投げ飛ばされる。
照準が向けられる。
バラニウム弾はマズイ、延珠には致命傷だ。
延珠を受け止めそのまま半回転した。

「哭けソミドーッ、唄えゴスペルッ」

直後、九ミリバラニウム弾の嵐が背中に殺到する。
身体が躍る――――歯を食いしばり、耐えた。
生きている、即死は免れた。
蓮太郎はプラスチック製の注射器を取り出し、薬液を注入する。
これは諸刃の剣だ。
『ＡＧＶ試験薬』――――ガストレア研究中に室戸董が作り上げた、人間の再生能力を瞬間的に飛躍させる薬である。
この作用は、バラニウムの再生阻害を上回る。
二十％という超高確率で被験者がガストレア化する副作用がなければ、医療界で及ぼす影響は計り知れない。
弾丸が体外に排出される。
これさえあれば――――。

「――――終わりだ。我が奥義を見せよう……」

トンっと、脇腹に手が添えられる。
〝来る〟、手遅れで、もう間に合わない。
この男が、〝終わり〟と言ったのだ。

正真正銘――――――切り札。
義眼の演算装置がスパークし、瞼の裏がチリチリ焼けるような痛み。
コレは奇跡に近い、『ＡＧＶ試験薬』による一時的な肉体の活性化と、義眼による思考加速。
普通なら間に合わない追撃を、この二つが合わさる事により実現した。
地を蹴り、足から炸裂音が鳴り響き、空薬莢をインジェクト。
後方に向け推進力を足の裏から噴射。
ほぼ同時に腕から空薬莢が飛び出し、驚異的な速度で下からすくい上げるようなアッパーを放つ。
〝天童式戦闘術一の型十五番〟
「――――――『エンドレス・スクリームッ』!!」
「――――――『雲嶺毘湖鯉鮒ッ』!!」
斥力フィールドが圧縮され巨大な槍上になり、拳打がぶつかりあい落雷を轟かせ夜よにまき散らす。
実力は影胤の方が上、圧倒的に勝てる相手ではない。
しかし、反撃を想定していなかった影胤の青白い槍は、蓮太郎のすべてが宿った〝今までの自分〟に軌道を大きくはずし――――――破裂音と共に超音速で振るわれたアッパーが影胤を体ごと上空十メートル打ち上げる。
何がおきたか訳が分からないって顔をしてるな蛭子影胤。
それでいいんだ。
貴様に何がおきたか分からず殺されていった人たちと同じ想いを背負え。
スラスターの角度を後方に撃発。
影胤と同じ高度まで跳躍し、体を半回転、頭を下にしながら脚部の薬莢をまとめて撃発させる。

「天童式戦闘術二の型十一番」

彼と目が合う。

人類を超える上位存在となり、初めて味わう人の頃の感性。

彼は諦めたかのように小さくしゃがれた声をだした。

「そうか……私は君に、負けた、のか……」

この敗北で彼もまた強くなる。

だが蓮太郎は、影胤を生かす気など毛頭なかった。

「『隠然（いんぜん）・哭汀（こくてい）・全弾撃発（アンミリテッド・バースト）』ッ!!」

オーバーヘッドキック――――超バラニウムの爪先は、フィールドを突き破り、仮面ごしに顔面に振り下ろされる。

水きり石のように凄まじい速度でコンクリートをバウンドし、海面まで叩き落され、百メートル以上先まで吹き飛び、あたりに津波のような水柱を生みながら沈んだ。

戦っていた小比奈と延珠も静観プロモーターの決着を察し――――

――延珠の方を振り返り笑って見せた。

「よっしゃあ勝ったぞ延珠」

そんなポカーンと驚くなよ、俺も驚いてるよ。

「そんな、……パパァ、パパァァァァ!!」

彼女はもう敵じゃない。

終わったんだ。

これで――――その時胸ポケットが震え、電子音が響く。

《生きてるみたいね、里見くん》
「終わったよ。約束通り勝ったぜ木更さん」
《見てた。でも君に悪いニュースを一つ伝えなきゃいけないわ》
「……悪いニュース？」

ヤな予感がする。

《落ち着いて聞いてね……ステージ――――――ザァ―ぁザ……》
「え？」

蓮太郎は知らない。
木更たち以外にこの戦いを観戦していた者がいた事を。
直後偵察機が撃ち落され、ジャミングがされた事を。

「見て……否、見させて頂いたよ里見蓮太郎くん」

その男は兎に角場違いなかっこだった。
白衣――――医者、学者、何でもいいが何故ここにいる？

「あれ？微妙な反応だな、もしかして愛しの彼女とのひと時をぶっちされて怒ってる？そりゃ知りもしない赤の他人が、全部終わった後で”見させて頂いたよ”とか登場したらそりゃ困惑するわ。行き成りしゃしゃり出て何様だよってね」
「……何者なんだ、あんたは？」
「何者か……『木原』と名のっても君には理解できまい。詳しくは菫くんに訊いてくれたまえ」

菫さんの知り合いか？でもなんだ、この男とは生き方が相容れないと直感する。

「正直君が負けたら即彼女を投入する予定だったけど……どうでもい

いか。嗚呼さっきの電話の内容だけど僕が変わりに説明するよ」

――――――ステージⅤのガストレアが姿を現した。

これから何が起こるのか説明され、もしかしたら撃退できるかもしれない可能性を説明された。

ガストレア大戦期末期の遺物――――――完成はしたが、ついに一度も試運転もないまま陣地放棄を余儀なくされた超巨大兵器。

通称『天の梯子』――――――またの名を『線形超電磁投射装置』直系八百ミリ以下の金属飛翔体を亜光速まで加速して撃ち出すことの出来るレールガンモジュール。

〝君が撃つんだ〟

訳が分からない。

そこまでの事情に精通して何故自ら動かない。

〝場所は……一目で分かるな。軽く準備しといたから、後は弾を込めて狙いを定め引き金を引くだけ〟

守りたいものがあるなら守ってみせろと言われ――――――やるしかないだろ。

白衣の男はいつの間にか姿を消し、声だけがこだました。

〝東京エリアを救えよ、ヒーロー〟

ゾディアックの終焉の泣き声が聞こえる。

本当に救っちゃったよ。

憧れるなぁー。

元凶である影胤を撃破し、ステージⅤゾディアック天蠍宮（スコーピオン）を『天の梯子』で斃した。

ＩＰ序列は１２万３４５２位。

元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊「新人類創造計画」の人間兵器。
高校生で。
女難の相。
正義感が強くて、人を引き付ける何かがある。
見つけたよ。
この物語の主人公（ヒーロー）を。

「君の親御さんも正義感の強い、いい迷惑な人たちでしたよ」

彼が僕の所まで辿り着くのはそう遠くないのかもしれない。

第二十七次観測

「私の眼は悠河どうよう機械で、同調できるよう改良されている。シャコの目からそんな改良ほどこすんだから凄いよね」
「眼だけと思っていたからな……全身をここまで精密に作れるとは」
「きゃ！ちょっ、あんまりぺたぺた触られるのは……こまる」
「ちょっと気になってね。また頼むよ」
「え……あぁ、うん。分かってたよ、そうだよねー悠河はノーマルだもんねー（隣の住人に影響されてアブノーマルになんないかなー）」
「僕の義眼は二世代型の最新版だ。蓮太郎くんと比べるのは止してくれないかな」
「そーゆー意味じゃないんだけどな……そ、そんなことよりもっと聞きたい事ないの！」
「うむ……お前の話しが本当なら体重が重いのは納得だ」（第二十四次観測推奨）
「だから乙女の体重の話しはしないで」
「どうでもいい、訊かせろ。能力が使えるのはサイボーグの御蔭ならそれは誰でもいいのか？」
「どうでもいい……そだよねーどでもいいよねー」
「ももか？」
「んえナンデモナイヨ!?唯の独り言だよ!!?そうだサイボーグ、他の人も私のように全身サイボーグにしたら使えるのかって話でしょ！」
「お、おう」
「（あれ～若干ひいてね？）バンバン量産されたらそりゃ『呪われた子供たち』の存在意義はなくなる。でも能力の付属なしでいいなら悠河みたいな機械化兵士もいる。ドクターなんて人より動ける程度の義体なら機械化兵士の総額金と維持費の十分の一で作れるよ。肝心な誰でもかってのは無理。無理無理無理――――――ガストレア化しちゃうよ」
「……何で使える」
「『呪われた子供たち』一歩手前ってことは、それはもう『呪われた子

供たち』ってことにならない？」

哲学的質問、何分専門外だ。

それでもそれに近い答えを尋ねているのなら――――。

「感染者か」

「グッド、一定量のガストレアウィルスを注入された生物は感染者になりガストレアに変態する。その感染者は人でありながらもうガストレアでもあるんだ。私は『人間』と『呪われた子供たち』の間になるよう生まれたどうしようもない落ちこぼれだよ」

落ちこぼれ――――だがそれでは説明がつかない。

「お前はどちらでもない中途半端な存在なのは分かった。だがそれとお前以外が使うとガストレア化するのには何の関係性がある？」

「それは――――」

「それは僕が説明するよ悠河君」

「誰だ!!」

誰も居なかったはずの『鬼』の死体のそばに佇む白衣の男。

誰だ？白衣の男を護るように待機する三人も只者じゃない。

何より、ももかが怯えている。

僕に寄り添い震えている。

此奴らは一体……。

「実際に合うのは初めてだね。僕は『木原』、君の上司だ」

妙に聞き慣れた男の声は、上司である『木原』のものだ。

それだけで信用するには怪しすぎる。

「そんなに警戒するな、ご存じ『木原』様だ。君にくっ付いているもも

かに訊いたら分かるんじゃないかな」
「……ももか？」
裾を掴まれながら震えが伝わってくる。
尋常じゃない、これには身に覚えがある。
あの日、僕が『木原』と呟いたあの日と似た反応。
「……『木原』なんだな？」
小さく、頷く。
「そうか」
それ以上は詮索もしない、壊れてしまいそうだから。
「納得してくれたみたいだ。それじゃ改めて説明するね。ももかの肉体情報とサイボーグの情報は同じに作られている。人工筋肉、人口神経、人口臓物、ももかが『呪われた子供たち』になったらベースはモンハナシャコで確定している。それを違和感なく、ももかのＤＮＡデータを成長させ、サイボーグに組み込んでいる。ようはその義体はちゃーんと生きてんだよ。あ、サイボーグだからってガストレアウィルスはマズイ、君達の定義で言う所の『人間』と『呪われた子供たち』の間の存在であるももかはとても不安定な綱渡りをしている。肉体と義体でバランスをとってるんだ。だからあまり義体の性能を落とすような無茶な使い方は好ましくない。軽い傷はガストレアウィルスの恩恵で人工筋肉も何でも治るけど腕は生えてこないなー……後で作ってあげる」
「……ご説明ありがとうございます『木原』さん。ももかもこのままじゃ不便だと思うのでよかったです」
「そ♪んじゃ本題に入ろうか、まさかそれだけの為に来たとかないよね？」

「まさか、嫌な予感がこれでもかと感じてますよ」
「ならよかった。このままじゃ不完全燃焼でね、彼女を試せなかったのはデカい。データを取りたかったよ……おっと脱線した。腕なんて後で幾らでも直してやるから主じ――――――里見蓮太郎くんを回収してきてくれないかな？」
「実験材料、もしくは駒にすると？」
「んな無粋な、死に掛けている彼を無事病院まで生きて連れてって欲しいだけだよ。その際、自分の身体の事をバラしといて、このままこそこそ義眼使うの面倒でしょ？」
「し、しかしそれでは！」
「大丈夫、室戸菫が背後にいるのはちゃんと知ってる。そこからグリューネワルト翁に行くことはない。『木原』にして貰ったといいなさい。それが最善だ」
「……何者なんですか」

この男が不気味だ。
理解の及ばない存在ほど怖いものはない。

「なに、唯の『木原』だ」

立ち去る『木原』に付き添う二人の少女は最後までももかと目を合わせなかった。

「……ももかの説明の方が面倒だ」

あれが『木原』、ももかの生みの存在。
ももかは今年で十歳だ。
これは――――――どういうことだ。

木原は退屈そうに眼を擦りながら、彼女に寄り添う伊熊将監に声を掛けた。

「心配しなくても彼女は起きている。もう自分で呼吸も動く事も声も出せないけど、脳は起きている」

この容器に入っていればそれだけ生きられる。

生命維持装置がチューブとして小さな肉体を蹂躙するように取り付けられ、呼吸器を肺まで居れ固定されている。排出物が容器内の緑色の液体と混ざらないよう下半身を覆う機械が取り付けられている。

これはレルネ専用『愛の棺桶』の簡易型をモデルにした兵器。

必要なのは高度な演算が可能な脳。

ベース：ドルフィンは作ってなかったせいか、コレを使える子が一人もいなかった。

まさか――――――

「まさか、並の脳では廃人になるとはな……夏世の専用装備確定だな」

五翔会の秘密基地の一つを貸してくれる約束だ。そこの格納庫に彼女を収納する。

僕は将監の肩を掴み耳元で語り掛ける。

「さぁこれが君の選択だ。彼女は生きている。生きているんだ。君の声は脳を通じて伝わるし、脳波を読み取って機械が彼女の声で通訳してくれる。伊熊将監……彼女を守るんだろ？男なら最後まで守ってみせろ」

「あぁ……俺は何をすればいい？どうすりゃ守れんだ？」

「簡単だよ、僕の仕事引き受ける……それだけで彼女を守ることにつながる」

「仕事？」
「彼女を安全な場所に移動させる。でもそれじゃあ宝の持ち腐れだ、この装置に幾らつぎ込んでいると思う？うん？」
「お、俺の……稼いだ金なら……」
「そんなんじゃ足りない。維持費も加算すればもっと足りない。でもそこを……僕が提供する仕事を引き受けるだけで免除してもいい。逆に給料も出そう。そう!!これは彼女の為になるんだ」
「あいつのため？」
「ガストレアウィルスの汚染を解決できるのは僕だけだ。僕の下で働けばその方法を真っ先に夏世ちゃんに試させてあげる。救えるんだよ彼女を」
「あんたの下に付けば救えるのか？」
「そうとも、世界でただ一人僕だけが彼女を救える」
「……わかった。何だってする。仕事をくれ」
「話が早い、ではさっそく君のヤル気を確認させてくれ」

”君の元雇用主三ヶ島影似を殺してこい”

その瞳には一つの決意。
千番台？勿体無い勿体無い、彼は強くなる。
何より東京エリアで自由に動かせる手駒だ。
丁重に扱うつもりだ。
それにしても、人権が軽い世界になったものだ。
『呪われた子供たち』は人間じゃないと定義する者たち、その自分たちでさえ軽いものだと気付かない。
この世界は――――人類は死に掛けている。
終末論を信じるなら、この時代こそ終末なのかもしれない。
滅びが近いのなら、人間様が招いたツケを人間様がはらうだけだ。
これは人間がどうにかする問題だ。
ガストレアウィルスもゾディアックも人間の科学で生み出すのが可能な領域なのだ。

何と恐ろしい、何と滑稽か。
この問題が解決しても人間は再び自分の科学（手）で首を絞める事になる。
いつか、必ず。

その翌日、三ヶ島ローヤルガーター代表取締役三ヶ島影似が殺害されたと東京エリアのニュースで流れた。

第二十八次観測

ティナ・スプラウトにとっての日常とは――――――

『呪われた子供たち』として集められた私たちは親の顔も場所も戸籍も何もない。

最初は名前すらなかった。

首輪のように付けられた番号付のタグ。

個を識別するナンバー。

少女たちに求められるものは一つ。

役に立つのか、役に立たないのか。

午前は勉学、生きるため戦うための知識を学び、人とガストレアを殺すための武器の組換えと扱い方を学ぶ。

午後は実技、身体能力が元々高い『呪われた子供たち』には基礎体力をつけるなどの訓練はなく、組手と武器の扱いをひたすら叩き込まれる。

娯楽はない、毎日その日の評価を開示され月一に退場者が発表される。

退場者のその後を知るものはいないが……想像する恐怖が彼女たちを駆り立てる。

ここでは死ぬと命令されれば死ぬよう教育されている。

それでも、まだナンバーで呼ばれる間は個として識別されるが、退場者（ロスト）はマウスと化す。

死ぬこともできない拷問に近い実験を強要されるのを恐れ、退場者（ロスト）に選ばれたものに時折自殺をしようとする少女もいる。

それを許してしまうと連帯責任で自殺した少女と同じグループに所属している少女たちの中から成績関係なしにランダムで数人身代わりにされた。

それを知った施設の少女たちは同じグループに所属する少女が自殺しないよう自分たちで手足を拘束して研究者に引き渡すのが恒例となった。

ここで唯一信頼するのはマスターのみ。

マスターだけを崇拝し如何なる命令にも疑問を抱かず忠実に実行する。

少女たちは道具で、『呪われた子供たち』はマスターに使われる命。

日々減っていく少女たち。

家族がいた。

姉妹がいた。

大切な仲間がいた。

明日には消えるかもしれない淡い関係。

そんな日常に最年長であるティナ・スプラウトはマスターであるエイン・ランドの手により『呪われた子供たち』から強化狙撃兵に造りかえられた。

麻酔はない。

痛みに慣れるよう訓練されているが、頭を開き脳を弄くられる感覚には手足の腱と関節にバラニウムを埋め込まれていなければ暴れていた。

ハイブリッドとして新たに造り出されたティナ・スプライトはマスターの忠実な駒として与えられた能力とモデルを駆使し、その身を暗殺者として完成させた。

マスターのイニシエーターとしてティナ単独の戦闘力でＩＰ序列９８位を誇る。

彼女と同じく、生き残った選ばれた妹たちは初期型のティナ・スプライトと違い、真にマスターの求めるハイブリットとして９８位を超える化け物となった。

同じ施設で同じ環境で育った姉妹として、ティナ・スプライトは少女たちを大切に思っている。

姉妹は家族でティナの身内。

最年長であるティナは姉妹たちの中で多くの出会いと別れを経験している。

それが原因か、彼女の本質か――――――――妹たちより寂しがり屋で、人の温もりを求めている。

マスターの命令に疑問を抱くな、殺せと命令されれば身内でも殺

し、死ねと命令されれば脳を自ら破壊する。
でも少女は根が優しいから。
暗殺者として任務と関係のない人殺しを好まないし、ターゲットにも十字を切り謝りながら引き金を引いていた。
そんな日常（毎日）に特別な非日常はなく、今回の任務も一人の要人の暗殺。
現場はアメリカではなく日本の東京エリアということを除けばいつも通りの日常。
任務上世界のあらゆる言語を習得しているティナは、会話などのトラブルを起こすことなく入国する。
体質上太陽が昇っている時間帯が弱い彼女は寝惚けることが多々ある。
パジャマのまま自転車に乗って出かけ、一般人に絡まれる。
眠気で回らない頭でも、こういう輩はどの国でも同じなんだなと変わらぬ日常をすごす。
傷つけず一人でどうやり過ごそうか悩んでいると、不幸そうな顔つきをした男の人が助けてくれた。
それはティナ・スプライトの日常において在り得ない存在。
他人も姉妹もマスターも助けてはくれない、そんな弱い子は実験マウスになる。
この男の人はティナの人生観では〝在り得ない〟ことをやってのけたのだ。
物語の中にしかいないと思っていた存在。

「正義の、ヒーロー……生まれて、初めて見ました」

ティナ・スプライトは生まれて初めて非日常に足を踏み入れた。

「嗚呼……確信したよ。二つ名持ちの百番台に単身で勝利をおさめ、あまつさえ死闘をやってのけた互いの心を通わせ苦難を乗り越えた仲間となっている。暗殺ターゲットだった聖天子も惚れているとはいえ蓮太郎くんに甘すぎる。国家元首の暗殺未遂犯の死刑を取り消すなんて並大抵の批判なんてレベルじゃない。嗚呼けど、それを可能にするのが主人公（ヒーロー）か」

ティナ・スプライトは救われた。

他の妹たちと違いティナ・スプライトの性格――――本質が優しすぎたんだ。

ティナはずっと非日常に憧れていた。

もしも……もしも……と、何処までも優しい姉はその優しさを妹たちに教えられなかった。

あの場所では間違っているから、マスターに命を捧げ命令に従順でいれば百番台のティナ・スプライトを含めた五人の姉妹には不自由はないのだ。

任務がなければ惰眠を貪ってもいいし、お菓子をお腹一杯食べてもいい。

実力がすべて。

ただそれだけ。

そこに優しさなどない。

あるのは命令に従う従順な駒と己が絶対だと信じる自己の強さ。

愛という何とも平凡な逃げ道に逃げたティナ・スプライトは己の価値観で救われたのだ。

ほかの妹たちも同じだなんて安易な考えはいけない。

ティナ・スプライトのように救わなきゃと考えるのも烏滸がましい。

彼女たちは自己の価値観でもう生きてるんだから。

「その点ヒーローは弁えている。自分の救える範疇をしっかり弁え

……抗っている。暗殺者であるティナ・スプライトと心を通わせ改心させ、『光』を教えた。凄いよなぁー僕には無理な思考だ」

僕が造り出した娘たちはレルネとエヴァを除いて愛なんて注いだ記憶がない。（エヴァにとっては傍迷惑）

娘たちは僕のことをどう思ってるんだろう？

創造主である父親（ドクター）に逆らえないよう教育だけはしたけど木原的感性に任せたせいか一般的にはよくないお父さんと思われてる可能性大。

「ももかは僕に会うのが恥ずかしくて隠れたんじゃなくて会うのが嫌で隠れたのか？……今の時代的風景や思想、『呪われた子供たち』の価値と可能性を考慮すれば『平和』のためには仕方ないことだ。争いと戦争がガストレアのせいで頻繁に起きているせいで科学の発展はここ十年で半世紀分進んだとみている。でもね……人あっての科学なんだ」

《ドクターは私に何と言ってほしいのですか？》

ゴポッと空気の泡が液体を上り溜まらないよう排出される。

仮死状態に近い夏世は自分で肺も動かせない。

生命維持装置が自動で生命活動を促している証拠だ。

「いやさ……正直僕のことどう思ってる？割とマジに答えてくれると助かる」

《……怖い人です》

声は紛れもなく彼女の声。

口にチューブを入れられている彼女は喋れないが、この声は紛れもなく彼女の声だ。

それもそのはず、生前の千寿夏世のデータを基に脳波を読み取りコンマの間で声に翻訳しているのだから間違いようがない。

それより肝心なのは、滅多に落ち込まない『木原』が今の発言で少なからずダメージを負っているのが重要だ。

「……僕って怖い？」

《怖いです。『木原』さんの話を聞く限りだと貴方の娘たちは貴方なしではほぼ生きられない体にされています。浸食率は上げないことが前提なのに逆に上げて、体に機械を埋め込んで人の形に保つよう制御しているのが現状です。私のような例もいることですし、生まれてから今までドクターの実験に侵されてきた彼女たちはもう分かってるんですよ》

翻訳機能が優秀すぎるせいか、声に怒りが含まれているのがわかる。

誰もが『木原』を恐怖し、逆らえず、言いたいことも言えなかった彼に対し、彼女は言い切った。

《〝自分たちはドクターのマウス（モルモット）にすぎない〟》

元平凡な日本人の精神では首を括って終いかねないと『木原』の感性に任せて生きてきた。

その方が楽だから、『木原』として生きていけば余計に悲しまず楽しく生きていけるから。

新しいことに挑戦し、失敗と成功を重ねるのが楽しくて――――

―

「なぁんだ……『木原』の本質は理解していたつもりだけど……僕自身の本質はこれっぽちも解析できてないじゃないか。人体実験は悲しいことだ。人の命を何だと思っている。でも未来のため、人類のために。……だからって人の命を粗末に扱っていい理由にはならない。……そうか、うん、そうなんだよなぁ……」

《なにをいって……》

「どうやら待たせるのも持つのもあまり得意じゃないらしい。科学者として実験の結果を見るまで安心は出来ない。何かの拍子にダメになるのを考慮すると今からの方がいい。断然その方がいい!!」

《ドクター?》

「どうもおじさんとも呼ばれたくてね。本人たちの意思を無視するようで悪いけど……まて、今年以内にと条件を付けて……ジョセフにだけ言う……レルネのかわいい反応が見られる……娘の初心なシーンと子供ができて一石二鳥……この方針で行こう。そゆことだから一旦帰ってお仕事してくるよ。将監くんも頑張ってることだしね」

去っていく後姿をレンズ越しに見ながら、誰に聞こえることなく翻訳機能をオフにし少女は呟く。

”私は……お荷物だ”

第二十九次観測

絶対悪、純粋悪とは？

――悪しかなく、生きるとは人の罪である。

――悪が生まれるには過程があり、そこから悪が生まれる。

――悪とは対立する第二者が決める。

――悪は己と第二者が決めるのではなく、第三者が認識する。

――悪と正義の定義を決めるのは一個人でも少数派でもなく多数派。

――悪を決めるということは正義を決めるということ。

――悪も正義も存在しない。

自分を完全な悪と定めて生きている……生きられる人間は存在しない。

悪をするために生まれ、悪に生涯を捧げ、悪そのものが生きがいであり人生。

それは人ではない別の何かだ。

大義名分。

主義主張。

宗教的思想。

多数派。

……エトセトラ。

これらは、個人・集団にとって正義の行いであり、〝正当防衛〟である。

正義は自分たちにあり――――神のお導きである。

そこに悪はない。

あるのは互いの正義をぶつけ合う正義の使者。

最前線で戦う者は命令だから仕方ないと大体が割り切る。

そうしないと人の心が持たないからだ。

拷問が大好きとか、人殺しが好きな人間も環境のせいだったり、家族や部下に優しかったりする。

生まれながら拷問が大好きで悲鳴や不幸を愛していて総果てに人間を玩具（劣等種）など考える悪の化身など存在しえないのだ。

そんな存在が生まれたなら、生まれたのが間違いで、生物が兼ね備える〝子を残す〟とは真逆の人間を殺し私だけの〝個を残す〟を淡々と太陽の上った時間に起き朝食を作り食べる生活習慣と同じ感覚で狂人以上に人間を殺す存在。

必要悪でもない。

絶対悪で、純粋悪で、悲しい過去も過程もなく、カッコいい悪とかそんな括りじゃなくて、殺されても悲しいとか生き様が男らしいとか交感がもてる悪でもない。

人間性もないドス黒い真っ黒の更生の余地もない悪。

相手の嫌がることを積極的に弱みに付け込み裏の裏をかいて安全地帯から確実にやるのが悪の基本だ。

正々堂々も男らしさも悪の定義すらない。

要するに、もしも人間として純粋悪が生まれたのなら――――裏で暗躍する大物感のある小物だ。

『木原』は悪か？

悪とは人に害を齎す存在。

その存在は絶対悪でも純粋悪でもない。

悪の定義で考えるなら『木原』とは必要悪である。

科学の発展のため文字通り『ナニ』を仕出かすかわからない一族。

どれだけ非人道的で外道な悪な実験を実行しても、最終的には科学の発展と人がより良き世界を手に入れるためのより良き犠牲となるのだ。

これは悪か？

普通に考えて悪だ。

こんな人物と一緒にいるだけで狂って恐怖しオカシクナル。

良心のある感性で『木原』を理解しろってのが無理な話だ。

ただ”そうゆうもの”だと認識しろ。

『木原』は悪とか正義とか……常識人では理解されない『木原』の定義が存在する。

人の命を何だと思っている？

心は痛まないのか？

常識人の心の在り方を説いたところで『木原』の芯は曲がらない。

『木原』は今も昔も言うことは一つ――――”科学の発展には犠牲はつきものだろ？”。

巳継悠河は五翔会のエージェント――――正確には教授の壁となる存在として生涯を捧げた信仰者。

教授の手足としてあの御方に仕えたい――――ただそれだけが自分の存在意義。

それがあの御方の傍を離れ何故か民警をしている。

蛭子影胤テロ事件以降は平穏なものだ。

「……平和だ」

十年前、ガストレアウィルスが世界を侵食し同時期に発生したガストレアにより人類はモノリスの壁に覆われた壁の中に閉じ込められた。

島国である日本も世界の崩壊には抗えない、人類生存可能領域は五つのエリアに分かたれ、一億二千万人の人口を誇っていた栄光の日本は見る影もない。

ここは五つのエリアの一つ、東京エリア。

太陽の眩しい熱攻撃を全身に浴びながら、これといった任務も民警の仕事もない日々が続く。

これといった用事がなければ、勘が鈍らないようももかと組手をし、移ろい行く雲と東京エリアを散歩をしながら暇をつぶしている。

目的もなくぶらぶらと町を歩いていると不幸そうな人物にばったり出会ってしまった。

「おや、お二人でデートですか？この状況でよくやりますよ。先輩は僕と違って経験豊富ですし当然といえば当然ですか。女性（レディー）の扱いはお手の物と」

「お、お兄さんとは……その、そんなんじゃ……」

「変な誤解を招く言い方をするな。ティナを用事のついでにエリア内を案内していただけだ」

「この世界に名だたる五変人の一人である先輩が真面な弁解をしても説得力に欠けますよ。己が内に秘めし衝動を正直に認めたらどうですか？せ・ん・ぱ・い」

「世界の五変人……そのようなお方と知らず、……御見それしました。わたしもそのぉ……たべられちゃうんですか？」

「なんだその称号初めて知ったわ!!本気にするな、こいつは俺を社会から抹殺しようとしているだけだ!!」

「東京エリア一……五変人『ロリコン』の名を与えられた先輩は謙遜が過ぎます。延寿やももかの次は金髪ロリですか、僕の知らないところでどれだけ幼女引っ掻ければ気が済むんですか？今までどれだけ女

の子を泣かしてきたのやら……一応パートナーなんでももかを泣かしたらケジメつけますよ」
「その嘘八百な二つ名どこソースだ!!?まて、言うな!言わなくてもわかる!……室戸さんだな?あの人以外在り得ない」

別の意味で信頼されてるねあの女。本当に教授と同じ五賢人の一人なのか?

先輩には両目の事を知られている。目よりももかの機械仕掛けの体の説明の方が少々難儀したが、『木原』に両目を引き換えに死にかけの親友の妹をサイボーグにしてもらったと――――――我ながらあっぱれな演技力で深く聞かないで空気を醸し出し、今のところ追究はない。

室戸董に両目を調べられたが、「これが『木原』……あの狂人めェ」と文句を言いながら何とも言い難い表情で解析されたのは苦い思い出だ。ももかのは更に酷い

「五賢人の一人である博士のお言葉を否定しろと?否だ……東京エリアを救った英雄であったとしても三百番の民警と五賢人の発言の重みは天とドブだ」
「正論ぽく聞こえるがあの人に会ったんだよな?」
「そりゃもう目を調べるんですよ。世間話から変人と名高い所以を垣間見ました。……マジヤバイ」
「……一度会えば本能が理解してしまう。嗚呼常人とは違うんだなと、そこまで分かれば俺の冤罪も」
「それとこれとは話は別です。だって見る目がヤバイですもん」
「俺の目が原因なのか……!?」

驚愕に顔を歪め余程ショックだったのかバランスを崩しよろける。そんな蓮太郎さんにティナは本気心配している。結構ペアを組んだらバランスがいいこの二人、狙撃手と特攻格闘家。

シャコを前衛に近距離と狙撃手もこなせる僕だが、ペアを組んだ

ティナ・スプライト相手では勝算は低いだろう。百番台の実力は伊達ではない。

「現状が現状です。チームリーダーとしてスカウト活動中……ですよね蓮太郎さん」

「……嗚呼。最初に声をかけようとしたがももかが散歩中って言うもんだから最後にしとこうって決めたんだが、マジにただの散歩かよ」

「慌てても状況は改善しない。いつも通りに体調も精神も万全にすればいい。……僕を探していた理由は見当つくんで答えますけど、僕もう先客がいるんで先輩のアジュバントには入れません」

「ちっ……当てにしてたんだけどな」

「メンバー集め頑張って下さい。スプライトはしっかり者だから先輩の面倒お願いね」

「はい、お兄さんは私が責任をもって面倒見ます。それとティナで結構です」

「そお？それじゃティナって呼ばせてもらうよ。僕のことも悠河で」

「はい悠河さん」

「お前らは俺の保護者か……」

別れを告げ二人とは逆の方向に歩を進める。あの二人の反応は正しい。のんびりとしている時間はないのだ。

ここからでもその全貌が見渡せる黒い塊。縦一・六一八キロメートル、横一キロメートル、長方形の巨大なバラニウムの構造物。東京エリア外周区・第四十区にそびえ立つ三十二号モノリスは六日後崩壊する。

バラニウム構造物であるモノリスはガストレアにとって有害な磁場を発している。それが巨大であればあるほど効果を発揮する。その条件に当てはまらないのがガストレアレベルⅤ。その前提があるから人類はまだモノリスの壁の中で生きていける。

「ステージⅣ・アルデバラン……バラニウム侵食能力を持つガストレ

ア」

残された六日間で状況を打開する策、統率、戦力が必要となる。策に関しては、天童菊ノ丞、聖天子が対応し最善を選ぶ。統率に関しては、十年前東京を守り切った自衛隊は独断専行が目立つ民警と違い、誇りと意思で繋がっている。戦力に関しては、情報通りレベルⅣがアルデバランのみなら現状の戦力で事足りる。

状況は生き物だ。一刻一刻に状況は変化する。『木原』にはアルデバランが現れた時点で報告してある。詳しい情報元は知らないが、上に潜り込んでいるのは確か。五翔会の闇は深い。

今回あの人は間に合わないかもしれない。壊滅する都市に貴重な飛行機を飛ばす馬鹿はいない。ルートも限られてくる。それを踏まえ、『木原』からの命令は至極単純。

〝指定された場所に決められたルートに従い移動しろ〟

僕だってただ散歩していたわけじゃない。命令通り必要だから散歩をしている。

行ったり来たりと3時間弱、人里離れた舗装工事が行き届いていない廃墟の街並み。崩れた瓦礫が散乱した下町の道路、ここが的地。そこにポツンと新品の高級車が一台。ナンバープレートには『９８６（きはら）』。

「乗れってことか……ふざけてるのか？」

運転手はいない。自動か、はたまた人が来るのか――――後部座席以外はロックがかかっている。後ろに乗れってことか。

更に待たされ三十分、一人の巨漢が運転席に乗り込んだ。

「やっとですか。さっさと……」

俺はこの男を知っている。ただの人間が千番台で生きがい調子に乗っていた愚か者。

「伊熊、将監なのか？」
「久しぶりじゃねーか悠河。協力者がまさかテメエだったとはな」
「……生きていたのか」
「思い出話としゃれこみたいが時間が惜しい。唯でさえ無駄な時間を使ったんだ」
「それには同意だけど、このルートを指定したの誰？」
「俺の相棒だ」

この男はこんなにも素直でだったか？
車のエンジンが掛かり、前進する。キーは刺さってもいないし、ハンドルさえ操作しいない。結局自動操縦か。

「……変わったね、君は」
「こんな時代だ……変わらねー野郎なんていねぇよ。俺もそうだった……切っ掛けさえあれば、これまでが嘘だったみてぇに変わっちまう」
「……」

切っ掛けさえあれば、人は変われる。どんな形であれ、人は切っ掛けさえあれば変わってしまう。教授に目を頂いた瞬間、僕は変われた。人は時間をかけて変われる時もある。だが、劇的に変われる瞬間がある。それが、良いことなのか悪いことなのかは分からない。けど、その『選択』を掴み自分の意思で選んだのなら――――後悔はない。
貴方もそうなのでしょう？

「降りろ」

外周区に位置する廃墟の工場に到着した。

「それで、ここからどこに？」
「地下だ」
「へー……僕にも知らされていない拠点が在ったのか」

パッと見廃墟に似合うエレベーター、動く筈のないソレを将監がカードキーを差し込むとスムーズに動き出す。
揺れも無く三十秒で目的地に止まる。このエレベーターだけでここの設備の重要性を理解する。

「最深部にいる。歩くぞ」

一方通行。ライトに照らされた最深部の扉だけが見える。距離はおよそ百メートル弱。エレベーターから直線に位置する最深部の扉が不気味に映る。

（何を目的に設計されたんだここは……）

悠河に知る由もないが、通路左右の壁の奥には最深部に接続された最新の機器が敷き詰められている。ここがもとはただの地下倉庫だったと誰が思うか。
大事な協力者兼実験体に『木原』が手を抜く筈がない。娘であるレルネの最終目標は完全なる『人間』を生み出すこと、これはその過程で生まれた産物。目標に向かって進みその過程で生まれた好奇心に『木原』は素直に実行した。
スローガンは〝『人間』の進化とは異なる別のプロダクション〟。
器の中身を見つけた『木原』は、倉庫そのものを千寿夏世のために丸っと魔改造した。施設丸ごと千寿夏世の機能として。

「おらぁ挨拶しろ……東京エリアの頭脳（ブレイン）に」

扉を潜ると壁一面が機械音と数値の羅列に囲まれた異様な空間。

その中央で規則正しい機械音に合わせてステップを踏むおぼろげな少女。

落ち着いた色の長袖のワンピースにスパッツ。ぱっちりとした眼元をしているが、どこか冷めた雰囲気をしている。

「ドルフィンの……」

「お久しぶりですね悠河さん。お茶の一つでも出すのが礼儀なのですが、濡らすのはよろしくないのでご容赦を」

笑顔で迎え入れてくれた夏世の瞳には、感情の色はなかった。

第三十次観測

「身の上話と洒落込みたいですが私たちがどうしてこうなったか……ききたいですか？」

「……遠慮するよ。他人の事情をズカズカ踏みにじる趣味はない。どうしても胸の内がもやもやとしてるなら、それで納得するなら話せばいい」

「……わかりました。では予定通りブリーフィングを現時刻をもって開始します。本作戦成功には二つの要素が絶対不可欠です。一つ、アルデバラン撃破。二つ、新しい壁の建築。アルデバランを斃さない限り同じことが繰り返される可能性があります。退けたはあってはなりません。モノリスは六日後の崩壊から三日後にすべての準備が完了し新しい壁が組み立てられます。ここまでで何か質問はありますか？」

「僕たちに与えられた役は何？壁をつくる技術もないし自衛隊と民警に交じってアルデバランを斃すわけだけど、具体的に何をするわけ？」

「黙って夏世の指示に従ってろカス」

この野郎は本当に伊熊将監か？あの天上天下唯我独尊俺様最強理論の伊熊将監なのか？イニシエーターを道具として扱っていたあの伊熊将監が”夏世の指示に従え”と従順にそれっぽいこと言ってる。要するに何が言いたいかというと。

「女の子に尻尾を振って、イヌみたいですよ。嗚呼もしかしてこれがギャップ萌えってやつ？」

「死にてェなら素直にそう言えやクソガキィ!!」

完全にブチ切れた将監が巨剣に手をかけたその瞬間、夏世が将監の目の前に現れ怒りを諫めた。だがおかしい、部屋の中心にいた夏世、僕と将監の狭間にいる夏世、二人の夏世が存在している!?――――

―否、そうじゃない。二人目の夏世が出現する瞬間、体がノイズのように揺らめいた。

「これは……立体映像……？」

それこそ有り得ない。僕の眼をもってしても出現の際生じる僅かな空間の揺らぎ――――――ノイズがなければ本物と見分けることができないなんて。

「悠河さんは勘違いしてます。片方ではありません、両方とも実体がありません」

「なぁ!?」

二人が同時に消滅する。二人の夏世が偽物であることの証明でもあり、本物は影すら見えない。

「黙って聞け、小難しいわかんねェことは夏世が説明する」

暗に自分は馬鹿ですって認めてる大馬鹿。

「貴方が『木原』と呼ぶ人物……ドクターと呼ばせてもらいますがこの拠点を改造して私を設置しました」

「せっち？」

「今後の作戦上中心を担う私の存在を教えます。この部屋、この拠点そのものが私の脳。分け合って脳以外の機能が停止している私は生きるプログラム、ＡＩとして機能してます。私は演算処理装置、壁の内側すべてが高度な演算処理を可能とする機器で埋め尽くされ、そのすべてに私は接続されてます。悠河さんの両目の事は知ってます。人間の脳に繋がれたチップサイズの装置だけでその眼は数秒先の未来予知さえ可能とする。なら……ドルフィンである私の脳と、サッカーグランドと同じ面積２１６０坪に設置された代理脳が何も問題

なく機能したら……『呪われた子供たち』の定義に収まらない枠の外の化け物だと思いませか？」

戦慄した。

おそらくだが、『千寿夏世（システム）』はまだ機能していない。衛星、防犯カメラ、携帯、電子機器に接続されれば不特定多数の人間の完全なる未来予知が可能になるのでは？第二者が正しいデータを入力する必要がない分、その可能性は無限だ。

「ドクターは私を樹形図と例えました。『千寿夏世』は大木、枝分かれの仕方は漏らさず・ダブらずの超高度並列演算処理器。六日後の終わり七日の始まり午前零時に地上に蕾を咲かせます。ドクターは私（プログラム）の起動を心待ちにしてデータに噛り付いて興奮が治まらないと通信が送られてきましたが……映像と音声どちらから観たいですか？」

「遠慮しとく」

「……そうですか」

感情の色がわからないのに何故か残念がってるのはわかった。

「……注意事項が一つあります。自衛隊が壊滅、民警の指揮系統が一度崩壊してから手を打ちます」

それはあまりにも遅い対応。いや、一度会ったならだれもが思うはずだ、『木原』はどんな手段を使ってでも実験をやってのけると。

そう考えるとおかしい、まるで自衛隊と民警が負けるのが分かっているかのような対応だ。

「邪推は簡単に見抜かれますよ」

「それこそ心配無用、僕は組織の人間だ。上の指示には従う」

「……本日のブリーフィングは終了です。明日からはももかと直接来てください。将監さんもお仕事頑張ってくださいね」

「嗚呼……」

将監は夏世に背を向けいち早く退室しようとするが、歩みを止める。

「……もう自分を卑下するな。お前は『千寿夏世』、それだけだ」

返事は聞かず、そのまま出ていく。

僕は何も語らずその背中を追った。

「アルデェダラン？」

「アルデバランですよドクタ～お馬鹿じゃないんですかぁ～？ガストレア研究の第一人者がなに寝惚けてやがるんですか～」

「相変わらず僕の失言には手厳しいね沙希ちゃん。もっち覚えてるよ、金牛宮（タウルス）の腰巾着で高々ステージⅣの雑魚でしょ、まぁあの子の試運転にはもってこいだ」

『木原』のおかげでローマ連邦は世界で一番平和の国家と呼ばれている。『木原』が開発した『呪われた子供たち』は序列一位を含め上位に複数いる。木原一族ももう彼しか居ないわけだが、秘密主義の先代『木原』達が残したデータが沢山ある時点で、他の五賢人より数歩も先に進んでいる。

「日本の五翔会って何処までしんようできるのですドクタ～？グリューネワルト翁の支配組織……投資者？何でもいいですけど、うちを蹴落とすき満々組織あそこくらいですよ？」

「エリアごとの支配者は利用する関係、信用なんて（笑）。グリューネ

ワルト翁はそもそも『木原』を理解する数少ない理解者。こんな時代だから『木原』の価値をちゃんと分かってる。科学者である限り『木原』には絶対劣る。それは仕方ないんだ。あ、チケットとれた？」
「政府のお偉いさんが認証するわけないじゃないですかぁ～。どこも東京エリア見限ってますよ～」
「やっぱ無理か……規約で一位は国を出れない。僕もいろいろ縛りあるし……プロジェクトに立ち会えないって『木原』を侮ってね？」
「科学者を侮ってますね～安全地帯から結果だけ待つって政治家ならいいですけど科学者にとって侮辱でしかない。アイツら誰のおかげでここ等の平和が手に入ったと……」
「キャラ変わってる。一旦落ち着け沙希ちゃん」
「あ、ごめんなさいドクタ～。でも実際どうします？」

『木原』の思考パターンと演算回路を外付けした沙希ちゃんは日に日に『木原』に近づいている。一族が増えるのは歓迎だけど、前の自分を見失わないでね。

「研究所に監視はないし、僕が外に出なきゃむっこさんはなーんも言ってこない。なら、僕以外の職員が出ても何も干渉してこない」
「？要するに？」
「顔と指紋、声帯を変えて他の職員と入れ替わる。お偉いさんには”調査のために使い捨ての科学者一人派遣する”て連絡しといて」
「手術はどれも時間がかかりますし包帯をとるのだって……」
「生物、とくに人体で僕ほどの科学者はいない。三十分もあれば全部終わる」
「了解ですドクタ～！後のことはお任せくださいな！」

ふふふ、『木原』の行動力をなめるなよ。実験のためならその力は無限大だ。

悠河と別れた後、自分より弱い奴の下にはつかないと宣った片桐兄弟を降し、アジュバントの一員にした蓮太郎はティナとともに室戸董の研究室に訪れていた。

影胤事件でステージⅤから東京エリアを救った英雄として十二万番台から千番台まで上げ、百番台９８位ティナ・スプライトが引き起こした聖天子暗殺事件でティナに勝利したことでＩＰ序列３００位となった蓮太郎の機密情報アクセスキー・レベル５。序列十番以内に入ることで与えられる最高機密アクセスキー・レベル十二には程遠い。

「ティナは帰らせた。で、話して起きたいことって何だ先生？」

「なーに、いくつか聞きたいことと観て貰いたいものがあるんだ。その前に……君の質問に答えようじゃないか」

「……そんな分かりやすいか？」

「君の悩んだときの顔は〝あの幼女貴重なハーレム計画に加えてやるぜぇ、あと幼女の腋うめぇペロペロ〟の次に見分けがつく」

「その作り話言いふらすなよッ!!」

「くくく……善処する。私も暇じゃないんだ。私に質問する価値がある悩みかどうかは自分で決めることだ。無いならさっさとその顔はやめたまえ」

「……」

蓮太郎は悩んだ。聞くべきか、聞かざるべきか。

けど――――

「『木原』って何なんだ？」

「何者、目的、立場、関係、様々な答えを用意していたが〟何なんだ〟と来たか。……そうだな、君の脳みそでも解釈できる言語となると文

字通り『別次元』の科学者だよ」

生きる伝説人類最高の頭脳五賢人の一人、室戸菫が『別次元』と評価を下す『木原』。学校の授業を真面に受けていない連太郎にしたら、室戸菫は『別次元』の頭脳を兼ね備えた偉人だ。変人で変態だが尊敬する命を救ってくれた先生だ。

先生が引き出しからファイルを取り出し中身をテーブルに広げる。

「？……これは？」

「九十九ももか。レントゲン写真、ＤＮＡ情報、破損した腕げた腕の解析。どれもこれも見たことがない、コレに対する扱いは私でも手が余る。ブラックボックスの塊だが分かることも多々ある。コレをつくったやつは頭がオカシイッてことだッ!!発想も方向性も狂人の領域を超えまず思いもつかないロジック、頭のネジ一本二本どころか歯車なしで回ってるんじゃないか『木原』は!?……ここまではいいね？」

「……先生より更にヤバイ変人って認識でいいか？」

「面白い例えだ。強ち間違いでもないしその認識で構わないよ。問題は君の隣人の眼にある。ももか君とあの少年はつくりが噛み合っていない」

「なんだそりゃ？腕も眼も同じサイボーグだろ」

「すー……はぁ」

何故にわざわざ深呼吸してから溜息ついた。

「君の眼は素材からして機械、壊れたら私直々に直すしかない貴重な手足だ。ももか君のはそもそも大きな損傷がなければ直す必要もない。義手自体が生きて修復してくれるんだよ」

「そりゃ……どうゆうことだ？」

「体は七割、九割ほどが人工物だが替えの利かない重要器官、脳や心臓の成長に合わせて成長している。裏を返せばその器官は脆弱で並み

の人間とあまり大差のない数値、恐ろしいまでのバランスでこの肉体は形を保っている。この異常性が少しは理解できたかな？ようは私ごときでは作れないあーちょうヤベーマジ分からんッだァ!!」

「……そんなにか」

「そんなにだ。だがそんなことどうでもいい、人工物以外は普通の子供と全く同じ値……子供をわざわざ『呪われた子供たち』と同じ領域まで押し上げるとは……吐き気がする」

『呪われた子供たち』は今も増え続けている。なのに態々莫大な金をかけて『呪われた子供たち』を人工的に造り出す。需要がない。それどころか、未来ある子供に選択さえ与えず戦いと血の道に踏み込ませた。『木原』はなにがしたいんだ？

「話がずれた。『木原』とは何かだったな、あれは都市伝説……よくある陰謀説の類で”科学業界に科学の発展の最先端に居ると言われている一族。新しい発明には『木原』の影がある”我々の業界では伝承のレベルで根付いている。噂には噂される根本が必ず存在する。その元凶がアレのわけだ。事実奴は天才、完敗だよ。五賢人神無城沙希は奴の傀儡、隠れて好き勝手やるって寸法さ」

「……裁かれないのか」

「いるわけないだろ。ティナをつくったエインズはアメリカの後ろ盾があるように、『木原』はローマ連邦が守っている。誰も責められない。力を持たなきゃ生き残れない時代、悲しいかな力を生み出す存在は何より優先される。証拠があれば別だがね」

「ももかとティナが悪事の証拠だッ!!」

「世界は『呪われた子供たち』に優しくない。社会的地位も低い『呪われた子供たち』と人類最高の頭脳、どちらを選ぶかはその辺を歩いている化粧臭いおばさんでも答えられるさ」

「そんなの！」

「蓮太郎くん、君だって東京エリア以外の国の『子供たち』が天国みたいな生活を起きっているなんて思っているわけじゃないんだろ？君

がすべての問題を解決しようとするのは傲慢だ。いま東京エリアで起こっている『子供たち』への強力な差別運動もね、起こるべくして起こっている。すべての物事には原因と結果があるんだ」

ようやく先生が話をどこに持っていこうとしているのか理解する。

「国外のイニシエーターより扱いがましだから、延寿やティナが汚い言葉を吐きかけられ踏みにじられても仕方がないと?それが聞きたいことか?」

「極論するとそのとおりだ。どうせ君の事だから、どうしようもないことで心を痛めて馬鹿な考えを巡らせているんじゃないかと思ってね」

「言わせてくれ、俺は先生のそういう冷めたところ、大っ嫌いだ」

「……ここからが聞きたいことだ。君は無力だ。君がこんな世界を本当に変えたいと思うなら、君は政治を裏で牛耳る天童一族の家を出るべきじゃなかった」

俺は――――――間違っているのか?この問答には答えなどない。

俺は――――――何をしたいんだ?俺は頭は平均より良ければそれでいいレベル。これまでの話、素直に里見蓮太郎が何をしたいのか。

「政治家の代わりに民警として、世界からガストレアを駆逐する。世界の変え方は一通りしかないわけじゃないんだろ?東京エリアは狭い、民警の護衛機をつけないと航空機は飛べないし、海棲ガストレアの危険があるから海では基本泳げない。俺は延寿に、広い世界を見て回ることができる自由を与えたい。先生、俺は延寿のために世界を変革するよ。そのために倒す。邪魔するなら『木原』だろうがステージVのガストレアだろうが全部全部ッ!!」

菫は口を開けたまま固まってしまった。だが次の瞬間、天井を仰い

で額を叩きながら爆笑し始めた。

「ハハハハ、そうか『木原』とステージVを全部ね。いや参った。出来るか出来ないかはさておき、よくぞ言ったよ蓮太郎くん。……君がまぶしいよ」

「そんなことねぇよ。先生だって……」

「……私ではダメだ。少し物事に詳しくなると人間のどうしようもない面ばかり見えてくる。やはり私はこの薄暗い地下室がお似合いだ。光の下はもう歩けない」

「……」

「蓮太郎くん、この世界でもっとも美しいものが何なのかわかるかい？」

「いや……なんなんだ？」

「仏教の世界観ではね、蓮の花だそうだよ。つまり君だ。『蓮』太郎くん。君の魂は美しい」

蓮太郎は胸が詰まった。迂遠な性格からいって、いまのは最大級の賛辞といえる。

「いまの君ならば、あれを見せても大丈夫だろう」

影胤事件、聖天子暗殺事件、ＩＰ序列３００位へとなった蓮太郎の機密情報アクセスキー・レベル５。序列十番以内に入ることで与えられる最高機密アクセスキー・レベル十二には程遠い。

先生の机の上のスクリーンに映像が表示される。

「国際イニシエーター監督機構が推奨するＩＰ序列は姑息だと思わないかね。序列が上がるごとに〝擬似階級の向上〟や〝機密情報へのアクセス権〟などの特権が与えられるこのシステム……まずはこれだ」

スクリーンの画面に細かい文字がびっしり刻まれていて、２０３１年から過去二十年は遡った年表らしい。一読して眉をひそめた。

２０２１年に勃発したガストレア戦争初期から末期にかけての項目がほとんど真っ黒に塗りつぶされている。試しに黒く塗りつぶされた項目をクリックしてみると『アクセスキーのレベルが不足しています』というエラー音と共に寒々しい文字が吐き出される。

「気づいたか、蓮太郎くん」

「ああ……」

学校で習う近代史の歴史年表にはこんな黒線は存在しない。なぜなら項目そのものが綺麗さっぱり消えているからだ。ガストレア戦争の混乱期において多くの資料が焼失し、サーバーを保存しているデータセンターも数多くやられたので正確な資料が残っていない、というのが理由らしい。八十億だった人類が十分の一以下になるまでガストレア戦争で殺戮されたのだ。残っていないのも仕方ないと納得した。

したが――――

「嘘なのか……」

『アクセスキーのレベルが不足しています』とは、裏を返せばアクセスキーさえあればこの黒塗りもオープンとなり、真実がつまびやかになるおいうことだろう。『ガストレア戦争により資料が焼失した』という政府側の公表は、真っ赤な嘘だったことになる。

なぜ政府がガストレア戦争の詳細を隠す必要があったのか？あるいは隠さなければならないほどのものがこの下に隠されているのか？

「蓮太郎くん、これをみろ」

レベル五で閲覧できる情報を下にスクロールしていくと『関東会戦』、『第二次関東会戦』だったり、忘れがたい『蛭子影胤事件』の名前もある。

細かい文字で先生の指示がなければ読み流しそうになっていた一文、脊髄に雷撃が奔り、瞳が裂けんばかりに見開かれる。

〈『――――――二〇二一年某月某日、七星村消失』〉

『七星』――――――『七星の遺産』。何故かゾディアックガストレア『天蠍宮（スコーピオン）』を呼び寄せる触媒になり得たのか、ついにわからなかった謎のアイテム。

そして、ジュラルミンケースの中の入っていた『七星の遺産』の正体は、壊れた三輪車だった……。

確信に近い予感が駆け抜ける。これの真相は『絶望』しかない。

「七星村の記述は他を探そうがこれ限り、そして……これを探すには苦労したよ」

いまはほぼ現存しないガストレア戦争が起こる前の日本地図だ。

先生によると、七星村とは元富山県の県境にやや近く、三〇〇〇メートル級の山々からなる飛騨山脈のふもとという位置。当然、長野県そのものがガストレアが闊歩する未踏査領域化しており、おいそれと近づくこともできない。ともかく、蓮太郎は七星村の位置を深く心に刻む。

「年表に戻るが、何処か疑問に感じないかね」

黒塗りの年表には西暦だけが表示されている。西暦２０２１年ガストレア戦争混乱期から末期までの記録は存在しないことになっていた。ガストレアは突如現れ殺戮の限りを尽くしたからだ。

資料が焼失したのは二〇二一年――――――なぜ二〇一四年から黒塗りで隠されている。

「これは妄想、憶測でしかないが、ガストレアが表舞台に上がる七年前……二〇一四年に何かがあると私は睨んでいる。寧ろ、元凶はココから始まったのかもしれない」

情報が一気に流し込まれ心拍数が上がり、軽い興奮状態の蓮太郎の背筋に冷や汗が流れる。

つまり、政府はガストレアウィルスの存在を七年前からすでに認知していたことになるのではないか？いや、それにしては対応があまりにも雑だ。

「蓮太郎くん、バラニウムを発見しモノリスを発明したのが誰だか覚えているかね」

「そんなの神無城……さき……」

「そうだ。『木原』の傀儡神無城沙希が発表したんだ。ますますきな臭い」

「じゃあなにか、『木原』はガストレアウィルスが何なのか知ってるってのか？」

「そこまではわからない。だがね、科学の発展に必ず〝い〟るのが『木原』だとゆうことを忘れないでくれ」

室戸董を超える科学者。五賢人の一人神無城沙希を裏で操っている。科学の発展には必ず『木原』がいる。ガストレアウィルスの何らかの秘密を握っているかもしれない。

もしまた向こうから接触があれば――――――聞きたいことができたぜ。

「心してくれたまえ。さらにヤバイ……これが、『アルディ・ファイル』だよ」

最後に観せられたそのファイル、スクリーンには高画質で記録された人型の人ではないナニか。手術台は配線が束になり歪なナニかに

繋がっている。この世の恐怖と醜さと歪さを詰め込んだソレは確かに生きている。胸の膨らみ、腰のくびれ、男性器の膨らみが見えないことから女性であるということが分かる。ガクガク膝の力が抜け、机を咄嗟に掴み転倒を免れる。

いつの間にか、画面下に『Ｄｅｖｉｌ　Ｖｉｒｕｓ』という文字が表示されている。

時間にしては一分も満たない。だが蓮太郎にとっては永劫に等しい時間だった。

「先生、あれは……？」

「私にも分からん。しかし、『アルディ・ファイル』というからには、アレが『アルディ』なのだろう。『アルディ』は、おそらくコードネームだ。アルディピクス・ラミダス……現在発掘された人類の化石で最も古いのは四百四十万年前のラミダス猿人、つまり『アルディ』でね。しばしば『人類の最初の女性』の比喩として用いられることがある。まあ科学的には最古というわけではないのだがね」

「『人類最初の女性』……？じゃあ、先生アレは!?」

「あの人間の目は赤かった。多分あれが〝最も初期に感染した、人類最初のガストレア〟なのだろうね」

衝撃に脳を揺さぶられる。気づけばスツールに座っていた。

「右下に出ていた『Ｄｅｖｉｌ　Ｖｉｒｕｓ』って文字見ただろ？あれってガストレアウィルスのことだよな」

「常識に考えてそうだろうね」

「なんで『悪魔の』ウィルスなんだ？」

「悪魔のような振る舞いをするからだろ？残虐非道、人間を悪魔に変えてしまう」

「じゃあ、サテンでもデーモンでもいいしゃねぇかよ……いや違う、そうじゃない。なんで『Ｄｅｖｉｌ　Ｖｉｒｕｓ』のまま世間に伝わらなかったんだ？なんでガストレアウィルスをガストレアウィルスと

呼ぶようになったんだ?」
「理由がひつようなのかね?人口に膾炙する過程で名称が変わることなどザラだと思うが?」
「〝噂には噂される根本が必ず存在する〟。ガストレアも何かしらの意味があると思うんだ」

考えれば考えるほどわけが分からなくなる。何が何なんだ。何がどうなってんだ。どうしてこんなものが――――そのとき、携帯電話が震えてはっとする。着信名は木更だ。

《里見くん、ニュース観た?モノリスの白化現象が発覚したわ。もう隠しきれなくなったみたい》

地獄へ引き落とす。『木原』?ガストレア?そんな疑問は突き付けられた地獄には霞んでしまう。
なぜ俺たちを狙う?そんなにも人類が、人間が憎いのか?
モノリスの崩壊まであと、四日。一刻も早く、仲間を集めなければ。

第三十一次観測

『蓮太郎』

これは夢、記憶の泉に沈んだ小さな欠片。

『蓮太郎』

声変わりを終えた男性が自分を呼んでいる。
名前を呼ばれただけなのに、その声は語り掛ける。
優しく、窘める。

『……蓮太郎』

声の主はどこか困った声色を滲ませる。
この人は誰だ？覚えのない声、なのに知っている。
聞いたことがある。

『もう行かないとな』

頭部に大きくて暖かい手がのせられる。
慣れてないのかわしわし髪が乱れる。

『■■さんも■■さんも、■■さんのプロジェクトに招待されたんだ。
科学者にとって名誉ある実験なんだ。詳しい説明はこれからだけど
……冥利に尽きるよ』

この人は誇りを持っている。
自分に、仕事に、役割に。
なにより――――――

『僕はね……君に誇れる■■さんで有りたいんだ。普通とは違う、他の子にちょっと凄いって自慢できるカッコイイ男でいたいんだ』

この瞬間、俺はどう思ったんだ。
どこか懐かしいのに、顔が見えない。
声だけが鮮明に語り掛けてくる。

『れんたろう。■■さんを困らせないの』

柔らかな女性の声、また頭部を撫でられるがさっきと違い気持ちい。

『ごめんねれんたろう。でもね、これは必要なことなの。今はどうにもできない病気や体の不自由な困ってる人を治すのが医師なの。主任の■■さんは医学のスペシャリストだから世界中の人を救えるの。このお誘いはみんなに誇れる凄いことなの。だから……ね？ほんの少し我慢して、男の子だもんね』

顔が思い出せない。
誰なのかも分からない。
けど、知っている。
俺は――――この人たちが大好きなんだ。

「……ゆめ」

体が重い。疲れが取れていない。

「……なんの夢だったか」

よく覚えていないが、何故か懐かしく感じた。

「それにしても、あちこちイてぇな」

体が長時間重圧をかけられ、固定されたみたいに痛む。固まったを伸ばす。

「……ンンッ」

「？」

何故か妙になまめかしい声が耳に響く。

（くそ、寝たりねーのか）

血の気があまり通っていない右腕を動かす。腕を軽く引き、手首を回す。

「ン……あッ」

別の意味で血の気が引いていく。聞き間違いでも何でもない。男としての本能か、戦う者としての本能か、窮地に立たされた男の頭が鮮明に状況把握と思考を冷やしていく。嗚呼ヤバイ、ひたすらヤバイ、何かが巻き付き挟まれた右腕、正確には二の腕に巻き付いた何かと手首に挟まれた湿っぽく暖かい何かに――――――思考がそれ以上考える前に右腕を引っこ抜き布団を剥ぎ取った。

「んん～……朝から乱暴だぞれんたろ～、寝込みを襲うならもっと優しくしなきゃだめぇだ……ぞぉ？」

「あ？あぁ、そ、そうだな？（そうじゃねーだろ!!混乱してどうする!!?

何が〝あぁそうだな〟だよ!!まるで了解のサインみたいになってるぞ!!?)」

この危機的状況を打開すべく混乱した思考で導き出す最善の策を紡ごうとした時、下半身に何とも言い難い感触が駆け抜けた。

彼の今の心情を簡単に過剰表現で説明する――――――――活発系少女藍原延寿の元気の象徴ツインテール、普段は動きに合わせて宙に流れる流星の流れ星のきらめきを魅せる髪も、髪留めが外されストレートに無造作に流した髪が鎖骨などに掛かりナニかグッとくるものがある。

さて、ここからが本題だ。延寿は彼の腕に巻き付いていた。なら――――――ティナは?下半身に接触するこの感覚、視線を下げると下腹部あたりに西洋人形のように綺麗な金髪に整った顔立ちの少女が眠っていた。延寿は流れ星なら、人形のように整ったこの少女はさながら夏の天の川。この騒ぎで起きないところを見るに眠りは深いようだ。だがよろしくない、少女は下腹部あたりに顔をうずめ、腰に抱き着いているのだ!!寝相が悪いのか、確実に悪いが、顔をうずめながら頬ずりする少女に少年は危機的状況から命の危険(社会的)まで自分の首に縄が巻き付いていることを理解した!!※説明終了

(これはありとあらゆる角度から理論と法律と社会的に知られたら言い訳不可能即デス。もし木更さんに見られたらアウト。延寿にティナのポジションがばれると延寿の口から木更さんにばれて言い訳不可能即デス。現状を鑑みるに延寿さえどうにかすればこの状況に希望が見える!!)

延寿は寝惚けており焦点が定まっていない。夢うつつと目をとろんとしている。誤魔化せる。チャンス。延寿の対処に思考を総動員。

「な、なに寝惚けてんだ延寿?まだ早い、寝てろ」

肩をそっと抱き、眠るよう促す。

「ん……わかったのだ」

肩を抱いたのが仇になった。腕枕で寝てしまった延寿を起こさないように脱出しようとすると――――――

「……里見くん」

阿修羅がいた。振り向けばさぞかし心底見下した養豚場の豚を見る目をしていることだろう。残念ながらそんな趣味は蓮太郎にはない。

だが冷静にそれぞれの体勢をイメージすればわかる。

蓮太郎は右手を枕にして寝ている延寿を起こさないよう静かに抜こうと、右ひざを軸に軽く状態を起こし延寿の頭を覆うように逆の手をそえている。つまり顔が近いのだ。更にまるで寝ている延寿を襲う手前に見えるかもしれない（木更ビジョンでは完璧に襲っている）。そこに更なる誤解が生みだしたのがティナ、寝ている位置がまずかった。だが、まだ誤解を解くことができる。あの時はティナが誤解を招く爆弾発言と『夜バージョンのティナ』と誤解が誤解を招く自爆をしたからであって、断じてまた警察のお世話になって不名誉な呼び名を定着させないためでは断じてない!!核弾頭を落としたはやっぱティナだった。

「……兄さんのぉかたくてぇ……あついです」

「……」

「……」

「……」

「……きさら、さん？」

「通報」

またあんたかと、同じ警官に調書を取られ誤解を解くのに一時間かかった。

「またですか先輩。ロリコンなのは知ってますけど少しは理性で抑えてください」
「誤解だ……」

心底疲れた声音を滲ませた先輩。この短期間に二度も児童ポルノを犯す禁忌に手を染めるとは――――死ねばいいのに。

「……その眼をやめてくれ、何もしてないのに自分が悪く思えてくる」
「事実そうだからじゃないですか？」
「勘弁してくれ」

全くこの人は、この忙しいときに……夏世が動き出すまで僕も暇か。

「で、アジュバント結成したんでしょ？なんでまだこんな貧乏住宅で寝てるんですか？」
「そこに住んでるだろお前……木更さんとティナが加わったおかげで四チームのペアが揃ったんだが、ほら……一応学校の先生やってるだろ？」
「ええ、貴方の守備範囲内のハーレム教室でしょ」
「誰が守備範囲内だと!!嗚呼もう茶化すなら話さねーぞ」
「謝りますから、ね？」
「……いろいろ案内したからな、帰りが遅くなったんだよ。テントに戻ってもよかったが食料品を取りに行くついでに泊まったんだ。も

しかしたら……」

〝もしかしたら……もう戻れないかもしれない〟。言えるはずがない。言ったら決意が、意思が鈍くなってしまう。そんな顔をした先輩に、僕は特に何も思わなかった。この世界はみんなが一生懸命生きている。生きたくて、守りたくて、失いたくなくて――――僕も同じだ。だから何も思わない。その意思が当然だと断じるからだ。

「そうだ、先輩のアジュバントに誰が入ったんです？……尖ってそうで興味が」

「確かに個性トゲトゲの痛い奴らばっか入った。俺には勿体ない頼もしい仲間だ」

「よくそんな恥ずかしい台詞平然と言えますね」

「……話すんじゃなかった」

「すねないでください。けど……仲間か」

「悠河？」

「何でもないです。ええ……」

本当に何でもない、粗末なこと。

そう言えばと、ふとした疑問が一つ浮かび上がった。

「『呪われた子供たち』は野良が発生しないよう国際イニシエーター監督機構（IIO）か、国が設けた孤児施設（IIS）に預けるのが義務です。……怠っている国も多いですが東京エリアは比較的に治安がよく子供たちも数多く住んでるはず……それでも増え続ける子供たちに施設が足りず監視に入っていない子供たちは多いと聞くけど、施設入り出来なかった方の先生に？」

「伝手があってな、気さくで優しい爺さんが保護している子供たちの集まりがあってな、勉強や物事を教えるのが苦手とかで俺に依頼をな」

「この時期によくやりますよ」

「こんな時だからだよ。延寿、ティナ、あの子たちにこんな時だからこそ不安や恐怖を忘れてほしいんだ。その点、俺や木更さんはあいつ等に感謝しきれない」

「……里見蓮太郎、さん」

「な、なんだよ？」

僕は東京エリアで起こる悲劇の全貌を第三者で確認できる立場にいる。『千寿夏世』が起動すればどんな不利な状況でも覆せるし――――もうダメなら一発で計算できる。彼らとは仕事の関係でありそこまで親しくはない。なら――――

「あの、えっと……そ、その、どうですか？」

「だから何がだよ」

あれ、僕ってこんなキャラだっけ？らしくない、ズバッと言うぞ。

「ぼ、」

「そうそう、あいつ等がお前紹介しろってうるさいんだよ。民警同士、信頼し合える仲間は多い方がいいってよ、友達俺くらいしか居なさそうだし丁度いいんじゃね？」

「……」

「わりい、遮っちまった。それで、何だ？」

全くこの人は、なんで平気な顔で普通に恥ずかしい台詞平然と言えますね。でも、悪くない。

「いえ、やはり何でもないです。そうですね……僕も先輩のお友達に興味があるので近いうちに紹介してください」

「なんだよやっぱ俺しかいねぇのか」

「それこそ侮らないで下さい。ももかに延寿にティナに木更さん、それと……」

ドイツで別れ人類の命を背負うのを宿命づけられた幼い少女。僕にとって妹の用でもあり――――――最初の友達。

「故郷にもいますしボッチな先輩より多いんじゃないんですか」
「おいコラ身近な奴の名前しかねーぞ、やっぱボッチだろ」

こいつ。

「……細かいことはいいんですよ、ねえ―ロリコンサン」
「……ボッチ」
「ロリコン」
「ＤＶ！」
「根暗！」
「俺様カッコイイ系男子！」
「ハーレム！」
「黒目！」
「ワカメ！」

ぜぇはーぁはーぁはーぁ……こいつめ!!

「……」
「……」
「ぷッ……あはははっははははは」
「……（イラ）」
「いや～悪い、けど、ちょっとな」
「なんだよ」
「ここ最近暗い顔してただろ。なんか抱えてるって表情だったからさ」
「……そんなことはない」
「ばーか無理すんな。俺は先輩だろ?」

「……不幸顔の貴方にいわれたくないですね」
「たく、人が折角励ましてんのにそれかよ」

僕は光を眼に焼き付けるだけでいい、光を持たない光を知らない僕が光にはなれない。教授から光を頂いたあの瞬間、闇から光に導いてくれたあの瞬間、僕はただ――――光に目が離せなかった。世界は美しさに満ち、教授は光を教えていただいた光そのもの。

「敵わないな……」

僕にはないものを持っているこの人に――――

「やっぱり今から紹介してくれませんか。この眼でみてみたい」

仲間に囲まれた眩しい光景を焼き付けたいから。

第三十二次観測

自分の都合しか考えず、他人を妬むのが人間。
家族、仲間、友達のために他者を苦しめるのも人間。
信じる人のために、その人の願いを妨げる障害を排除するのも人間。
普段馬鹿にしている奴に自分を重ねてみろ、何が違う？
劣っている？
頭が悪い？
根性がない？
音痴？
物事すべて真実だけで回るのは夢物語。
自分の周りは本当に平和で誰もが幸せか？
集団の中で劣っている馬鹿を貶してないか？
他人をクズ呼ばわりする前に自分を鑑みろ、胸を張って誇れる人間はどれだけいる？
ただ暮らしているだけで他者を傷つける人間が、真に皆が幸せな世界をつくるのは可能なのか？
理想郷は所詮理想でしかない。
次世代に平和を望むならそれこそ武力で弾圧し、ユートピアを作り上げろ。
子供を産ませてユートピアに適する世代をつくり続けろ。
その時初めて、平和が訪れる。
だが――――未来を思おうが、その時代を生きているのは我々自身。
数値だけで物事を判断する人間は確かに優秀だが、好かれないし人間味がない。
感情論で判断する人間は評価はされるが他人から脳筋、物事を見据えていないなどと伐倒される。
『木原』は数値と感情の両方をみる。
数値と結果だけを求めるなら『木原』は名乗れない。

どれだけ時間が掛かろうが、効率が悪かろうが、『木原』らしさがそこになければ『木原』とは言えない。

数値で最も効率的な実験を模索しても、そこに『木原』がいるだけで台無しだ。

けどだれも逆らえない。

某科学者の想定した結果など優に超え、『木原』は結果、課題、改善点、その先まで導き出してしまう。

『木原』は人間を数値として認識しつつ、『木原』としての感情と相手の感情に正直で敏感だ。

この場合相手の感情の在り方で、『木原』に気に入られるかか決まる。

優柔不断なゴミや、使えないクズは要らない。

人間の感情を何より科学的に理解している木原だからこそ、感情の大切さを理解している。

『木原』は効率厨を敬遠するし認めない。

目的を達成するには感情は不可欠。

だけど、『木原』が他人の都合を優先するかは――――その『木原』の個性に委ねられる。

明後日、壁は崩壊しガストレアとの全面戦争がはじまる。教授にすべてを捧げる身として、ここで死ぬわけにはいかない。教授とエヴァ……百歩譲ってももかも大切だとしよう。人を殺し、裏社会で身を置いている僕がこの一年間で友達が増えた。一見不良ぶっている片桐玉樹と生意気でツンデレの片桐弓月。先輩の先輩で認めたくはないが僕より武術が強い薙沢彰磨と恥ずかしがり屋の布施翠。ペアなんていらないんじゃと思わせる剣豪天童木更と天然スナイパーティナ・スプライト。いつもその明るさで周りに元気を振り撒いている藍原

延寿。そして――――

「我儘になったものだな僕も……失いたくない」

見失いたくない。

試練を与え、耐え、苦行を乗り越えてこそ輝くというが、試練にはその人のぴったりな苦行じゃないと相応しくない。そう――――――あの人に相応しくないんだ。

「いくらなんでもやりすぎだ。汚すな、汚すな、あの光景を奪うな……」

汚い奴らだ。

「僕たちが目指す世界にゴミは要らない。未来を見据えず、停滞し、過去に囚われた愚か者など以ての外!!」

なんの戦闘手段のないゴミクズが群れをなしてわらわらと――――不愉快だ。

「……目障りだ」

証拠も血痕も残さない。

一撃で心臓を破壊する。

「な……何なんだよテメェ――!!?」

「ザッケンナァ!!」

「壁が崩壊すんのも、内側にいるガストレア共がおびき出したせいだ!!」

うるさい塵共だ。

「僕は慈悲深い……痛みもなく終わらせてやる」
「ヒッ！」

そこからは一方的な虐殺。一撃で心臓を破壊し、肉塊を量産した。
此処は外周区・第三十九区――――――太陽が昇れば子供たちが集う場所でもある。

残すところ一日になった。朝から風が強く、テントの天幕をはためかせていた。

「行くのか、今日も？」
「ああ」

テントの戸口で見送りをする薙沢彰磨はいつになくしかつめらしい顔をして立っている。

「なんでいまさら学校に行く必要があるのさ？わけわかんない」

隣のボサボサに跳ねた金髪を撫でつけている片桐弓月に、延寿は元気よく腕を振り上げて答えた。

「こんな時だからこそいくのだぁ!!」
「はぁ？」

心底理解できないという弓月の声に、俺自身も何故こんな行動をとるのか上手く他人に説明できる自信はない。

残すところ一日、今日一日を完全自由に決めたのは民警をまとめ上げている我堂長政だ。今日で最後なので自由を満喫しろとの意図らしい。確かに、いま会わなければ恋人や家族と今生の別れになる可能性はある。そして俺は、最後の自由になる日を『蓮太郎先生』として過ごすことを、ごく自然に当然として選択した。

「未練が増すだけじゃねぇのか？」

片桐玉樹はいぶかしむ表情をする。

「かもしれねぇけど最後の挨拶をしないとな」

「ふん、わかってんならまあ、湿っぽくならないよう気を付けるんだな」

「お前らは？」

片桐兄妹が顔を見合わせる。

「オレっちは明日に備えてたらふく美味いもん食って寝る」

「お前ら、他にやることねぇのか？」

「家族親戚あらかたガストレアに食われちまったしな、別れを言う相手もいねぇよ」

質問したことを後悔した。

「……お前たちは、ガストレアに復讐するために民警になったのか？」

「さーて、どうだかな。そう七面倒くさいことは考えねーようにしてっから」

「いや、考えないようにしてるってそんな――――――!!」

「ガストレアとの戦いに恨みを持ち込むやつは早死にすっからな」

胸を突かれた気がした。玉樹はズレたサングラスから覗く鋭い瞳を見られるのが嫌がるように、中指でブリッジ部を押し上げる。

「まあ強いて挙げるなら誰かの笑顔のためかな。よしッ!!マイスウィートォォォオオ!!明日に備えてもうひと眠りすっか」

余程眠いのか、弓月は頷くとそのまま寝床に戻っていく。蓮太郎は先ほど垣間見た玉樹の表情を見て複雑な心境になったが、無理矢理気持ちを切り替える。

「彰磨兄ぃはどうすんだよ?」

彰磨は天童式の道場では蓮太郎の兄弟子、本当の兄弟ではないけど兄のように慕っている。彰磨は傍らの翠を見る。

「もう少し経ったら二人で修行を開始するつもりだ。いざというとき体が動かないようでは困るからな」

片桐兄妹にしても彰磨ペアにしても、随分淡泊な話だ。まあ彼らからしたら、のんきに学校に行っている自分たちも危機感が欠如しているか。その時、テントからティナが飛び出してきて申し訳なさそうな表情で「さきに行っててください」とぺこりと礼する。木更さんよティナの立場が遂に逆転した瞬間だった。いまから、最短でたどり着いても大遅刻だが。

こうして最後の一日は粛々と始まった。三十九区行きの切符を買い電車に乗る。朝の陽ざしがポカポカと暖かい。今日が東京エリア最後になるかもしれない日だと、とても思えなかった。明日になれば千体のガストレアを率いるアルデバランとの決戦になる。二千体のガストレアもアルデバランも想像を絶する強敵として立ちはだかる。蓮太郎がかつて経験したことのない激闘になるのは必至だ。蓮太郎も延寿も生きて呼吸をしている確証がない。だから、なのか――

――残された時間の短さが、こんな何気ない時間さえも、かけがえのないもののように世界を輝かせる。

「延寿、学校は楽しいか?」

延寿は目を細めると、気持ちよさそうな表情で蓮太郎の胸に頭をこすり付けてくる。延寿から甘い日向の匂いがした。

「うん、とってもたのしいぞ。ありがとうな、蓮太郎」

「もし楽しいなら、それはお前が頑張っているからだ」

延寿は顔を上げると、胸にしがみ付いたまま首を横に振った。

「妾は知ってるんだぞ。蓮太郎と木更が夜こっそり電卓を叩きながら、妾のいけそうな場所で、一番良いところを探してくれたんだって」

「覗いてたのか?」

複雑な心境になる。こういうリアル鑑定はあまり子供に知ってほしいところではない。

「妾、蓮太郎に感謝している。……まあ、木更にもちょっと感謝している」

延寿の頭に手を回し、胸に抱く。

「なら、頑張った甲斐があった」

「蓮太郎は、先生やるのやっぱ楽しくないのか?」

「そうだな……」

がタンゴトン、車窓に流れる廃墟を眺めながら今日までの出来事に思いを寄せる。建物は瓦礫に、空だけが漠然と広がっている。

「楽しいよ」
「え？」

一度認めればこんなにも楽なのか。

「きっかけは何であれ、楽しいよ。お前のおかげだ延寿、ありがとう」

最初は目を丸くしていた延寿も、徐々に表情の形が笑みになり俺の腕に抱き着いてくる。慌てて引きはがそうとしたが、延寿のとろけそうな顔を見て、黙って延寿を抱いた。

穏やかな時間が流れていく。列車は三十九区前に到着する。名残惜しいが延寿の背中を押し降りるよう促す。今日も超満員で教室で待っているだろう。列車を降りるとそこには意外な人物がいた。

「悠河？何でこんなところに？」
「……遅刻、素行不良に時間厳守は無理か」
「遅刻して悪かったな、てかマジ何でいんだ？」

先生をしているのは話したが、特に手伝うなどの話はないはずだ。

「いえ……自主的な掃除ですよ。生ごみが投棄されてたので片づけに時間がかかりまして」
「態々やってくれたのか？」

意外だ。子供たちには無関心だと思ってたのに。

「……そのせいか掴まりましてね。今の今まで玩具にされてましたよ。……さっさと行ってください。最後なんでしょ、蓮太郎先生」
「繋ぎの時間稼ぎと掃除サンキューな、今度礼させてもらうよ」
「ま、頑張ってください。ももかたたき起こしてくるんで」

アイツまだ寝てんのか。

「そうか、お前も頑張れよ」

最後の自由をどう過ごすのかはアイツが決めること。最後にしては、らしくないことをする。

「悠河も混ざりたいのか？」

「いえいえ、ただ先輩に貢献しただけです。後輩らしいことでもしようと。そろそろ行ったらどうです？待たせてますよ」

「おう」

「悠河、またな！」

教室まではそんなに遠くない。騒がしい声がここまで聞こえてくる。そこには希望が溢れている。夢が満ちている。――――これで、最後なんだ。

一歩、教室に踏み込む。

「席に就けお前らッ!!授業始めんぞッ!!」

いつまでも続けばいいのに。

二〇三一年七月十二日午後三時十六分。

白化したモノリスが風の影響で一日早く崩壊――――『第三次関東会戦』がまったく意図しないタイミングで始まった。

第三十三次観測

ローマ連邦から輸入した最新兵器に、使い慣れた銃器と兵器を携え自衛隊は二千のガストレアと衝突した。蛭子影胤の手により一度は壊滅した陸上自衛隊特殊兵科所属駆動鎧戦術部隊を再編し戦車やミサイル群の掃討に逃れたガストレアを着々と減らし遠距離からの攻撃手段のないガストレアでは勝敗は決していた。

二千のガストレアとレベルⅣアルデバラン。幾つもの都市を破壊してきた怪物に、自衛隊は自らが東京エリアの、ひいては日本の盾で在らんとする意思と気概、第一次関東会戦と第二次関東会戦を戦い抜き化け物どもから市民を守り切った経験と自信を胸に燃え滾らせ照準を赤目に抜けていた。

「たったの二千だ!!なぁに、十年前とそう数は変わらん」
「あの巨体だ。こっちは目を瞑っても当たるぜ」
「あっちから近づいて来るから照準を合わせる必要もない」
「おいせめて目は開けて撃て、無駄弾は税金の無駄だ」
「ちがいねェ!!」

一日モノリスが崩れるのが早かろうが、歓迎パーティの準備は事前に出来上がっている。最前線で戦う者たちにとってこの戦争は、現状が最善。強いて言うなら「一日くらい待ってろよ」の声が上がるくらいだ。

「にしてもスゲーなアレ」
「パワードスーツ部隊の事か?」
「そうそうそれ。戦車の砲撃なみの銃口を片手で撃っといてあの機動力だぜ、仕事全部取られちまう。ま、楽できるからいいんだけどな」
「おいおい新設部隊にいい顔させて悔しくないのか?今こそ俺ら歩兵の雄姿を知らしめる時だぜ」
「俺はごめんだね。あんなのと一緒に並んで撃ってみろ、耳がイかれ

ちまう」
「ちがいねェ!!」

　不安要素など有るはずがない。勝つのは自衛隊。火力も統率も機動力も情報力も上上上上上上上上。新しい壁が届くまでの時間稼ぎどころか、「殲滅しちまった方が早いんじゃね」精神で殺して殺して殺してガストレアを絶滅させてやると自衛隊の心は一体となっている。

「（随時絶やさず制圧爆撃……ガストレアの生命力は脅威だが、どの部隊もカバーし合い連携も問題ない）弾を絶やすなァッ、常に弾数と残弾に注意を払え!!」

　この場を指揮する隊長は腕よりも思考を、悩むより口を動かしていた。戦いが始まりどれ程経過しただろうか。被害が少数出るのは遺憾ながら、完璧な陣形や作戦などないからだ。だが、新設した駆動機の制圧力は凄まじいの一貫だ。歩兵をカバーしつつ、砲撃やミサイルから逃れたガストレアを確実に仕留めている。負けが許されないのは分かっているからこそ、口では部下を奮い立たせる。壁が崩壊する時点で東京エリアが終わる可能性の方が高いのは計算しなくとも理解できる。それでもなお、自衛隊である彼らは戦わなければならない。十年前の屈辱は一日たりとも忘れない。煮えくり返った怒りが、隊長である彼の原動力。思考は冷静に、肉体を怒りに燃え上がらせる。自衛隊の現場を指揮する隊長としての統率力と判断力、十年間鍛え続けた肉体から繰り出す戦闘力は、ＩＰ序列２７５位我堂長政に引けを取らない。

「（作戦は上手くいっている。ミスはない。失敗もない。なら――）
――見せ付けてやろうじゃないか……後ろで眺めている民警共に東京エリアの、日本の防衛は誰が守っているかおよッ!!」
『おおおおおおおお!!!』

士気を高め、さらに活気になる。行ける行けるぞと皆が脳裏に描くのは、ガストレアの脅威からエリアを守り抜いた己の姿。いつかは、日本ごと取り戻すと己を奮い立たせる。

「（さあアルデバラン、雑魚じゃ陣形を崩せないぞ……あの巨体だ。有りっ丈の弾打ち込んでやる）」

最初の空爆で撃ち尽くしたミサイルを補給した戦闘機が戦場に返ってくる。これからその全機の火薬がアルデバランだけに注がれる。

「（いつまでも劣勢で自分たちが蹂躙する側だと思うなよ。我々人類も十年で十二分の力を付けた）怨みに報ゆるに徳を以てす……ふん、貴様らには生涯当てはまらぬ言葉だ。……撃て」

勝利は目前だ。最初は、不安でいっぱいだった。十年前とは違うのはわかっている。敵の情報と対処も十年前とは違い余りある。でも――――恐怖とアノ光景は拭えない。敗戦に敗戦を重ね、閉じ込められた。十年、屈辱に耐えながら反撃のトキを待ち続けた。そして今、閉じ込められた唯一の楽園さえ地獄に塗り替えようとしている。

「（我々は自衛隊だ。防衛の要であり、日本の反撃の象徴でもある。勝算はある。勝てる。負けない。人類の領域をこれ以上侵させない）」

それでも――――恐怖は隊長である彼を苛立たせる。その怒りを、力に変える。

「アルデバランを発見したようだな……勝った」

アルデバランさえ斃せあ残りは烏合の衆。時間さえかければ勝てる。逆に、アルデバランがいる限り負ける可能性がある。

「(見てるか民警、子供を武器にして戦わせるなんて気に入らない。俺たち大人が頑張ればそれでいいんだ)」

彼らは何も悪くない。舐めてなどいないし侮ってもいない。勝てるか分からない相手に最善を尽くしている。それでも尚、化け物は人類の予想を超える進化を遂げる。

「……ぜッ……全機……撃墜だと？ヘリは……トマホークは!?」

情報網が混乱している中、光の槍が弧を描きながら彼らに降り注ぐ。

「がァッ、ガストレアアアアアアアアアアアアア!!!」

光の槍で陣形に穴を空けられ、それを埋める指示をする現場指揮官を失った自衛隊は――――崩壊した。

《千寿夏世起動(プログラム)――――》代理脳超高度並列演算処理器ニ接続ヲ開始シマス》

〃

〃

（　　）

”

接続完了”――”全システムオールグリーン”――

”掌握ヲ開始シマス”

・　・　・　・　・　・　・　・　・

”東京エリアノ全システムヲ掌握シマシタ”》

（速い……三十分もかかってない）

《尚――――『木原』ニ従イ入力キーヲ”千寿夏世”ト任命――――『木原』ニ従イ代理脳デアル超高度並列演算処理器ヲ含ム入力キーヲ”千寿夏世”ヲ”ツリーダイアグラム”ト呼称シマス――――

「……ナルｈｏど，ｋこれは私にしか耐えられない」》

「気分どうだ？」

「大丈夫です将監さん。寧ろ気分がいいです……東京エリアが自分の体の一部に感じます」

それは全能感。夏世は東京エリアの所有する戦艦、ヘリ、戦闘機、無人兵器からあらゆる面での情報を網羅している。個人が所持しているパソコン、携帯端末、町中のカメラも夏世の目で在り耳で在り動かせる手足だ。

「これで東京エリアは思いのままか。規格外だな『木原』は」
「何だビビってんのかァ？」
「まさか……けどこのままだとガストレアに蹂躙されるだけだ。民警の敗北は貴方方の敗北を意味する。……僕も同じか」

手元の液晶パネルに表示されている情報に無い唾を飲み込む。

「勝てるのか……これは」

自衛隊の壊滅、民警は大打撃を受けた。自衛隊を壊滅させた光の槍は民警をも壊滅の危機にさらした。各民警チームがガストレアの進行を妨げている間、我堂長政率いる少数精鋭チームが光の槍が降ってこないアルデバランの内側に侵入。我堂長政は己の足一本を犠牲にアルデバランに致命傷を与え、撤退に追い込んだ。第三次関東会戦の初日は、主力自衛隊の壊滅と民警の半数近くが犠牲となり終了した。

「……戦力が半減とかそんなレベルじゃない。士気も最悪だ」
「だからこいつの出番だろ。女神の啓示だ」
「少し時間を下さい。何分初めてなので慣れるのに時間がかかります」
「なれか……感覚的にはどうなんだ？」
「そうですね……体が東京エリアになったと考えてください」
「……どうイメージすれば」
「馬鹿かテメェーそういうのはな言葉の意味をそのまま受け止めればいいんだよ。マジかよスゲーってな」
「……そうか」

何かいろいろ諦めた悠河。
そこに、予期せぬ来訪者が現れた。

「悠河!!」

「……エヴァ？」

エヴァが悠河の胸に飛びつき、放さんとばかりにしがみ付く。エヴァは悠河の胸に顔をうずめたまま何も言ってこない。どうしたものかと、落とさないよう左手をお尻にやり、右手でしっかりと頭を押さえる。撫でるのも忘れない。多分こうして欲しいだろうと思い。

「……」

「……」

何故ここにエヴァがいるのか。自分がいなくても大丈夫だったか。聞きたいことは山のようにあるが、今はどう切り出せばいいか分からずにいた。そしてあまりにも突然だった為、そんな二人を傍観するしかなかったももかは魂の抜けた心底青ざめた表情をしている。

「最新の情報を伝え忘れてたみたいだな。ドイツからお客さんだ」

絶対わざとだろうが、サプライズにしては嬉しい訪問客だ。悠河は実の妹のように思っているエヴァをただただ心配していたのだ。その間ももかの表情からは魂は抜けていく。

「あのーそろそろよろしいでしょうか？」

「!!」

夏世の声で、勢いよく悠河の腹を蹴り距離をとったエヴァはさっきまで自分の行動に顔を赤面させあたふたしているが、蹴られた悠河は地にうずくまり痛みに耐えるしかなかった。

「ゆぅ～がぁ～だぁいじょうぶ～？」

好機を得たとばかりにももかは悠河に寄り添う。鬱憤は何一つ隠

さないが。

「か、肩を貸してくれ……」
「いくらでも貸すよ～いくらでもね～チラ」

結構ガチで入ったのか、ももかの変化に気づかない悠河。ももかはももかで、悠河に見えないようエヴァを挑発しまくっている。

「……悠河のなに？」
「わたし～？悠河の一生のペアだけどぉ」
「い……いっ、しょう」
「そうそう、死が二人を分かつまでずっと一生永遠と一緒なんだから」
「へえ……で、でもそれって所詮上司と部下の関係でしょ？所詮仕事の関係で、所詮その程度でしかないんでしょ」
「へえー口減らないねー、なら君はどうなの？」
「私は！……私は……」
「わたしはぁ？」
「か、家族……みたいなものよ！」
「そっかー家族かーねえねえ悠河、この子の言ってることほんと？」

さっきから何が言いたいんだこの二人はと、話についてこれない悠河は困惑しつつ質問に答える。

「そうだ。家族だよ」

エヴァは勝ち誇った顔をし、ももかは絶望に染まった顔をする。

「エヴァは俺にとって妹だ」

ももかは勝ち誇った顔をし、エヴァは絶望に染まった顔をする。

「うっさい！バーカバーカァ！死ねぇ」
「まったく、毒舌の子しかいないな僕の周りは」
「え～私は違うよ？」

悠河は溜息をこぼす。積もる話はあるが、現状の優先度を考慮すれば上から二三番目くらいだ。

「テメェ―らスッゾコラ。こっちとらそいつが誰かも聞かされてねーんだぞ。おら計算が終わった。見てみな」
「９５．２％……負ける」

予想はしていた。けど、ＩＰ序列2位のエヴァが戦えば戦況はひっくり返るはず。何より、東京エリアには『雷神』の情報は無い。計算に組み込んでいないのも納得できる。

（希望はある……このことを言うべきか？）

ＩＰ序列百番台、二つ名持ちの中で国家兵器と等しいのが一桁台。その情報は機密の塊だ。悠河は自分の判断でエヴァの情報を開示していいものかを悩んでいる。エヴァはドイツの――――――――グリューネワルト翁の刃だ。

（民警が全滅……東京エリアの防衛力が完全に消滅する前に、エヴァに動いてもらおう。そもそも何故、第二位のエヴァがここにいる？何らかの意図、指示があったはずだ）

夏世に見つからず、聞かれない場所で問いただす必要がある。

「９５．２％は現状の敗北の確率を計算したものですが、光の槍のガストレア。アルデバランと並ぶレベルⅣガストレアと思われますが、この個体が斃さない限り勝率はさらに低くなります。攻撃方法か

らテッポウウオと推測されます」
「演算処理装置無しでここまでの正確無二の狙撃を……アルデバラン並みの脅威と知能だ」
「打つ手なしってことでオーケー？」
「馬鹿が、対策たてんだろーが。あんまイライラさせんな斬るぞ」
「へーそれって私も含まれてるの？低脳な塵虫にできるわけ」
「……ぶっころす」
「落ち着け将監！エヴァも挑発するな！」
「チッ」
「ふん」

　致命的にそりが合わない二人、気が強い奴が並ぶと駄目だ。
　話は戻り、現状を鑑みてのこれからの打開策を話し合ったが、どれも――――――

「推定テッポウウオ型ガストレアが存在している限り、９０％以上の確率で大敗します。この戦争はまず、アルデバランより先にこの長距離狙撃を可能としている推定テッポウウオ型ガストレアの撃破がキーポイントです。ですが、ソコにたどり着くには二千のガストレア、アルデバランの目を掻い潜り斥候するしかありません。夜になればほとんどの個体が睡眠をするため推定テッポウウオ型ガストレアだけを狙うなら成功の確率が上がります。何％か教えましょうか？」
「やめとくよ。どうせやらなきゃならないんだろ？Ｃ４はこっちで準備する。場所を特定しといてくれ。いくぞももか」
「りょーかい！じゃ～ね～エヴァちゃん♪」
「ちょっ……待ちなさいよ！私じゃなくてそのブサイクを名指しで指名ってどういう了見よ!!」
「（あの二人もこの子が一桁台、しかも序列第二位『雷神』とは思うまい）パートナーだからだ」
「パートナー（結婚相手）!?」

雷に打たれたような顔をするエヴァ。こいつは何か致命的な何かを勘違いしているんじゃないかと考えた悠河だが、どう勘違いしているのかまでは思い至らなかった。

「（教授の許可なく）お前は使えない。（大抵の荒事は雷神の力を借りなくても）こいつで十分だ」

プルプル肩を震わせるエヴァの表情は窺えない。

「エヴァ？」

「うっさい！バーカバーカァ！じゃあね！また明日!!!」

「お休み、また明日」

「明日も用事あるんだから覚えてなさい!!」

来るのも唐突だが、帰るのも行き成り、悠河とももかを抜かし走り去っていく。

「変わってないな」

「……ちょっと同情する」

「何がだ？」

「べっつに～……夏世ちゃんに教えないの？」

「聞いてこないってことは弁えてる証拠だ。こちらから教える義理もない。意外なのは君だ、エヴァを知ってるのか？」

「そりゃーね、ある意味姉妹みたいなものだし」

「エヴァは知らないみたいだが？」

「下の方が一方的に知ってるだけだよ。優秀な姉は落ち零れの妹の存在さえ聴かされてないと思うよ」

「じゃあエヴァの親は……」

「私と一緒であのキチガイ」

「本人を目の前に同じ姿勢で挑めたらな」

「うっ……それは無理」

この会話を盗み聞きしている夏世には意味も分かるまい。室戸董も『木原』に関する詳しいデータは持ち得ていない。悠河も知らない。そもそも東京エリアで『木原』に詳しい奴っているのか。『木原』が東京エリアに千寿夏世を設置した時点で、木原の情報は無いと判断した方がいい。

「エヴァ（優秀な姉）を憎んでいるのか？」

ももかは考える素振りを見せる。

「……落ち零れ（失敗作）は、こうやって外で好き勝手生きられる。いろいろ縛りもあるけどぬるい方だよ。普通な姉（未成功）は、落ち零れでもないから仕事とか用事、実験に付き合わされる。優秀な長女（成功）と次女（作）は、そりゃーねヤバいよ。生まれてから死ぬまでの計画表でもあるんじゃないのってくらヤバイ」

「……」

悠河はエヴァを知らない。今まで何があったのか、何をしてきて何をされたのか。何も知らないんだ。

「多分だけどね……普通の幸せってのしらないんじゃないの。そうあれ、そのために生まれてきた。そんな環境でずーと育ったらそうなっちゃうのも仕方ないよ。でもね、あの子はそんな普通な幸せを探してるんじゃないかな？」

「……そうか」

「そ、だから……ちょこっと嫌だけど明日は悠河の事かしてもいいかな」

「僕はお前の所有物じゃないぞ」

「……鈍感」

「何がだ？」

もういいと叫んで、ぷいっと顔を背けてしまうももか。悠河はこの年齢の女の子は心底難しいと思った。

作戦を実行するのは夜が妥当だ。Ｃ４もすぐ揃えられるし余った時間にエヴァと遊ぶのもいいだろう。

「三人で行こうか」

「なんでそうなるかなぁ……ま、いいか。人数多い方が楽しいしね」

「会戦時の敵の総数は二千体ほどだった。だが、前衛を務めていた七千の自衛隊決戦兵力が倒され、ガストレア陣営にも五百体の被害を与えたが、代わりに倒された自衛隊員二千人がウィルス感染によりガストレア化してアルデバランの傘下に加わったとみられる。膨れ上がったガストレア三千五百体と我々五百ペア千人の民警軍団がぶつかり、九百体の損害を与えたが、こちらも半分のペアが殺され……悲しいことに百体程度が敵の傘下に加わったとみられる」

我堂長政は静かに事実のみを告げる。

「ガストレアが二千七百体に対して、我々は五百人」

その数字には負傷者は勿論、十歳という未熟な精神に深刻なトラウマを負ってふさぎ込んだもの。ペアの片方が殺されて戦力が半減以下になったのも多数にいる。相棒を失った民警同士が即席のペアを組んだとしても阿吽の呼吸などたがが知れている。それを含めれば戦力は三分の一程度。絶望的だ。

「それをしてもらって尚、辛い決断を下さなければならない」
「なに？」
「アルデバランがハチのガストレアと分かったのは君のおかげだが、テッポウウオ……プレアデスの分析も理解した。里見リーダー……君に聞きたいのは他でもない、作戦行動中に英彦の陣を離れ、アジュバントを単独行動させたことに申し開きはあるかね？」

周囲の視線の圧力が一層増し、強力なプレッシャーを感じる。

「待ってくれ。俺たちは本陣の背後に回った奇襲ガストレアに気づいて、それを迎撃するために――――」
「――――ガストレアの死体は確認済みだ。だが建前は建前、命令違反は命令違反だ。この二つは分けて考えなければならない」
「仮にも軍隊の体制を保っている民警軍団の中で、一人の命令違反者が出ればどういうことになるか、考えが至らない君ではあるまい。上官の命令無視、他の民警にしたら敵前逃亡とも捉えられる。ましては君と君のイニシエーターのＩＰ序列は高位序列者である三百位。君の行動は、震える膝を懸命に堪え列についていた他の民警に致命的な動揺を与えた。そのツケは、払わなければならない」
「だ、だけど――――」
「軽率だったな里見リーダー。君のアジュバントを解体し、君を極刑にする。言い訳は聞かん。君を処罰しなければ〝命令に背いても罰しられない〟悪しき前例を残すことになる。規律が緩んだ軍隊は軍隊とは言わん。烏合の衆だ。敗戦ムードが高まっている今だからこそ、風紀を引き締めなければならない」

我堂長政の言葉が、ずしんとのしかかる。

「ふ、ふざけんな！」

我堂に詰め寄ろうとした瞬間、我堂のイニシエーター朝霞に組み伏

せられる。床に叩きつけられ肺の空気がたまらず吐き出される。

「カハッ」

「動けばお命、散らすことになりますよ」

蓮太郎の喉元に、冷たい日本刀の刃が突き付けられる。

「……俺の、アジュバントだけは咎めないようにしてくれ……あいつ等は俺の命令に従っただけだ。頼む」

「天蠍宮（スコーピオン）を倒した救国の英雄が死刑囚。里見リーダー、もう一度死んでみる覚悟はあるか？」

「え？」

「団長！」

「まあ待て、里見リーダー知っての通り今回の戦いは代替モノリス着工まで持ちこたえる防衛線だ。だがディフェンスだけではいけないという意見もあってね。特に民警の恐怖の象徴になっているプレアデスを撃破できれば、この閉塞した状況の打開する糸口になるのではと考えている。だがなにぶん精鋭を派遣できるほどの余力は我が軍隊には持ち合わせていない。――――そこで、君に一つ頼みごとをしたい」

アルデバランを撤退に追い込んだ代償に片足を失った筈の我堂のプレッシャーに衰えはない。杖を片手に立ち上がると、しかめ面を作って断言した。

「単独適地潜入と正体不明長距離狙撃ガストレア・プレアデスの撃破だ」

その頼みは、処刑と同一だ。

我堂は「朝霞」と傍らのイニシエーターに下知を送ると、ＰＤＡ端末を操作。巨大な３Ｄモデリング画像が部屋全体に表示される。

「現在民警軍団とガストレアの軍団はモノリスを挟んで等距離に位置している」

画像は広大な森を表示する。樹冠も高く、ステージⅣのガストレアが隠れるのも可能。ガストレアウィルスのせいで異常な成長と多様な生態系が見える。

「この森のどこかに、二千七百体強のガストレアが拠点を構え休息している」

「アルデバランやプレアデスが森の何処にいるのかわからないのか？」

「残念ながら不明だ。これぱかりは人工衛星でも分からない。第六世代型の赤外線映像装置（サーマルビジョン）を搭載した無人偵察機もあるが……官僚はこれを飛ばすことに非常に消極的だ」

「……プレアデスか」

「巡航ミサイルや支援戦闘機すら撃墜させる生物兵器を、お偉い方は非常に恐れている。彼らは、制空権の確保を約束していたのだが……まったく、昨日は飛行ガストレアに好き勝ったやられて防戦一方だった」

強力なガストレア一体で戦局が左右される。そんな冗談を現実にするのがプレアデス。冗談な生物はゾディアックだけで十分だというのに。

「里見リーダー……元リーダーか。やりたまえ、君に拒否権はない。成功確率は極小だろうが、死ぬ予定の君ならば失っても惜しくない人材だ。死んだ英雄というのは、勝手がいいだろうさ」

「正体表しやがったなタヌキジジイッ!!」

「これは偽りざる本音である。アルデバランも私の与えた傷が完治次第、必ずここに再襲撃してくる。今を除いてチャンスはないのだ。里

見くん、君がこの任務を受けてくれるならアジュバントに罪を問わないことを約束しよう。だが、断れば……君もろとも処罰する。君には、君を慕ってくれるイニシエーターと、可愛らしい幼馴染がいるそうじゃないか。……可憐な彼女たちが苛烈な罰を受けるのは忍びない」

「延寿や木更さんに指一本触れてみろッ……ぶっ殺してやる!!」

「なら決まりだ。道具はこちらで準備しよう。君は今日のうちに仲間たちに別れを言いたまえ。ミッションを完遂出来ることを心から祈っている」

もう話すことは無いとばかりに、椅子に座り瞼を閉じる我堂に、部下が一枚の報告書を見せる。

「これは……君は桁外れの幸運の持ち主かもしれんな」

我堂が投げ渡した紙を掴み、内容を流し読んだ。

「なッ、間違いないのか?」

「正式な書類だ。私も己から死地に飛び込む輩がいるとは驚きだ。こちらから送り返したくても暗号化されていては無理だ。運が良ければ森で出会うかもしれんな」

その紙には、単独でプレアデスを撃破するミッション内容が書かれており、実行する民警の名前にはこう書かれていた。

『ＩＰ序列６３０位巳継悠河』

第三十四次観測

命令無視によりアジュバント解散。それを伝える。仲間たちの反応はまちまちだったが、悔しいが解散を認めるしかなかった。チーム一丸となっていた所での解散は響くが、これでもう会えないわけじゃないと、拳を掲げた延寿がみんなに宣言する。

そこからは夢のような時間だった。配給された三日分の食料をふんだんに使いやけくそに料理し、苦しくなるほど食料を胃に詰めていく。電気がない部屋には蝋燭が焚かれ、全員の表情を赤々と照らす。ぼんやりと照らされる優しい炎が延寿とティナの大きな瞳の中に映り込みキラキラ輝き、とても可愛らしい。蝋燭の光のせいか、ほんのり赤みの帯びている横顔に目を奪われてしまった。なかでも木更のややこぶりの猫目には妖しい美しさがあり、思わずずっと眺めていた衝動にかけられるが、目が合いそうになると慌てて視線をそらした。

女性陣はお風呂に入りたいと話題に騒ぎ。男性陣は現実的で食料の備蓄を計算し、足りなければカエルやカタツムリを食べなければならないと蓮太郎の冗談に、お嬢様育ちの木更は半目で「最低」とつぶやく。

玉樹は地下に貯蔵されていたワインを拝借し成人組で飲み明かす。一見馬が合わなそうな二人だが、マシンガントークの玉樹の話に、彰磨は黙って頷き話を聞いている。敗戦ムード漂う鬱憤を払い除け、戦場のただ中にいることを忘れさせてくれた。蓮太郎も気分が良くなり、時間を忘れ騒ぎ立て、時刻が深夜を回ったところで各自ホテルの部屋に解散した。

延寿が寝静まったのを確認すると起こさないよう頭を優しく撫でる。手を放すと蓮太郎の心が徐々に冷却されていく。延寿の幸せそうな寝顔から視線を外し、歩き出す。――――仲間たちと過ごす最後の時間が終わりを迎えたのだと悟った。

食堂までたどり着くと暖炉の前に我堂の使いが立っていた。ナップザックを受け取ると中身を確認する。コンパスなどのサバイバル用品、極めつけにＣ４爆弾。装備を整えるとホテルの外に出る。結局

延寿たちには打ち明けることなく出てきてしまった。

「里見くん……」

何でいるんだ。恐る恐る振り返る。

「木更さん……」

木更には正直に話そう。その上で、信じてほしい。悠河と合流さえすれば希望はある。それでも、木更を泣かしてしまった。男と女――――男はすべてを背負い、一緒に逃げようと言ってくれた女に我儘を貫き通す。結局、延寿を頼むとしか言えない自分自身が歯がゆい。男は最後まで不器用なまま最愛な彼女に「ありがとう」すら伝えられなかった。

モノリスを越えれば、そこは人間の領域ではなくなる。油断や気の緩みなど許されない。夜の森はそれほど危険だ。火器はギリギリまで使用しない方がいい。自分の居場所をガストレアに教えているようなものだ。マグライトで先を照らさなければそこは闇が満ち一寸先も見えないほどだ。。

その時、通常なら聞き逃してしまいかねない小さな音だったが、風の音とともに何処からともなくヒタヒタという足音をとらえた。息を殺し遮蔽物に身を潜める。その姿は闇に包まれて見えなかったが、シルエットから予測はついた。オオカミだ。

実のところ、ガストレア化した生物の中でわけても民警を悩ませるのは、グロテスクな容姿をしたガストレアでも、強力な神経毒をもったガストレアでもない。本来それらを食べる最終捕食者、食物連鎖の

頂点に立つような個体がガストレア化し群れを形成したならば、その脅威総計は民警にとって最大である。

「オオオオオオオオオオオオオオオン!!」

突如、オオカミの遠吠えが闇を震わせる。ヤバイ――――体は走り出していた。群れで行動するオオカミに対し馬鹿正直に向かい打つのは自殺行為だ。なら、ばれたのなら囲まれる前に一目散に逃げるしかない。

オオカミは群れで狩りをする。一体を殺してもその間に二体が喉笛に喰らいかかる。足を止めてはならないのだ。だが、体力には限界が来る。蓮太郎は歯を食いしばり、半分振り返りながら発砲。少しは怯んでくれるのを祈るしかない。荒い呼吸が真正面から聞こえてライトをそちらに向けると、大きく開かれた口に生えた牙が視界いっぱいに広がって襲い掛かってくる。

「(いつの間に正面にッ!?)」

恐怖で足がもつれ、木の根に足を取られ受け身も取れず無様に転がる。呻く暇もなく、一匹が右義足に喰らいつく。慌てて痛覚神経をカットオフするが、痛みが脊髄を奔り脳に直撃する。

「――――ッ!!」

痛みにもがきながら拳銃のトリガーを三回引く。バラニウムの弾は牙と顎を砕き、一発は眼球にに命中。痛みに悲鳴を上げるオオカミは後退する。だが突如別のオオカミに胸を強打され二百キロの巨体が蓮太郎にのしかかる。大きく裂けた口が眼前――――。

「うおおおおおおおぉぉぉ!!」

右腕を口に突っ込み火薬炸裂式の義手を撃発。オオカミの顔が血飛沫を上げ飛散。倒れ掛かる巨体を回避し跳ね起きると周囲を確認。囲まれている。半歩右足を下げると足から炸裂音が鳴り響き、空薬莢をインジェクト。オオカミを飛び越え全力で走る。人間が全力疾走を持続できる時間は8秒といわれている。ペース配分を考えないでの全力疾走は蓮太郎の体から体力を奪った。このままではダメだ。オオカミは臭いで追跡する。唐突に道は途切れ――――――――蓮太郎は絶望のあまり目眩がした。途切れた先は断崖絶壁。崖下は川が流れているが轟々と逆巻いている。飛び込めば命の保証はない。前方には十匹二十匹――――――――闇の隙間から赤く光る眼は、どう見積もっても五十匹以上はいる。川かガストレアか、足がすくむ。生き残る可能性は川の方が高いけど――――――――萎えた意気を叱咤し気合を込める。蓮太郎は覚悟を決め大きく飛んだ。激流にもみくちゃにされ平衡感覚が狂わされる。流木や岩に何度もぶつかる。激流を流れる石などの異物は散弾となり蓮太郎の体中を殴打した。意識を失えば終わりなのを本能から感じ取る。手を無茶苦茶に振り回す。ふと、蓮太郎の手が何かを掴んだ。それを岩だと理解した瞬間、激流に逆らい歯を食いしばりながら全身でしがみつき、叫び声を上げ這い上がった。生き残ったのだ。体はもう限界。水を吐き出しながら震える体。

「……しつこい奴らだ」

蓮太郎の言葉を合図に、オオカミたちが木陰から出現する。蓮太郎は悟った。今日が人生最後の日になる。脳裏にかけがえのない思い出が流れ、気づけば涙が頬を伝う。

突如、五十匹以上のオオカミがピンと耳を立て暗がりの木々の奥にいる何かに警戒し前傾姿勢になる。闇に殺到するオオカミたちが消えていく。静まりどのくらい経ったか――――――――四つの影が歩み寄る。

「パパァ、あいつたしか延寿と一緒にいたやつだ」
「おやおや」

なんてことだ。何故、この二人が一緒にいる。

「……一人？」
「ゴキブリ並みの生命力ですね先輩」

かつて生死を競った最強の魔人と、次世代型の最新機械化兵が現れた。

「そろそろ銃を下してくれんかね」
「断る」
「まったく、包帯や抗生物質を提供したのがもう誰なのか忘れたのかね？」
「テメェたちこそ、自分たちが何をしたのかもう忘れたわけじゃねぇだろな」

まさかこの男と焚火を囲むことがあるとは過去の蓮太郎も思うまい。油断なく拳銃を構えながら左手だけで器用に包帯を巻く。

「私が本気を出せば、そんな豆鉄砲ききやしないよ」

蛭子影胤が操る斥力フィールドは対戦車ライフルを弾き返すほどの防御力がある。かつて身をもって味わっている。色々追究したい気持ちはあるが、まず確認することがある。

「なんでコイツといる悠河」
「僕にも色々事情があるけど先輩が危惧している間柄ではないのは保証しますよ。任務優先。コイツと殺し合いがしたいなら好きにしてください。ガストレア共を引き付ける囮として」
「チッ」

拳銃をホルスターにしまう。悠河の目は本気だ。蓮太郎と影胤が戦えばお互いただでは済まない。人知を超えた機械化兵が本気でやり合えば本人どころか周りも無差別に破壊する。要するにまき餌だ。ガストレアを引き寄せる餌。

「どうして未踏査領域にいる？また菊之丞（ジジイ）の悪だくみに加担して暗躍してんのか」
「ノーコメントだ。誘導尋問はやめてもらおうか」
「……悠河と行動している理由はなんだ」
「なに、彼とは相性が悪いからね。暇つぶしに同行してるよ」
「テメェはジャンケンで〝グー〟しか出せない。対して相手は相性最悪の〝パー〟。それで矛を収めるたまか？」

違いないと肩をすくめる影胤。

「いやはやまいった。よく分かってるじゃないかね。なに、ただの気まぐれだよ」

小日向が蓮太郎を上目遣いで見る。

「延寿は？死んだの？」
「別行動中だ」
「そう」

そっけなく言うが、口元は嬉しそうに笑っている。

「里見くん、君こそなぜこんなところにいる」
「プレアデスを斃すため」
「プレアデス？」
「水銀を撃ち出す正体不明のガストレアだよ。この森にいるらしい」
「ああ、そうらしいね」

影胤の反応に疑問を覚える。

「悠河といるからそうじゃないかと思ったが、お前ら昨日の戦列に加わってアルデバランと戦ってたのか？」
「まさか、この辺で一番高い木に登って文字通り高みの見物をしていたよ」
「僕も昨日参加してません」
「……戦わないとみんな死ぬんだぞ」
「裏方には裏方でしかできないこともある。この任務もそうだ。〝死んで来い〟先輩はそう命令されたものでしょう？英雄は表舞台でガストレアを倒せばいいんです。衆目で体を張って守りましたよって示せばいいんです。それが貴方のやるべきことだ。僕がプレアデスを斃せばその分英雄は楽できる」

悠河は、可笑しそうに口を押えながら蓮太郎が一人でプレアデス退治を任された理由を口にする。

「こんな任務任された時点でやらかしたのは確定事項。大方、独断で戦列離れて勝手に行動したとかそんなところでしょう。我堂は命令違反者を決して許さない。ましてや相手が英雄ならとことん有効活用する。正直、先輩が一人で死にかけていたときは驚きを通り越して呆れましたよ」

蓮太郎は、こんな任務を任された理由を見事的中されて何も言い返

せない。

「フフフ……君たちを見ていると飽きないな。里見くん、私も話題を一つ提供しよう。かつて……私の同士には『鬼』がいた」

「おに？」

「嗚呼、彼女か。お前に劣らない頭が狂った狂人の」

影胤は可笑しそうに喉を震わす。彼女とは似た者同士なのだから当然だと。

「同士と言ってもお互いの事は何一つ知らない仲だ。彼女はただ、唯ひたすらに『木原』を憎んでいた」

「『木原』を？」

「『木原』が何者かは私に知る由もないが、君たちは知ってるようだね」

悠河は、『木原』はこの世界の秘密を知る――――原因なのかもしれないと考えている。

蓮太郎は、『木原』はこの世界の秘密を――――ガストレアウィルスが何なのか知っているのではないのかと考えている。

「そうそう、国際イニシエーター監督機構のトップが誰か知ってるかい？」

「……いや」

「そこまでは」

「君たちのイニシエーターに深くかかわることなのだがな……国際イニシエーター監督機構の本部はローマ連邦に、『木原』はそこの出身だ。名前は伏せられてるが容易に想像がつく。更に、組織設立の時期も怪しい、第一位がゾディアックを斃したと報道されて間もなく、予め用意していたかのように組織は形になった。そこに誰もが疑問を挟まないんだ。確かに、『呪われた子供たち』は実用的な対ガストレア兵器だ。我々のような兵器を作るより金は浮く。誰が思いつく？大

人が武装してやっと倒せる怪物を、子供が玩具で遊んでつい壊しちゃったで倒す。おいおいふざけるなよなんだそれは、我々の存在意義がないではないか。だが世界は安定の戦力と供給を求めてしまう。そこに目を奪われたら本質は見えてこない。何故――――――――疑問に感じない」

この疑問が君たちには分かるかい？その問いに答えを持ち合わせていない二人は、ただ黙るしかなかった。この二人も、『呪われた子供たち』のメリットにしか目が行っていなかった。そこにあるのだからそうなのだろうと疑問を挟まない。

「ＩＰ序列に、序列が上がるごとの擬似階級の向上、機密情報へのアクセス権、一組織に何故そこまで力が集中している？しかも世界規模でだ。日本には自衛隊、アメリカには軍隊、各国には戦いを専門にしている組織が必ずあるし、国ごとにルールも主張も考え方も違う。ガストレアの脅威に世界が混沌としている中、国際イニシエーター監督機構という基盤を作り上げた。これだけで偉業だよ。どれだけ追い詰められようが、国が違うだけで人は相いれない」

人類の敵が現れた。だから、みんな仲良く同じルールで資源と武器と情報を譲り合いましょう。そんな都合のいい妄想は頭の中にだけ閉まっといてくれ。

「情報は武器だ。階級も国を跨げばあまり効果がないこともある。それを、序列が上がるごとの擬似階級の向上？機密情報へのアクセス権？前者はまだ納得しよう。所詮階級だ。問題は後者だ。機密情報へのアクセス権とは笑わせる。浸食抑制剤もそうだ。これだけけで武器だ。イニシエーターを問題なく安全に運用できる薬として浸食抑制剤を売り出せば需要は大きい。バラニウムの次くらいにはなるんじゃないか。そして機密情報へのアクセス権、これに関しては意味が分からない。何故態々開示する？浸食抑制剤は組織に反しない限り

無料で貰える。アクセス権も実力次第で手に入る。一体『木原』はこれだけのお膳立てを用意して何を企んでいるのか……フフフ、私の勘だが、『木原』は五賢人クラスの頭脳を持っている。六賢人にしてもいいと思うが、そうしない理由があるんだろうね」

悠河はあの戦いを思い出す。鬼は『木原』を心底恨んでいた。その憎悪は生半可なことじゃ生まれない漆黒の心。それを知るだけに、『木原』にいい感想は抱かない。『木原』の印象は最悪と言ってもいい。

「話はここまで、勝手な憶測さ。嗚呼最後に里見くんにこれを渡すよ」

影胤はＵＳＢを懐から取り出すと、蓮太郎に渡した。

「これは？」

「さーね、私も知らん」

「テメェ……」

「別に怪しいものじゃない。それは彼女が私にくれた情報さ。残念なことにそれの中身を確認する伝手も手段も今はないんだ。なら、私に勝った勝者の景品としてね」

渋面でＵＳＢを蛭子から手渡しされ、胸ポケットにしまい込む。

「ちゃんと中身を確認してくれたまえよ里見くん？情報は時に命より重い、『木原』に復讐するしか能がなかった鬼が、金棒を隠した。この意味を考えることだ」

蓮太郎は胸ポケットに手を当てる。『木原』を恨み復讐を誓った鬼が隠した爪。中身はおそらく――――――『木原』の情報。

心拍数の刻むリズムが速くなる。頭が熱くなる。これを知れば、何かが変わるのかもしれない恐怖、全てを知りたいと思う自分。何かを掴めるかもしれない期待に思いをはせる。

そこからはお互い会話が無くなり、薪が尽きたのを合図に就寝となった。

蓮太郎の体の疲労は限界に来ており、体全体が重くだるい。瞼が落ちそうなのを堪える。影胤より先に眠るわけにはいかない。体感で一時間ほどが経っただろうか。小日向とももかの寝息が聞こえ始めると目を開け、XD拳銃を掴み、音を立てないよう気配を殺し影胤の枕元に中腰で近づく。二人は横向きになり折り合うように一枚の毛布を共有している。蓮太郎は拳銃を頭部に照準する。

「……堪えてください」

傍でももかと共に寝ていた筈の悠河が、その先を止めた。

「なぜお前が止める」

「……正直に話します。それ以外で止まりそうにない」

「……なんのことだ?」

「冷静に聞いてください。僕たちは、蛭子影胤と契約を交わしました」

何を言われたのか理解できなかった。

「契約内容の詳細は知りませんが、その中にアルデバラン撃破までの協力が含まれています。彼は、貴重な戦力なんです」

「ッ!?」

「それに、そいつ起きてますよ。僕の眼は誤魔化せない」

「随分な扱いだね」

「余裕だな。お前のバリアは、この至近距離から引き金を引くのに先んじて出せるもんなのか?俺が情けをかけられたら泣いて喜んで仲間になるとでも思っているのか?悠河も、こいつがどれだけ危険な存在か理解してるだろ。必ず、次の災厄を引き起こす。戦力として?鳴呼文句ねーよ。だけどな、俺は社会秩序を守る」民間警備会社社員としてお前を抹殺する義務がある」

「……娘も殺すつもりかい」
「本当にお前の娘なのか？」

すやすや眠る小日向見た。

「勿論だとも。里見くん、蠱毒の壺を知ってるかい？大量の虫や蛇を同じ壺の中に入れて共食いさせて最後に残った最強の一匹が強力な呪いを持つとされているやつでね。昔、まだ私が若かった頃の話だ。私は攫ってきた女五人に人工授精を施すのと同時に胎児にガストレアウィルスを投与したことがある」

蓮太郎は絶句した。これはつまり、人工的に『呪われた子供たち』を作ったということだ。

「そして生まれた五人の娘たちを別々の地下室に閉じ込めて六年間、殺しのトレーニングと洗脳教育だけをして育てた。そしてある日、私は五人初めて引き合わせて殺し合わせた。生き残ったのが小日向だ」
「なんのためにそんなことを？」
「私はこの世のすべてを知りたかった。すべてを支配する真理を見つけ出したかった。果たして人という種のその先にある彼女たちは何なのか、と」
「外道めッ。人の命を何だと思ってる！」
「それが分からなかったから私は実験をしたのだ」
「子供は純粋な存在だッ！天使にも悪魔にも育つ。お前のせいだ影胤。お前のせいでこの子は悪魔になった」
「然り、私は悪魔を作りたかった。だが失敗したよ。生まれてきたのは邪悪な天使だった」

影胤は寝ている小日向の髪を優しく撫で、静かに顎を持ち上げる。
「見たまえこの可愛らしい寝顔を。醜く、おぞましく、愛おしい我が怪物少女（モンストレス）。この子たちは生物種としては強いが、結局のところどうし

ようもない弱さも抱えていた」

その時、ん、という寝言と共に小日向が身じろぎして、場違いと思える満足げな寝言がささやかれる。

「パパ、大好き」

蓮太郎の銃口が揺らいだ。なぜだ。なぜなのだ。

「蓮太郎先輩……」

引き金にかけた指が凍り付いたように動かない。蓮太郎はぎゅっと目蓋を閉じた。

「チクショウッ!!」

蓮太郎はやけくそに銃をしまうと、むしゃくしゃしながら腰を下ろす。

「傷の件、感謝してんよ。だがテメェは信用できねぇ」

焚火の反対側で寝そべる影胤たちを警戒しながら寝転がる。

「最後に聴かせろ。すべてを知りたいんならＵＳＢ（これ）はお前にとって重要じゃなぇのか？」

「言ったはずだ。勝者への報酬だと。私を破った君へのプレゼントだ」

会話もなくなり静寂が蓮太郎の思考回路を鈍らせる。微睡みの中、影胤のインパクトで聞きそびれたことを思い返す。

「（影胤は悠河と契約したわけじゃない……なら、誰と……）」

意識はそこで途切れた。

第三十五次観測

匂いがする。鼻孔をくすぐる匂いに蓮太郎の意識とは関係なく、胃が鳴る。眠気より食欲が勝り意識が覚醒する。ハッとして立ち上がると、首を周囲に巡らせる。

「起きましたか。簡単なレーションですが朝食たべますよね？」

「あ、嗚呼……」

悠河からのレーションを受け取り腰を下ろす。カレーの香りに逆らえず、胃の中にかっ込む。

「しみわたるぅ……あいつは……」

「影胤なら娘と一緒に外で見張りです。どうしました」

「いや、飯食わねぇのかなって」

「先輩が起きる前に食ってたんで問題ないですよ。けど、あいつを心配するってどうしたんです？」

「別に……ただ、これからって時に足手まといは困るだけだ」

「自分で言いますそれ？」

荷物を纏めた二人は外で待機していた影胤ペアと合流する。右手をひらひら振って来て鬱陶しい。

「やあ里見くんよろしく。じゃ、いこっか」

「けっ、プレアデスがどこにいるのか分かってんのか。その様子だと見当ぐらいついてんだろ」

「僕と影胤は見てましたからね。場所の見当はついてます。先行するので付いて来て下さい」

風下ルートを模索し隠密行動に徹すること五時間、遠目からでも確認できるガストレアのキャンプ地を発見した。タイミングがいいこ

とに雨が降り出し臭いも誤魔化せるレベルになってきた。蓮太郎は元々死にに行けと命令された任務だがプレアデスを打倒し、無事任務を果たせば我堂もこれ以上難癖をつけてきたりはしないはずだ。

「奴らは夜行性だ。この拠点の何処かにプレアデスがいる。敵の本丸はおそらく中央に位置しているだろうから、そこまで見つかってはならない」

「……なんで俺を見る」

「影胤、自分の役割は分かってるな？」

「任せたまえ、スニーキングキルは大得意だ」

「無視かよ」

　足音を立てぬよう焦らず、ゆっくり、されど急いで移動する。先頭を行く悠河ペアは目を使い、暗殺任務で身に着けた気配察知能力を最大限生かし警戒を払い先行していく。影胤ペアは悠河ペアが見逃した潜んでいたガストレアを掃討し悠河の指示に従い迅速に仲間を呼ぶ暇もなく絶命していく。敵陣の真っ只中を悠河を先頭にももか、影胤、小日向、蓮太郎と続く。

「さて、里見くん。いよいよ敵の本丸は近いよ」

　蓮太郎は黙って頷く。雨音に混ざり恐ろしいうなり声が、林の向こうから聞こえてくる。悠河はハンドサインで屈むよう指示を出す。中腰で林を進む悠河たちは事前に覚悟を決めていたため無様に叫んだりせずにすんだ。

「……ここが、敵の拠点」

　そこは地獄だ。百鬼夜行、魑魅魍魎、大小様々なガストレアが見渡す限り存在する。腐臭にも似た吐息がこちらにも漏れ肺が腐りそうになる。小さい物もいれば、小山と見紛うほどの巨大な生物まで、視

界が続く限り連綿と続いている。アルデバランもどこかにいるはずだが、あまりにもガストレアの数が多く見つからない。

「君たちがプレアデスと呼ぶのは、あのガストレアじゃないのかい？」

「あれが……」

勿論、蓮太郎もプレアデスを見るのは初めてだが、直感的にあれがそうなのだろうと確信した。高さと横幅の目算は十メートルほど、ティナのシェンフィールドを用いての情報と合致する。事前の情報通り口は漏斗状に尖っており、テッポウウオというよりコウノトリ、プテラノドンに似た嘴に見える。特に目を引くのは膨張した腹だ。気球のように膨れ上がった腹は、水銀の量を物語っている。代わりに退化した手足は自分で歩くことも物を掴むことも出来ないほど短い。これはガストレアの進化が生んだ失敗作だ。あっという間に自然淘汰されてしまう。だが、よく見れば猿のようなガストレアが餌を運び咀嚼させていた。

「本来なら君はどうするつもりだったんだい？」

「プラスチック爆弾を設置して安全圏までまで離れたところで爆発させるつもりだったんだよ。川で全部流れちまったが」

「一人で来るところもそうですが、馬鹿ですね」

「計画性のなさにドン引き、ｍ９（＾Д＾）プギャーｗｗｗｗｗ」

「そうだよ馬鹿だよ計画性もないアホだよ！ならお前はどうすんだよ」

「これを使います」

悠河は腰のホルスターから一発のライフル弾を取り出す。先頭の弾頭部が黒く普通のバラニウム弾よりやや大きい。

「この９５口径ライフル弾頭部に封入されているのはバラニウムを液状に溶かして濃縮した超濃縮バラニウム弾です。インパクトの瞬間

内部で砕けた超濃縮バラニウムが体内に広がって、再生レベルⅣまでのガストレアを殺せます。製造されてまだ数発しか開発されていない試作品を取り寄せるのは苦労しました」

「再生レベルⅣ？」

「菫医師から聞いたことありませんか？普通のバラニウムの武器で殺害可能な個体を再生レベルⅠと定義して、ほとんど全てのガストレアとイニシエーターがここに所属していますが、この範疇に収まらないものがレベルⅡ以降ですね。再生レベルⅡは通常のバラニウの再生を押し返す程度で、首と胴体を切り離したり、燃料をかけて燃やせば倒せる程度のレベルです。レベルⅢになると、腕を切り落としても生えてきたり再び元の肉体に戻ろうと、細胞同士が呼び合うらしいです」

「細胞同士が……呼び合う……？」

「再生レベルⅣはもっと凄い。体のほとんどの内臓を損失しても再生が可能で、これを葬るのにはチリを残さず滅却するしかない。アルデバランがこの再生レベルですよ。そして再生レベルⅤ、これは極低温や真空、何千度もあるマグマの中に放り込んでも環境さえ整えば再生します。分子レベルでの再生。２０３１年の科学では物理的に殺しきる手段が存在しないのがレベルⅤです。ゾディアックは大体このレベルに分類されてますが、1位と2位、貴方も含めてよく撃破できましたね」

「俺を化け物連中と一緒にするな。……時と場所に恵まれただけだ」

「謙遜しすぎですよ。世界はゾディアックを斃したという事実のみに注目してるんですから」

義眼による計算で７２．５メートル。ここからでも何ら問題なく狙撃できる距離だ。背負っていたバックからそれぞれの部品を組み立て磁力狙撃砲を完成させ、超濃度バラニウム弾を装填する。磁力狙撃砲は電磁石を使用して、スチール製の弾丸を飛ばすスナイパーライフルの一機種。無論超濃縮バラニウム弾はスチール製に改良されている。弾丸の初速は２９０メートル。音速にやや届かない程度、単純

な威力だけなら通常の狙撃銃に劣るが、火薬を使用しない為に反動が無く、更にブレも発射音も無いため狙撃に適している。

「……それを使えばアルデバラン斃せるんじゃねぇか？」

「無理です。あの質量を消すにはこれ一発では足りない。三発、五発は必要でしょう。それに、この場を全員生き残るにはこれしかないんです。接近して斃した場合、小日奈も担げるのは二人、三人は行けますが一人は置いて行かれる。ももかの足は遅いのでこの場を生き残るにはこの距離から一発で、プレアデスが消滅するまで一歩でも遠くに逃げる。……効果を確認次第後退します」

「……嗚呼」

磁力狙撃砲の引き金を引く。義眼の力を開放すれば１２００メートル先の新幹線に乗ったターゲットにヘッドショットも容易だ。外すことは無い。７２．５メートルなど義眼を使わずとも当てられる。銃口から放たれた超濃縮バラニウム弾はプレアデスに命中し、速くも目に見える範囲で効果を及ぼした。

「……なんだよ……あれ」

蓮太郎は己の目を疑った。命中した個所から、漆黒が広がっていく。溶かすでも、阻害でもない。闇がプレアデスを飲み込んでいる。否、侵食している。

「撤退します」

磁力狙撃砲をその場に放棄した悠河は、撤退を下し蓮太郎の肩を叩き急がせる。この場に留まれば、プレアデスの異常に気付いたガストレア共が数の暴力をもって潰しに掛かる。ここまでの道のりは覚えている。逃走経路は方向を迷わなければ目的地に逃げきれる。

「何だよあの弾……おかしいだろ」
「理論上、当たれば消滅するまで侵食を続けると言われている超濃縮バラニウム弾。ナノサイズの粒子がガストレアの肉体を瞬時に抉り切る特殊兵器です。ですが、質量が増えるわけじゃないんですよ。巨大で大きければ大きいほど再生力に負けてしまう。詳しい理屈は知りませんが、そう言うものだと理解してください」

蓮太郎ほどではないが、悠河もこの超濃縮バラニウム弾の効果に驚きを隠せないでいた。これが量産できれば、それこそ機械化兵士の存在意義はなくなる。誰もが引き金を引くだけでステージⅣのガストレアを殺す事が出来る弾丸。これを送ったであろう人物にふつふつと怒りが込み上げてくる。

「（もう機械化兵士（俺たち）は必要ない、と……そう言いたいのか木原!!）」

誰にも胸の怒りを悟られず、安全圏まで脱出を果たした。
千寿夏世が予測した安全圏まで逃げ込んだ悠河たちは一度腰を落ち着かせ休憩していた。蓮太郎は緊張状態から解放され木に背を預け座り込む。

「先輩、休憩もいいですが今は何においてもプレアデスを撃退したことを伝えなければいけない。先輩なら聖天子の連絡先くらい当然知ってるでしょ」
「助けた時どうせ〝今後同じようなことがあるかもしれません。何時でも連絡が取れた方がよろしいかと〟……とか、ね。チョロイン乙」
「……お前ら、馬鹿だろ。聖天子が俺みたいな奴に気がある分けないだろ。住む世界が違いすぎる」
「はっ……電波が届く所まで案内するのでとっとと終わらせてください。プレアデスを斃されたアルデバランが怖気づいて逃げると思ってるんですか？」
「確かに。今なら後手に回らずに済む。……さっきからどうしたんだ

お前」
「……なに、少々違和感をね。首筋がぞわぞわする……嫌な予感だ」
「アルデバランか？」
「……おそらく」
「急いだほうがよさそうだ。先輩、行きますよ」
「分かってる」

悠河も蓮太郎も殺し合いの世界に常に身を置く狂人の嫌な予感をある程度信頼していた。だが、二人は勘違いをしている。影胤は現状アルデバランしか脅威が居ない為〝おそらく〟と呟いたが、アレを初めて見た時こうはならなかった。だが、今になって妙に胸の内がざわざわする。

〝では――――なぜ？〟

自問自答に意味はないと悠河と蓮太郎に付いていく。何方に転んだにせよ、その先には闘争しかないのだから。

そこは、壁一面が機械音と数値の羅列に囲まれた異様な空間。

一人の少女に生命維持装置がチューブとして小さな肉体を蹂躙するように取り付けられ、呼吸器を肺まで居れ固定されている。排出物が容器内の緑色の液体と混ざらないよう下半身を覆う機械が取り付けられている。

これはレルネ専用『愛の棺桶』の簡易型をモデルにした特殊兵器。

必要なのは高度な演算が可能な脳。

脳を活かすためだけに容器に閉じ込められた少女こそが東京エリアの頭脳（ブレイン）でもあり、『システム』そのもの。モデル・ドルフィンが可能とする人を越えた高度な演算脳。サッカーグランドと同じ面積２１６０坪に設置された代理脳に接続された『呪われた子供たち』の定義

に収まらない枠の外の化け物。超高度並列演算処理器を操作し、その中心部を担う存在。

その少女こそが――――――千寿夏世。

不特定多数の人間、事象の完全なる未来予知を可能とする化け物は、誰もいない機械の空間で再計算に追われていた。何度計算してもその度に予測された未来が訪れない。東京エリアの情報のすべては千寿夏世が掌握している。最新の情報も随時インストールされている。高確率で訪れると予測される未来を二百五十二パターンまで絞ることも出来た。しかし、自分の体同然となった東京エリアで知覚できないナニか。情報が流れる色とりどりのカンバスに情報の色がない空白が生じている。

観測できない。

知覚できない。

体の中に異物が入ったかのような違和感。

千寿夏世も己が完璧な未来予知を可能とするなど微塵も考えていない。あくまで起こり得る可能性を、選択を、無数の枝を圧し折り、確率が高いと選んだだけなのだ。何より初めて使うこの力を信頼しろと言う方が無理があると思うが、これは脳として、彼女自身にしか分からない全能感で、この力の可能性を理解しているのだ。理解したが為にどうしても解せない。

何故――――――

何故、操作し、導き、最善で最高の未来予知を可能とする『システム』に千寿夏世（人の脳）を使うのか？

これが完璧な、混じり気のない唯の機械で出来ていたのなら。入力すればそこから１００％正確な未来を一つだけ啓示する。そこに人が混じれば、戸惑い、思い、感情、決して精密な判断を下す機械に混じってはいけない人の『心』が介入してしまう。

これはとんだ欠陥兵器だ。

機械による精密で正確な計算も、人が介入すれば歪められてしまう。いくら高度な演算処理が可能なドルフィンの脳だからと言って感情が無い分けではないのだ。現に二百五十二パターンから絞り込

めない。空白の情報のせいもあるが、千寿夏世が居なければそれすら想定してこの超高度並列演算処理器は一つの正確な未来を選び取るのではないのか？

そう思うが故に、再度計算する。

繰り返し——再計算する。

その度に、脳は最適化されていく。コツを掴んで来たというべきか。どうすればよいのか段々と分かってくる。だけど、空白は止まらない。東京エリアを蠢く空白は予測が出来ない。百パターンまで絞り込めたが、この空白はその百パターンのいずれもの予測を越えて想定外の未来に導く恐れがある。

恐れ。

恐怖。

焦り。

不安。

緊張。

心が落ち着かない。

あぁ、百三十二パターンに増えてしまった。

人は感情と考えで視野を狭める。

私はまだ、全体を見通していないのではないのか？

分からない。

分からない。

分からない。

私の大切な人たちが全員生き残るにはどうすればいい？

あぁ、二百パターンに増えてしまった。

千寿夏世は恐れる。東京エリアの全てを知覚できる全能感を持ってしまった故の先の分からない恐怖に。感情の渦が少女を苦しめる。

焦れば焦るほど、人としての感情を捨てきれない限り１００％の未来

は訪れない。
故に、捨てられない。
それは、あの人の思いを、この温もりを亡くしてしまうのと同義だからだ。
また繰り返す。
思いの機微でパターンが減ったり増えたりするを繰り返す。
少女は一人、また繰り返す。

その様子を観測し、データを取っている一人の男は笑う。

――――――あぁ……やっぱり人間は最高だ。思いのほかこのアプローチはまあまあ成功かな？

東京エリアに空白を作りだしている男は、少女の葛藤に満足げに頷いた。

第三十六次観測

「森を抜けました。これで携帯も機能するはずです」

戦闘音も赤い光もまだない。アルデバランはまだいないようだ。民警との衝突前にたどり着けた。携帯を掴み出すと衛星モードに切り替えて番号を呼び出す。

「……」

「どうしました？固まってないで早く繋いでくださいよ」

「……ここは本当に電波が届くんだよな？」

「？障害物が無いですからね。衛星電話なら尚更機能するはずですが」

「……まずい、キャンプ地に向かうぞ！」

駆け出そうとする蓮太郎を悠河が諫める。走りながらでいい、どういうことだ。事情を話せと。

「……電波が一切届かない。似たような状況に身に覚えがある。あの時はアイツが絡んできた」

「『木原』か……」

電波妨害（ジャミング）による連絡手段の遮断。それにより走ってアルデバランより先に民警のキャンプ地にたどり着く必要がある。問題はこの電波妨害が偶然このエリア付近に展開されていて俺たちが其処に入り込んでしまった。もしくは、俺たちがここに来るのを分かっていて電波妨害をこのエリアに展開していたのか。後者だとしたらこのまま大人しく行かせてくれるのか？

「常に監視されているのか？」

「おう。そうだよ」

――――――え。

チッ――――――顎に拳がカスる。それだけで、蓮太郎の膝は崩れ落ちた。抵抗も出来ぬまま手首を捻られ顔面から地面に着地する。そのまま右腕を極められ、首に圧がかかる。何時でも首の骨が圧し折れるよう靴底が首に乗せられる。

「動くな」

その一言に込められた力に。悠河とももか、あの蛭子親子でさえ止まるしかなかった。彼らの後ろにもう一人姿を現す。少女は肩まで届く短めの赤髪に黒のセーラーワンピースを着ている。赤のスカーフが髪とマッチしているのがポイントだ。下らない分析をしてはいるが、ももかと小比奈はガストレア因子による本能か、はたまた直感からヤバい奴を見れば喧嘩を売るべきか逃げるべきかをある程度理解できてしまう。二人とも死と隣り合わせの環境で育ったせいもあり、生き抜く処世術を身に着けたのかもしれない。故に直感した。

――――――この二人には勝てない。

「がはははははははははははははは!!」

『ッ!!』

それぞれが得物を無意識に手に取る。危機的状況に対する条件反射だが、今はどうしようもない。

「まぁまぁあんちゃんら落ち着けってぇ!!別に殺し合いをしに来たわけじゃねーんだかんよ!!まぁそんなにも先走りたいなら止めねぇよ?」

「……誰の指示だ。『木原』か?」

「さーなーどうだろうな!?あんちゃんは俺が違うっていえば納得すんのかよ!?しねーだろ!!俺がその『木原』って奴の命令でこんな事して

んですって言えば満足か!!まぁ実際違うけどな!!……その変どうでもいいだろ?俺があんちゃんらに要求するのはたった一つだ。ここで大人しくしててくれや」
「……ざけんなッ」

その要求に真っ先に反論したのは、今にも殺されかけている蓮太郎だった。

「アルデバランがそこまで来てんだ。今ならまだ先手が取れる。……航空支援が要請できんだよ!!プレアデスを倒したって報告するだけでこの戦況を覆せるかもしれねぇんだよ!!俺はもう、あんな死に方をする奴を増やしたくないんだ……民警が全滅すればお前も終わりだぞ」
「終わりでも何でもねーよ。あー……何か勘違いしてねーか?あんちゃんのやりたい事も信念も覚悟もよーく分かった。でもな、組織で働くってはこういう事だ。人が死ぬ、たくさん死ぬ。やりたくないしたくないでまかり通るスジはねーんだわ。上の命令に従うのが組織だろ?どーしてもやりたくないなら、んな組織やめてらぁボケ!!だからなぁんな分かり切った条文宣っても俺には響かねーぞ!?俺に言わせれば身内以外どーでもいいんですわ。英雄様と違って赤の他人にまで手を伸ばすほど人間出来ちゃいないんだよ!!分かったかこのアンポンタン共!!」
「流石です。清々しいまでのゲス発言」
「がははははははははは!!知ってるくせに!!そういやー自己紹介まだだったな!!俺はＩＰ序列９位『旅人（カブリース）の運転手』!!これを聞いたうえでやるってんなら命賭けろよ!?」

――――――ＩＰ序列９位。

それは、天地が引っくり返ろうが決して越えられぬ壁。正真正銘の化け物が1位と2位なら、その枠組にいる一桁台もまた化け物。百番台の蛭子ペア、九十番台のティナ・スプライト。それを遥かに凌駕す

る世界最強の人類の九番目。

「それで、どうする!?」

勝てない、レベルが違いすぎる。何も知らないままこの唯のおっさんと知り合っても酔っぱらいの戯言ものでしかなかったが、それを裏付けるプレッシャーと、実力を見極めているのに最も長けている蛭子ペアが挑発も殺気も飛ばさない。小比奈に至っては怯え、小さな体を震えさせている。これはももかにも言えるが、何処か慣れている様な反応だ。そう、どうしようもない各上相手のプレッシャー、重圧にどう考え、思い、体をどうするべきか分かっている様な反応。

蓮太郎も悠河も影胤も、小比奈でさえどうするべきか打開策を足りないの脳で考えている。だからこそ、ももかは諦めていた。直感から小比奈とももかは同じレベルで危機感を共有した。だが、違いがあるとすれば性格。

ももかは、受け身で流れに身を任せるタイプ。

小比奈は、戦うな以外の選択肢を知らない。そもそも戦ってすらいない相手から逃げるといった教育をされていないのだ。

故に、殺されるのは嫌だし痛いのも嫌だけど、〝どうしようもないなら仕方ないじゃん〟と諦めていた。

「ももか」

なのに。名前を呼ぶこの少年は微塵も諦めていない。

「生きて帰るぞ!!」

プロモーターに応えるのがイニシエーターなら、ももかは決して諦めない。

「うん!」

流れは、決まった。

「馬鹿もここまでくると愚かですね」

ＩＰ序列９位のイニシエーター：ヴァンティアンは、戦闘力が最も高い蛭子ペア、その司令塔であるプロモーターの心臓を何の躊躇もなく獲りに行った。機械化兵士といえどもとは人間、視界には霞みしか捉えきれず何も反応できない。しかし、今だかつてない強敵を前にした小比奈だけは完璧に対応した。勝てるか分からない強敵を前に、高められた集中力と溜め込んだ闘気と殺意が、ヴァンティアンの攻撃が引き金となり完璧に対応できるだけの爆発力を発揮した。

「ッ!!これは……驚きです。一呼吸で繰り出せる最大連撃全二十一撃を急所に叩き込んだのですが……ここまで完璧に防がれたのは初めてです。……嗚呼、これも初めてですね。今から殺す相手に殺意など懐いたのは」

額、目、乳様突起、アゴ、首、頚椎、心臓、肋骨、肝臓、肝臓、みぞおち、膀胱、肩口、脇の下、上腕骨隙間、手首、肘後部、膝、モモ、スネ、アキレス腱。人体の急所と呼べる箇所に過剰なまでの殺傷行為。１位を含め彼女より上位の８人に防がれていたなら何も感じなかっただろう。９位１０位、二十番台までなら何か思う事もあっても殺意までは抱かなかっただろう。しかし、相手は百番台の雑魚。遥か格下に己の二十一撃全てを完璧に防がれる。それは、『運転手』の娘として、お父さんに教えてもらった絶対と確信する技を防がれたことによる怒りと屈辱。

「よく考えることがあります。何故、遥か格下相手に抵抗された強者は冷静さを失い。暴力的になるのかと」

ヴァンティアンは武器あるオープンフィンガーグローブのバラニ

ウム加工されている甲の部分を人差し指で優しく撫でる。

「成程。確かに、見下していた相手にコケにされるのは頭に来ますね」

「斥力フィールドッ!!」

影胤はフィールドを全力展開しヴァンティアンを弾き飛ばした。

影胤も理解しているのだ。小比奈の限界を超えた動きは生半可なものではない。精神的な疲れに加え、肉体の彼方此方は先ほどの動きに伴う犠牲を払っている。呪われた子供たちがどれだけ傷の治りが速かろうが、そんな不完全な状態では命取りになる。

「あーやるしかねーな。あの子妙にヤル気満々だが俺は気絶だけですませてやるぜ!!」

「ッ!!」

右腕を破壊しようと力を込めた『運転手』は、掴んでいる手の感覚の違和感の正体に思い至った。

「あーそう言えば機械化兵士だったか!!?痛そうにしてたし気のせいと思ったぜ!!」

痛覚神経を遮断した蓮太郎は、右腕を無視し転ばせようと体を回転させ蹴りを足に叩き込む。

「うそだろ!?」

足は大木のように地面に張り付き微動だにしない。

「鍛え方が違うんだよ!!機械化兵士なら機械を使って鍛えぬいた人間超えてみせんかい!!」

掴まれたままの右腕に圧がかかる。何をしようとしているのか察した蓮太郎から熱が引いていく。右腕を破壊するんじゃない。右腕の接合部を破壊するつもりだ。

「うおおい!!」

影胤がヴァンティアンを弾き飛ばした瞬間駆け出したももかの右こぶしを『運転手』は回避のため掴んでいた手を放す。

「仕切り直しか!!ええぞいいぞ!!オラオラ準備が整うの待っててやるよ!!さっさと立って構えろ!!」
「うるせぇんだよ少し声抑えやがれ!!」

蓮太郎と並ぶように悠河とももかはＩＰ序列９位を見据える。

「どうやら待ってくれてるみたいですし僕の作戦に聞く耳在りますか？」
「俺だけじゃやどうあがこうが勝てない相手ってのはわかった。……力を貸してくれ」

当然とばかりに、最も最適な作戦を伝える。蓮太郎はなにか言いたげな顔をしたが、そうするしか生き残る道がないならそうするまでと作戦を肯定した。

「今更じゃもう手遅れかもだけどあえて言わせて貰うぜ!!アルデバランがひと暴れしてこっちが指定する時間までプレアデスを倒した報告をしないと約束してくれんなら!!縛るだけにしてやるよ!!」
「「断る!!」」
「嗚呼!!知ってる!!」

義眼開放――――三つの眼の力が解放される。

『運転手』の重心、構え、筋肉繊維の力の加え方で未来を予測する。『運転手』とて人間、呪われた子供たちの身体能力を有していない。どれほど鍛え貫こうが、人間としての技術を極限まで極めたというのなら、人間の造り出した人間を圧倒する機械で粉砕するまで。ヴァンティアンは未知数だ。ＩＰ序列９位の恐ろしさはヴァンティアンに集約されている。ここの３人より、ヴァンティアンを圧さえこんでいる蛭子ペアの方が称賛するべきだ。

ＩＰ序列９位――――その肩書は本物で、脅威であるが、プロモーターは別だ。なら、全力をもってプロモーターを倒し、イニシエーターを全員で叩く。人間を超える新人類が三人も居るのだ。可能な筈。

そう考えていると『運転手』は見抜く。その未来予知を越え叩き潰すと誓う。

「「行くぞ!!」」

「来いいいいいいいいいい!!!」

『運転手』は構えを解かない。そもそも彼の任務は時間稼ぎだ。向こうが時間をかけるならその邪魔をする必要はない。何より、彼の戦闘スタイルは何がどうなろうが変わらない。人間を、人類を超える新人類機械化兵士。

義眼の演算加速は最大で「１秒間を２０００秒間に体感」させる？ガストレアステージⅣを殺せる手足？あらゆる攻撃を弾くシールド？そんなんで俺に勝てる気なら、人間の底力見せてやるよ!!

「くらえ!!」

蓮太郎は左足の踵を叩きつけ仕込んだカートリッジを炸裂させる。推進力を得た体は空高く飛び上がり、悠河とももかはそれに合わせるように地を走る。

「（シャコペアが先に当たる。ちんちくりんは落下重力を利用して更に威力を倍増させた踵落としか？）」

そこまで読んでも構えは変わらない。動きが読まれるならその読まれた相手の動きに反応すればいいだけだ。

「痛いのはがまんしとけ!!」

悠河の眼と同調したももかは、何処をどう殴り、どう対応するのか、同じ眼と思考を共有している二人にしかできないコンボ攻撃を二十パターンまで試したところで防がれると予測した。よって、ももかは作戦も糞もない戦法に出た。

「シャコラッシュ」

我武者羅なただのラッシュ。だがシャコであるももかの拳を一撃でもくらえば致命傷だ。それをインパクトの瞬間、手首を弾いて軌道をずらしている。その光景に、予測通りにＰ８拳銃を『運転手』の足に発砲する。一撃でも逸らし損ねたら死に直結する状況の中、ももかの背に隠れるように抜いたＰ８拳銃を防ぐとは出来ない。拳銃も発射タイミングも分からないまま撃たれて唯の人間がかわせる筈がない。

足に当たった瞬間、弾丸は弾かれた。

「俺みたいな脳筋馬鹿が飛び道具対策してねーと思ったんかい!!服の下には分からねーくらいの極薄プロテクターを着こんでんだよ!!」

「そこまで予測できなかったが、これで９位を倒せるなんて考えちゃいないよ。先輩！」

「おう!!」

『運転手の』頭上まで接近した蓮太郎は踵を振り上げ――――

振り下ろす。ももかは蓮太郎に巻き込まれないよう後ろに飛ぶ。『運転手』も即座に頭上に対する防御の構えをとった。頭上に構えた『運転手』の拳数ミリ手前を思いっ切り空振った。

「あへ？」

そのまま飛んでいく蓮太郎に、自分はまんまと嵌められたのだと悟った。

「おんどりゃー始めっから!!?」
「嗚呼そうだよ。まともにぶつかる分けないじゃん」
「脳筋馬鹿（笑）」

左足のカートリッジの推進力で飛んでいる蓮太郎に追いつく手段は『運転手』にない。奇しくもヴァンティアン同様、格下にコケにされたのだ。

「ザッケンナー!!ぶっ殺してやる!!」
「吠えるな。雑魚に見えるぞ」

怒りを表した『運転手』だったが、波が引くように感情の高波を霧散させる。

「本当なら護衛である俺がどうにかするべきなんだが……あの人もあの人で妙にヤル気だからな。さっさと沈めて戻ることにするわ!!」
「（妙に会話が噛み合わないな。先輩の方向に誰かいるのか？どうにかなるレベルだとありがたいんですが、そう簡単にいきませんか）」

『運転手』が歩き出す。ゆっくりと此方に攻撃の意思をもって近づいてくる。義眼が教えてくれた。悠河とももか、どちらかが一人で戦おうとすれば五手――――否、二手で敗北すると。

「攻撃の手を絶対に休めるな。あとは合わせる」

ももかはプロモーターを信じて自ら懐に飛び込む。ももかの攻撃は防げない、回避するか逸らすしか方法は無いのだ。それを利用して悠河が更に責め立てる。ももかの動きを予測し、ももかの真後ろから拳銃で狙い撃つ。

「なんてアホな戦い方だ!!思い付きはしても実行なんて普通しねーよ!!」

目を共有し、プロモーターなら合わせてくれるというイニシエーターの絶対の信頼がなければ成立しない戦法。演算し、最適な予測を繰り出す眼にどれが最善か選び出し実行する判断力の思考速度。特殊な訓練を受けなければ思考速度に対し反応の遅い肉体で予測された動き通り動くのは困難極まる。まさに、この二人でしか成立しない戦い方なのだ。

「(服の下で見えないが、アイツが身に着けているプロテクターは外骨格だ。人間に不可能な動きもそれで説明がつく)」

銃が効かないなら戦い方を変えるだけ。ももかのアッパーカットに合わせてボディーブローをぶちかます。『運転手』は半歩下がると二撃の力と速度をそのままに別方向に受け流した。

「なッ」

ももかは体勢が崩れガードが甘くなり、悠河のボディーブローはそのままももかの脇腹に命中した。致命的な自爆。その隙を逃す相手ではない。

「その若さで俺様とここまで渡り合ったんだ。凄いことだぜ？機械化兵士か……その眼と武術を磨けば三十行くまでには俺を超えれると思うぜ!!」

『運転手』の掌が二人の胸にそっと添えられる。悠河とももかはその先何が起こるのか理解したが、回避は不可能だった。

――――――――発勁。

〝ズンッ〟

結果は分かっていた。これは、内臓を直接殴りつけるのに等しい。眼以外は生身の悠河は完璧に極まった発勁に抗うことも出来ず、予測通り意識を失った。ももかも、呪われた子供たちの能力を引き出すサイボーグの肉体とはいえ重要器官は生身だ。意識までは刈り取られなかったが、最早戦闘続行は不可能だ。

悠河とももかの敗因は一つ。『運転手』の人間としての技術、武術の巧さが、悠河の考えを超える化け物に他ならなかったことだ。

大抵の相手は一本のルートで予測が可能な義眼も、一つの姿勢から構えから複数の攻撃を繰り出す武術の達人には、何本ものルートが枝分かれしている。悠河がボディーブローを放つあの時、四本のルートが予測されていた。

一つは、致命傷とまではいかないが悠河の拳がほんの僅か命中するルート。

一つは、どちらの攻撃ももう半歩下がって回避するルート。

一つは、先ほどまでと同様逸らされるルート。

最後の一つは、此方の力と速度を利用して悠河のボディーブローをももかに命中させるルート。

プロモーターである悠河は、最後の一つは在り得ないと断じ実行し、イニシエーターはそれを信じ敗北した。

「ふぅーあいたたた……楽しかったぜ!!」

久しぶりにいい汗をかいたと首を右左と回す。『運転手』が装備し

ている外骨格パワードスーツは銃弾は防げても衝撃までは吸収できないのだ。痛みと腫れによる運動の阻害を表に見せず義眼を騙し切った『運転手』の肉体操作はある程度薬品が使われている事を考慮しても、それを可能とする技量は超人に相応しい。

「そちらも終わったようですね」
「お!!そっちはどうだった!?殺したのか!!?」
「生きてます。殺してもよかったのですが、蛭子小比奈は此方に一歩踏み込んできている。ドクターからも天然から生まれ出る可能性の芽をつむいではならないと厳命を受けています」

ヴァンティアンのオープンフィンガーグローブは悠河に試験用として渡されている『幻想殺し』の次世代型。悠河の戦闘データの全てが記録されているヴァンティアンのオープンフィンガーグローブは当然、影胤の斥力フィールドを砕く。そこからの流れは蹂躙だ。

「へぇ……強かったか?」
「今後に期待ですね」
「俺もだ!!」

世界初である、新人類の先兵である機械化兵士とＩＰ序列９位『旅人（カブリース）の運転手』のゾーンに到達した者たちの戦いは、圧倒的実力差で勝敗を決した。

――急げ。
――早く。
――速く。

一刻も早く電波妨害の領域から抜け出し、プレアデスを倒した事と増援要請次第戻るつもりでいた。蓮太郎が戻っても足手まといになるだけかもしれない。けど、あんな化け物相手に奮闘しているあいつ等を見棄てる選択はなかった。民警のキャンプ地の近くまでは電波妨害は無いはずだ。そこまでたどり着けたら――――――

「はいはいごめんね～これ以上行かせる分けにはいかんのよ」

〝キーーーーン〟脳を揺さぶる耳に響く甲高い音に、超加速していた体勢が崩れ視界がぐるんと回転する。そのまま地面に衝突する前に脚部のスラスターを落下方向に向け威力を相殺し何度も転がりながら無理矢理立ち上がる。ティナ戦での経験がここで役に立った。

「いやごめんね。ほんと行き成りね。嗚呼スイッチ切ったからもう大丈夫だよ。何か言いたそうだね。今耳栓外すから文句だけは聞いてやるよ」

なんで――――――こいつがここにいる。

「『木原』ぁあああああああああ!!」

「はい、『木原』です。何々どうしたの?一々大声で名前確認しないと誰かも分からんのか?てぇー意地悪な質問だったな。今のニュアンスは〝どうしてお前がここにいる〟かだろ?まーあれだよ、ひとまず僕のために大人しくしててくれ」

義眼を開放する。神出鬼没のこいつを捕らえるのは今しかない。こいつが俺たちを襲った首謀者なら、捕まえた後、あの化け物を止めるように指示を出させればいい。

「ほいっと」

『木原』が嵌めていた耳栓が蓮太郎の顔の左右一メートルほど真横に投げられる。

「ボン」

炸裂した。殺傷能力は無く、音だけの爆弾。まるで狙いすましたかのように、耳には異常はなく音は頭の中で波の様に視界と感覚だけを蹂躙する。

「セイ」

〝パパンパン!!〟と乾いた音が連続する。蓮太郎は感覚が狂いながら左右の手で空気を裂くように振るったのに対し、『木原』は右足一本地面につける事なく、二段蹴り、三段蹴りの要領でそのまま連打する。打ち合いの末、地に付したのは、驚くべき事に機械化兵士である蓮太郎。

「橈骨麻痺って知ってるか？横になって寝ていると下に潰されていた腕の感覚がまるで他人の腕の様に感じる現象だ。足でもなったことある奴いると思うが……まぁ要するにだ。そういった神経を体内で伝播する衝撃同士をかち合わせ麻痺させたんだ。効果は一時的で一分もあれば後遺症も残らず元通り。俺って何て優しい『木原』何だろ」

『木原』はそのまま蓮太郎の首筋を引っ掻く。

「……目的はなんだ」

「そう睨まないでほしいね。大層な目的なんて掲げてないんだから。だから、ね？安心して寝ていな。大丈夫、二時間程度で起きると思うからそのあとは好きにするがいい」

「なに……を……」

体が強制的に眠気を感じている。瞼も重く逆らうことも出来ない。

「科学者の手は危険な薬品が染みついてるから今後気を付けることだね」

蓮太郎の意識はそこで落ちた。

意識覚醒する。夜なのに何かを照らすような赤い光と、破壊音で自分がどういう状況なのか思い出し立ち上がった。

「……なんだよ……これ」

赤、赤、赤――――――

どこまでも赤く光る眼に、大地は埋め尽くされていた。

第三十七次観測

地獄が広がっている。
そこは、人間の居ていい場所じゃない。
あんなのは、人間の死に方じゃない。
この十年間、モノリスの壁の内側で築き上げた平和が崩れ落ちる。
忘れた訳じゃない。あの憎しみを悔しさを、ガストレアに対する怒りを忘れるなんて誰も出来やしない。だけど、壁の内側は確かに平和だったのだ。あの出来事を遠い過去の引き出しにしまえるくらいにはなったんだ。なのに、再び、思い出した。
この場の全員が一緒だ。これはもう戦争じゃない。生きるために、死にたくないから戦っている。この戦線で何人だけが、勝利を胸に戦っているのやら。
ああそして、また死んだ。
その巨体に押し潰された者がいた。
生きたまま食われていく者がいた。
手を足を無残に裂かれる者がいた。
プロモーターの肉片を抱えたまま泣き叫ぶイニシエーターがいた。
イニシエーターを囮に逃げだすプロモーターもいた。
お互い、最後まで放さなかった手だけが残っている者もいた。
赤い、赤い、赤い、――――すべてが赤い。
希望は、赤く染まる。
彼もまた、仲間にイニシエーターを託し、最後の時を足掻いていた。
失った片足片腕から止めどなく血が流れる。とっくに死んでもおかしくないのに。
ガストレアに食われる前に、出血多量で死ぬかもしれない。――――
――いや、その前に。
見上げる空はどこまでも黒く、赤い。
視界の端に赤い光が映った。
それが何なのか本能が理解したとき――――

「あ――――――あ、あああああああああ」

大型犬サイズのガストレアに腕を食われ、三体の同種に体が生きたまま貪り食われている。

「――――――カァ――――――あ、」

声にさえならない掠れた声が唇から漏れ出す。
いつ死ねるか分からない。頭がぐちゃぐちゃに狂いだす。
それでも彼は、残った片腕で引き金を引き続ける。
照準なんて定めていない。我武者羅に撃ち続け、殴りつける。
食われたところから再生していると気付く余裕さえない。
それでも、これだけはわかった。

「――――――ァ」

それを見たら、もう泣くしかなかった。
ソレが来るという意味がどういうことかを。
理不尽な怒りしかわいてこない。なんで、どうして、もっと早く。
俺たちにとって、何もかももう手遅れなんだよ。
それは、きた。
空を切り裂く人類の兵器。対艦ミサイルが降り注ぐ。
その身はもう助からない。
奴らの一部になってあいつ等の敵になるくらいなら――――――

”俺がいなくて寂しくなるが――――――絶対幸せになれよ”

何もかもが手遅れだが、その先に――――――勝利を。

”おせーんだよ、馬鹿。――――――糞野郎（ファック）”

最愛のイニシエーターの未来を祈り、腐れ縁の友に勝利の中指を掲げた。

絶望的だった局面が、希望の光が差し込んだ。

対艦ミサイルが、ガストレアの一群に突き刺さり、爆発。大量のガストレアを巻き込む。

だが、蓮太郎が目覚めた時には、もう何もかも手遅れ。

聖天子に連絡を繋ぎプレヤデス討伐を討伐したと報告し、ミサイルと戦闘機を要請したが――――

「クソッ!!クソクソクソクソクソクソォォォォォオオオオ!!何がしたいんだ『木原』ァァァァァァァ!!!」

邪魔をされた。

同じ人類でありながらその人類に邪魔をされた。

『木原』は、何かを企んでいる。東京エリアを犠牲に自分の利益を得ようとしている。

例え天地が逆転しても勝てない頂――――――IP序列第九位。
あんな化け物を引き連れて何をしようとしている？
俺に何ができる？
東京エリアを守れるのか？
そもそも『木原』は東京エリアを潰す気ならもっと他に方法はあるはずだ。この状況を利用して『木原』に何の得がある？

「～～～～あぁクソッ!!董先生に相談できれば……延寿は、あいつ等は……」
「落ち着いてください先輩」
「元気そうじゃないか里見くん」
「おっおまえら……」

傷だらけだが、そこには確かに四人がいた。

「生きてたのか！」
「勝手に殺さないでください。まあでも、……ぶち殺してやりたいですね」
「……どうかーん」

悠河ペアは報復したくて仕方がない様子。

「こんな一方的な蹂躙は初めてだ……イイ……」
「斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい……」

分かってはいたが、蛭子ペアは中々に人とは感性のズレた持ち主の様だ。
積もる話もあったが、それより急いで延寿たちの顔が見たかった。
こんな地獄でも笑顔のアイツらの顔が見たい。無事でいてくれ。

――――ガアアアアアアアアアアアアアアァァァァ!!!!

一体の巨大なガストレアが怒り狂って天に吼える。そいつは敵の一角の中でも比較的指揮の取れた箇所に最初っからそこに居たかのように現れた。丸みを帯びた背中から細長い触腕がでたらめに生えたシルエットを見た瞬間ぞっとする。全長は５０メートルに近い。

あれが――――アルデバラン。

壊走寸前だったガストレアが、アルデバランの意思に従うように再び民警軍団に向かっていく。自衛隊の二機の戦闘機もアルデバランに狙いを定めて空対空ミサイルを切り離す。数に物を言わせた飛行ガストレアがアルデバランを守るため火焔の花火となる。二機の戦闘機はクロスカウンターの要領でアルデバランに突撃をかける。一機は飛行ガストレアの体当たりを避けきれず翼端をかすりガストレアを巻き込みながら落下。残り一機は誘導弾を切り離すのと、アルデバランの触腕がコックピットを貫くのは同時だった。二機のパイロットは絶命したが、切り離された５００ポンドの誘導爆弾はＧＰＳ誘導で落下位置を微調整しながらアルデバランに胴部に直撃した。

「やった!・」

流石のアルデバランも無傷では済まない一撃。もしかしたら今の一撃で――――

「いいえ、あの程度ではアイツは倒せない。こうも簡単なら人類はアルデバランに、最強のゾディアックの後星など名づけない」

爆炎が晴れ視界がクリアになったとき、頭部を完全に消失し腹まで露わになったアルデバランのシルエットが現れた。

「私も資料で見たことあるけど、アレを生身で一方的に殺せるのってそれこそ一桁台でも一握りだよ。いやーそう言えばＩＰ序列９位と

戦ったんだけ?よく生きてたね～」
「……なんの話だ」
「アレの話」

ももかの指さしたアルデバランの体がピクリと動く、収納されていた翅を展開し高速振動。その動作を首を失った状態で行っている。

「……そんな馬鹿な」
「ほんと馬鹿しかいない。こんな馬鹿みたいな戦争も、馬鹿みたいな戦いも、馬鹿な人の馬鹿による馬鹿なアホくさい馬鹿野郎に任せればいいんだッ!!」
「……落ち着け……落ち着くんだ……大丈夫だももか。僕がついてる」

興奮状態のももかを悠河が抱きとめ頭を撫でて宥める。悠河の服の襟を握りしめ落ち着くのを待つ。

「……すいません。合流しましょう。アルデバランも撤退しました。……お前もいつまでくっついてる」
「……ふ～んだ。悠河冷たい」
「行くか」
「行きましょう」
「私の扱い段々雑になってない!?」

お前の扱いは元からだろと蓮太郎は民警の拠点に合流を果たす為駆け出す。アルデバランの軍団をやり過ごし、駆け抜け、飛び込むように拠点に駆け戻る。悠河たちは調べ物をしたいと途中で別れてきた。

「木更さん!!」

満身創痍の民警軍団の一団に木更を発見すると手を振りながら駆け寄る。隣には延寿の姿も捉える。延寿も気づいたようだ。

「蓮太郎！」
「延寿ッ！」

体当たりするように抱き合った。きつく延寿の体を抱きしめ、首に顔を埋める。延寿の腕が腰に回される。

「もう、馬鹿ぁッ」
「すまん延寿。本当に……すまん」
「どうして妾に黙って行っっちゃたのだ。心配したのだぞ」

言いながら、半泣きでゴスゴス脇腹にパンチしてくる。

「ぐえ痛ぇやめろ。そこ怪我してんだ触んな」

蓮太郎は延寿を無理矢理もぎ離し、木更さんを見つめる。

「……里見くん」
「木更さん」

木更の黒髪と白皙の肌は煤汚れと血で汚れていて、目の上が切れて血で左目がふさがっている。延寿の服も煤と血で汚れ、ダメージの残滓が所々存在する。それでも木更は涙を視界の端に溜めたまま、気丈に腰に手を当てキッと此方を見る。

「もう、遅いわよ！」
「すまん」

木更は何か言いかけるが、続く言葉がついに出てこなかった。祈る

ように胸の前で掌を組み合わせると、俯いてぶるぶる肩を震わせる。蓮太郎もひどい罪悪感にかられ気まずくなり、どう処したらいいかわかりかね、頭紙をかく。その時「おいあれ、里見蓮太郎じゃね？」と言う声に顔を上げると、まるで死者が蘇ったかのように見る目つきで、生き残った民警が遠巻きに取り巻いている。

「追放されたって……」

「じゃあミサイルが飛んできたのも」

「プレアデスを倒して帰ってきたのか……」

「嘘だろ……」

ざわめき声が聞こえるが、蓮太郎は内心の動揺が表表情に出ないように必死で抑制する。みな外見の怪我以上に憔悴しているのは見ればわかった。第二波が攻め寄せてくる前は五百人いたはずの精鋭な軍団が五十人近くしか姿が見せないのはどういうことなのか。

「他の連中は……？」

木更はしかつめらしい顔を作り敬礼をすると、鋭い視線で蓮太郎を見る。

「里見くん……いえ、里見リーダー。――――――我堂団長が戦死されました」

死んだ？あの我堂が？ＩＰ序列２７５位の歴戦の戦士が？

「民警マニュアル第四十条『アジュバント・システム』の規定により、団長が死亡した場合、次に序列の高い民警に軍団指揮権の移譲が起こります」

「じゃあいまの最高指揮官は誰なんだ……まさか、嘘だろ……」

――――無理だ。出来っこない。

「ここからは、君が軍団を指揮して戦うのよ――――里見くんお願い。私たちを導いて」

救護所のある学校保健室で治療を終えた蓮太郎は、木更の案内で学校から少し離れた元保健所建物に向かった。入口までくると、木更が立ち止まる。俯いて視線が泳がせる。沈黙は蓮太郎に重圧として圧し掛かる。重いのだ。胸の奥で罪悪感が沸いてくる。どうすればいいのか分からず、木更からのアクションを待つ。

「……里見くん」

「……なに」

顔を上げた彼女は、今にも崩れ落ちそうな表情をしていた。

「こういうのは無責任だなんて分かってる……それでも、もう貴方しかいないの。ぜんぶ、ぜんぶ押し付ける私を許してッ!!」

木更は胸を押さえ、胸から溢れ出る罪を押さえつける。

「……里見くん、〝覚悟〟して、この先に何があっても挫けないで……潰されない〝覚悟〟を持って……お願い……」

「我堂が戦死し、俺しかいないなら……〝覚悟〟を決めるよ」

本当は、怖い。誰かを導き、自分の命令で死にに行けと言うのが。だが――――

「……やってなる。やるしかないんだ」

そうしなければすべてが終わる。

入口を抜け、大広間のような場所まで案内されたが、蓮太郎は袖を掴まれ止まる。そのか弱い力は、蓮太郎を止めるには十分すぎた。

「もう気付いてると思うけど……里見くんのせいなんかじゃない。それだけは、みんな知ってるから」

蓮太郎は木更に導かれるまま通された。

部屋は広く薄暗く、すすり泣きの声が時折聞こえる。整然と並べられている黒い死体袋が五列に分けて並べられている。その中の一つに、見知ったメンバーを見かけた。

「ぁぁぁぁ……おにぃ、ちゃん……ぁっぁっぁっぁっ……」

兄貴の真似をしていたキザな口調も無くなり、延寿たちと元気にはしゃぐ姿が印象的な彼女は、たった一つ残された右腕を前に蹲り、目の端から抑えきれなくなった涙が流れ出ていた。目じりは赤く、声は硬く、霞んで乾いていた。

「蓮太郎か」

「彰磨兄ィ……」

外で民警の人数を確認した時、誰が足りないか薄々気づいていた。ちゃんとこの眼で確認するまで認めたくなかった。

「あいつは……玉樹は逝ったんだな。そして――――」

「あの子は、俺がこの手で看取った。出来るだけ苦しみを与えないよう……一撃で破壊した」

「……二人の最後は……どうだった」

傍にいたティナが弓月妹をそっと優しく抱きしめる。腕の中で泣き続ける弓月は、まるで本当の姉妹に見える。

「二人とも、最後まで人の為に戦う勇気ある戦士だった」

孤立無援で四方八方から押し寄せてくる敵は、彰磨と翠で連携を崩さず防御に徹すれば、決して凌ぎ切れないものじゃなかったらしい。だが彼女は、戦闘中にピンチに陥ったイニシエーターを見かけてしまった。お互い人見知りで黙礼する程度の仲でしかなかった。そんな彼女が、プロモーターとはぐれ両足を失った状態で戦場のど真ん中に放置されると知れば、翠が物事の前後を見失い飛び出すのは無理のないことだった。だが、それこそがガストレアの巧緻極まる戦術である。少なくともガストレアの脳では〝仕留めた獲物をすぐには殺さずに、それを救助に来た別の得物も両取りする〟というレベルの知能があったのだ。

そして、砂状の地底に隠れていたガストレアに恐らく神経毒で動きを止められ、円錐状の突起でガストレアウィルスを注入された。しかも一体ではなく二体に。

――――――――一分間。

それが、翠が侵された時間である。

ガストレア化した生物は体のどこかにウィルス嚢と呼ばれるウィルスの詰まった部位が発達し、それを何らかの方法によって相手に注入して仲間を増やす。ウィルス嚢に詰まったガストレアウィルスは、平均一リットルの二億匹以上。一般人ならひとたまりもなくガストレア化するレベルだ。イニシエーターでいくら耐性があろうと、二体同時に注入されれば――――――――

「俺の腕の中で、アイツも悟った。許容以上のガストレアウィルス注入で体の五分の一がガストレア化。最後の言葉も翠らしく――――

――〟お荷物にだけにはなりたくはない〟」

「……ッ」

一度言葉を切り、もう一つの結末を話し出した。

彰磨が駆けつけた時にはもう玉樹は瀕死だった。玉樹兄も片月妹も実力的に連携を崩さず防御に徹すれば決して凌ぎ切れないものじゃなかった。防衛の点から見たらスパイダーの糸は守ることに適している。だが、駆けつけた時はスパイダーの糸は溶かされていた。恐らくはマイマイカブリのガストレアかと思われるが、糸が溶かされさらにカマキリのガストレアの斬撃により無力化。玉樹が片月を庇わなければ、肉親である妹が死んでいた。運が悪いとすればその後だ。レベルⅢの集団が集結しつつあったのだ。

玉樹が助けるまで深くない傷をカマキリのガストレアから受けていた彼女に戦闘を継続させるのは無理があった。

「だから玉樹は俺に言った」

――――〟妹を頼むぜ……色男〟

「俺が抱えて撤退する間も彼女は最後まで斬り飛ばされた右腕を放さなかった。……これだけが残ったが、どうする？」

彼の手の中には、玉樹が普段からかけていたサングラスとバラニウム製チェーンソーのメリケンサック。

「……彰磨兄が持っててくれ」

蓮太郎は膝を突くとティナと片月に視線を合わせると、優しく頭を撫でる。戦闘後だというのに二人の髪がふんわり柔らかかった。そして、片桐玉樹に向き合う。

喧嘩をしたり、悪態をついたのも一度二度じゃきかない。互いを

嫌っている部分も十個上げろと言われればすぐに言えるだろう。でもそれは、本当に嫌いなわけじゃない。

「……お前とは、もっと馬鹿な事をしたかったよ。……ありがとう」

体の芯から力を込めて立ち上がる。〝覚悟〟は決まった。

蓮太郎はそのまま、木更の案内でもう一つの死体袋の前に立った。係りの人間がタグを確認すると一礼して去って行き、蓮太郎は黙って見送ってからそっと死体袋のジッパーを下ろした。

「俺は……アンタは嫌いじゃなかったよ。我堂」

我堂の生き様をしっかり眼に刻む。その傷一つ一つ、指揮官として、戦士として戦った誇りだ。

「あとは……任せてくれ」

この男をあっと言わせてやりたかった。任務を無事完遂し、驚いた顔を見たかった。

蓮太郎は首を巡らせて、整然と並ぶ死体袋の列を見る。現在の戦力比は、ガストレアが千八百に対して民警は五十人強。増援は来ない。ミサイルや戦闘機も底をついている。東京エリア全体が摩耗しており、これは最早戦術以前の問題で負けている敗残の軍と化している。

アルデバランはもう一度来る。必ず来る。蓮太郎はアルデバランとの最終決戦は避けられないものと覚悟した。

蓮太郎は固く拳を握る。

――――――俺は団長として、託されたすべてを……勝利に。